



公立大学法人 名桜大学

# 名桜大学 30 年史

## 公立大学法人化 15 周年記念



名桜大学 30 年史 公立大学法人化 15 周年記念

公立大学法人 名桜大学



30<sup>th</sup>  
ANNIVERSARY  
MEIO UNIVERSITY  
OKINAWA

# 名桜大学30年史

公立大学法人化15周年記念

## 卷頭言

名桜大学開学30周年・公立大学法人化15周年記念史部会 部会長 小番 達

本学は、2024（令和6）年に開学30周年、そして、2025（令和7）年に公立大学法人化15周年を迎えました。本学は、「平和を愛し、自由を尊重し、人類の進歩と福祉に貢献する国際的教養人と専門家の育成」という建学の精神に基づき、国際社会・地域社会に貢献できる有為な人材を輩出することを目的として歩を進めてきました。開学以来の本学の足跡は、『名桜大学10年史』、『名桜大学20年史』、『公立大学法人名桜大学 10年のあゆみ』と節目ごとの周年事業で刊行された記念史を通して辿ることができます。この記念史では、開学30周年・公立大学法人化15周年に至る、この10年の足跡を中心に紹介する内容となっています。上に掲げた目的がどのようなかたちで達成されたかについては、本編の内容をお読みいただくことでご理解いただけるものと思います。

さて、この10年間の中で忘れられない、未曾有の出来事が、新型コロナウイルス感染症の拡大でした。2020（令和2）年に沖縄県の緊急事態宣言が出されたことに伴って、本学の指針を定め、これに従って大学としての活動を継続しました。授業はオンラインへ変更し、3密回避や感染対策の徹底等も求められるなど、本学にとって（もちろん社会全体にとって）試練の期間でした。さまざまな場面でさまざまな制約を受けながらも活動を維持できたのは、教職員の努力や学外関係者の支援があったこととともに、大学での学びを続けたいという学生諸君の強い思いがあったからではないかと考えます。また一方で、このコロナ禍に試行錯誤して身についたノウハウは、ポストコロナと呼ばれる現在に活かされています。とくにオンラインの利活用はその代表的なものです。県外・国外にいる講師の授業を受講したり、国内外の大学の学生と対話したりと本学にいながら国内・国際交流が可能となっています。禍（わざわい）を転じて福と為す、といえるでしょうか。

また、教育研究組織体制と学内施設の充実、いわばソフトとハード両面でアップデートしたことでも、ここ10年で大きな出来事といえるでしょう。学部では国際学群が国際学部へと改組し、国際文化学科と国際観光産業学科が設置され、人間健康学部に健康情報学科も新設されました。これによって現代社会が抱える課題へ広く、柔軟に対応できる人材育成の体制が整えられました。大学院では国際文化研究科と看護学研究科にそれぞれ博士後期課程が開設され、さらに大学院スポーツ健康科学研究科（修士課程）が新設されたことによって高度の専門的職業人、高度の研究能力を有する研究者を養成する体制が一段と強化されました。学内施設にあっては、学生会館サクラウムや多目的グラウンドの設置をはじめ、2024（令和6）年には事務部門を集約化し、学生食堂と中規模教室を合わせもつ本館が完成しました。これに統いて2025（令和7）年には、事務部門が入っていた旧本部棟を改修し、新設された健康情報学科のカリキュラム運営に対応した専門機材・ICT設備を備える教室を配置した第2講義棟も完成しました。

開学して30年、人間で言えば30歳、心身共に成熟し、働きざかりの壮年期に入る年齢と言えます。次の10年、40歳を迎えるまで、ソフト・ハードのさらなる充実を図りつつ、建学の精神のもと、社会を支える人材の育成をより着実に進めるとともに、公立大学の使命である地域貢献をさらに積極的に進めるよう教職員一丸となって精進します。今後もご指導、ご助力いただければ幸いです。

最後になりますが、お忙しい折に寄稿くださった学内外の方々に心より御礼申し上げます。

## 式 辞



北部広域市町村圏事務組合  
理事長 渡具知 武豊

沖縄県北部への高等教育機関設置を求める地域の皆様の強い願いにより、沖縄県及び北部12市町村によって設立された沖縄県唯一の公設民営の大学としてこのやんばるの地に名桜大学が1994（平成6）年4月に誕生いたしました。

以来、幾多の困難を乗り越えながら、その歩みを止めることなく発展を重ね、地域の悲願であった大学としての使命を果たしていただきました。

1998（平成10）年の第1期生の卒業を皮切りに、多くの名桜大学生がこの地で学びを深め、力強く社会へと羽ばたき、地域はもとより我が国、さらには国際社会においても活躍の場を広げております。

しかしながら、その歩みは決して順風満帆であったわけではありません。社会情勢の変化という大きなうねりは、大学にも容赦なく押し寄せてまいりました。少子化による18歳人口の減少、大学の乱立に伴う全入時代の到来、さらには長引くデフレ経済による家庭経済の疲弊など、厳しい逆風の中で、大学の志願者数は開学当初の1,823人から2009（平成21）年度には547人まで大きく落ち込むこととなりました。

しかし、その苦境に屈することなく、国際学群の改組や看護学科の設置など、社会の多様化や学生のニーズに応えるべく不斷の改革に挑戦し続けられました。そして2010年（平成22）年度には、公立大学法人化を成し遂げ、志願者数も大きく回復をしました。これは、幾多の荒波にも耐え抜き、大学改革を推進めた歴代の理事長、学長、教職員の熱意と努力、そして地域の皆様の温かいご支援の賜物と心より感謝申し上げます。

さらに20周年を経てからのこの10年間、大学は教育研究の質を高めるとともに、地域貢献・国際交流の拠点としてその存在

感を確かなものにされました。たとえば、地域医療を支える人材育成においては看護学科が着実に成果をあげ、国際交流の分野では多くの留学生の受け入れ、派遣事業を実施するなど大学のキャンパスは多文化共生の場として一層の活気を呈していました。

また、地域との連携事業や産学官の協働を通じ、やんばるの未来を担う人材の育成にも大きな役割を果たすとともに、学生主体の「地域貢献活動プロジェクト」を通じてやんばる地域の活性化や課題解決にも寄与しております。

こうして30周年を迎えた今、名桜大学は単なる「学びの場」にとどまらず、地域と世界を結ぶ架け橋として、より確固たる存在へと成長していることを実感いたします。

学習環境に関しましても、開学以降、学生生活のより一層の充実と地域貢献の推進を図るべく、留学生センター、多目的ホール、生涯学習推進センター、看護学科棟、総合研究所、多目的グラウンド、学生会館SAKURAHALLなどの施設を整備し、加えて、この度、開学30周年・公立大学法人化15周年記念事業の一環で計画された「本館」が完成しております。本館は、学生食堂や講義室、事務室が一体となった複合施設として整備され、教職員にとっては、効率的で高い集中力とモチベーションを維持することができる場となり、学生にとっては、快適で充実した学びが提供される場となっております。ここで活動する全ての人がより良い環境で自分の夢や目標に向かって邁進できる新たな拠点を整備されるなど、計画的な学習環境の充実に努められていることに敬意を表するとともに、大学と地域の連携を一層深め、今後も益々地域に開かれた大学となることを期待するところであります。

結びに、今まで名桜大学を支えてくださいました北部12市町村のご関係者様、地域住民の皆様、企業の皆様に感謝の意を表しますとともに、多くの大学関係者のご尽力に心より敬意を表します。今後とも皆様の変わらぬご支援、ご協力を賜りますようお願いするとともに、名桜大学の益々の発展を祈念いたしまして、式辞とさせていただきます。

## 発刊によせて



理事長 高良 文雄

名桜大学開学30周年・公立大学法人化15周年にあたり、記念史を刊行できることを心から嬉しく思います。

名桜大学は、1994（平成6）年4月に「平和」「自由」「進歩」を建学の精神として、開学しました。以来、「国際社会で活躍できる人材の育成」を目標として一歩一歩と確かな足取りで前進を続け、2010（平成22）年4月には、建学の精神をそのまま継承し「公設民営の私立大学」から「公立大学」として生まれ変わりました。

名桜大学が立地する県北部地域（ヤンバル）になぜ大学が設置されたのか、歴史を辿ると明治時代に国頭農学校、大正時代に国頭高等女学校が地域の人々の熱意によって設立されたことに遡ります。それは、「学問が人材を育て、地域を良くする」という考えに基づいています。ヤンバル地域は、産業が乏しく農業・漁業・林業を中心とした経済的に恵まれない地域でした。しかしながら、「子弟の教育」に対する情熱は根強いものがありました。その熱意は終戦後も途絶えることなく、高等教育を希求する先人の思いから本学は誕生しました。大学の創設当時を振り返りますと、その道のりは苦難の連続でもありました。名護市に大学を誘致しようと「大学誘致懇話会」が発足したのは1979（昭和54）年です。その後、15年の糾余曲折を経て、国際学部の一期生として、384人が一歩を踏み出したのは1994（平成6）年でした。

開学以来本学は、多目的ホール、総合研究所、学生セ

ンター、野球場、屋内温水プール、北部生涯学習推進センター、人間健康学部実験・実習棟、北部地域看護系医療人材育成支援施設（看護学科棟）、学生会館SAKURAUM、多目的グラウンド、附属図書館増改築、旧本部棟の改築、新本館等、諸施設を着々と整備拡充してまいりました。教育分野においては、開学当初、単科大学として国際学部の下に国際文化学科、経営情報学科、観光産業学科の1学部3学科でスタートしましたが、その後、多様化する学生ニーズの対応や地域社会からの要請を受けて、新たな学部、大学院研究科及び専攻科を開設しました。現在では国際学部（国際文化学科、国際観光産業学科）、人間健康学部（スポーツ健康学科、看護学科、健康情報学科）、大学院（国際文化研究科：修士課程、博士後期課程）スポーツ健康科学研究科（修士課程）、看護学研究科（博士前期課程、博士後期課程）、助産学専攻科の2学部5学科3研究科5課程1専攻科を擁する、地域に根差した大学として発展してまいりました。

現在学生は2,440人が在籍しており、県外出身者は半数近くを占めています。北海道から鹿児島までの46都道府県と外国から入学しており、キャンパスは活気に満ち溢れています。全国には101の公立大学が設置されています。本学はその中でも中規模大学として、ヤンバル地域からも沖縄、日本、アジア、世界へ有為な人材を送り出す「知の拠点」としてますます存在感を高めつつあります。これまで学部学生11,076人、大学院生250人が卒業または修了し、社会の各分野で活躍しています。

このように開学以来、本学がここまで発展を続けることができましたのも、地域の方々のご支援とご尽力のおかげであり、心より厚く御礼申し上げます。これからも本学は、教職員一丸となって魅力ある大学づくりに努め、さらなる飛躍を目指してまいります。本記念史発刊にあたり、引き続き変わらぬご支援を賜りますよう謹んでご挨拶申し上げます。

## 名桜大学開学30周年・ 公立大学法人化15周年を迎えて



学長 砂川 昌範

本学は2024（令和6）年に開学30周年、2025（令和7）年に公立大学法人化15周年という節目を迎えました。1994（平成6）年に公設民営の私立大学として創立され、2010（平成22）年に公立大学として新たな歩みを始めて以来、「平和・自由・進歩」の建学の精神のもと、教育・研究・地域貢献という大学の使命を果たしてまいりました。沖縄県北部という地に大学を築いた先人たちの情熱と努力に心から敬意を表するとともに、これまで本学を支えてくださった地域の皆さま、設立団体、教職員、卒業生、後援会そして国内外の協定校の皆さまに深く感謝申し上げます。

本学は、「国際社会で活躍できる人材の育成」を教育目標に掲げ、地域に根ざしながら世界を舞台に学ぶ多様な教育プログラムを開設してきました。海外協定大学との交換留学制度では、英語圏・アジア・中南米など18カ国以上、52大学との連携を通じて、語学力と国際感覚を高めています。また、海外スタディツアーや海外インターンシップ、現地実習、国際看護学Ⅱ海外研修など、分野ごとに特色ある体験型学習を実施しています。こうした地域と世界をつなぐ学びの中で、学生は自ら考え、行動する力を培い、“地（知）の拠点”として地域社会に根ざしながら国際的な感性と実践力を備えた人材を育成してきました。

2020（令和2）年以降の新型コロナウイルス感染症の拡大は、本学にとっても大きな試練でした。教職員一丸と

なって感染防止を徹底しながら、オンライン授業やハイブリッド型授業への移行を迅速に進め、学生の学びを止めない体制を整えました。この経験は教育のデジタル化と柔軟な学びの環境整備を加速させ、現在の遠隔授業やキャンパス内留学プログラム（オーストラリア協定大学とのオンライン授業）など、新たな国際教育の形へと発展しています。危機の中で得た教訓を活かし、変化の時代における大学の使命を改めて確認する機会となりました。

2023（令和5）年には、社会の変化と地域の要請に応えるため、国際学群を発展的に改組し、国際文化学科と国際観光産業学科からなる国際学部を新設しました。また、人間健康学部にはAI（人工知能）やデータサイエンスを活用して健康・医療・福祉の課題に挑む健康情報学科を開設しました。これにより、大学全体の学生定員は2,380人（560人増）に拡充し、沖縄県北部地域の大学進学率向上、地域産業の活性化、そして新たな知の創出をめざす大学へと進化しています。さらに、地域医療分野では名桜大学附属北部看護学校を2026（令和8）年4月に設置します。これは地方独立行政法人法第77条の2に基づき、大学の人的・物的資源を活用して看護教育や臨地実習を行い、地域の医療人材を継続的に育成する取り組みです。

名桜大学は、これまでの30年の歩みを礎に、沖縄の自然・文化・人を大切にしながら、AIやテクノロジーの力を活かして新しい価値を創造する大学であります。文化、観光、スポーツ、健康、医療、福祉など地域の現場で生まれる知を「地域の知」として共有し、ウェルビーイング（心身の幸福）に基づく教育を通して、知識と共に感を併せ持つ人間力豊かなグローバル人材を育成します。次の30年、本学は「地域に根ざし、世界とつながる大学」として、未来社会の課題解決に貢献する新たな挑戦を続けてまいります。

今後とも本学の発展にご協力とご支援をお願い申し上げます。



沖縄県知事 玉城 デニー

## 祝 辞

はいさい ぐすーよー ちゅーうがなびら。

公立大学法人名桜大学が、開学30周年・公立大学法人化15周年を迎えたことを、心よりお祝い申し上げます。

名桜大学は、1994(平成6)年に沖縄県並びに名護市をはじめとする北部12市町村により沖縄県唯一の公設民営の私立大学として設立され、2010(平成22)年には公立大学法人へと移行し、開学以来、「平和・自由・進歩」を建学の精神として掲げ、国際社会で活躍できる人材の育成に取り組んでこられました。

また、「大学と地域をつなぐ総合窓口」として地域連携機構を設置し、公開講座の開催や健康支援活動の実施など、教育研究の成果を積極的に地域社会へ還元し、地域に開かれた大学として地域との連携活動を推進してこられました。

さらに、地域と協働して北部地域の雇用創出と若者定着の促進に取り組み、地域の再生・活性化を推進するなど、今後も地域に大きく貢献されるものと期待しております。

開学30周年を迎えるまで、世界的な新型コロナウイルス感染症の流行をはじめ、幾多の困難があったかと思いますが、高良文雄理事長や砂川昌範学長をはじめ、歴代の役員、教職員並びに関係者の皆様の教育にかける情熱と努力により、晴れて節目の日を迎えたことに対し、深く敬意を表します。

さて、沖縄県では、2022(令和4)年5月に「新・沖縄21世紀ビジョン基本計画」を策定し、「多様な能力を發揮し、未来を拓く島」を目指して、銳意取り組んでいるところであります。

人口減少・少子化が進行する昨今の社会情勢の中で、次代を担う若い世代を育成していくことは、沖縄県の将来の発展にとって極めて重要であると認識しており、本県としましては、引き続き名桜大学をはじめ高等教育機関と連携して地域を支える多様な人材の育成・確保に取り組んでまいりたいと考えております。

結びに、名桜大学のますますの御発展と、関係者の皆様の御活躍・御健勝を祈念いたしまして、お祝いの言葉といたします。

いっぺー にふえーでーびる。

## 祝 辞

名桜大学の開学30周年、ならびに公立大学法人化15周年を迎えられることを、心よりお祝い申し上げます。これまで大学の発展を支えてこられたすべての関係者の皆様に、深く敬意を表します。

貴学は1994(平成6)年、沖縄県および名護市を中心とする北部12市町村により設立され、「平和・自由・進歩」を建学の精神として掲げ、地域社会に深く根ざしながら、国際社会への深い理解を備えた人材の育成に取り組んでこられました。とりわけ「平和」の精神においては、沖縄の歴史から学び、それを次世代へと継承するという強い使命感のもと、教育に力を注いでこられたことに、改めて敬意を表するものです。

近年、情報技術に代表されるテクノロジーの急速な進化、ならびに人の移動を含む社会活動のグローバル化により、社会はますます複雑化し、予測困難な時代を迎えています。こうした状況において、貴学は国際的な教育研究を通じて学術の進展に努め、地域社会および人類社会の福祉に貢献することを使命とし、地域課題解決に資する「データアナリスト人材」の育成や、情報発信力を高める産学連携協定の締結など、具体的な取り組みを着実に進めておられます。

貴学が掲げる「地域と大学がともに課題を解決し、未来を切り拓く」という精神が、こうした産学連携の取組を通じて実践されていることは、極めて意義深いことです。データ利活用やスマートシティ支援といった社会からの要請が高まる分野においても、地域と連携した実践力ある人材を育成する役割は、ますます重要となっています。また、自然豊かな名護の地に根ざしながら、学生一人ひとりの個性と可能性を尊重する教育姿勢は、多くの若者にとってかけがえのない学びの場となっています。

言うまでもなく、18歳人口の減少は今後さらに進み、高等教育を取り巻く環境は劇的な変化の中になります。本年2月には、中央教育審議会より「我が国の『知の総和』向上の未来像～高等教育システムの再構築～」が答申として取りまとめられました。世界経済の不安定化、AIの進展に伴う効率化とリスク、少子化の進行など、社会の変化に伴い、地域における高等教育機会の確保と連携による機能強化が喫緊の課題となっています。

そのような中、地方自治体が設立する公立大学は全国で101大学を数えるまでになりました。沖縄県内においては、沖縄県立芸術大学、沖縄県立看護大学とともに、名桜大学が公立大学として重要な役割を果たしています。公立大学の大きな強みは、地域に根差した存在であるとともに、設立母体である地方自治体と継続的に対話を重ねながら、地域の未来を共に考え続けている点にあります。

激動の時代において、危機に直面した際に唯一の正解があるわけではありません。だからこそ、多くの地域関係者と共に歩み、相互の連携を深めながら、共に学び、成長していく。そのような粘り強い取り組みこそが、名桜大学をはじめとする公立大学の特質であると確信しています。

名桜大学におかれましては、これまでの歩みの中で得られた多様な経験や知見、ご苦労、そして成果を公立大学協会にもお届けいただいております。公立大学協会としましても、その貢献に応えるべく、貴学をはじめとする多くの公立大学との連携をさらに深め、地域から世界へと成果を発信していくよう、全力を尽くしてまいります。

結びに、名桜大学のこれまでの輝かしい歩みを称えるとともに、大学に関わるすべての皆様が今後ますますのご発展を遂げられますよう心より祈念申し上げ、名桜大学開学30周年・公立大学法人化15周年にあたっての祝辞とさせていただきます。

令和7年7月吉日



一般社団法人公立大学協会会長  
浅井 清文

# CONTENTS

卷頭言	名桜大学開学30周年・公立大学法人化15周年記念史部会 部会長 小番 達	1
式辞	北部広域市町村圏事務組合 理事長 渡具知武豊	2
発刊によせて	理事長 高良 文雄	4
名桜大学開学30周年公立大学法人化15周年を迎えて	学長 砂川 昌範	6
祝辞	沖縄県知事 玉城デニー	8
祝辞	一般社団法人公立大学協会会长（名古屋市立大学長）浅井 清文	9
<hr/> <b>序章 設立から20周年まで—1994～2014年</b> <hr/>		
設立から20周年まで—1994～2014年	総務企画部特任参与・学長補佐 金城 正英	16
やんばるに大学を造ろう	総務企画部特任参与・学長補佐 金城 正英	17
<hr/> <b>1章 10年のあゆみ—2015～2025年</b> <hr/>		
10年のあゆみ—2015～2025年	総務企画部特任参与・学長補佐 金城 正英	26
改組と大学院研究科の設置	総務企画部特任参与・学長補佐 金城 正英	27
各機構・各センターの設置	副学長・教育入試担当 木村 堅一	40
<hr/> <b>2章 大学紹介</b> <hr/>		
リベラルアーツとは知性と感性の調和	副学長・教育入試担当 木村 堅一	42
<b>国際学群</b>		
国際学群	前国際学群長 仲尾次洋子	43
国際文化教育研究学系	前国際文化教育研究学系長 板山 勝樹	44
経営情報教育研究学系	前国際学群長 仲尾次洋子	45
観光産業教育研究学系	前観光産業教育研究学系長 大谷健太郎	46
<b>国際学部</b>		
国際学部	国際学部長 嘉納 英明	47
国際文化学科	国際文化学科長 坪井 祐司	48
国際観光産業学科	国際観光産業学科長 金城 亮	49
<b>人間健康学部</b>		
人間健康学部	人間健康学部長 大城 凌子	50
スポーツ健康学科	スポーツ健康学科長 小川寿美子	51
看護学科	看護学科長 阿部 正子	52
健康情報学科	健康情報学科長 天願 健	53
<b>国際文化研究科</b>		
修士課程	国際文化研究科（修士課程）研究科長 大谷健太郎	54
博士後期課程	国際文化研究科（博士後期課程）研究科長 嘉納 英明	55
<b>看護学研究科</b>		
博士前期課程・博士後期課程	看護学研究科（博士前期・後期課程）研究科長 木村 安貴	56
<b>スポーツ健康科学研究科</b>		
修士課程	スポーツ健康科学研究科長 奥本 正	57
<b>専攻科</b>		
助産学専攻科	助産学専攻科長 小西 清美	58

## 附属図書館

附属図書館	附属図書館長 小番 達	59
-------	-------------	----

## リベラルアーツ機構

リベラルアーツ機構	リベラルアーツ機構長 佐久本功達	60
-----------	------------------	----

言語学習センター（LLC）	言語学習センター長 藤井まい	61
---------------	----------------	----

数理学習センター（MSLC）	数理学習センター長 高安美智子	62
----------------	-----------------	----

ライティングセンター	ライティングセンター長 屋良健一郎	63
------------	-------------------	----

## 環太平洋地域文化研究所

環太平洋地域文化研究所	環太平洋地域文化研究所長 小嶋 洋輔	64
-------------	--------------------	----

## 地域連携機構

地域連携機構	地域連携機構長 前川美紀子	65
--------	---------------	----

## IR室

IR室	IR室長 中里 収	66
-----	-----------	----

## センター

健康・長寿サポートセンター	健康・長寿サポートセンター長 田場真由美	67
---------------	----------------------	----

教員養成支援センター	教員養成支援センター長 板山 勝樹	68
------------	-------------------	----

看護実践教育研究センター	看護実践教育研究センター長 村上 満子	69
--------------	---------------------	----

メディアネットワークセンター	メディアネットワークセンター長 鈴木 大作	70
----------------	-----------------------	----

沖縄ディアスpora研究センター	沖縄ディアスpora研究センター長 山城 智史	71
------------------	-------------------------	----

保健センター	保健センター長 大城真理子	72
--------	---------------	----

## 3章 地域に開かれた大学

名護市学習支援教室ぴゅあ	名護市学習支援教室ぴゅあ前顧問 嘉納 英明	74
--------------	-----------------------	----

恩納村を支える未来塾の現状と今後について	国際学群国際文化専攻 山本 望晴	75
----------------------	------------------	----

2025年国頭村学習支援ボランティア	人間健康学部スポーツ健康学科 新垣 希颯	75
--------------------	----------------------	----

ヘルスサポート（ヘルサポ）	スポーツ健康学科 高瀬 幸一	76
---------------	----------------	----

食を通して生きる力を育む食育活動の取り組み	健康情報学科 前川美紀子	77
-----------------------	--------------	----

朝市健康支援活動	看護学科 溝口 広紀	78
----------	------------	----

思春期応援団「やんばる・がんばる・ぴあまーる」	助産学専攻科 長嶺絵里子	79
-------------------------	--------------	----

育児支援サークル ふれんどまみい♪	看護学科 安仁屋優子	80
-------------------	------------	----

VAG (The Volunteer Activity Group)	看護学科 溝口 広紀	81
------------------------------------	------------	----

学生による地域活動支援（学長裁量経費）		82
---------------------	--	----

産官学プロジェクト	副学長・地方創生担当 林 優子	83
-----------	-----------------	----

COI (Center Of Innovation)	学長補佐・COI担当 奥本 正	84
----------------------------	-----------------	----

名桜文学賞	附属図書館長 小番 達	85
-------	-------------	----

各団体の地域貢献活動		86
------------	--	----

外部委員会（名護市との関わり）		96
-----------------	--	----

名桜大学公開講座一覧		101
------------	--	-----

名桜大学地域出前講座一覧		105
--------------	--	-----

## 4章 広がる協定大学

大学間交流	112
国際交流センター	国際交流センター長 本村 純 114
名桜大学の国際交流 —海外交換留学を中心に—	前国際交流課長 中山 登偉 115
協定大学から派遣されてきた留学生への日本語教育	国際文化学科 当銘 盛之 120
2015-2025年に国際交流協定を結んだ協定大学	121
国際交流協定大学 派遣・受入実績	122
受入学生の体験談	カイル・バロン・ウォル、方 婪怡 クララ・キアラモンテ・デ・ソウザ、ジ・アリム 124
派遣学生の体験談	安里 紗、永利 千夏、江口 美礼 126

## 5章 特色ある教育

プロジェクト学習	プロジェクト学習担当 遠矢 英憲 130
海外スタディツアーアカデミックライティングⅠ	国際文化学科 山城 智史 131
国際文化学科 現地実習	ライティングセンター副センター長 大峰 光博 132
中南米コース	長尾 直洋 133
東アジアコース	133
東南アジアコース	坪井 祐司 134
沖縄コース	照屋 理 135
日本コース	屋良健一郎 136
国際協力コース	高嶺 司 136
日米関係コース	志田淳二郎 137
英語圏コース	渡慶次正則 137
教育支援コース	板山 勝樹 138
国際観光産業学科 海外インターンシップ	国際観光産業学科 新垣 裕治 139
国際観光産業学科 観光関連実務	国際観光産業学科 新垣 裕治 140
国際観光産業学科 ホテル実務	国際観光産業学科 東恩納盛雄 141
日本語教師養成	国際文化学科 当銘 盛之 142
看護学科 臨地実習	看護学科 比嘉 憲枝 143
看護学科 海外スタディツアーアンダーパーフォーマンス	看護学科 藤井 まい 144
スポーツ健康学総論・演習	スポーツ健康学科 遠矢 英憲 146
本学独自の奨学金	147

## 6章 研究活動

10年間の研究推進活動を振り返って	副学長（研究国際交流担当） 永田美和子 150
やんばるブックレット	やんばるブックレット編集委員長 奥本 正 151
『琉球諸語と文化の未来』の刊行	国際文化学科 小嶋 洋輔 152
小さな大学による地域創生文化事業	「琉球文学大系」編集刊行事務局長 渡具知 伸 154
学術シンポジウム	155
環太平洋地域文化研究所主催のシンポジウム	157
学長裁量経費（教員対象）	162
科学研究費助成事業	166
環太平洋地域文化研究所出版助成	168
各教員による出版	169

教員・団体の受賞歴	170
在職中に学位を取得した教員	171

## 7章 寄稿

『名桜大学開学30年記念史』「大学の未来への提言と名桜大学への期待」	客員教授・名誉博士 佐藤 優 174
活躍する卒業生・修了生	
学びの原点から始まる旅—名桜大学で拓かれた私の歩み	国際観光産業学科 上原 明 176
続・故郷に根を張り、志は高く	健康情報学科 島 康貴 177
「いちゃりぱちよーでー」の学び舎で	スポーツ健康学科 窪田 誠志 178
やんばるで学び、ケアリングの未来へ繋ぐ	看護学科 溝口 広紀 179
「AB ALTO AD ALTUM」	駒井 由紫 180
物事を捉える視点 財産	金崎 永幸 180
多くの縁と学びに感謝	屋部 藍華 181
学びを力に、起業の道へ	名嘉山兼志 181
「私を支える“名桜大学での日々”」	平良 礼香 182
名桜で築いた人生の原点	宮國 康弘 182
大学の歩みに深い誇り	島袋 完俊 183
対話を通して育んだ看護の心	加藤 勇人 183
名桜大学とともに歩んだ助産師への道	川端 星羅 184
大学での学び 私の原点	伊波 史子 184
恩師との出会い転機	高木 智子 185
琉球漢詩の魅力 広めたい	前堂 鳩世 185
世界に学んで、違いを楽しめた。	先家 茉子 186

## 8章 資料

公立大学法人名桜大学組織図	188
教員名簿	189
職員名簿	191
理事・監事・経営審議会委員・教育研究審議会委員	192
名誉学長・名誉客員教授・名誉博士・名誉教授	192
歴代役員	193
後援会 歴代役員	198
同窓会 歴代役員	198
入学志願状況	199
在籍状況	202
卒業者数	203
卒業者就職状況	204
開学30周年・公立大学法人化15周年記念事業	205
開学30周年・公立大学法人化15周年記念募金 寄附者一覧	209
教育研究奨励基金、その他特定・一般寄附金 寄附者一覧	215
年表	216
編集後記	名桜大学開学30周年・公立大学法人15周年記念史部会 副部会長 小嶋 洋輔 218



# 序 章

設立から20周年まで——1994～2014年



## 設立から20周年まで——1994～2014年

- 1994 学校法人名護総合学園 名桜大学 国際学部（国際文化学科、経営情報学科、観光産業学科）設置
- 2001 大学院 国際文化研究科（修士課程）設置
- 2005 人間健康学部 スポーツ健康学科設置
- 2007 国際学群 国際学類（国際文化専攻、語学教育専攻、システムマネジメント専攻、情報システムズ専攻、観光産業専攻）設置
- 2007 人間健康学部 看護学科設置
- 2010 学校法人名護総合学園解散 公立大学法人名桜大学設立
- 2011 大学院看護学研究科（修士課程）設置

本学は、2024（令和6）年に開学30周年を迎えました。1994（平成6）年に名護市を中心とする北部12町村及び沖縄県が創設経費を負担し「公設民営」の私立大学として設置されました。ここに30年間の歴史と、さらにそれに先立つ大学誘致運動の歴史を叙述しました。また、2010（平成22）年に「平和・自由・進歩」の建学の精神をそのまま継承し、大学の公立大学法人化が実施され、今に続く公立大学法人名桜大学が誕生しました。法人化してからは今日まで15年間の歩みということになります。

本学は、2025（令和7）年10月現在、国際学部に国際文化学科、国際観光産業学科、人間健康学部にスポーツ健康学科、看護学科、健康情報学科の2学部5学科と、国際文化研究科に国際文化システム専攻（修士課程）と国際地域文化専攻（博士後期課程）、看護学研究科に看護学専攻（博士前期課程）と看護学専攻（博士後期課程）、スポーツ健康科学研究科にスポーツ健康科学専攻（修士課程）の3研究科5専攻（修士課程2、博士前期課程1、博士後期課程2）を擁する大学となっています（図表1）。

その誕生の経緯は、『名桜大学10年史』『名桜大学20年史 公立大学法人化5周年記念』『公立大学法人名桜大学10年のあゆみ』『大学概要』などで、既に繰り返し記述されています。これまで刊行された『記念史』等と併せて読むことで、本学の誕生から現在に至る北部地域住民や大学関係者の高等教育を希求する熱い思いが強く伝わってくると思います。

図表1 学部、大学院等の設立状況



## やんばるに大学を造ろう

沖縄県は、戦前から1950（昭和25）年に沖縄史上初めての大学（琉球大学）が設置されるまで、日本で唯一高等教育機関が設置されなかった県です。翌1951（昭和26）年に、琉球列島米国民政府（United States Civil Administration of the Ryukyu Islands: 通称=USCAR: 以下、「米国民政府」）によって、米国民政府布令第30号「琉球大学」が発布され、設置根拠が示されました。しかし、同布令には、琉球大学のみが規定され私立大学の設置は認められませんでした。その後、琉球政府によって、1958（昭和33）年1月10日公布、4月1日に施行された沖縄の「教育基本法」（琉球政府立法第1号）、「教育委員会法」（琉球政府立法第2号）、「学校教育法」（琉球政府立法第3号）、「社会教育法」（琉球政府立法第4号）と呼ばれる「教育四法」が制定され、同年に沖縄史上初の私立大学（沖縄短期大学）が設置されました。

沖縄県北部地域における大学誘致運動は、琉球政府時代の1953（昭和28）年1月に県北部出身の琉球政府立法院議員（幸地新義、山川宗道、兼次佐一、湖城其章、新里銀三）及び県北部16町村長（比嘉宇太郎名護町長、吉元栄進屋部村長、上原嘉四郎本部町長、宮里眞上本部村長、大城善英今帰仁村長、宮城源太羽地村長、玉城作四郎屋我地村長、新里善福国頭村長、宮里金次郎大宜味村長、比嘉謙三東村長、浦崎康裕宜野座村長、奥間清徳金武村長、比嘉敬浩久志村長、真栄里豊太郎伊江村長、伊礼徹伊是名村長、新垣安助伊平屋村長並びに教育委員会委員及び教職員会など144人の署名を添えて「琉球大学師範科名護分校設置請願書」を琉球政府中央教育委員会に提出されたことが始まりとなります<sup>1)</sup>。

これは、琉球大学が1950（昭和25）年に設置されたことを契機に北部地域に教員養成機関を設置し、教育文化の向上と教育の機会均等を希求する地域ぐるみの誘致運動でありました。しかし、北部住民の念願であった「琉球大学師範科名護分校」の誘致は実現することはありませんでした。

それでも、北部住民の高等教育を希求する熱い思いは冷めることなく名護市は、1979（昭和54）年に、「大学誘致懇話会」を設置し、新たな大学誘致に向けた検討を開始しました。1980（昭和55）年には、名護市条例に基づき「大学誘致委員会」（委員長：高良鉄夫琉球大学教授、副委員長：比嘉鉄也名護市議會議長）を発足させ、大学誘致に向けたさらなる検討が重ねられました<sup>2)</sup>。その結果、1983（昭和58）年12月、「地域総合短期大学」の設置を視野に入れながら大学を誘致する」という下記の内容が答申されました<sup>3)</sup>。

将来的には、四年制の大学として整備充実を図ることとするが、発足時は短期大学として特色ある教育・研究を実践していく。…（略）…この地域の課題に総合的、学際的に取り組んで行こうという大学であり、また、学生も名護市、北部圏域にとどまらず広域的に募集して行こうということであるから、国立又は県立とすることが望ましい。ただし、市立、北部広域市町村圏組合立、私立などの可能性も検討していくこと。

さらに、上記で述べた基本方針に沿って創設される短期大学の3学科の概要は次のとおりです。

- 「地域産業学科」：農業、園芸についてのコース、海洋、水産養殖についてのコース、地方産業（陶芸、木工、染織等）についてのコースなどを中心とし、一次産業およびその

加工、展開についての教育研究を図ることとする。

2. 「生活福祉学科」：老齢化社会に向かう中で、地域福祉に携わる専門職が必要となる。そのため、保健コース（准看護師資格を得る）、保育コース（保育士資格を得る）、リハビリコース（理学療法士、作業療法士資格を得る）、福祉コース（指圧、鍼灸などを行う）などを設ける。
3. 「生活技術学科」：電算、情報処理、広告、広報観光サービス、グラフィックデザイン、秘書実務などを内容とし、地域における生活技術を修得する。

この短期大学の3学科の実現に向けては、北部市町村の行政、教育関係者で「大学設置期成会」を組織し、北部一体となって取り組んでいく必要があると提言されています。しかし、高等教育を希求する北部住民の悲願であった「地域総合短期大学」の設置は実現することはありませんでした。

1984（昭和59）年、北部12市町村で組織する北部広域圏市町村協議会は、「大学誘致委員会」の提案に基づき協議を重ね、『やんばる市民大学の展望』と題した報告書を提出しました。それには大学の誘致は困難だとする判断からキャンパスを持たない「市民大学」が提案されました。このような中、名護市は、1980（昭和55）年に国土庁大都市圏整備局に設置された大学等の新設・拡大を望む県外の学校法人等の閲覧に供する「学園計画地ライブラリー」に登録し、大学の誘致運動を展開していました。しかし、1985（昭和60）年と1986（昭和61）年の2回にわたって国土庁でヒアリングを受け、大学誘致に向けた情報提供を求めたが進展することはありませんでした。また、1998（昭和63）年から1990（平成2）年にかけて、アメリカのマイアミ大学とペンシルバニア州立大学から分校設置について関係者から打診がありましたが初期の段階で話がまとまらず、誘致委員会での検討にはなりませんでした。一方、同年の名護市長選挙で「誘致がだめなら自分たちの力で造ろう」と大学設置を選挙公約の一つとして掲げ当選した比嘉鉄也市長（後の第2代学校法人名護総合学園理事長）の下で、大学設置の取り組みが始まりました。

そして1991（平成3）年7月5日、名護市総合学園設立審議会（会長：山里将晃琉球大学教授）が発足しました。同年7月14日には発起人会に引き続き、東江康治元琉球大学長（後の初代学校法人名護総合学園理事長・名桜大学学長）を委員長、外間守善法政大学教授（後の学校法人名護総合学園理事）を副委員長とする名護総合学園設立準備委員会が発足しました。1992（平成4）年4月には、岸本建男企画部長（後の名護市長、創設経費や校舎建設等を担当）及び砂川栄右大学設立調整官（後の大学事務局長、教育課程の編成や教員の採用計画等を担当）並びに名護総合学園設立準備委員会及び大学設置専門委員会委員を中心に、『学校法人名護総合学園名桜大学設立基本構想』が取りまとめられました<sup>4)</sup>。設置形態については、名護市をはじめとする北部12市町村及び沖縄県が創設経費を負担し、学校法人が運営していくという、いわゆる公私協力方式の一種である「公設民営」方式となりました。

これは、地方にある大学を誘致又は新設する場合に採られた方法で、一般的に「公設民営大学」と呼ばれています。この方法は、1984（昭和59）年6月付け文部省の大学設置審議会大学設置分科会『昭和61年度以降の高等教育の計画的整備について』において、「地方の要望に適切に応じた高等教育機関を設置・運営する場合には、国、地方自治体と学校法人の協力が重要

である」と提言しています<sup>5)</sup>。その具体的な整備方策として、次の二つを挙げています。

- ① 地方公共団体が土地、校舎等の建設及び設備の一部を現物又は資金で準備する。
- ② 地方公共団体は学校法人に対し、経常費（運営費）の一部を補助する。

本学の設置経費を見ますと、創設経費（校舎等建設費及び設備購入費の全額と開学から平成9年度までの運営費の一部）66億2,935万7千円の内訳は、名護市が52億9,905万7千円、北部11町村が3億30万円、沖縄県が10億3,000万円を負担しています。また、用地23万9,803.6m<sup>2</sup>については、名護市が9万9,397.57m<sup>2</sup>を無償譲渡し、14万405.98m<sup>2</sup>は無償貸与で提供しています<sup>6)</sup>。

このような、文部省の高等教育計画や国土庁の国土開発に関する政策を背景に名桜大学は、1986（昭和61）年から1992（平成4）年までのゴールドセブンと言われる18歳人口の急増期に構想され、急減期の1994（平成6）年に、「地方大学」「私立大学」「単科大学」の三つの宿命を背負って、国際学部（国際文化学科・経営情報学科・観光産業学科）の1学部3学科でスタートしたのです。

## 2010年 公設民営の私立大学から公立大学へ

地域住民の強い期待に応えて誕生した名桜大学でしたが、18歳人口の減少や経済不況の逆風で、いきなり生存を賭けた大学改革の課題に迫られました。2000（平成12）年以降、一部学科で入学定員が充足できない中、比嘉鉄也学校法人名護総合学園理事長から東江平之学長（第2代名桜大学長）及び教授会に対し、次のとおり理事会決議文—「国際文化学科の改革」についてが通知されました。

### 理事会決議文

#### 「国際文化学科の改革」について

国際文化学科においては、平成12年度、平成13年度の2年連続の入学定員割れとなっている。この間、県内私立大学で本学国際文化学科と競合するような学部学科の改組が行われたといえ、このことが本学全体の定員の確保を困難にさせている。このことについては、平成13年3月28日に開催された、第25回学校法人総合学園評議員会から、「国際文化学科の改革」について検討する必要がある旨の意見書が理事会に提出された。これを受けて、第35回学校法人名護総合学園理事会においても審議され、国際文化学科の2年連続の定員割れは、法人経営上も看過できる事態ではないとの結論のもとに「国際文化学科の改革」を早急に進めることが決議された。ここに理事会決議として名桜大学長並びに教授会に対し、国際文化学科の組織、カリキュラム、学科の運営等の改革を求める。併せて他の学科においても教育の充実等に一層努力され、引続き学生確保に充分に留意されるよう要望します。（原文ママ）

平成13年4月4日

学校法人名護総合学園

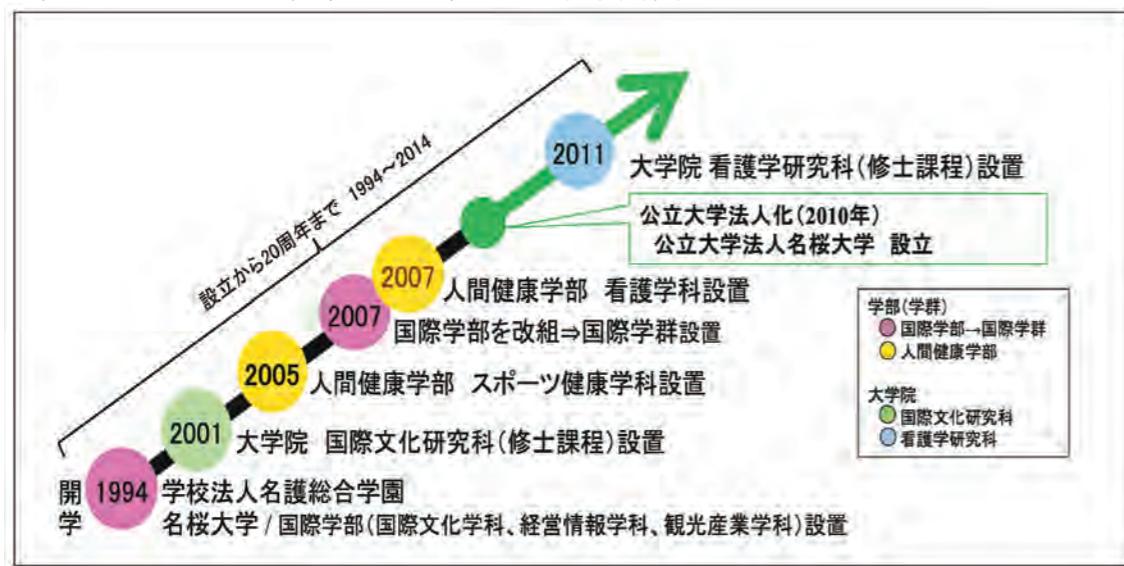
理事長 比嘉 鉄也

この「理事会決議文」が教授会に提出されたことが契機となって、大学改革委員会及び緊急対策会議等が設置され、改革が推進されました。2001（平成13）年には、国際文化研究科国際

文化システム専攻（修士課程）設置、2005（平成17）年には、人間健康学部にスポーツ健康学科設置、2007（平成19）年には、人間健康学部に看護学科増設、国際学部を国際学群国際学類（5専攻）に改組しています。2009（平成21）年には、学則変更届出により国際学群国際学類の下に診療情報管理専攻を増設し、計6専攻になりました。また、2010（平成22）年には、学校法人名護総合学園を解散し、公立大学法人名桜大学を設立、2011（平成23）年には、看護学研究科看護学専攻（修士課程）を設置しました（図表2）。

このような改革が実現すれば、学生に選ばれる大学になると予測しました。しかし、人間

図表2 設立から20周年（1994-2014）までの学部学科等の設置状況



健康学部については、順調に入学定員を充足することはできましたが、国際学群は、入学定員345人に対し入学定員充足率は、2007（平成19）年度78.8%、2008（平成20）年度65.6%、2009（平成21）年度47.8%でした。ただし、2009（平成21）年度については、実情に即して入学定員を65人削減して280人としたため、実質の入学定員充足率は58.9%でした。

こうした危機的状況に直面して経営、教育研究に対応する緊急対策方針が定めされました。その内容は、教職員・非常勤講師の削減や勤務体系の見直しによる人件費の削減、学生募集の見直し、低迷する国際学群の改組及び入学定員の削減などでした。しかし、これらの経営安定化に向けた取り組みは、ネガティブで教職員の士気を鼓舞するものではなく、大学再生の特効薬とはなりませんでした。すなわち、名桜大学の経営基盤が将来にわたって持続可能な成長や発展が期待できる内容ではなく、新たな改革案の必要性を示唆するものでした。

#### 公立大学法人化を模索

2004（平成16）年4月に、地方独立行政法人法（以下、「地独法」という。）が施行され、全国の公立大学を中心に地方独立行政法人（大学の場合は、特例で公立大学法人という文字を用いる）が設立されていました。これら公立大学法人化の取り組みを可能にした「公立大学法人

制度」は、地方自治体における「大学改革」の取り組みの一環として地独法の中に定められており、都道府県立大学などの行政による直営から民間的手法を取り入れながら、大学運営を自律的、弾力的、効率的なものに転換する制度であります。ところがその当時、都道府県立の直営の公立大学が公立大学法人化した事例は多くありましたが、学校法人から公立大学法人化した事例は皆無でした。

この前例のない公立大学法人化の作業を推進するため、水面下で情報収集を続けてきましたが、先行する高知工科大学への訪問、設置認可の窓口となる沖縄県、総務省自治財政局などの関係部署を訪問し情報を集約する必要がありました。

まず、訪問した高知工科大学では、先行している作業内容とそれらの取り組みについて詳細にアドバイスをしていただきました。そして、本学も公立大学法人への移行は可能だという手応えから、満腔の謝意を表しながら高知工科大学をあとにしました。その後、期せずして2009（平成21）年2月23日付け、日本経済新聞の「公設民営大を4月に公立化—高知、授業料半額学生呼ぶ」とする見出しの記事中に「名桜大は職員が高知工科大を視察し、公立大学法人への移行を検討するための調査を始めた。」と掲載されました。この記事を目にした琉球新報の記者からすぐさま取材依頼の申し入れがありました。そして、その取材を受けたことを機に同年2月26日の琉球新報の紙面に「名桜大、公立大学化を検討—時期、設置主体未定」とする記事が掲載され、翌日の沖縄タイムスの紙面には「名桜大2010年公立化—授業料半額、北部市町村が主体」と大きく掲載されました。この時点で、北部12市町村には情報を提供しておらず勇み足ではあったが、このことが契機となり、学内での作業と並行して北部12市町村との本格的な調整が始まりました。

その後すぐに、沖縄県庁の総務私学課を訪ね、数ページにまとめた公立大学法人化に関する書類を手渡しましたが、廊下で「資料は預かりますが、非公式です」と、取りつく島もなく、けんもほろろな対応でした。今度は、地方交付税担当の企画部市町村課を訪ねてみましたが、やはり同様な対応でした。県の対応窓口が定まらず途方に暮れましたが、北部12市町村を説得している間に県も相談窓口を決めてくれるだろうと、妥協を余儀なくされました。まさに五里霧中で先行きが全く見えませんでした。

しかし、沖縄県の相談窓口が定まらないならば国に頼るしかないと、総務省の公式ホームページの事務分掌を手掛かりに調査したところ、財務調査課が担当窓口だということが判明したため、直接、電話で相談することにしました。しかし、担当者が述べた「公立大学法人化に関することは、設立団体である地方自治体と協議することであり、大学と総務省が直に調整することは難しい」という回答は、至極もっともなことで異論を唱えることはできませんでした。だからといって手をこまねくわけにはいかないので藁にもすがる思いから「沖縄県に相談窓口ができるまで」と懇願し、同年12月には、総務省自治財政局財務調査課への事務相談の機会をいただき、名桜大学の沿革や土地・建物などの創設経費等を掲載した『名桜大学の公立大学法人化に向けた取り組み（報告書）』を提出して、地独法第2条（定義）に定める「地方公共団体が設立する法人」に合致するのか、地独法第6条（財産的基礎）に求められる「業務を確実に実施するために必要な資本金その他の財産的基礎を有する」のか、などの視点から移行の可能性を模索してきました。

## 公立大学法人化に向けた2つの課題

このような中で、設置者変更の根幹となる二つの課題を解決する必要がありました。

一つ目の課題は、設立団体の確定でした。

名桜大学の場合、沖縄県、名護市、北部12市町村で構成する北部広域市町村圏事務組合のいずれかが設立団体になる必要があったのです。大学創設の経緯から北部広域市町村圏事務組合が設立団体となって公立大学法人化するというのも当然でした。

しかし、事務組合理事会は、北部12市町村の首長、また議会は、北部12市町村の議会議長により構成されていますが、この理事会、議会の決定は、これらの構成自治体の同意が必要になります。そのための説得の作業は、学校法人側に委ねられました。そして当時の比嘉鉄也理事長、瀬名波榮喜学長、屋嘉義和事務局長、公立大学法人化準備室長の私、比嘉克宏北部広域市町村圏事務組合北部振興対策室長は、3離島を含む北部12市町村を3回にわたり訪問し、公立大学法人化及び設置者変更について詳細に説明を行いました。説明に当たっては、パソコンと投射用のスクリーンを持参し二つのことを強調しました。

一つには、「北部12市町村の新たな財源の拠出はない」ことを説明しました。1994（平成6）年の名桜大学創設時に、名護市を除く11町村が人口割で約3億円、沖縄県が約10億、名護市が約53億円を拠出していましたが、公立大学法人化に当たっては、北部12市町村の新たな負担金はないということを強調しました。

二つには、「北部広域市町村圏事務組合規約の一部を改正する必要がある」ということを説明しました。その改正内容とは事務組合規約の共同事務を行う条項に、「地方独立行政法人法に基づいて大学を設置及び管理に関する事務」を追加し、設立主体として大学を管理運営することを明文化する必要がありました。そのため、事務組合を組織する12市町村議会の承認が必要になる、ということを強調し説明を行いました。

その結果、それぞれ北部12市町村の議会ごとに「北部広域市町村圏事務組合規約の一部改正」について審議され、議決されていきました。

二つ目の課題は、沖縄県の担当窓口を確定することでした。

これまで沖縄県を訪問しましたが、依然として窓口は定まっていませんでした。しかし、難航していました担当窓口が突然、沖縄県企画部市町村課に決まりました。

2009（平成21）年8月、沖縄県企画部を訪問した際のエピソードです。当時の川上好久企画部長（後の副知事、その後沖縄開発金融公庫理事長に就任）は、本学の屋嘉事務局長と高等学校の同窓でした。そうした関係性から事務局長は、「沖縄県庁の近くに来たので、ちょっと寄っていいか」と、偶然を装って連絡を入れました。そうしたところ企画部長は安易な気持ちで「コーヒーでも飲みにおいでよ」と快諾していただいたので、事務局長と私は両手が塞がるほどの公立大学法人化に関する資料を持って県庁6階の企画部長室を訪ねました。なんとしても沖縄県の窓口を確定させなければいけないと藁にもすがる思いが募る中で、企画部長との雑談を始めました。はやる気持ちを抑え、東の間の雑談が終わるのを見計らって唐突に、「名桜大学を公立大学にしたいので協力してほしい」と口火を切りました。すると企画部長は、「公設民営の大学を公立大学にできるの？」と逆に問い合わせられたところ、事務局長と私はすぐさま「できます」と応えました。そして「昨年（平成20年）に、高知県を設立団体として公立大

学法人化を目指している高知工科大学を訪問してきたこと、総務省の自治財政課にも出向き話を聞いてきたこと、そして可能な限りの情報を収集した結果、北部広域市町村圏事務組合を設立団体として公立大学法人化できることを確信したこと」を伝え、加えて「沖縄県のバックアップが必要不可欠なので、今日はそのお願いに来た」という目的を企画部長にお話ししました。

すると企画部長は、「そんなうまい話があるわけがない」と怪訝な面持ちで比嘉課長と渡嘉敷係長に同席を求め相談を始めました。そして担当課長の「時間をかけなければできる」という発言を受け、企画部長は「それでは、できるのであれば進めましょう、県北部地域に公立大学は必要だ」と賛意を示し、すぐに渡嘉敷係長を総務省に派遣することになりました。これが突破口となり、企画部市町村課が公立大学法人化の窓口に決まりました<sup>7)</sup>。

このように二つの課題を解決し、事務組合と学校法人名護総合学園との間で大学の「設置者変更に関する契約書」を締結することができました。その契約書の内容は、①地独法の規定に従って、名桜大学の設置及び管理をする公立大学法人を設立するために沖縄県に認可申請を行うこととし、公立大学法人の名称は公立大学法人定款に定める法人とすること、②学校教育法に基づき、文部科学省に設置者変更を行うこと、③私立学校法に基づき、文部科学省に学校法人解散認可申請を行うこと、④解散時の財産及び職員の処遇についてはそのまま継承しこれを誠実に実行すること、となっています。2009（平成21）年12月、事務組合と学校法人名護総合学園の間でこれらについて合意が得られました。幸い、総務省、文部科学省の指導・助言の下で、沖縄県・名護市及び北部12市町村の市町村長で構成する事務組合の理事会並びに12市町村議長で構成する事務組合の議会及び事務組合の北部振興対策室の協力のもと、移行作業は順調に進めることができました。そして、その協働作業の成果を短時間にまとめ、沖縄県と文部科学省へ提出しました。

## 公立大学法人化の成就

2009（平成21）年12月19日、地独法に基づき「公立大学法人名桜大学設立認可申請書」が事務組合理事長から沖縄県知事へ提出されました。また、学校教育法に基づき「名桜大学設置者変更申請書」及び私立学校法に基づき「学校法人名護総合学園設置者変更及び解散に係る認可申請書」が学校法人名護総合学園理事長から文部科学大臣に提出され、2010（平成22）年3月19日付けで公立大学法人名桜大学の設置、学校法人名護総合学園の解散及び設置者変更が認可されました。これらの一連の作業は、名桜大学の在校生、教員、職員、校地、校舎、機器備品、金融資産などの財産と権利義務の全てを切れ目なく継承し、大学の教育研究の継続性を保証するという観点から、設立・変更の登記は同年4月1日に同時に行われました。このような手続きにより、学校法人が設置する名桜大学は消滅し、沖縄県初の公立大学法人が設置する新生名桜大学となりました（図表3）。

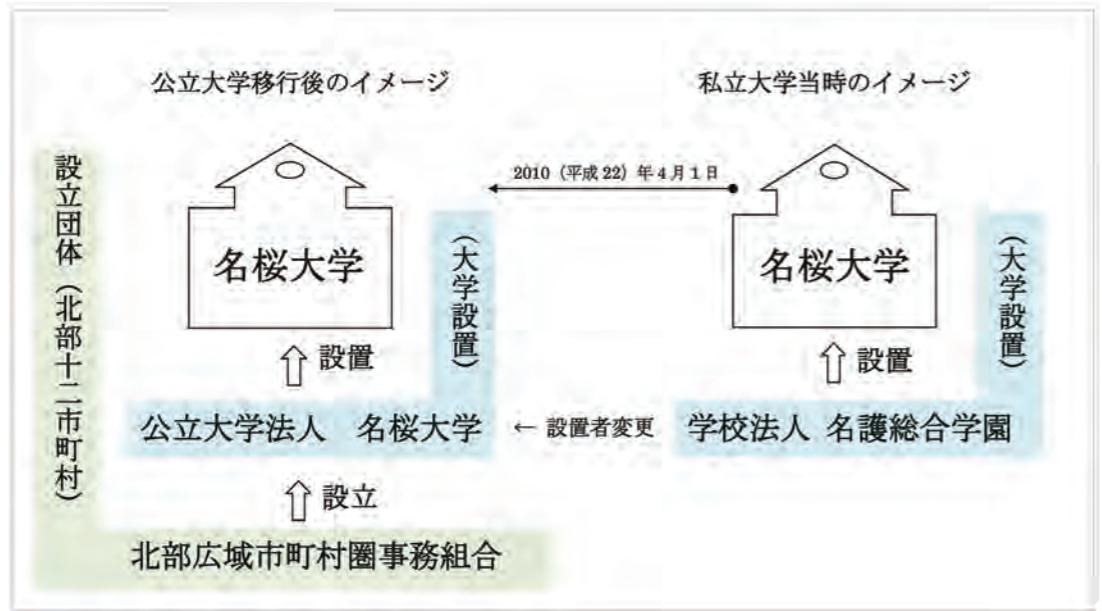
この「公立大学法人制度」は、名桜大学の創設時には存在しませんでした。このことから公設民営の私立大学として設置された名桜大学は、2004（平成16）年に施行される地独法の先駆けとして、北部地域の活性化、進学機会の拡充及び地方創生にその役割を果たしてきたと言えます。また、先人の言葉に「脱皮しない蛇は滅びる」というのがありますが、公設民営の私立大学から公立大学への転換という壮舉を成し遂げたことは、まさに名桜大学が新しく生まれ変

わるための「脱皮」であったと言えます<sup>7)</sup>。

もちろん、名桜大学だけでこの大事業を成し遂げることはできません。名桜大学、北部広域市町村圏事務組合、沖縄県、名護市の4者の連携があってのことです。北部広域市町村圏事務組合の比嘉克宏氏、沖縄県の川上久好氏、名護市の末松文信氏、金城秀郎氏、仲井眞修氏、さらには先発の高知工科大学職員の指導と協力があったからこそ実現したのです。

これはまさに、「天の時、地の利、それに人の和」によって公立大学法人化が成就したと言つても過言ではありません。

図表3 公設民営の私立大学から公立大学へ



注・参考文献

- 1) 沖縄県公文書館資料コードB00162753B、「琉球大学師範科名護分校設置請願書」。
- 2) 名桜大学開学10周年記念誌部会（2004）、「名桜大学10年史」p.22。
- 3) 名護市役所企画室（1984）「北部に地域総合大学を名護市誘致委員会が答申」『名護市広報・市民の広場』第146号、p.2。
- 4) 名桜大学開学10周年記念誌部会（2004）、「名桜大学10年史」pp.22-32。
- 5) 大学設置審議会大学設置計画分科会は、1984年6月、「昭和61年度以降の高等教育の計画的整備について」報告している。その中の「高等教育機関の地域配置の在り方」について述べた箇所で、「国、地方公共団体、学校法人の協力方式による高等教育機関の整備」には三つの方式があるとして、地方の要望に応じた高等教育機関を設置・運営する場合の公私協力方式について述べている。
- 6) 学校法人名護総合学園設立準備委員会（1993）、「名桜大学設置認可申請書」。
- 7) 名桜大学開学20周年・公立大学法人化5周年記念事業記念誌部会（2014）、「名桜大学20年史公立大学法人化5周年記念」公立大学法人名桜大学、pp.37-41。

(総務企画部参与・学長補佐 金城 正英)



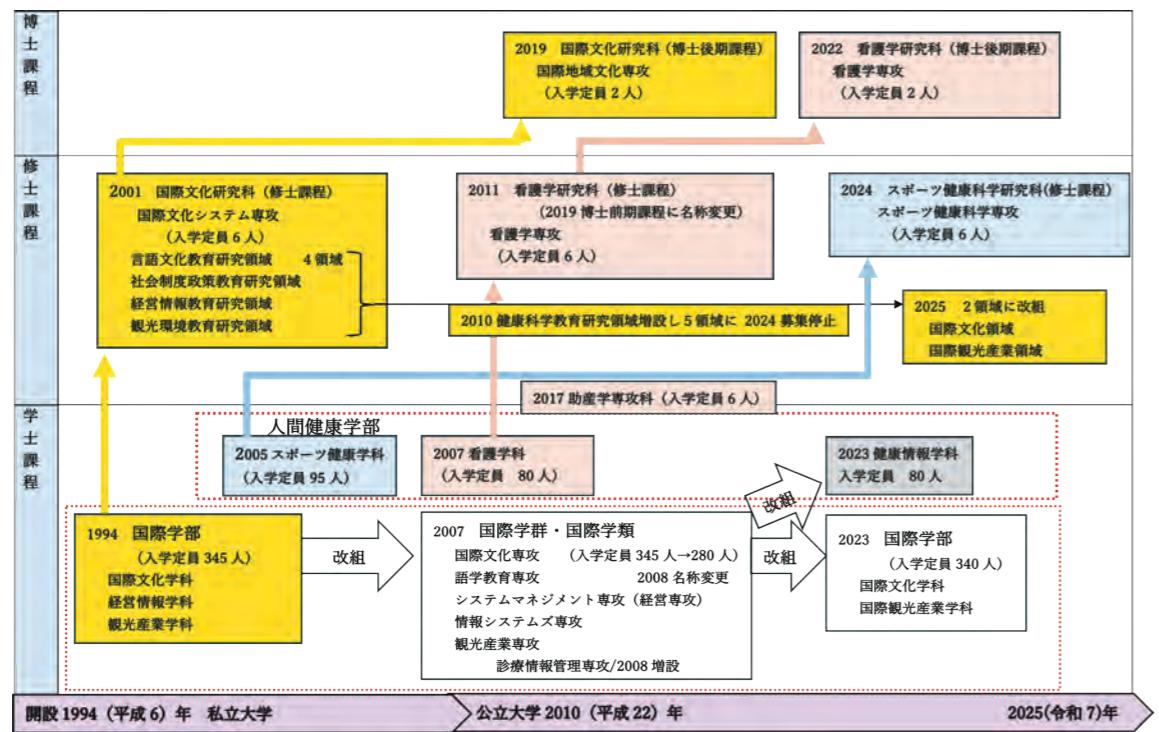
## 10年のあゆみ——2015～2025年

- 2017 助産学専攻科設置
- 2019 大学院国際文化研究科（博士後期課程）設置
- 2022 大学院看護学研究科（博士後期課程）設置
- 2023 国際学部 国際文化学科設置、国際観光産業学科設置
- 2023 人間健康学部 健康情報学科設置
- 2024 大学院 スポーツ健康科学研究科（修士課程）設置

2015（平成27）年から2025（令和7）年の10年間は、振り返るとエポックメイキングな年であったと言えます。2017（平成29）年4月、助産学専攻科、2019（平成31）年4月、大学院国際文化研究科国際地域文化専攻（博士後期課程）、2022（令和4）年、大学院看護学研究科看護学専攻（博士後期課程）、さらに2024（令和6）年4月、大学院スポーツ健康科学研究科スポーツ健康科学専攻（修士課程）が設置されました。具体的には、極めて高い水準の研究能力が一般的に求められる「研究者」「大学教員」を養成する2博士後期課程が設置されました。また、「高度専門職業人」を養成する1修士課程が設置されています。併せて、国際学群を改組し、国際学部に国際文化学科、国際観光産業学科を設置するとともに、人間健康学部スポーツ健康学科と看護学科に加え、新たに健康情報学科を設置しています（図表4）。

本章では、まず国際学部から国際学群、国際学群から国際学部への2度にわたる改組の状況について叙述し、併せて学士課程を基礎とした大学院研究科設置の状況を叙述します。ただし、それ以外の部分については学部、研究科、専攻科等が執筆する「第2章 大学紹介」に譲ることとします。

図表4 改組と大学院研究科の設置（基礎とする学士課程と修士課程及び博士課程）



## 改組と大学院研究科の設置

### 1 新生国際学部設置前史

#### (1) 国際学部から国際学群への改組 (2007)

前述のとおり、2001（平成13）年4月に、比嘉鉄也学校法人名護総合学園理事長から東江平之学長（第2代名桜大学長）及び教授会に対し、「理事会決議文一「国際文化学科の改革」について」が提出されことを契機に、国際学部を早急に改組するよう指示が出されていました。2005（平成17）年3月に安田晃次学長（第3代名桜大学長）のもとに「国際学部の改組案を検討する学長室会議」が召集され、同年8月24日付で小濱哲国際学部長から国際学部の教職員に「国際学部の改組の方針」として、国際学部改組の背景と目的、教育目標とその内容、改組のポイント及び今後のスケジュール（予定）等が示されましたが、その後の作業は進展しませんでした。

そのような中、2006（平成18）年2月17日付で就任した瀬名波榮喜学長（第4代名桜大学長）は、社会の価値観の多様化、それに伴う入学者の多様化に対応させるため、懸案事項であった国際学部を学群制に移行するための改組を行うこととしました。最初に学群・学類・学系制度を導入した大学は筑波大学ですが、その後、桜美林大学や福島大学に導入されました。当時、学群制は一般的ではありませんでした。2005（平成17）年に瀬名波学長と内間直仁国際学部長（後の初代国際学群長）と新学部学科設置準備室長の私は、学群制度を導入していた国内単位互換協定大学の桜美林大学（当時の佐藤東洋士理事長）を視察しました。そして、学群・学類制を導入した桜美林大学の成功を目の当たりにして、帰任後、本学も学群制を導入する方向で改組検討委員会を立ち上げるよう瀬名波学長、内間学部長から指示が出され、同年3月8日に第1回国際学部改組検討委員会が開催されました。

委員（当時）は、内間直仁国際学部長（委員長）、各学科から住江淳司助教授、渡慶次正則助教授、木村堅一助教授、佐久本功達講師、朴在徳助教授、宮城敏郎助教授、事務局から屋嘉義和総務企画部長、垣花勝行教務部長、又吉純入試広報部長とし、庶務は、新学部学科設置準備室長の私と上江洲安幸係長が担当しました。議事に先立ち、瀬名波学長から改組にあたって「学科制を採らない場合、選択肢として学群制や主専攻・副専攻等のカリキュラム構成も視野に入れて検討してほしい」と提言されました。また、検討委員会委員から、「自ら改組に関して理解した上で取り組みたいということ、また、所属学科に対して説明義務があるので、なぜ改組が必要か確認したい」旨の発言があり、内間委員長から「大学運営の最高機関（責任者）である理事会が改組の必要性を決定しています。その理由として、大学の経営基盤が弱くなっていることが挙げられます。そのためにもこれまで、退学・休学防止等について各教員の努力が求められてきましたが、打開するためには、魅力ある大学を構成しなければならないということであり、現状に留まっていると他大学に遅れてしまうのは事実であります。常に脱皮しなければならないのです。学科において何か異論があれば、学部長の私に問い合わせるよう伝えてください。」と改組の必要性が述べられ、都合38回にわたり検討委員会が開催されました。

会議は週2回のペースで開かれ、たびたび深夜まで及ぶことがありました。定員確保に苦戦している国際文化学科が学群制移行に積極的であるのに対し、定員を安定的に確保している観光産業学科は、学群制への移行に消極的でした。一方、志願者が減少しつつある経営情報学科は、学科制と学群制の両方の選択肢を検討しており、各学科の実情に応じた心情が、その対応

に滲み出ていました。当然のことながら、定員割れを起こしている学科と定員を充足している学科とでは、議論がかみ合わないことが多々ありました。あまりにも意見がまとまらないため、時折「改組を断念しようか」と内間委員長の研究室で苦いコーヒーを飲みながら話し合ったこともあります。

しかし、内間委員長のリーダーシップで国際学部改組案をまとめていきました。2006（平成18）年5月には、国際学部教授会において学部改組の方向性について了承を得ることができました。そして7月31日付で文部科学省へ『名桜大学国際学群届出書』を提出することができました。

国際学群は、幅広い職業人養成の機関となることが社会的責務と考え、1994（平成6）年創設の国際学部の3学科（国際文化学科、経営情報学科、観光産業学科）を統合しました。その教育組織の編成の考え方は、研究組織と教育組織の2組織で構成した点です。研究組織は教員が研究を行なっていく組織で、国際文化教育研究学系、経営情報教育研究学系、観光産業教育研究学系の3学系で構成しています。各学系には、学系長を置き、学系長が教育科目提供の責任を負うものとしています。また、国際学群国際学類のもとに5専攻（国際文化専攻、語学教育専攻、システムマネジメント専攻、情報システムズ専攻、観光産業専攻）及び副専攻を置くこととしました。専攻には専攻長を置き教育課程の改革及び編成に責任を負う体制を整えました。国際学群は、学部・学科制に比べて専攻、副専攻、教職課程などが柔軟に選択できるシステムになっており、教職員を第一に考えた組織ではなく、学生ファーストの組織に変わったということが言えると思います。

<sup>28</sup> 文部科学省への設置届出するにあたり一番苦労したことは、文部科学省の担当官を納得させる法的根拠を示すことでした。それは、大学設置基準第4条に教育研究上の基本組織として「学部には学科を設ける」と規定していたためです。そのため以下のとおり、説明することとしました。

本国際学群は、教育研究上の基本組織として「学部」を「学群」に、「学科」を「学類」として組織することとした。本国際学群国際学類の専攻は、国際社会及び地域社会の要請に応えるように編成した「人材育成モジュール」であって学科に設けられた専攻ではありません。すなわち従来の専攻によって学科が設けられる学部とは概念的に違う意味で捉えている。本専攻の「国際文化専攻」「語学教育専攻」「システムマネジメント専攻」「情報システムズ専攻」「観光産業専攻」の5専攻は、従来の縦型構造を生み出す個別化されたものではなく、「人材育成モジュール」であるということ、また、学則上の国際文化学科、経営情報学科及び観光産業学科の授業科目は従来の学科ごとに分化されたものではなく、すべての科目が一つの箱に入っている。

さらに、学校教育法第53条の但し書きに「当該大学の教育・研究上の目的を達成するため、有益かつ適切である場合においては、学部以外の教育・研究上の基本となる組織を置くことができる」とある。上記の5専攻は、従来の学科の組織としては位置付けず、5専攻を持って教育組織の集合体としていることに照らした上でも、学部ではなく学群であることが望ましい。

と説明して承認を得ました。教育課程の編成の考え方に対する回答では、3学科の提供科目を基礎教養科目の学際・統合系科目、専門教育科目の学類共通科目及び専攻専門科目として統合し、

学生は各専攻の教育目標に合わせて履修していくことで「人材育成モジュール」と表現し、文部科学省の承認をいただきました。

さらに、2008（平成21）年4月には、地域のニーズを踏まえ、新たに「診療情報管理専攻」を加え1学群1学類6専攻とし、同時に「システムマネジメント専攻」を「経営専攻」に名称変更しました。しかし、国際学群開設当時から高校現場や本学評議員会委員などの学外委員等からは、「学群学類制では、これまでの経営情報学科や観光産業学科の教育内容や特色が見えない、わかりにくい」などの声があり、改組の必要性に迫られてきました。

## （2）国際学群から新生国際学部の設置（2023）

2020（令和2）年2月、理事長、学長、副学長、学部長及び事務局長等で組織する第1回法人運営会議（議長：高良文雄第6代理事長）において、国際学群の改組を検討するための「公立大学法人名桜大学国際学群改組検討委員会規程」が制定されました。同年3月には第1回国際学群改組検討委員会（委員長：山里勝己第5代学長）が発足し、高良理事長から、これまで継続審議となっていた国際学群の改組3案を含めて、新たな視点で「国際学群改組の趣旨及び必要性等」を検討するよう諮問がなされました。また同年8月には、新学長の下で第2回国際学群検討委員会（委員長：砂川昌範第6代学長）が開催されました。砂川学長からは、「学部・学科の名称及び新教育組織検討ワーキンググループ（委員長：新垣裕治教授）」に対し、国際学群の情報システムズ専攻と診療情報管理専攻の見直しを図るとともに、人間健康学部への移動も視野に入れ検討するよう提言されました。このことを受けて同年9月には、新垣委員長から学部名称を「国際学部」とし、学科名称を「国際文化学科」「国際観光学科又は観光産業学科」に、さらに、人間健康学部に新たに設置する学科名称を「医療情報学科」とすること、新教員組織については、以下の四つの枠組みとする内容が砂川学長に答申されました。

- ① 医療情報学科については、経営情報教育研究学系所属の「情報システムズ専攻」「診療情報管理専攻」の教員を中心に組織する。
- ② 国際文化学科に係る教員組織については、国際文化教育研究学系所属の教員を中心に組織する。
- ③ 国際観光産業学科又は観光産業学科に係る教員組織については、経営情報教育研究学系所属の「経営専攻」の教員と観光産業教育研究学系教員を中心に組織する。
- ④ ただし、今後設置される3つの「教育課程を検討するワーキンググループ」国際文化学科WG、国際観光産業学科又は観光産業学科WG、医療情報学科WGの審議を踏まえ、教育課程編成上、必要な教員の採用や異動を行う。

国際学群検討委員会では、同答申に基づきさらなる検討を重ねた結果、2023（令和5）年4月から国際学群国際学類の情報システムズ専攻と診療情報管理専攻の募集を停止の上、両専攻の教員組織を人間健康学部に異動し、「医療情報学科」を「健康情報学科」とすることに、また、国際文化専攻と語学教育専攻を統合し「国際文化学科」に、経営専攻と観光産業専攻を「国際観光産業学科」とし、1学部2学科体制に改組する方針案をまとめました。そして、2020（令和2）年10月に法人運営会議に改組に関する方針案を報告し、文部科学省への申請に向けた取り組みを加速していました。

## （3）新生国際学部の組織構成

国際学群検討委員会では、教育組織（学生を指導する学類・専攻）と研究組織（国際文化教

育研究学系、経営情報教育研究学系、観光産業教育研究学系)が異なる人材育成モジュール(専攻)としての横断的な履修を可能にした学群制を見直し、教育組織と研究組織が一体となった4年間の責任ある教育体制を目指し学部・学科制に移行することとしました。

2023(令和5)年には、「国際学群」から「国際学部」に名称変更を行うと同時に、「国際学類」のうち「国際文化専攻」及び「語学教育専攻」を改編し、「国際文化学科(収容定員730人)」を設置、「国際学類」のうち「経営専攻」及び「観光産業専攻」を改編し、「国際観光産業学科(収容定員650人)」を設置することとしました。

また、保健・医療・福祉、行政、製造業、サービス業など、社会における様々な問題・課題を数理・データサイエンス・AIの手法を駆使し、新たな価値やサービスの創出に貢献できる人材を養成するため、「国際学類」の「情報システムズ専攻」及び「診療情報管理専攻」を基盤とした「健康情報学科(収容定員330人)」を人間健康学部に設置することとしました。

これにより国際学部に2学科、人間健康学部に3学科、すなわち2学部5学科を擁する大学となりました。なお、入学定員及び3年次編入学定員並びに収容定員は以下のとおりです(図表5)。

図表5 国際学群改組に伴う組織の移行表

(単位:人)			
変更前		変更後	
国際学群	入学定員	編入学定員	収容定員
国際学類	280	15	1,150
国際文化専攻			
語学教育専攻			
経営専攻			
観光産業専攻			
情報システムズ専攻			
診療情報管理専攻			
合計	340	10	1,380

※1 国際学部各学科の入学定員中5人は外国人留学生とする。  
(学則第2条第2項関係)

変更前			
人間健康学部	入学定員	編入学定員	収容定員
スポーツ健康学科	95	5	390
看護学科	80	5	330
合計	175	10	720

計 1,870

変更前			
人間健康学部	入学定員	編入学定員	収容定員
スポーツ健康学科	95	5	390
看護学科	80	5	330
健康情報学科	80	5	330
合計	255	15	1,050

計 2,430

#### (4) 文部科学省への届出

大学の新設や新学部等を開設した場合及び大学等の収容定員に係る学則の変更の認可を受けた場合は、原則として当該学部等が「完成年度」(開設又は変更年度に入学した学生が卒業する4年間)を迎えるまでは、設置計画履行状況等調査(通称:アフターケア(AC))の対象期間になります。例えば、教員の変更等がある場合は、新たな教員を補充するなど適切な対応が求められます。

しかし、国際学群の国際学部への改組にあたっては、「学部の名称変更」と「学部の学科

の設置」並びに「収容定員の変更」を「学則の変更の届出」により行いました。

「国際学群」から「国際学部」への学部の名称変更については、原則として既存の教育課程等の変更を伴わない、いわゆる「看板の掛け替え」のみの変更であることから大学設置・学校法人審議会大学設置分科会運営委員会(以下、「運営委員会」という)の「事前相談」に諮り、了承を得ることができました。ただし、「国際学類」から「国際文化学科」への「学科の名称変更」については、運営委員会から「教育課程の変更を伴う計画になっている」との指摘から「新たな組織の設置」と見なされたため、「名称変更の届出」を行わないこととしました。このことから、2022(令和4)年3月15日付、「私立学校等学長決定及び公私立大学等の学則変更等の届出について(通知)に基づき、「学則の変更の届出」により、「国際文化学科」を設置することとしました。また、国際観光産業学科及び健康情報学科の設置及び国際学部並びに人間健康学部の収容定員の変更についても同様に「学則の変更の届出」により行いました。これらの手続きは、当該届出書が文部科学省へ提出された時点で完了となり、「完成年度」までのアフターケア(AC)への対応は一切不要で、教務事務等の手続き作業は大幅に軽減されました。

なお、「学則の変更の届出」の結果は、図表5に示すとおり国際学群から国際学部への変更後の入学定員は、280人から340人となり60人の入学定員増となりました。また、人間健康学部の入学定員は175人から255人となり80人の入学定員増となりました。さらに、大学全体の収容定員は、1,870人から2,430人となり560人の収容定員増となりました。

## 2 大学院研究科の設置

2005(平成17)年9月5日、中央教育審議会の答申『新時代の大学教育—国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて—』において、大学院は、「創造性豊かな優れた研究・開発能力を持つ研究者等の養成」、「高度な専門的知識・能力を持つ高度専門職業人の養成」、「確かな教育能力と研究能力を兼ね備えた大学院教員の養成」及び「知識基盤社会を多様に支える高度で知的な素養のある人材の養成」の四つの人材養成機能を担っていることを提言しています。同答申における四つの人材養成機能に照らした場合、本学大学院修士課程では、通常2年間で完結することを想定されている課程であるということを踏まえ、「高度の専門職業人」の養成とし、また博士課程は、極めて高い水準の研究能力が一般的に求められる「研究者」「大学教員」を養成することとしています。

また、本記述に当たっては、大学院開設準備から完成年度まで事務局担当者として携わる機会がありましたので、原則として文部科学大臣に提出した「大学院設置認可申請書」をもとに叙述するものです。なお、大学院完成年度以降の歩みについては、各研究科が執筆するページに譲ることにします。

### (1) 国際文化研究科国際文化システム専攻(修士課程)の設置(2001)

名桜大学大学院国際文化研究科国際文化システム専攻(修士課程)(入学定員6人)は、2000(平成12)年6月30日付で東江康治理事長(初代学校法人名護総合学園理事長・初代学長)から「名桜大学大学院国際文化研究科国際文化システム専攻(修士課程)設置認可申請書」が文部大臣に提出され、同年12月21日付で認可されました。2001(平成13)年4月、東江平之学長(第2代学長)のもと、それまで国際学部長・副学長だった瀬名波榮喜教授(後の第3代名桜大学長)が初代研究科長に就任しました。

本研究科は、国際学部を構成する「国際文化学科」「経営情報学科」「観光産業学科」の教育

課程を基礎としながら、国際文化システム専攻としてさらに統合されたアプローチをとり、研究課題の明確化と教育研究体制の緊密な連携の視点に立ち「言語文化教育研究領域」「社会制度政策教育研究領域」「経営情報教育研究領域」「観光環境教育研究領域」の4領域をもって教育課程を編成していました。大学院設置時の教員組織は、研究指導教員15人、講義担当教員14人、兼任教員13人で編成し、領域ごとに研究指導教員（マル合教員）を配置していました。

その後、2010（平成22）年、新たに教育研究分野を異にするスポーツ健康学科教員で組織する「健康科学教育研究領域」が増設され5領域となりました。しかし、同領域は、国際文化研究科の教育課程の編成や実施の方針を踏まえた場合、スポーツ健康学科を基礎学部とする新たな研究科の設置が望まれました。そして、2024（令和6）年4月、スポーツ健康科学研究科が設置されると同時に、「健康科学教育研究領域」は、学生募集を停止することになりました。

次いで、2025（令和7）年4月には、4教育研究領域を2領域に再編成し国際文化領域（国際文化分野、語学教育分野）に修士（国際文化）、国際観光産業領域（国際観光分野、経営情報分野）に修士（国際観光産業）を授与するための大学院学則を変更するに至りました。

開設時の大学院の入学定員、収容定員及び学位名称等は、次のとおりです（図表6）。

図表6 大学院の入学定員、収容定員及び学位名称等

研究科・専攻・領域	課程	設置年度	入学定員	収容定員	学位名称
国際文化研究科					
国際文化システム専攻					
言語文化教育研究領域	修士課程	2001 (平成13)	6人	12人	国際文化 (国際観光産業) <sup>*1</sup>
社会制度政策教育研究領域					
経営情報教育研究領域					
観光環境教育研究領域					

\*1 改組により、2025（令和7）年4月から国際文化領域に修士（国際文化）、国際観光産業領域に修士（国際観光産業）が授与できるよう改正されました。

## （2）大学院看護学研究科看護学専攻（修士課程）の設置（2011）

大学院看護学研究科看護学専攻（修士課程）（入学定員6人）は、2010（平成22）年5月22日付で嘉数啓公立大学法人名桜大学理事長（第3代理事長）から「名桜大学大学院看護学研究科看護学専攻（修士課程）設置認可申請書」が文部科学大臣に提出され、同年10月29日付で認可されました。2011（平成23）年4月、瀬名波榮喜学長（第4代学長）のもと、これまで人間健康学部看護学科長だった金城祥教教授が初代研究科長（人間健康学部長併任）に就任しました。

本研究科は、沖縄の歴史や文化に根ざしたケアリング理論を基盤として、地域に根差した地域の健康問題を創造的に解決していく卓越した看護実践能力の養成と看護現象の解明を目的とした研究能力の開発、看護の新たな価値の創出を目指す、①地域の看護需要に対応して問題を解決するための指導的役割を果たす看護実践のリーダーの養成、②沖縄県北部12市町村の健康課題をテーマに継続的に研究する教育者と研究者を養成することを目的としています。

本研究科の設置時の教育課程は、基礎看護学、看護学教育、地域在宅看護学、高齢者リハビリテーション看護学、母性看護学、小児看護学、精神看護学の7分野のコースワークを導入し、

本研究科の養成する人材像の達成を目指しています。また、教員組織は、看護師、保健師、助産師のいずれかの免許を取得している専任教員15人、医師免許を有する専任教員1人、その他2人の計18人で編成しています。教員配置にあたっては、学位のほか、それぞれの分野における十分な教育・研究業績、実務経験等を有する教授9人、准教授3人、講師6人の計18人の専任教員と兼任教員12人を配置しています。

その後、2021（令和3）年に、看護学研究科（博士後期課程）看護学専攻が設置されると同時に、看護学研究科（修士課程）は看護学研究科（博士前期課程）に名称変更申請を行ない現在に至っています。

開設時の大学院の入学定員、収容定員及び学位名称等は、次のとおりです（図表7）。

図表7 大学院の入学定員、収容定員及び学位名称等

研究科・専攻	課程	設置年度	入学定員	収容定員	学位名称
看護学研究科看護学専攻	修士課程 (博士前期課程) <sup>*1</sup>	2011 (平成28)	6人	12人	看護学

\*1 2021（令和3）年4月、大学院博士後期課程設置に伴い、修士課程から博士前期課程に名称を変更しました。

## （3）大学院国際文化研究科国際地域文化専攻（博士後期課程）の設置（2019）

大学院国際文化研究科国際地域文化専攻（博士後期課程）（入学定員2人）は、2018（平成30）年3月30日付で比嘉良雄公立大学法人名桜大学理事長（第5代理事長）から「名桜大学大学院国際文化研究科国際地域文化専攻（博士後期課程）設置認可申請書」が文部科学大臣に提出され、本学初の博士課程として同年8月31日付で認可されました。2019（平成31）年4月、山里勝己学長（第5代学長）のもと、波照間永吉教授（沖縄県立芸術大学名誉教授）が初代研究科長に就任しました。

本研究科は、国際文化研究科国際文化システム専攻（修士課程）において構成する五つの教育研究領域（言語文化、社会制度政策、経営情報、観光環境、健康科学）のうち、「言語文化教育研究領域」を基礎に発展させたものとして国際文化研究科国際地域文化専攻（博士後期課程）が設置されました。

### 博士後期課程設置の意義

これまでの沖縄（琉球）・アジア、（ハワイを含む）南北アメリカ研究は、近年かなりの発展を遂げてきているものの未だ解明されていない領域が数多くあり、特に環太平洋という視点に立ったこの分野の研究が必要とされています。また、高等教育機関におけるこの分野の研究の継続に関して言えば、今後の発展に十分に対応している状況とは言えません。そのため本学では環太平洋という視点に特化し、これまでに蓄積された沖縄（琉球）・アジア、（ハワイを含む）南北アメリカ研究を継承・深化するため、「国際地域文化専攻（博士後期課程）」を設置することで、高度の普遍的な研究を行う必要があると思料するに至りました。

### 教育課程編成の考え方

教育課程編成にあたっては、「文化の多様性を理解し、グローバルな視点から国際社会が抱える多様かつ重要な課題の解決に向けた普遍的な研究を行い、高度な水準の研究を行うために

必要な能力及びその基礎となる豊かな学識を有する創造性に富む人材を養成する」ことを目的としています。具体的には、①「国際地域文化という観点から、高度の外国語運用能力を駆使し、沖縄（琉球）・アジアと（ハワイを含む）南北アメリカに特化した環太平洋の地域文化の研究を行い、地域社会や国際社会において活躍できる人材の育成を目指す」、②「本学が立脚する琉球・沖縄の歴史や文化の研究を深化し、その成果を沖縄の地域創生に役立て、国内外の学生や研究者との共同研究を通じて、先端的な理論と知識を創造することのできる研究者を養成する」という養成する人材像のもとディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与方針）を掲げています。

これらの目的・方針の達成に向けて、本博士後期課程の教育課程は、「国際」「地域」「文化」を基本概念とし高度の外国語運用力を含む研究能力を備えた研究者を育成するため、また、総合的な判断能力を育成し、グローバルと地域の視点を備えた研究者を育成するために研究分野間の学際的な連携を図ることを重視し編成しています。かつ、体系的に教育課程を編成するため、「共通科目」、「専門科目」及び「研究指導科目」の区分により授業科目を配置しています。以上の方針を「カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施方針）」として掲げています。

#### カリキュラム・ポリシー（教育課程編成・実施方針）

1. 「国際」「地域」「文化」を基本概念としてカリキュラムを編成し、高度の外国語運用力を含む研究能力を備えた研究者を育成する。
2. 総合的な判断能力を育成し、グローバルと地域の視点を備えた研究者を育成するため、研究分野間の学際的な連携を図る。
3. 博士の学位にふさわしい高度な専門知識と学識の修得及び研究遂行能力の醸成を目的に共通科目を編成する。
4. 専門科目は、複数の専門分野に関連する研究課題にも応用できる研究能力を醸成することを目的に、沖縄（琉球）・アジア研究及び（ハワイを含む）南北アメリカ研究に関する専門科目及び関連科目により編成する。
5. 博士論文執筆のための指導を行う研究指導科目を編成する。

教員組織は、原則として、高い教育実績、研究業績及び研究指導実績を有する専任の教授で組織しています。専任教員は11人であり、教授9人、准教授2人、兼任講師1人を配置しています。

このような教員構成により、国際社会及び地域社会で活躍できる国際水準の人材を養成することとしています。

開設時の大学院の入学定員、収容定員及び学位名称等は、次のとおりです（図表8）。

図表8 大学院の入学定員、収容定員及び学位名称等

研究科・専攻	課程	設置年度	入学定員	収容定員	学位名称
国際文化研究科	博士後期課程	2019 (令和元)	2人	6人	国際地域文化
国際地域文化専攻					

#### （4）大学院看護学研究科看護学専攻（博士後期課程）の設置（2022）

大学院看護学研究科看護学専攻（博士後期課程）（入学定員2人）は、2021（令和3）年3月18日付で高良文雄公立大学法人名桜大学理事長（第6代理事長）から「名桜大学大学院看護学研究科看護学専攻（博士後期課程）設置認可申請書」が文部科学大臣に提出され、本学2つ目の博士課程として同年8月27日付で認可されました。2022（令和4）年4月、砂川昌範学長（第6代学長）のもと、それまで神戸市立看護大学大学院教授だったグレッグ美鈴教授が初代研究科長に就任しました。

#### 県北部地域における博士後期課程設置の意義

沖縄県内における看護基礎教育を担う看護系大学が3校（国立大学法人琉球大学医学部保健学科（看護以外の他コース含む）、沖縄県立看護大学、名桜大学）であり、博士後期課程については、2004（平成16）年に沖縄県立看護大学大学院看護学研究科に、2007（平成19）年に琉球大学大学院保健学研究科に設置されました。

しかしながら、博士後期課程が2大学に設置されているとはいっても、島嶼県である本県における看護系大学教員の確保の困難さは常態化し、大きな課題となっています。他県のような近隣県を含めた教員の確保が困難であること、また、本県において博士後期課程への進学を希望するものの、在職しながら県境を越える通学の困難さがありました。

沖縄県北部地域の看護教員や臨床の看護師、保健師が博士後期課程に進学しようとした場合、県内での定員数が限られていること、また、県内であっても通学のために往復で2時間かかる（車・高速道路使用）という距離的な問題から進学を断念する状況にありました。沖縄県内の均衡ある看護学発展のためには、本学への博士後期課程における設置が急務であり、保健・医療・福祉の課題に取り組む看護人材の養成に資する教育研究者の確保が喫緊の課題でした。

このことを踏まえ、本学の大学院看護学研究科の今後の方向性として沖縄の歴史や文化に根差したケアリングの理解をもとに、人々の健康と生活の質向上のための看護学研究を自律して行い、看護学の発展に寄与する高度な研究能力を有する教育研究者の育成のため、「看護学研究科看護学専攻博士後期課程」を設置するに至りました。学内では、2018（平成30）年より博士後期課程の設置について審議を重ね、2020（令和2）年には、理事長、学長、副学長、学部長、事務局長等で構成する法人運営会議（令和2年2月26日開催）で推進を決定し、2020（令和2）年4月には理事長及び学長が全教職員に向けて博士後期課程設置の推進を表明し、申請作業を進展させました。

#### 教育課程の編成方針

本博士後期課程における教育課程は、すでに設置している大学院看護学研究科看護学専攻（修士課程）における沖縄のケアリングを基盤として新たな看護実践方法を開発する看護専門職者の育成と看護学研究者や教育者の育成を目的とし、各専門分野における看護学の実践理論を探求し、高度専門職業人及び教育・研究者を育成する教育理念を継承し編成されました。

これらの目的を達成し、教育課程を体系的に編成するため、「共通科目」、「専門科目」及び「研究科目」に区分しています。以下のとおり、本博士後期課程のカリキュラム・ポリシー（教育課程編成方針）を示します。

- 本博士後期課程は、ディプロマ・ポリシー（学位授与方針）で示した能力を育成するため、以下の方針に沿ってカリキュラムを編成する。
- ア 看護実践並びに看護学の発展に寄与する教育研究者の養成に必要な基盤となる要素を学習し、自律して研究を計画・実施できるために、「看護学研究特論」、「看護教育学特論」を必修の共通科目として設定する。
  - イ 沖縄の歴史や文化に根ざしたケアリングの理解をもとに、地域課題の特性を学習し、社会のニーズに対応できるために「沖縄のケアリング文化と看護」を必修の共通科目として設定する。また、「沖縄の保健看護政策特論」を選択必修の共通科目として設定する。
  - ウ 生体内外の環境の変化及び調節機構を評価する指標や科学的エビデンスに基づいた看護実践を開発できるように「生体環境看護科学特論」を選択必修の共通科目として設定する。
  - エ 生涯にわたり高度な専門性をもって教育・研究活動を行い、専門性の高いケアが実践できるように、「基盤看護学分野」として「看護キャリア開発学特論」を、「応用看護学分野」として「がん看護学特論」、「成育健康看護学特論」を、「生活支援看護学分野」として「地域包括看護学特論」、「精神保健看護学特論」を選択必修の専門科目として設定する。
  - オ 看護の専門性を追究し、看護の発展に寄与する優れた学位論文を計画的に遂行し作成するために「看護学特別研究」を設定する。

36

37

本研究科の教員組織編成の考え方は、教員組織は、原則として、高い教育実績、研究業績及び研究指導実績を有する本博士後期課程の専任の教授及び准教授で組織する点です。

看護学研究科は、修士課程から博士後期課程までの教育が連続かつ一貫性を持って行われるよう基盤看護学分野（看護キャリア開発学1人）、応用看護学分野（がん看護学2人、成育健康看護学4人）、生活支援看護学分野（精神保健看護学2人、地域包括看護学5人）の看護系教員14人（専任）を配置しています。その他科目担当として医学系教員2人（専任）、地域文化研究の教員4人（兼任）、看護系教員2人（兼任）の合計22人で構成しています。

開設時の大学院の入学定員、収容定員及び学位名称等は、次のとおりです（図表9）

図表9 大学院の入学定員、収容定員及び学位名称等

研究科・専攻	課程	設置年度	入学定員	収容定員	学位名称
看護学研究科看護学専攻	博士後期課程	2022 (令和4)	2人	6人	看護学

### （5）大学院スポーツ健康科学研究科スポーツ健康科学専攻（修士課程）の設置（2023）

大学院スポーツ健康科学研究科（修士課程）スポーツ健康科学専攻（入学定員6人）は、2023（令和5）年3月17日付で高良文雄公立大学法人名桜大学理事長（第6代理事長）から「名桜大学大学院スポーツ健康科学研究科スポーツ健康科学専攻（修士課程）設置認可申請書」が文部科学大臣に提出され、同年9月4日付で認可されました。2024（令和6）年4月、砂川昌範学長（第6代学長）のもと、それまで人間健康学部長だった奥本正教授が初代研究科長に就任しました。

#### 県北部地域における修士課程設置の意義

人間健康学部スポーツ健康学科は、2005（平成17）年4月に設置されました。その後、2010（平成22）年の公立大学法人化により、公立大学で唯一のスポーツ健康系の学科を有する大学になりました。同年には、国際文化研究科国際文化システム専攻の4領域に加え健康科学教育研究領域が増設されました。その意味では、公立大学で唯一のスポーツ健康系の大学院を持つ独自性を示すことになりました。しかし、同研究領域が国際文化研究科にあるため、「保健体育」の専修免許状が取得できないことが課題となっていました。このようなことからスポーツ健康学科を基礎学部とする大学院研究科の設置とそれに伴う国際文化研究科の改編の必要に迫られました。

2013（平成25）年には、金城祥教人間健康学部長を委員長とする「名桜大学大学院スポーツ科学研究科設置調査委員会」が開催され、研究科設置に向けた意向調査等の実施に向け検討を開始しましたが、研究科の設置は叶いませんでした。

2020（令和2）年には、砂川昌範人間健康学部長（名桜大学大学院スポーツ健康科学研究科設置調査委員会委員長）から山里勝己学長に「意向調査と財政・施設整備計画に関する検討結果から令和4年4月の開設に向けて、名桜大学大学院スポーツ健康科学研究科設置検討委員会の設置を提言する」旨の答申書が提出され、文部科学省への設置認可申請に向けた作業が進められました。

当時沖縄県には、スポーツ・健康分野を総合的に学修できる大学院は存在しませんでした。唯一、琉球大学に教育学研究科（修士課程）があり、保健体育の専修免許を取得することができますが、この大学院も2019（令和元）年に学生募集を停止し、現在は専門職学位課程の教職大学院のみとなっています。したがって、本研究科が目指す「スポーツ・健康分野に関する学修を通して、高度な専門的知識と研究力を身に付け、理論と実践を往還できる高度専門職業人を養成する」大学は沖縄県内ではなく、そのような学び続ける場所を提供するために、学部生だけでなく、現職の保健体育教員、地域のスポーツ指導者、健康運動指導士や健康運動実践指導者の資格をもったスポーツインストラクターなど、スポーツや運動を指導している職業人のリカレント教育の場を提供することを構想しました。このような、スポーツや健康を基盤とする職業人が時代の変化に対応できる高度専門職業人を養成するためにもスポーツ・健康分野を専門とする大学院が必要と考え、大学院修士課程のスポーツ健康科学研究科を設置することとしたしました。

#### 教育課程編成の考え方

本研究科においては、中央教育審議会答申「新時代の大学院教育—国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて—」（平成17（2005）年9月5日）及び「2040年に向けた高等教育のグローバル化と質的向上」（平成22（2010）年1月15日）に基づき、以下の点を踏まえて教育課程編成を行いました。

ンドデザイン（答申）」（平成30（2018）年11月26日）を踏まえ、高度専門職業人の養成に必要な教育内容を構築するにあたり、学位授与方針（DP）に定める養成する人材像を具現化するために、教育課程編成・実施の方針（CP）を以下のとおり定めています。本研究科の教育課程は、基礎科目、共通科目、専門科目を体系的に履修するコースワークと研究科目により構成しています。

《教育課程編成・実施方針（CP）》	
<b>1. 教育内容</b>	
(1)	広範なスポーツ・健康分野を横断した知識と、自らの専門分野における知識を深化させるために、「基礎科目」「共通科目」「専門科目」を配置する。
(2)	高い倫理観を養成するとともに、スポーツ・健康分野における種々の課題を適切な手法を用いて分析するために、「基礎科目」「研究科目」を配置する。
(3)	専門性の高い知識・技能を基盤にした指導力を養成するための科目として、「専門科目」に「コーチング特論」「地域ヘルスプロモーション特論Ⅰ」「地域ヘルスプロモーション特論Ⅱ」「保健体育科教育特論Ⅰ」「保健体育科教育特論Ⅱ」を配置する。
<b>2. 教育方法</b>	
(1)	「基礎科目」「共通科目」「専門科目」は講義、演習いずれかで行うとともに、発表や議論を用い、学生が主体的・能動的に学修する。
(2)	修士論文の作成にあたっては、研究計画に従って指導教員に指導を受け、1年次で実施する、修士論文研究テーマ発表会、2年次で実施する修士論文中間報告会で、論文審査会の助言を受けて進めていく。（※長期履修制度利用者の場合は2年次以降）
(3)	本研究科で行われる人を対象とした研究は、全てスポーツ健康科学研究科倫理委員会に申請し審査を受け、承認を得て研究を実施し、論文の作成を行う。
<b>3. 教育評価</b>	
(1)	各授業は、シラバスに示した到達目標の達成度に応じた評価方法を導入し、適正な成績評価によって単位を付与する。
(2)	修士論文は、口述試験と評価ループリックにより審査・評価する。
(3)	2年間の学修成果は、基礎科目（必修）、共通科目、専門科目、特別研究（必修）によって行い、総合的に評価する。

本研究科の教員組織は原則として、高い教育実績、研究業績及び研究指導実績を有する本研究科の専任の教授及び准教授並びに助教で組織しています。専任教員は13人であり、9人が教授、2人が准教授、1人が講師、1人が助教の職位です。また、2人の兼任教員と9人の兼任教員を配置しています。専任教員の年齢構成は、70歳代が2人、60歳代が2人、50歳代が6人、40歳代が1人、30歳代が2人で、教育研究活動における高度な指導力を有する教員が配置されています。また、教員の専門分野である、運動生理学、スポーツ栄養学、健康科学、スポーツコーチング、公衆衛生学、スポーツ医科学、健康教育、学校保健、スポーツ哲学、スポーツ

バイオメカニクス等の各種専門分野の中から、自らの研究課題に沿った分野をより深く学修することに加え、他分野の専門知識にもより広く触れることで、総合的な知見を基にしたアプローチから総合科学である「スポーツ健康科学」を探究できるように教員組織を編成しています。

開設時の大学院の入学定員、収容定員及び学位名称等は、次のとおりです（図表10）。

図表10 大学院の入学定員、収容定員及び学位名称等

研究科・専攻	課程	設置年度	入学定員	収容定員	学位名称
スポーツ健康科学研究科 スポーツ健康科学専攻	修士課程	2024 (令和6)	6人	12人	スポーツ健康科学

### エポックメイキングな10年間の総括

これまで述べてきた、国際学部から国際学群、そして新生国際学部へと至る教育組織の改編並びに極めて高い水準の研究者・高度専門職業人を養成する博士後期課程・修士課程の設置は、本学の学部教育中心の機関から地域社会の課題解決と研究を担う機関へと質的に転換されました。

特に、大学全体の収容定員の大幅な増加と、健康・医療・福祉・データサイエンスといった時代が求める専門分野への積極的な対応は、本学の経営基盤の強化と未来に向けた明確な方向性を示していると思います。これらの歴史を鑑みると、2015（平成27）年から2025（令和7）年の10年間は、名桜大学の歴史において、まさに新しい時代を切り拓いた「エポックメイキングな10年間」であったと言えます。

### 【参考文献】

- 中央教育審議会答申『新時代の大学教育—国際的に魅力ある大学院教育の構築に向けて—』2005（平成17）年9月5日。
- 学校法人名護総合学園（2000）、『名桜大学大学院国際文化研究科国際文化システム専攻（修士課程）設置認可申請書』。
- 公立大学法人名桜大学（2010）、『名桜大学大学院看護学研究科看護学専攻（修士課程）設置認可申請書』。
- 公立大学法人名桜大学（2018）、『名桜大学大学院国際文化研究科国際地域文化専攻（博士後期課程）設置認可申請書』。
- 公立大学法人名桜大学（2021）、『名桜大学大学院看護学研究科看護学専攻（博士後期課程）設置認可申請書』。
- 公立大学法人名桜大学（2023）、『名桜大学大学院スポーツ健康科学研究科スポーツ健康科学専攻（修士課程）設置認可申請書』。

（総務企画部参与・学長補佐 金城 正英）

### 各機構・各センターの設置

名桜大学はこの10年間、教育・研究・地域貢献の三本柱をより確実に具現化するため、学内における複数の機構・センターの設置および再編を段階的に進めてきました。

まず、2015（平成27）年には、教養教育の理念と実践を明確に位置づけるため、「リベラルアーツ機構」が設立されました。これは従来の教養教育センターを拡充・再編したものであり、「国際的教養人の育成」を担う中核組織として機能しています。初年次からのアカデミックスキル、ライフデザイン、思想と論理、沖縄理解、健康スポーツなどの共通コア科目群を体系的に運営し、学生の知性と感性を統合的に育む教育を推進しています。また、言語学習センターと数理学習センターを同機構の下に統合し、2016（平成28）年には学生会館SAKURAUM内に「ライティングセンター」を開設。同一階に3つの学習支援センターを整備することで、自律的学びの支援体制を強化しています。

同年には、グローバル化に対応した教育・研究交流の拠点として「国際交流センター」も開設されました。協定校との単位相互互換、留学生の受け入れ、語学支援、海外派遣支援などを包括的に担い、国際的な学びと体験を推進しています。2025（令和7）年7月現在では19カ国・1地域において50大学と国際交流協定を締結し、教育・研究の国際化に寄与しています。

一方、地域貢献の推進体制として、2017（平成29）年に「地域連携機構」が設置されました。これは従来のエクステンションセンターを発展的に再編したものであり、自治体・教育機関・地域団体との包括連携協定に基づき、地域課題に即したプロジェクトや人材育成事業を展開しています。健康長寿サポートセンター、看護実践教育研究センターを中心とし、公開講座、学生の地域活動支援、課題解決型共同研究など、実践を通じた社会貢献の機会を広げています。

特に注目される取組としては、2018（平成30）年度より弘前大学COI-NEXTの連携拠点として実施されている「やんばる版プロジェクト健診」があります。これは、北部12市町村の住民を対象とした疫学調査であり、健康寿命の延伸やヘルスリテラシー向上を目的としています。2024（令和6）年度には334名の地域住民が参加するなど、持続的な連携による地域密着型研究の好例となっています。

2022（令和4）年4月には、「名桜大学沖縄ディアスボラ研究センター」が新たに設置されました。これは、国内外における沖縄系移民やその子孫の生活・言語・文化を学術的に探究する研究拠点であり、国際的ネットワークを活かした教育・研究・地域連携の融合拠点として活動を展開しています。

加えて、教員養成に関する支援体制の充実も進んでいます。教員養成支援センターが中心的役割を果たし、履修指導、各種手続き、教員採用試験対策に至るまで一貫した支援を提供しています。2023（令和5）年度からは学修ポートフォリオを活用した個別指導が強化され、学びの進捗に応じた面談支援も実施しています。また、北部12市町村教育委員会との連携協定に基づき、教育実習や学習支援ボランティアの受入が継続的に行われており、名護市との連携による「学習支援教室ぴゅあ」は、2025（令和7）年度で活動13年目を迎え、文部科学大臣賞を受賞するなど高い評価を得ています。

このように、名桜大学は学部・研究科の枠を超えて、機構・センターという横断的かつ実践的な組織体制を整備し、学生の成長支援と地域・国際社会への貢献を同時に推進してきました。特に、リベラルアーツと地域連携という二つの軸は、専門教育を補完・深化させる本学の教育の独自性を支える根幹といえます。

今後も、変化の時代に柔軟かつ確かな対応を可能とする教育支援と地域連携のモデルを、沖縄から全国、そして環太平洋地域へと発信し続けていく所存です。

（副学長・教育入試担当 木村 堅一）



## リベラルアーツとは知性と感性の調和

「知性と感性のバランスのとれた円満な人格の形成」——これが名桜大学のリベラルアーツ教育の根幹にある理念です。1994（平成6）年の開学以来、本学は「平和・自由・進歩」の建学の精神を礎に、国際的教養人の育成を目指してきました。時代の変化とともに、リベラルアーツ教育も進化を続け、特にこの10年間でその理念はより明確かつ体系的に具現化されてきました。

この10年を振り返ると、まず注目すべきは教養教育のカリキュラム体系の整備です。本学では、教養教育を「共通コア科目」と「共通選択科目」に再編し、「アカデミックスキル」や「ライフデザイン」などの初年次教育を強化しました。これにより、文章力・数理的思考力・外国語運用力、さらにICTリテラシーを含む「4基礎」の育成を段階的に進める体制が整いました。

また、「教養教育センター」を発展的に改組したリベラルアーツ機構の設置により、運営体制も一層充実しました。従来は独立して設置されていた数理学習センターや言語学習センターに加え、ライティングセンターなどの学習支援拠点を学生会館SAKURAUMに一元的に整備。学生が主体的に学び、互いに支え合う「ピア・サポート」や「ピア・チューティング」も発展しました。とくに、「教養演習I・II」では、全学的な教員・職員・学生チューターによる支援体制がマニュアル化され、全新入生が「正解のない問い」に向かい、対話や協働を通じて考える力や表現力を養うことができるようになっていまます。

こうした取り組みにより、学生の思考力や表現力は着実に向上しています。たとえば、地域社会や国際社会と結びついた課題解決型の学びでは、学生自らがフィールドワークや「プロジェクト学習」に積極的に取り組む姿が見られるようになりました。近年では、海外スタディツアーやグローバル教養演習を中心とした「副専攻プログラム（グローバル教養）」が始まり、外国人留学生との協働授業を通して多文化共生や国際理解も深化しています。

さらに、デジタル社会の進展に対応すべく、文部科学省が認定する「数理・データサイエンス・AI」教育プログラム（リテラシーレベル）を提供し、2025（令和7）年度からは応用基礎レベルのプログラムも開始されています。

一方で、学問の横断性を学生にどう定着させるか、また、リベラルアーツ教育の成果をどのように「見える化」するかは、引き続きの課題です。特に、批判的思考力や倫理的判断力といった「見えにくい力」の育成と評価には、今後さらなる工夫が求められます。

こうした中で、2025（令和7）年には「名桜大学のくさび型リベラルアーツ教育」モデルを提示しました。これは、1・2年次で基礎力と建学の精神を育み、3・4年次で学際的実践に接続し、大学院で専門性を深化させるという段階的・統合的な教育構造です。AI時代において情報を正しく理解し、創造的に活用するためには、知識だけでなく「感性」や「倫理」もあわせて育むことが不可欠です。リベラルアーツは、その力を支える土台であり続けます。

今後も名桜大学は、沖縄の地理的・文化的特性を活かしながら、世界とつながる教育を開拓していきます。地域とともに学び、世界に開かれた国際的教養人を育てる——そのためのリベラルアーツ教育を、さらに深化・発展させてまいります。

（副学長・教育入試担当 木村 堅一）

## 国際学群

国際学群の前身である国際学部（国際文化学科、経営情報学科、観光産業学科）は、1994（平成6）年に学校法人名護総合学園名桜大学として開学して以来、13年間にわたり、国際社会で活躍できる数多くの卒業生を輩出していました。しかし、地方に立地し、私立かつ単科大学という厳しい条件を抱え、1998（平成10）年を境に志願者が急減し、2000（平成12）年以降は一部学科で定員割れが続く厳しい状況に直面しました。

この課題を克服し、多様化する学生ニーズに応えるため、2007（平成19）年に国際学部は国際学群へと改編されました。新たな国際学群は、国際文化専攻、語学教育専攻、システムマネジメント専攻、情報システムズ専攻、観光産業専攻の5専攻体制でスタートを切りました。その後、情報システムズ専攻内の診療情報管理士課程が2009（平成21）年に診療情報管理専攻として独立新設され、同年にはシステムマネジメント専攻を経営専攻へと名称変更され、最終的には6専攻を擁する教育プログラムとして運営されることとなりました。

国際学群の教育目標は、21世紀の地球市民として「地域社会および国際社会で活躍できる人材」を育成することにありました。地球規模で協調・共生しつつ、国際競争力を高めることが求められる時代にあって、柔軟かつ総合的に判断できる能力を備えた人材の養成は重要です。学群制の下では、入学後2年間で豊かな教養を身につけるとともに、自身の関心に応じて6専攻が提供する専門教育科目を自由に履修し、将来の進路や展望を見極めることができました。3年次からは選択した主専攻において専門分野を徹底的に学び、さらに関心があれば副専攻を選択することで、学びの幅を広げることも可能でした。

また、国内外の交流協定大学で半年から1年間学ぶことができる留学制度も設けられています。このように多様な学びの選択肢を備える国際学群では、「アカデミック・アドバイザリー制度」が大きな効果を上げてきました。この制度は、専任教員がアカデミック・アドバイザーとして学生一人ひとりを担当し、成績（GPA）や履修状況を踏まえながら、履修相談や学修指導を行うものです。国際学群では、初年次教育を担うクラス担当教員から、3・4年次の専門演習を担当するゼミ指導教員まで、4年間にわたり指導教員を配置し、学生が修学面や生活面で困ったとき、あるいは進路に悩んだときに最も身近な相談相手となりました。

こうして国際学群は、学生の高い満足度を維持していましたが、近年のグローバル化やITをはじめとする技術革新の進展、そして社会問題の多様化・複雑化・高度化に対応するためには、より早い段階から専門分野を学ぶ必要性が高まってきた。そこで、名桜大学の強みであるリベラルアーツ教育を土台としつつ、初年次から学科に所属して専門教育を開始することで学生の動機づけを高め、4年間を通して教養教育を行う「くさび型教育」への転換が検討されました。その結果、学生と教員が入学時から同じ学科に所属することで、より丁寧な学習指導を可能とする体制を構築するため、2023（令和5）年度からは国際学部2学科へと再編されました。

これまで学群制で培った経験と実績を礎に、新たなステージへと進化する名桜大学国際学部のさらなる発展に、大きな期待が寄せられています。

（前国際学群長 仲尾次 洋子）

## 国際文化教育研究学系

2023（令和5）年度に国際学群を国際学部に改組し、国際文化教育研究学系は国際文化学科となりました。

改組以前の国際文化教育研究学系は、国際文化専攻と語学教育専攻によって構成されており、国際文化専攻では、国際理解、特に環太平洋地域（日本・沖縄を含む東アジア、東南アジア、オセアニア、中南米地域等）の文化、歴史、言語、社会、政治、環境等を総合的に理解することを通して、豊かな国際性と高い言語能力を有し、沖縄や日本、さらにはグローバルに活躍できる人材育成をめざしてきました。

一方、語学教育専攻は、英語コースと日本語コースを有し、英語コースでは、英語4技能やコミュニケーション能力、言語的知識、英米文学への理解を通して、世界の共通語ともいえる英語を習得し、他国の文化や社会等を理解する中で、視野を国際社会へと広げ、自身を世界へと発信できる人材育成をめざしてきました。日本語コースでは、日本語4技能やコミュニケーション能力、言語的知識、日本文学への理解を通して、日本の言語や文化についての知識を深めるとともに、他者を理解し、自身を的確に表現できる人材育成をめざしてきました。

本学系の大きな特徴として、前述した能力等を体験的に習得する「現地実習」に取り組んできたことが挙げられます。国際文化専攻では、「沖縄」、「日本」、「東アジア」、「東南アジア」、「中南米」、「国際協力」という6コース2023（令和5）年度からは「日米関係」が加わり、計7コース）が設定され、語学教育専攻では、「英語圏（ハワイ、オーストラリア、アメリカ等）」、「教育支援」という2コースが設定できました。

学生たちは、3年次の夏季休暇期間を利用し実施された「現地実習」で、現地での生活、教育・研究機関等での講義、学校現場での活動等を経験し、実習終了後の報告会（専攻ごとに実施）では、「現地実習」で得た、新たな知見や失敗談などが披露され、各人の体験を共有しました。しかし、2019（令和元）年の末あたり以降のコロナ禍の影響により、特に海外での「現地実習」（「東アジア」、「東南アジア」、「中南米」、「英語圏」コース）は、中止せざるを得ない場合も現れました。一方で、国内の関係機関での実習や、オンラインを活用した講義・講話の実施等の工夫を凝らしながら継続、再開したコースもありました。

コロナ禍の影響は、本学系の学生に希望者が多いため、海外留学の実施にも大きな打撃を与えました。少なくとも、2020～2023（令和2～5）年度の4年間の留学希望生は、その望みをかなえることが難しい状況でした。また、2020年代初めの数年は、授業がオンライン化し、他者との接触が制限されるなど、「現地実習」や留学の他にも、日常的な苦難を経験しました。

こうした苦難を経験した本学系の学生（卒業生）ではありますが、その苦難を乗り越えるとともに、獲得した高い言語運用、異文化理解、コミュニケーション等の能力を活かし、一般企業をはじめ在外領事館、国内外のNGO、NPO法人職員として、あるいは、公務員、中学・高等学校英語教諭、国内外での日本語教師としてグローバルに活躍しています。

2023（令和5）年度に国際文化学科に改組しましたが、これまで積み上げてきた国際文化教育研究学系の取り組みを踏まえ、本学の建学の理念である「平和・自由・進歩」を念頭におき、今後もグローバルに活躍する人材育成をめざし、教育、研究、地域貢献活動に取り組むとともに、その取り組みをさらに発展させていきたいものです。

（前国際文化教育研究学系長　板山 勝樹）

## 経営情報教育研究学系

経営情報教育研究学系の前身である国際学部経営情報学科は、1994（平成6）年に学校法人名護総合学園名桜大学として開学した際に、沖縄県内の既存の経営系や商学系の学部学科との差別化をはかるため、経営と情報を融合した新たな学科として設置されました。今でこそ、「情報」は、ヒト、モノ、カネとなるべく経営資源となりましたが、開学当時は画期的なカリキュラムを有する学科としてスタートを切りました。2007（平成19）年には、多様化する学生ニーズに応えるため、国際学部は国際学群へと改編されましたが、経営情報学科の方針は経営情報教育研究学系へと引き継がれ、「地域社会および国際社会で活躍できる人材育成を目指し、グローバル化に対応できるコミュニケーション力、数理的分析能力、ICT 活用力、現代社会の諸問題を解決する能力を身に付けるカリキュラムを実行してきました。

本学系は上述の人材育成目標のもと、経営専攻、情報システムズ専攻および診療情報管理専攻から構成されます。3専攻に共通する特徴として、「理論と実践」、「インターンシップの導入」が挙げられます。以下で各特徴と専攻について紹介します。

### ■理論と実践

正課および正課外で理論と実践の乖離を埋める取り組みを行っています。具体的には、「ベンチャービジネス」や「経営情報特別講義」において、県内外の起業家らを招へいし、国内外のビジネス現場の動向や社会に求められる資質について講話いただき、幅広い視野の要請に努めています。また、実践型インターンシップの「ガクPリーグ」や学外店舗経営Café de Meioにおいては、学生が実際の企画運営に携わることで座学と実践を体得しました。

### ■インターンシップの導入

本学系では、今日のようにインターンシップが一般的でなかった大学開学当初より、これを必修科目として導入してきました。プログラム編成、実習先の開拓と調整、そして実習前の研修など、多くの困難に直面しましたが、PDCAサイクルを用いて継続的に改善を重ねてきました。その結果、インターンシップは現在、本学系の象徴的な科目となりました。

### ■経営専攻

経営専攻は、現代社会の多様化・多次元化する諸問題に対応してマネジメントできる人材育成を目指していました。そのため、フィンテックやIOTなどの「新技術活用能力」、「理論と実践によるマネジメント能力」を重視していました。同専攻の卒業生は、県内外の行政や金融機関、流通業界をはじめとする幅広い分野で活躍しています。

### ■情報システムズ専攻

情報システムズ専攻は、情報技術による地域経済の活性化と地域産業の振興を支える担い手の育成を目指していました。具体的には、ネットワークの構築・管理・運営の高度なスキルを有する人材、インターネットとデータベースの管理・運営とコンピュータによる問題の発見・解決を行える人材、さらに、WebコンテンツやWebアプリケーションの作成・管理・運営を行える人材の育成です。同専攻の卒業生は、IT業界をはじめ、行政機関や企業のIT部門で幅広く活躍しています。

### ■診療情報管理専攻

「診療情報管理士」とは、カルテの精査・管理を行うライブラリー作業、診療情報をデータベース化と国際疾病分類に基づくコーディング作業、データベース分析・解析を通して医療の質を保証し、医療ニーズの分析を行う専門職です。医学的な専門知識を持つ診療情報管理士は、病院経営の場で即戦力のある貴重な人材として高いニーズがあります。同専攻の卒業生は県内外の医療機関で活躍しています。

（前国際学群長　仲尾次 洋子）

## 国際学群観光産業教育研究学系

冒頭、貴重な紙幅のなか少しの私事にも触れさせてください。観光産業教育研究学系は1994（平成8）年に開学した名桜大学の一つの学科である観光産業学科が前身です。開学の通史はすでに触れられている通りですが、観光を沖縄の将来のリーディング産業として捉えて観光産業学科を目玉にすると『名桜大学20年史－公立大学法人化5周年記念』のなかで初代理事長・初代学長の東江康治先生が仰っています。筆者はその観光産業学科の3期卒業生として、開学20周年・公立化5周年の際も観光産業教育研究学系長を務め、さらに再編された国際学部国際観光産業学科の初代学科長を拝命したことにも縁を感じながら、新学科へ引き継がれていく観光産業教育研究学系観光産業専攻のポリシーと特徴を述べていきたいと思います。

観光産業は歴史と文化、自然環境をはじめ交通、都市計画、イベント、健康などの資源を活用した複合的で裾野の広い産業です。沖縄県は観光立県として数多くの観光振興策やリゾート開発プロジェクトが県全域において計画、運営されていますが、この分野に関わる観光人材が質・量ともに不足しており、観光産業の振興をリードするスペシャリストやリーダーの育成が急務となっています。

とくに、本学は沖縄島北部地域に位置し、リゾートホテルの集積地であると同時に「やんばる」と呼ばれる国の天然記念物や貴重な固有生物が生息する自然に恵まれた地域に立地しています。そのため、観光産業専攻では観光政策・ビジネス、環境・エコツーリズム、観光文化の3つの研究領域で観光を総合的に学ぶことができるカリキュラムを提供し、国際社会のニーズに対応しながら地域に貢献できる実践能力のある人材を育成してきました。

観光産業専攻の提供してきた特徴的な科目にフィールドを生かした「エコツーリズム」「ホテル実務」「海外インターンシップ」「専門演習」などがあります。ホテル実務や海外インターンシップ等については別のページに詳しいのでここでは省略しますが、エコツーリズムは地域住民や行政、事業者・観光客の関わり方やその経緯、地域の取組み等について北部地域の市町村と産官学連携の中で学んでいきます。3年次から配置される専門演習（ゼミ）においては、産官学連携のもとフィールドワークなどを行うことにより、より実践的な人材育成を図っています。

さらに、観光分野に関わる研究活動を通じて自然環境に配慮した観光振興や歴史・文化プログラムの構築、産業のあり方など、実践的で多様な観点からの学びを提供し、著名ホテルや観光施設、自治体、空港や観光協会などの観光産業や観光関連組織に従事している卒業生も多く輩出しています。観光産業専攻は、学群制を生かして習得した基礎能力を土台として、社会の変化に対応しつつ地域社会や国際社会において観光産業の発展に貢献する能力を身につけた学生に学士（観光産業学）の学位を授与してきました。2025（令和7）年度は、国際学群での最後の入学生が卒業する節目となりますので、観光産業専攻の学生75名（卒業論文中間発表会時点）を最後まで丁寧に育成していきたいと思います。

このような特徴あるポリシーやカリキュラムを財産として、引き継ぎ国際観光産業学科でも国際社会および地域社会で活躍できる人材の育成に尽力していきます。

（前観光産業教育研究学系長 大谷 健太郎）

## 国際学部

2023（令和5）年4月、国際学群国際学類（2007（平成19）年4月開設）は、国際学部国際文化学科と国際観光産業学科の2つの学科に改組されました。「国際文化」と「国際観光産業」の看板を前面に押し出した新たな改組ですが、当然ながら、本学の建学の精神である「平和・自由・進歩」はそのまま引き継がれ、人類の進歩と福祉に貢献する国際的教養人と専門家の育成を目指しています。卒業生の中には、国内外で国際的教養人として活躍している方々や、専門家としての知見を活かして大いに羽ばたいている方々もあります。改組にあたっては、両学科とも学生定員を増やし、特に国際文化学科は、学内で最も規模の大きな学科となりました。これからも、人材育成の目標を念頭に置いた地道な教育研究活動が期待されています。

国際学部は、学生の教育指導において、次の3つの特徴を有しています。第一に、豊かな教養を育むために、人文科学、社会科学、自然科学を幅広く横断的に学びながら、批判的・論理的に考え、知的倫理性を実践する力を養っています。第二に、深い専門性を育むために、多様性・複雑化・高度化する社会問題を解決する力を身につけるため、幅広い教養を土台に、早い段階から専門性を深化させる取り組みを行っています。第三に、フィールドで実践力を育むために、国内外の協定校への留学やインターンシップを通して、他大学のキャンパスやホテル、観光関連組織などで実践力を培っています。

これらの特徴を持ちながら、国際文化学科は、生活拠点である沖縄・日本を探求しつつ、アジア・中南米・欧米の歴史や言語・文化を学び、国際社会への理解を深めることを目的としています。実習科目では国内外での実践的な学びを深め、多様な学問分野で世界にふれる魅力的な学科となっています。一方、国際観光産業学科は、旧カリキュラムの経営専攻と観光産業専攻を統合する形で誕生しました。同学科は、観光政策、観光経営、観光文化・環境の3つのコースを設けています。また、産官学連携のもと、自然豊かな“やんばる”での教育・研究活動を通して、国際社会や地域の発展に貢献するリーダーや、観光振興を通して社会の発展に寄与する人材の育成を目指しています。

国際学部では、両学科の目指す人材育成のために、幅広い研究分野の教員が教育研究を担い、多様な学問分野の科目群を提供しています。そして、学生の夢の実現に向けて、全面的なサポート体制を構築しています。とりわけ、本学は、17カ国1地域・47大学と国際交流協定を結び、また県内外20大学と単位互換協定を締結しています。これまでにも数多くの学生を派遣し、また受け入れてきた実績があります。沖縄・名護以外での国内外のキャンパスライフを通して、さまざまな異文化交流を深める機会を提供し、学生時代の大きな知的財産を築いています。大学内外での経験は、学生の将来のキャリアに関わる選択肢をより一層広げ、より充実したライフスタイルの形成につながっています。

卒業後の進路として、国際文化学科の卒業生は、在外公館職員、中学校・高等学校の教師、日本語教師、公務員などとして活躍しています。国際観光産業学科の卒業生は、航空業、宿泊業、交通・運輸業、旅行業など、さまざまな職種に就いています。本学の建学の精神である「平和・自由・進歩」が、卒業生の姿を通して具体的に表現されているのです。

（国際学部長 嘉納 英明）

## 国際文化学科

国際文化学科は、2023（令和5）年の大学の改組にともない、国際学部のもとに設置されました。国際学群時代の国際文化教育研究学系（国際文化専攻、語学教育専攻）がほぼそのまま新学科に移行した組織であり、旧学系の教員はそのまま引き継がれました。学科改組後は、新たにリベラツアーツ機構で中国語を担当してきた山城智史、李夢迪の2名が加わって22名の教員でのスタートとなり、初代学科長には板山勝樹が就任しました。旧カリキュラム時代の学系への進学者数は例年100～120名程度でしたが、新学科の定員は180名となり、大きく増えました。

国際文化学科は、高度な言語運用能力と多文化理解力を兼ね備え、地域社会や国際社会の問題解決に貢献する力を持つ学生を養成することを目指しています。そのため、日本・沖縄および環太平洋を中心とする諸地域の言語・文化・政治等に関する基礎力を養成する専門基礎科目と高度な言語運用能力と多文化理解力を養成するための専門発展・応用科目を配置しています。

これらの専門教育科目は、以下の3つの科目群に分かれており、学生は各自の関心に応じて基礎から専門まで学んでいきます。

国際文化系：沖縄、日本、アジア、中南米の各地域における歴史、文化、言語、社会などの各分野に関する授業や、地域を超えた国際学に関する授業が配置されています。教員も、沖縄（嘉納英明、照屋理、玉城福子）、日本（屋良健一郎）、東アジア（清水美里）、東南アジア（坪井祐司）、ラテンアメリカ（上原なつき、長尾直洋）といった地域ごとに配置されています。くわえて、国際学については高嶺司、志田淳二郎が担当しています。

英語・英語教育系：英語の4技能を伸ばすための科目に加えて、英語学、英米文学に関する授業が配置されています。渡慶次正則、ノーマン・フィーウエル、メーガン・クックルマン、半嶺まだか（2024（令和6）年まで）、林智昭が担当しています。英語系のカリキュラムには英語教員養成課程が用意されており、中学・高校の英語の教員免許の取得ができます。教育課程は、板山勝樹、嘉納英明が担当しています。

日本語・日本語教育系：日本語学および日本文学に関する授業が配置されています。日本語学は麻生玲子、当銘盛之、日本文学は小畠達、小嶋洋輔が担当しています。日本語教師養成課程が用意されており、日本語教育修了証を取得することができます。

演習科目については、1年次の教養演習、2年前期の基礎演習を経て、2年後期から各教員のもとで専門演習が開始され、それぞれの分野についてより深く学んでいきます。国際学群の旧カリキュラムと比べて半年早く専門演習が始まることで、腰を据えて専門を深めていく体制となりました。

国際文化学科のカリキュラムの一つの特徴は、知識を実践する機会として実習科目を配置していることです。日本、沖縄、東アジア、東南アジア、中南米（スペイン語圏、ポルトガル語圏）、国際協力、日米関係、英語圏という国内外の9つのコースの現地実習が開講されており、座学で得た知識や語学力を現場で活用し、学びを深めることができます。教員免許を目指す学生には、北部地区の学校で教育支援を行う教育支援実習が開講されています。現地実習は、新カリキュラムになって2年次から参加が可能となりました。

留学を希望する学生が多いのも学科の特徴といえます。本学には交換留学制度があり、在学しながら国内および世界各地の大学に留学ができます。講義で学んだ語学力をレベルアップさせるだけでなく、欧米、アジア、中南米など様々な国の学生とともに学び、多彩な文化にふれることで、人間力も磨くことができます。

国際文化学科の1期生は、2026（令和8）年度に卒業を迎える予定です。学科での学びを経て、国際的な視野を持って主体的に課題の解決に向かう自立した個人として社会に出て行ってほしいと願っています。

（国際文化学科長 坪井 祐司）

## 国際観光産業学科

国際観光産業学科は、2023（令和5）年度の学部改組により、前身である国際学群国際学類の観光産業専攻と経営専攻を統合する形で設置されました。これにより観光と経営の知見を融合した新たな学びの場としてスタートを切り、2025（令和7）年度には設置から3年目を迎えています。

本学科では、観光を単なる旅行としてではなく、地域社会や国際社会に広く関わる重要な産業として位置づけ、「学際性」と「実践性」の両立を教育の柱としています。観光産業には、文化、経済、地理、環境、心理、行政など様々な領域が関わるため、教育内容も多岐にわたります。本学科には観光政策、地理、文化、社会学、観光行動、ホテル経営、エコツーリズム、交通産業、環境化学、観光教育などの分野の専任教員をはじめ、旧経営専攻から経済、経営、会計、行政法、組織心理学などの専門を持つ教員が加わり、多角的な学びが可能となっています。カリキュラム構成としては、観光地形形成科目、観光経営科目、観光文化・環境科目、国際観光科目、実践・実習系科目などの多様な科目区分を設けています。

学びは座学のみならず、実務と地域とのつながりを重視しています。観光・ホテル業界での実務経験を持つ教員による専門科目、地域課題に向き合うプロジェクト型授業、国内外でのインターンシップなどを通じて、学生は現場と理論を行き来しながら多角的に観光を学んでいます。直近の話題としては2025（令和7）年7月に沖縄本島北部（やんばる）地域に開園した大型テーマパーク「ジャングリア沖縄」における長期実務実習があります。本学科から11名の学生が参加し、観光施設の立ち上げという貴重な経験を積んでいます。

近年、旅行者の日本ならびに沖縄への関心は高く、2024（令和6）年の訪日外客数は3687万人に達し過去最多を更新しました（日本政府観光局、2025）<sup>1)</sup>。沖縄県の入域観光客数も995万2700人にのぼり（沖縄県観光政策課、2025）、このうち外国人観光客数は229万1500人となっています<sup>2)</sup>。訪日外国人旅行（インバウンド）は活況を呈しています。一方で、観光の発展がもたらす課題も無視できません。近年ではオーバーツーリズムや環境への負荷、地域住民との関係性などが問題となっており、持続可能な観光の実現が大きなテーマとなっています。

本学科では、ユネスコ世界自然遺産に登録されたやんばる地域をフィールドとして、観光資源の保全と利活用の両立、地域共生の在り方、観光による持続可能なまちづくりなどを実践的に学ぶ機会を提供しています。学生は実際に地域に出向き、課題を発見し、解決策を提案・実行する経験を通じて、観光を起点とした社会貢献の意義を深く理解していきます。

学科開設から3年目であり、国際観光産業学科として卒業生を送り出すのは2027（令和9）年3月以降となります。観光・宿泊・航空業界はもちろんのこと、地方自治体、教育機関、さらには地域での起業など、観光を軸に社会貢献を志す人材として活躍してくれることを期待しています。

今後は、ICT・AIなどのテクノロジーを取り入れた観光DX（デジタル・トランスフォーメーション）、国際的な多文化共生、災害時の観光対応、バリアフリー観光に代表される福祉との連携など、新たな課題と向き合う力が求められています。本学科は、こうした変化を柔軟に取り入れつつ、地域と世界をつなぐ人材の育成に努めてまいります。

（国際観光産業学科長 金城亮）

### 参考資料

- 1) 日本国政府観光局（2025）。訪日外客数（2024年12月および年間推計値）[https://www.jnto.go.jp/news/press/20250115\\_monthly.html](https://www.jnto.go.jp/news/press/20250115_monthly.html)（2025年7月3日閲覧）
- 2) 沖縄県観光政策課（2025）。令和6年度沖縄県入域観光客統計概況[https://www.pref.okinawa.jp/\\_res/projects/default\\_project/\\_page\\_/\\_001/026/300/r6nenndo-matome.pdf](https://www.pref.okinawa.jp/_res/projects/default_project/_page_/_001/026/300/r6nenndo-matome.pdf)（2025年7月3日閲覧）

## 人間健康学部の10年を振り返って

### 1. 学部の設立と発展の歩み

人間健康学部は、「平和・自由・進歩の建学の精神に基づいた幅広い教養と、調和のとれた知・徳・体を備えた人材、そして心身の健康を支援する有為な人材の養成」を目的として、2005（平成17）年にスポーツ健康学科、2007（平成19）年に看護学科を設置し、2023（令和5）年には健康情報学科が新設されました。現在、3学科に65名の教員と約1,000名の学生が在籍しています。学部の成長に伴い、大学院教育との連携も強化され、2011（平成23）年には看護学研究科、2017（平成29）年に助産学専攻科、2022（令和4）年に看護学研究科博士後期課程、2024（令和6）年にはスポーツ健康科学研究科が開設されました。

### 2. 各学科の教育理念と学部の特色

本学部は、スポーツ・看護・情報の3学科がそれぞれの専門性を活かしながら、健康支援に貢献できる人材の育成を目指しています。各学科の詳細については、学科長の報告に委ねます。人間健康学部の特色は、健康を柱に、スポーツ・看護・情報の学問分野が学際的に融合することで、新たな価値の創造につながる点にあります。本学の重点事業であるCOI NEXT（やんばる版プロジェクト健診）への取り組みは、まさしく本学部教職員、学生の協働参画による成果でもあります。

学際的研究による価値創造は、時代のニーズであり、社会からの要請でもあります。人生100年時代を迎え、健康の概念も多様化する中、誰もが健康で幸せに暮らせる社会の実現を目指し、生涯学び続ける力を育むことが、本学部の使命であると考えています。

### 3. コロナ禍と教育改革

公立大学法人名桜大学10周年記念誌では、公立大学法人化以降（2010（平成22）年～2019（令和元）年）を「新生名桜大学の発展期」と位置づけ、自律的・弾力的な大学運営による特色ある大学づくりを目指すと記されています。しかし、2020（令和2）年1月15日には国内で初めて新型コロナウイルス感染が確認され、人類未曾有の危機に直面しました。この時期は、まさに自律的・弾力的な大学運営が試された時期であり、砂川昌範学長の指揮のもと、奥本正前学部長のリーダーシップにより、保健センターや看護学科を中心に感染対策が強化されました。同時に、ICT活用技術の進歩や新たな教育技法の開発が進み、学生の学びを保証するための教育改革が推進されました。コロナ禍を契機として、「心と体の健康」への社会的関心が高まり、本学部の使命と役割はより一層明確になりました。

この10年間、人間健康学部では主に3つの課題に取り組んできました。第一に、安定的な学生確保への取り組みです。2023（令和5）年に新設された健康情報学科では定員を満たすことができませんでしたが、学生募集戦略の見直しにより志願倍率が改善し、現在では3学科ともに定員を確保しています。第二に、看護学科の慢性的な教員不足への対応です。2020（令和2）年以降、5～6名の欠員が続き、公募期間の延長や教育支援員制度の新設などにより、欠員補充を進めています。第三に、学生・教職員が安心して学び、働く環境整備と、学部・学科の将来構想の検討です。2025（令和7）年度には健康情報学科の研究科設立に向けた準備委員会も設置されました。

### 4. 今後の展望と決意

開学30周年、公立化15周年を迎える、大学としての節目を迎えました。これらの10年は、公立大学として進むべき方向性を明確にし、持続可能な大学運営に向けて基盤を固める時期であると考えます。この10年間、人間健康学部は「地域に根ざした学びと人間力を育む場」としての確固たる基盤を築いてきました。今後は、これまでの成果を土台に、より広い視野で教育・研究・社会貢献を開拓していくことが求められます。AI・ICTを活用した新たな挑戦も視野に入れながら、学部のさらなる発展を目指してまいります。

（人間健康学部長 大城 凌子）

## スポーツ健康学科

名桜大学は創立当初、一学部（国際学部）でスタートし、2005（平成17）年度に新しい学部として人間健康学部が開設されました。スポーツ健康学科は人間健康学部に設置された最初の学科です。本学科の特徴は2つの領域で活躍できる健康支援人材を育成する点です。「スポーツ領域」ではスポーツパフォーマンスの向上やアスリートの養成、ハイレベルなスポーツ指導者・コーチ、実践的な保健体育教諭の養成を目指すために必要なスポーツ科学や実践を学びます。そして「健康領域」ではヘルスプロモーション、養護、福祉などを通じて個々ならびに社会全体のウェルネスを向上させるための健康科学の理論や方法を学びます。学生は1年次が95名、編入生が5名の定員構成です。大学の公立化以前は県内高等学校出身者がおよそ7～8割を占めていましたが、近年は県外高等学校出身者の割合が6～7割と増えています。

スポーツ健康学科のカリキュラムは、自然や文化・環境を生かした講義や実習、幅広い資格や免許の取得や受験資格の提供、実習や課外活動を通じた実践力の強化、地域の諸問題解決力の涵養を目指しています。まず本学科では中学校・高等学校教諭一種免許（保健体育）、養護教諭一種免許、第一種衛生管理者資格、健康運動指導士受験資格、トレーニング指導者（JATI）受験資格、社会福祉主任用資格、などの取得が可能です。また沖縄ならではの海洋スポーツであるスクーバダイビングや、伝統文化の空手・琉球舞踊といった多様な実技科目を通じて実践と指導方法を学ぶ機会があります。そしてスポーツ関連企業や地方公共団体でのインターンシップ、教員免許取得のための教育実習や養護実習など多彩な分野でのOJTを通じて実践力を磨くことができます。課外活動では、地域のボランティア活動を通じて、健康支援に関する様々な課題を見つけ、地域住民と共に解決に向けての計画・実行に取り組む機会があります。

2024（令和6）年度には名桜大学大学院スポーツ健康科学研究科（修士課程）を開設しました。大学院生は1学年6名定員で、入学者はスポーツ・健康分野に関する高度な専門的な知識と研究力を身につけ、理論と実践を往還できる高度専門職業人を養成することを目指します。同研究科では、中学校・高等学校保健体育教諭の専修免許も取得可能です。2026（令和8）年度からは養護教諭専修免許も取得ができます（只今、申請中）。

2025（令和7）年、スポーツ健康学科は開設20周年を迎えます。今までの卒業生は、総勢1,632人になります。彼らは保健体育教員や養護教員として活躍する卒業生のみならず、運動増進施設、消防士、警察官、一般企業、JICA海外協力隊など社会の様々な分野で活躍しています。

2025（令和7）年12月21日にはスポーツ健康学科開設20周年記念シンポジウム「からだ・こころ・地域をつなぐスポーツ健康学科20年の歩みと未来ー」を催します。また、大学HPやSNS等を通じて卒業生やその家族、教職員OB・OGが大学に集合するイベント（Homecoming Day）への参加を広く呼び掛けています。全国で活躍するスポーツ健康学科の卒業生が縦の糸（先輩・後輩）と横の糸（同輩）を交差させる機会を通じて、どのような“織物”が紡がれるか—地域で活躍する卒業生のネットワークが構築されることでしょう。それにより沖縄のみならず、日本そして世界にスポ健の輪が更に拡張することにより新たなエネルギーが創出されることを期待してやみません。

（スポーツ健康学科長 小川寿美子）

## 看護学科

### ■ ケアリングに根ざして：地域にひらかれた看護教育の10年

名桜大学人間健康学部看護学科は、2007（平成19）年4月の開設以来、「人間としての尊厳と健康に生きる権利を擁護する看護職の育成」を使命に歩みを進めてきました。学生が主人公として成長する参画型看護教育を柱に、教員と協同で学びを創造し、参画力を育んでいます。

2022（令和4）年度には、より地域に暮らす人々の生活に根ざした看護教育をめざし、新カリキュラムを導入。在院日数の短縮、少子高齢化の進行、地域包括ケアの推進など、保健医療福祉をめぐる環境の変化に応じて、実習時間や専門基礎科目を見直し、地域志向を強化しました。さらに多文化社会に対応できる看護職を育成するため「グローバルナーシングⅢ」を新設。この科目では、言語・制度・文化（こころ）の壁を越えて、医療や健康支援が必要な外国人への看護を考え、演習で実践力を養います。また、学生が主体的に将来を描けるよう「キャリアデザイン」科目を全学年に配置したのも特徴です。

中でも「ケアリング文化実習Ⅰ～Ⅳ」は1年次から4年次まで縦断的に行い、知識や技術に加えて対話力や感性、“ともにあること”的意味を学びます。学生は地域に足を運び、人々との出会いを通して看護の原点にふれる経験を重ね、学びを「病院の中」にとどめず「暮らしの場」へひらいていくこと。その人らしい生を支える看護をめざし、地域や国際社会に貢献できる看護職の育成——それが本学科の教育理念の核です。

2020（令和2）年以降の新型コロナウイルス感染症の拡大は、看護教育にも大きな影響を及ぼしました。臨地実習の縮小やオンライン授業への移行に対応しつつ、学生・教員・学習協力者の感染予防対策を徹底。戸惑いの中でも学生たちは画面越しのグループワークや少人数での演習、自主学習を工夫し、学びを止めませんでした。その姿は教職員にとって大きな励みとなり、ICTの活用や授業改善、実習先との連携強化へとつながりました。それと一緒に「人と人が出会うこと」そのものの尊さを再認識する日々もありました。さらに、地域のワクチン接種会場では、教員が看護職として支援に関わり、教育とケアの現場がつながる意味をあらためて実感しました。

教育環境の整備も進め、学科棟の改修や備品更新、中庭や実習室の環境調整を段階的に実施。沖縄の特性を活かした戦跡巡りによる平和学習や、学修成果の可視化、学生支援の仕組みが総合的に評価され、2024（令和6）年度、日本看護教育評価機構の専門分野別認証評価で「適合」と判定されました。今回の受審は、教育課程や組織運営をあらためて見つめ直し、看護学教育の質保証を強化する貴重な機会となりました。今後も評価結果を踏まえ、教育と運営の両面でさらなる改善を重ねていきます。

ナイチンゲールは「天使とは、美しい花をまき散らす者ではなく、苦悩する者のために戦う者である」と語りました。差別や貧困、災害や戦争など社会の不条理に対して、敏感で誠実に応答する姿勢を育むこと。それもまた看護教育の大切な役割です。名桜大学の建学の精神である「平和・自由・進歩」にも通じるこの姿勢を胸に、私たちはこれからも看護の本質を問い合わせています。

この30年の積み重ねに感謝しながら、次の10年も、名桜大学らしいケアリングに根ざした教育を礎に、地域に寄り添い、世界にも目を向ける看護学科でありたいと願っています。

(看護学科長 阿部 正子)

## 健康情報学科

公立大学法人名桜大学開学30周年・公立大学法人化15周年を迎えるにあたり、人間健康学部健康情報学科の創設3年目の歩みと未来への展望をご紹介できることを光栄に思います。

健康情報学科は2023（令和5）年4月に、急速なデジタル化と高まる健康意識という社会の要請に応え、数理・データサイエンス・AIの手法を駆使し、保健・医療・福祉などを含む健康分野と社会全般に関するデータを分析することで、新たな価値やサービスの創出に貢献できる人材を育成することを目指して設立されました。健康や情報への高い関心、論理的思考力、地域貢献への意欲を持つ学生たちを迎える、沖縄の公立大学として地域の健康課題解決に貢献する人材を育成することも、本学科の役割の一つだと考えています。

本学科の教育プログラムは、ディプロマ・ポリシーに掲げる「健康情報を適切に分析・活用し、地域社会の健康増進に貢献できる人材」の育成を目指し、体系的かつ実践的な学びを提供しています。健康に関する基礎知識に加え、データサイエンス、プログラミング、統計学など、ICTを活用した情報収集・分析・活用スキルを習得することで、学生は単に情報を受け取るだけでなく、自ら情報を生成・分析し、健康課題解決に繋げる能力を養います。座学だけでなく、演習や実習を重視しており、「健康情報演習I・II（PBL）」などでは、課題を解決するためのアプリケーション開発や、実際にデータを分析するスキルを学びます。さらに、地域と連携したプロジェクト学習を通じて、実践的な課題解決能力と、倫理観に基づいたコミュニケーション能力を育みます。卒業後の進路は、システムエンジニア（SE）、診療情報管理士、データサイエンティスト、公務員など幅広い分野を目指しているため、学生が自身の興味や適性に合わせて専門性を深められるよう、「IoT/SE（情報）モデル」「DS（データサイエンス）モデル」「HIM（ヘルスデータ）モデル」の3つの「履修モデル」を用意し、多様な選択科目を提供しています。また、本学科では、高等学校教諭一種免許状（情報）、診療情報管理士（受験資格）、社会福祉主事任用資格といった資格取得も目指すことができます。

開設から3年目を迎える健康情報学科は着実に成長を遂げています。健康と情報に対する強い関心を持つ学生たちは、ITスキルと健康に関する知識を融合し、新たな健康情報サービスを考案するなど、本学科の目指す人材像が育っていることを示しています。彼らは卒業時に、健康情報に関する深い知識と高度な技能、そして地域貢献への強い意欲を備えることでしょう。名桜大学が地域に根差した大学である強みを活かし、地域住民の健康増進活動にも積極的に貢献しています。学生たちはこれらの活動を通じて、学んだ知識が実際の社会でどのように活用されるのかを肌で感じ、地域貢献への意識を高めています。また、本学科の教員は、健康科学、情報科学それぞれの分野における専門家であり、教育に対する情熱と経験豊かな指導力を兼ね備え、学生一人ひとりの潜在能力を最大限に引き出すきめ細やかな指導を行っています。

健康情報学科は、今後も社会の変化に対応し、より質の高い教育を提供していくことを目指します。AI、IoT、ビッグデータなどの最先端技術が健康分野に与える影響は計り知れませんが、本学科ではこれらの技術を教育プログラムに積極的に取り入れ、学生が将来の社会で活躍するために必要なスキルを習得できるよう支援します。さらに、医療機関、企業、行政機関との連携を強化し、共同研究やPBL等を通じて、学生が社会の現場で直面する課題に挑戦し、即戦力として活躍できる能力を育成します。今後とも、皆様のご支援とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

(健康情報学科長 天願 健)

## 修士課程

本学大学院国際文化研究科国際文化システム専攻（修士課程）は2000（平成12）年に入学定員6名、修士（国際文化）の学位で設置認可を受け、翌年4月1日に開設されました。2002（平成14）年度の第1期修了生から、2024（令和6）年度3月までに179名の修了生を輩出し、2010（平成22）年4月の公立大学法人化を経て現在に至っています。

養成する人材像としては、高度の専門職業人、高度の研究能力を有する教育・研究者、地域の産業および社会文化の振興の諸課題に的確にかつ柔軟に対応できる人材の養成を掲げています。また、中学校および高等学校教諭専修免許の英語と商業の高等学校教諭専修免許の教職課程を設置し、2023（令和5）年度までは言語文化、社会制度政策、経営情報、観光環境、健康科学の5領域でカリキュラムを開設してきました。2015（平成27）年度から2024（令和6）年度まで平均して定員以上の志願者を確保していますが、修士課程の設置から20年以上が経過し、本学学部の構成も変化していることに加えて地域社会に広く貢献する高度な実践能力を育成できるカリキュラムに編成する必要性が生じています。そこで、学長を中心としたガバナンスのもと設置された検討委員会での議論を経て、現在は国際文化および国際観光産業の2領域に再編し、引き続き専修免許の教職課程を提供しています。

国際文化領域は、環太平洋地域（アジア、中南米、北米地域）と沖縄や日本について言語や文化を学的に探求し、地域社会や国際社会に高度専門職業人として応用できる人材を育成する科目を配置しています。国際観光産業領域は、グローバルな視座から地域社会や国際社会の問題を科学的に分析し、観光、経営および情報に関する学術的な研究を通じて、沖縄をはじめとする地域の観光、経営、行政、情報化などを担う人材を養成するための科目等を配置し、両領域で専門に応じた修士論文指導を行います。両領域では、それぞれ修士（国際文化）と修士（国際観光産業）の学位を授与しており、本学国際学部の学科構成に対応する形での修士課程となっています。

再編後初年度となる2025（令和7）年度は志願者数8名で入学者数6名となり、2領域と2つの学位への再編は、本学国際学部の国際文化学科と国際観光産業学科との学術的連続性を高め、国際的かつ地域的な研究を志す方に相応しい領域と学位になりました。しかし、本学学部からの進学者や地域の方の学び、そして研究の場となるためには、より専門性を高めつつ地域貢献を意識したプログラムの構築が必要と考えています。本研究科修士課程は、沖縄島北部地域（やんばる）での研究の意義や普遍的な研究能力の育成を常に意識しながら、地域社会や国際社会の課題解決に寄与できる人材を養成していくことが必要です。

これまで修了生は、本学教職員をはじめ自治体職員、高等学校等教員、国際的機関や観光産業などの職員として国内外で活躍しています。開学30周年そして公立大学法人化15周年を迎えた現在、引き続き学部からの進学者をはじめ地域の自治体や団体、企業等から研究を志す方、留学生などを受け入れ、地域の中での研究と社会への貢献の相乗効果を高めながら人材育成に努めていきたいと思います。

（国際文化研究科（修士課程）研究科長 大谷 健太郎）

## 博士後期課程

2019（令和元）年4月、名桜大学大学院国際文化研究科国際地域文化専攻（博士後期課程）が開設され、今年で7年目を迎えます。博士後期課程の設置は、開学以来の宿願でした。第4代瀬名波榮喜学長の大学院設立構想を引き継いだ第5代山里勝己学長の主導により、その設置構想が実現し、研究指導教員（いわゆるマル合教員）として、学内からは山里勝己（アメリカ文学）、住江淳司（中南米地域文化）の2名を、また、琉球大学を退職されていた赤嶺守（中国・琉球関係史）、山里純一（南島民俗文化）に加え、沖縄県立芸術大学を退職された波照間永吉（琉球沖縄文化）の計5名がマル合教員としてそろい、開設に至りました。初代の研究科長には、波照間永吉が就任しました。2024（令和6）年度末には、博士課程の教育と運営に多大な貢献を果たした創設時の研究指導教員5名に代わり、2025（令和7）年度からは、現職教員である渡慶次正則（英語教育）、嘉納英明（教育学）、高嶺司（国際関係論）、小畠達（日本古典文学）、小嶋洋輔（日本近代文学）、坪井祐司（東南アジア地域研究）による第2世代の教員が博士課程の運営を担っています。

本学の国際地域文化専攻の教育研究上の目的は、「文化の多様性を理解し、グローバルな視点から国際社会が抱える多様かつ重要な課題の解決に向けた普遍的な研究を行い、高度な水準の研究を行うために必要な能力およびその基礎となる豊かな学識を有する創造性に富む人材」を養成することです。地域に根差した特色ある大学院教育を目指す国際地域文化専攻では、指導教員による院生への博士論文作成に係る教育指導を中心としながらも、共通科目である「国際地域文化総合演習Ⅰ・Ⅱ」において、大学院所属の教員全員が参加する指導体制を構築しています。同科目は、1年次と2年次の前期に開講され、院生は博士論文の全体構想を描きつつ、複数回にわたり論文構成の一部を報告し、議論を深めます。院生の専門分野とは異なる他領域の教員や在学中の他の院生からの質問や意見は刺激的であり、本学大学院の学際的な性格を際立たせるものとなっています。

大学院生への研究支援としては、院生用研究室が完備されており、個々の院生には研究費補助が支給されています。博士論文が高く評価された最優秀の院生には「学長賞」が贈られ、あわせて大学による出版助成金も整備されているのが、本学博士課程の特長です。したがって、博士課程の教育研究環境は充実しているといえます。本大学院の博士課程に入学する学生の多くは社会人であり、有職者です。彼らは日々の忙しさの中でも、不断の努力を惜しまず、精力的に学会発表や学内外での査読付き論文掲載を目指して奮闘し、博士論文の執筆に励んでいます。2023（令和5）年3月には本学初の博士号授与者として2名が誕生し、2024（令和6）年および2025（令和7）年には、それぞれ1名ずつの博士号授与が行われました。今後も博士号授与者は続き、本学で学んだ者たちが新たな知の生産者として活躍していくことになるでしょう。博士号取得者の中には、他大学の専任教員として採用された者もあり、本学博士課程における研究者養成が着実に成果を上げています。

本大学院博士課程は、大学院修士課程と連携しながら、名桜大学ディアスボラ研究センターと環太平洋地域文化研究所との共催で、「ウチナーンチュの移民」に関する連続シンポジウムを開催してきました。これらのシンポジウムは、学内の研究成果を広く地域社会に還元する機会となっており、参加した市民とともに「移民」について意見交換を深める貴重な経験となりました。これからも大学の研究を継続的に発信し、地域社会とつながる仕組みを整備しながら、本大学院博士課程は着実に歩んでいくことになります。

（国際文化研究科（博士後期課程）研究科長 嘉納 英明）

## 博士前期課程・博士後期課程

### ■ 名桜大学看護学研究科の歩みと展望

名桜大学30周年を迎えるにあたり、看護学研究科のこれまでの成長と進化を振り返り、今後の展望について述べたいと思います。

本研究科は2011(平成23)年度に修士課程(現・博士前期課程)を開設し、「ケアリング文化に根差した看護教育を探求する教育者の育成」と、「地域の看護需要に応える課題解決能力と指導力を備えた実践リーダーの育成」を理念に掲げてスタートしました。設立以来、67名(2014~2024(平成26~令和6)年では59名)が修了し、県内外で活躍しています。修了生の研究レベルも年々向上し、この10年間で外部資金による研究助成は14件にのぼり、学会発表や論文投稿も飛躍的に増加するなど、確かな成果を上げています。

さらに2022(令和4)年度には、看護学博士後期課程を新設しました。「沖縄のケアリング文化を基盤とした研究を通じて、人々の健康と生活の質の向上に貢献できる高度な研究能力を持つ看護実践者・教育研究者の育成」を目指す本課程には、現在9名が在籍し、着実に歩みを進めています。また、2024(令和6)年度からは、博士前期課程にがん看護専門看護師(CNS)教育課程を開設し、1名の入学生と2名の科目履修生を迎えて運用を開始しました。地域の看護ニーズに応え、難解な課題にも取り組む高度実践看護師の育成に向けた取り組みが、本格的に始動しています。

この10年を振り返る中で、最も大きな転機となったのが、新型コロナウイルス感染症の拡大です。調査フィールドへのアクセスが困難となり、研究活動は大きな制約を受けました。医療現場では逼迫が生じ、研究への意欲を持ちながらも余裕のない看護職が増え、一時は社会人入学生がゼロとなる時期もありました。しかし、この経験は、予測不能な課題に直面した時こそ解決力が問われることを私たちに気づかせてくれました。同時に、教育・研究活動の在り方も劇的に変化しました。ICT(情報通信技術)の活用が進み、遠隔地にいる学生や講師も場所にとらわれず授業や研究活動に参加できるようになりました。これにより、名桜大学の地理的課題が一部克服され、柔軟かつ継続的な教育環境が整いつつあります。

博士前期課程を修了した人材は、看護管理者や本学の教員として活躍し、さらに博士後期課程へと進学する者も増えています。やんばるの地において、看護学の教育・研究を担う専門家が着実に育ちつつあることは、大きな希望です。一方で、臨床現場における高度実践看護師の育成は、なお道半ばであり、地域の切実なニーズに即した人材育成は喫緊の課題です。やんばるは、へき地や離島を含む多様で複雑な医療・福祉環境を抱えています。そのような土地だからこそ、ここで培われるケアリングは、他にはない深みと創造性を持っています。私たちは、やんばるの特性を活かしたケアリングの魅力を見出し、世界とつながる新たな看護学の地平を切り拓いていきたいと考えています。

名桜大学看護学研究科はこれからも、やんばるで育まれたケアリングを、地域に、沖縄に、そして世界に届けていく使命を胸に、一歩一歩前進してまいります。

(看護学研究科(博士前期・後期課程)研究科長 木村 安貴)

## 修士課程

2024(令和6)年4月、名桜大学に3番目の大学院修士課程となるスポーツ健康科学研究科が開設されました。しかし、開設までの道のりは決して平坦なものではありませんでした。人間健康学部スポーツ健康学科を発展させた大学院の設置は、2013(平成25)年に検討が開始されました。同年11月には名桜大学大学院スポーツ科学研究科(仮称)設置調査委員会が開催され、大学院設置が正式に検討されました。その中で2つのワーキンググループを立ち上げ、検討を進めておりましたが、2014(平成26)年10月以降、調査委員会・WGが開催されず、大学院設置構想は一時停滞いたしました。その後、2016(平成28)年11月には、高瀬幸一スポーツ健康学科長より大学院設置(調査)が再び提起されました。2017(平成29)年5月に名桜大学大学院スポーツ科学研究科(仮称)設置調査委員会および設置準備に係る学長・学部長・学科長調整会議が開催されました。その後、2019(令和元)年11月にスポーツ健康科学研究科設置調査委員会が開催され、2020(令和2)年3月には大学院スポーツ健康科学研究科(修士課程)設置に関する調査結果が答申されました。これを受け、2020(令和2)年4月に設置検討委員会が開催され、大学院設置に向けた作業が再び動き出すこととなりました。当初は2023(令和5)年4月開設に向けて準備を進めていましたが、さまざまな理由から開設時期は一度延期されました。その後、幾度となく検討を進め、最終的に2023(令和5)年3月に文部科学省に大学院設置認可申請を行い、同年8月末に文部科学省から設置が認可されました。大学院設置の検討から12年の年月がかかりましたが、2024(令和6)年4月から名桜大学の新たな研究科として活動を開始する運びとなつたのです。

この研究科は、スポーツ健康分野の高度な専門知識と研究能力を持ち、理論と実践を往還できる専門職業人の養成を目的としています。具体的には、以下の3つの資質を備えた人材の育成を目指しています。

- **保健体育教員:**先進的な教育カリキュラムおよび授業の開発・実践・評価ができる、高度な専門性を有する保健体育教員
- **地域のスポーツ指導者:**子どもから高齢者まで幅広い年齢層の参加者に対して、データを活用したプレイヤー主体の指導を実践できる人材
- **地域の健康支援人材:**様々な健康課題に対し、運動を中心とした身体活動を中心とした健康プログラムの指導・開発ができ、地域社会に貢献できる人材

これらの人材を養成するため、本研究科では幅広い学術分野にわたる授業により、専門分野における高度な知識と広範な領域を横断する知識を習得します。また、論理的思考力と専門知識に基づいた指導力を養うことで、修士(スポーツ健康科学)の学位が授与されます。本研究科の指定された授業の単位を取得することで、中学校・高等学校教諭の保健体育の専修免許状を取得することができます。さらに、2026(令和8)年度からは、養護教諭の専修免許状も取得できるよう、現在文部科学省に申請中です。

本研究科は、現代の「学び続ける時代」に対応し、現職の保健体育教員や地域のスポーツ指導者、健康運動指導士、健康運動実践指導者など、スポーツや運動を指導している社会人のリカレント教育の場としても機能し、就業を継続しながら学べるよう柔軟なカリキュラムや長期履修制度を導入しています。

このような特色をもった本学大学院修士課程スポーツ健康科学研究科は、誰もが様々な形でスポーツを楽しみ、「well-being」な社会を実現するために、地域社会だけでなく世界で活躍できる人材の育成に邁進していきます。

(スポーツ健康科学研究所長 奥本 正)



写真1 新聞記事を用いたカードメソッドの実施・発表



写真2 教育研修（乳児院の視察）



写真3 母子の癒し援助論



写真4 新生児蘇生法



写真5 分娩介助の演習

## 助産学専攻科

### ■名桜大学助産学専攻科の教育の取り組み

名桜大学助産学専攻科は、2017（平成29）年4月に開設され、2025（令和7）年には第9期生を迎える予定です。本専攻科は、「安心して健康な子どもを産み育てる地域づくりに貢献する」ことを教育理念として掲げています。

開設6年目となる2022（令和4）年には、超少子化、周産期医療の高度化、子育て環境整備の必要性といった社会の変化を背景に、保健師助産師看護師養成所指定規則の改正に伴い、新カリキュラムが施行されました。これに対応して本専攻科では、助産師に求められる能力を反映した教育課程への再編を行い、すべての科目を必修としました。さらに、依然として若年妊娠婦や社会的ハイリスク妊娠婦が多く、低出生体重児の割合も高いという沖縄地域の現状を踏まえ、新たに「周産期ハイリスクケア論」の科目を設置しました。この科目では、産科救急、母体急変時の対応、新生児蘇生法（NCPN講習会Aコース）、周産期メンタルヘルスへの対応などを取り入れ、社会の変化に即した助産師教育のさらなる充実と発展を図っています。

1年間の教育課程においては、まず入学時のガイダンスでは、最近の母子保健の現状に関する新聞記事を用いたカードメソッドの実施・発表（写真-1）や、キャリアポートフォリオの作成・発表などを通じて情報を共有し、助産師像について考える機会としています。さらに、教育研修の一環として「袋中園乳児院」（写真-2）「ひめゆり資料館」「達磨寺」「玉陵」などを訪問し、沖縄の歴史・文化・福祉について学びます。これによりクラスの絆を深めながら、助産学を学ぶモチベーションを高めています。

ガイダンス終了後は、助産学実習に備え、妊娠期・分娩期・産褥新生児期の助産診断技術や助産過程の学修を深めます。「母子の癒し援助論」で代替補完療法（指圧、マタニティヨガ、アロマセラピー、ベビーマッサージなど）の理論と実践（写真-3）を学び、実習の場で活用しています。特に「周産期ハイリスクケア論」では、新生児蘇生法（NCPN講習会Aコース）を実習前に開講し（写真-4）、様々な場面を想定したシミュレーションを多く取り入れています。新生児の状態を迅速に判断し、アルゴリズムに従って的確に対応する力や、チーム内での連携的重要性、児の変化を予測しながら行動することの大切さを学び、実習での実践へとつなげています。

次に、「分娩期演習」で分娩介助技術（写真-5）を修得し、7月から9月末にかけては「助産学実習Ⅰ・Ⅱ（分娩介助実習）」に取り組みます。指定規則により「1人の学生につき10例程度の分娩取り扱い」が求められる中、新型コロナウイルス禍においても感染対策を徹底し、学生6名全員が奮闘し目標を達成しました。

後学期の「母子ケアリング実習（離島・へき地）」では、離島・へき地での母子保健活動を学ぶとともに、今帰仁地区にある助産院や名護市の乳児健診の実習の中で分娩を担当した母子と再会する場面もあり、児の健やかな成長や母親の笑顔に触れることで、地域における母子のつながりの大切さを実感していました。一方、学生のキャリアプランで印象に残ったのは、「母子やその家族にとって特別な思い出となる出産を支援したい」「助産師としての専門性を高め、寄り添えるより良いケアを提供したい」という想いでした。

これまでに本専攻科からは第1期生から第8期生まで計48名が修了し、全員が助産師国家試験に合格、就職率も100パーセントを維持しています。修了生の多くが県内に就職しており、2024（令和6）年には全員が県内就職を果たし、地域に貢献しています。本専攻科での1年間の学びを通して、学生たちはケアリングの姿勢で妊産婦に寄り添い、常に先を見据えながら最善の助産ケアを実践できる力を育んできました。今後も、こうした学びを礎に、地域に貢献し、自己研鑽を重ね続ける助産師の育成に努めてまいります。

（助産学専攻科長 小西 清美）

## 附属図書館

附属図書館が辿ってきた、この10年を振り返るにあたって、図書館の増改築、図書資料の充実化、貴重資料の保全・活用の3点について、以下に取り上げます。

この10年におけるあゆみの中でもっとも大きなトピックは図書館が増改築されたことです。既存の1階建て部分を残して、これに併設するかたちで地上2階・地下1階が増築された新たな図書館が、基本構想の策定から設計・施工までの約5年間を経て\*、2020（令和2）年に完成しました（写真-1）。1階閲覧室の増築部には円形書架が設置されました（写真-2）2025（令和7）年6～12月は「資料でたどる戦後八十年」のテーマで関連図書資料を展示）。地下1階には10万冊収蔵可能な電動式集密書庫、そしてコミュニケーション・ルーム（2室）が設けられました（写真-3）。2階は周囲をパネルで囲んだキャセルデスク（60席）、個人学習室（10室）、サイレントルーム（30席）が設置され、より集中して学習できる環境が整えられました（写真-4・5）。コロナ禍（2020（令和2）年度）にあっては、自宅のWi-Fi環境が整っていない学生に対して、この2階フロアをオンライン講義受講の場としました。また、1階には本学初代学長の名を冠した東江康治記念講堂（40席）が新設され、研究発表会や講演会、映画の上映会などのイベントで活用しています（写真-6）。

教育・研究に資する図書資料などの提供は、図書館サービスの根幹です。研究の進展や社会の変化などに対応するため、継続購読雑誌・電子ジャーナル・データベースの見直しは、この10年間、ほぼ毎年実施してきました。図書購入も教員による選書を継続して行い、2020（令和2）～2022（令和4）年度には学生図書選書委員会が組織され、学生目線による図書の選定が行われました。2023（令和5）年度には、本学の第3期中期計画（2022～27（令和4～9）年度）を踏まえ、図書館サービスおよび図書資料の戦略的な整備・充実を図ることを目的に図書館サービス検討ワーキング・グループが設置されました。そこでは関連経費の見直しから必要なデータベースおよび蔵書、電子ジャーナルの抽出・整備を行い、減額できる予算を明確化し、その減額分を図書資料などの充実に充てることとしました。この理由は、同年度に実施した図書館利用実態調査の結果として、蔵書の充実の求める声が多く寄せられたためです。翌2024（令和6）年度には、教員選書予算を増額し、学部・大学院の国際文化系に予算の重点配分を行いました。全学合計の予算執行率が93%、受入冊数は約1,500点となりました。2025（令和7）年度は、学部・大学院の看護系に重点配分を行い、当該分野の蔵書の充実を図る予定です。

本図書館が所蔵する湧川清栄氏寄贈図書資料（以下、湧川文庫）をはじめとする貴重資料の保全・活用も、次世代へと継承し、研究の深化・発展に寄与するための重要な努めとなります。2019（令和元）年度には貴重書庫・中性紙製保存箱を購入、2020（令和2）年度以降は脱酸化処理を実施することで資料の劣化を防ぐ取り組みを行っています。また、湧川文庫の未整理図書資料を含む調査を進めるとともに保管・整理の対象となる図書等の優先順位を設けるため、2023（令和5）年度から外部有識者1名を雇用しました。その結果、特に県内で原本が当文庫でしか確認できない資料（11点）の存在が明らかになり、これらを含めた資料の一部を2024（令和6）年度にデジタル化を行い、2025（令和7）年度にはDVD版を作製する予定です。今のところ館内のみでの閲覧を考えていますが、湧川文庫の公開に向けた準備を進めているところです。

\*この経緯は、小川寿美子（2020）『『個性』『知性』『感性』を基本コンセプトに一名桜大学公立化10周年と附属図書館の増改築事業』『公立大学法人名桜大学10年のあゆみ』第4章第1節 pp.65-67に詳しく記されています。

（附属図書館長 小畠 達）



写真1



写真2



写真3



写真4



写真5



写真6

# リベラルアーツ機構

## リベラルアーツ機構

リベラルアーツ機構は、教養教育を全学的に推進するため、2015（平成27）年に設立されました。これは、前身である教養教育センターの取り組みをさらに発展させるための改組であり、開学20周年・公立大学法人化5周年の節目でもありました。この設立以降、本学の教養教育は新たなステージへと進みました。特にこの10年間、本機構は「教養教育カリキュラム」「高大接続事業」「学習支援体制」の取り組みを強化・推進してきました。

「教養教育カリキュラム」については、専門分野に進むための基盤を築くため、多様な分野を横断的に学ぶことができる科目を充実させました。特に、「海外スタディツアー」や「プロジェクト学習」「グローバル教養演習」などは、本学が目指す国際的教養人を育成するための実践的な学びを重視した科目です。1年次から履修できる「海外スタディツアー」では、学生が海外で語学研修や文化交流を体験し、異文化を理解する力を養っています。「プロジェクト学習」では、地域の課題解決に学生自らが取り組み、実践的な課題解決能力を身につけています。プロジェクト学習の課題募集については、新たに地域から募集する「地域枠」、学生から募集する「学生枠」の2枠が2024（令和6）年度より設けられました。「グローバル教養演習」は2025（令和7）年度から新設された「グローバル教養副専攻」の必修科目として開講しました。本科目では、沖縄の歴史・文化・社会・自然を深く理解しながら、外国語での意思疎通を通じて異文化理解とコミュニケーション力を磨きます。

「高大接続事業」については、北部地区の7高等学校と連携し、高大接続勉強会を年2回企画し、2025（令和7）年12月現在通算で14回開催しています。また、北部地区7高等学校からの入学予定者に対し、「入学前特別講座」を実施することで、高校から大学へのスムーズな移行を支援しています。これは、新入生が大学での学びの意義を理解し、学習意欲を高めるための重要な取り組みであると共に、新入生が大学生活にいち早く適応するための心理的なサポートにもつながっています。

本学のリベラルアーツ教育を語る上で欠かせないのが、学生会館SAKURAUM（サクラウム）の4階に設置した、言語学習センター（Language Learning Center：以下、LLC）、数理学習センター（Mathematical Science Learning Center：以下、MSLC）、名桜大学ライティングセンター（Meio Writing Center：以下、MWC）の3学習センターによる「学習支援体制」です。これらのセンターでは、先輩学生が後輩の学習を支援する「学生ピア活動」を積極的に推進しています。ここでは、先輩学生がチューターとなり、後輩の学びをサポートします。LLCでは、英語をはじめ中国語や韓国語など、多様な言語の学習を支援し、学生が外国語の習得に興味を持つきっかけを作っています。MSLCでは、数学や統計学など、専門分野の基礎となる科目をサポートし、学生の数理能力の向上に貢献しています。また、MWCでは、レポートや論文の書き方を指導することで、学生の論理的思考力や表現力を養っています。

リベラルアーツ機構は、これからも「建学の精神」を具現化した教養教育を追求し、学生が社会に貢献する「国際的教養人」として成長するための土台を築いていきます。今後は、基礎学力に困難を抱える学生への支援を強化するとともに、教職員が建学の精神の理解を深めることで、本学独自のリベラルアーツ教育をさらに確立していく必要があります。開学30周年・公立大学法人化15周年を迎えた今も、さらに今後も、リベラルアーツ機構が提供する教養教育や学習センターが未来を担う若者たちの可能性を育み、地域社会の発展に寄与していくことを確信しております。

（リベラルアーツ機構長 佐久本 功達）

## LLC：名桜大学言語学習センター (Language Learning Center)

### ■ LLCの歩みと役割

名桜大学言語学習センター（Language Learning Center）、通称LLCは、2001（平成13）年に設立された、名桜大学の最初の学習センターです。「ピア・ラーニング」の要素を取り入れ、本学の学生で構成されるチューターが、語学力をもっと高めたい学生へと学習支援を行う形をチュータリングと呼び、英語学習環境を整えたのが始まりです。

### ■ 英語から多言語へ

それから、20年以上を経て、LLCは大きく発展しました。現在では、大学全体として、国際性を高められる環境を整え、学ぶ学生の語学力を向上させ、グローバルな人材を育成することを目標に、LLCの役割はますます重要なになってきています。日本社会がさらに多言語化しグローバル化してきていること、そして留学などで世界へ向けて自己の能力を伸ばそうとする学生が増えたことから、2022（令和4）年度より次々と英語以外の語学教育環境を整えました。

英語・日本語はもちろんのこと、大学の第2外国語として講義を行っている中国語、韓国語、スペイン語、ポルトガル語もチューター制度を設立しました。特にポルトガル語のチューター制度は全国でも珍しい形態です。さらに、本学では、留学生も毎年50名を超えることから、日本語チューター制度も充実させています。チュータリング以外の活動については、必要に応じて、学生同士が交流できるようワークショップやイベントを開催できるようにしています。

### ■ LLCの活動内容

活動内容も、半期ごとに工夫しながら様々な取り組みを行ってきました。ワークショップなどで多彩な活動内容がある中の例として、4月には留学生歓迎セッション、続いて運動会、夏には流しそうめん体験を開催し、楽しみながら日本の文化や言語に慣れてもらえるように工夫しました。最近ではブラジルのお祭り体験のワークショップをポルトガル語グループが企画・実施しました。本学が所在する、沖縄県北部地域の小学校から依頼を受けて、小学生にも外国語を身近に感じてもらう取り組みも行っています。また語学力を向上させられるように様々な教材を準備して、施設内利用や貸し出しを行っています。これらの活動は今年度も続けていく予定です。

チューターは学生で構成されていますが、語学教育を行う「ピア・ラーニング」の機能を維持し、質の高い内容を提供していくため、該当言語専門の教員が配置されています。各言語のチューターグループは教員と連携を取りながらトレーニングを受け、チューターとしてのスキルを向上させています。

昨年は本学の30周年記念の年でもあり、大学としてもこれまでの軌跡を振り返る良い機会となりました。センター機能を持つ部署も数理学習センター、ライティングセンターへと追設され、それぞれの強みを発揮しています。今年度はそれぞれのセンターがこれまで培ってきたスキルを共有し、さらに質の高い教育の提供ができるようにと、合同報告会も行われました。

これらの経験、知見を今後は全国的にも発信し、他大学の良い事例などを取り入れて、多くの有意義な活動を展開していかなければと思います。

（言語学習センター長 藤井まい）



ワークショップの様子

チュータリングの様子



## リメディアル教育を支える 数理学習センターの活動

名桜大学数理学習センター（通称MSLC）は、2009（平成21）年に「学生の数理能力の向上と自主学習の促進」を目的として設置され、2024（令和6）年5月に15周年を迎えました。数理学習センターの活動は、授業連携を中心に予習・復習課題のサポートに加え、就職試験対策として数的推理や数学の活用力を目指した学習支援を行っています。MSLCでは先輩・後輩の学びのコミュニティ構築に力を入れ、数理系科目に苦手意識を持つ学生でも気軽に何度も足を運んでもらえる雰囲気づくりを心がけています。MSLCを積極的に活用した学生の学習習慣の確立や苦手意識の克服等がその成果として挙げられます。また、数学得意な学生がMSLCを利用することで、学びのコミュニティの良さを実感し、次は支援をする側になりたいとチューターにエントリーする学生もいます。この流れが現在のMSLCの活動を支えています。

2019（令和元）年には、記念誌「名桜大学 数理学習センター 10年のあゆみ」を発行しました。そこには、MSLCの基本理念及び設置以来の活動報告があり、MSLCが有効に活用されていることが分かりました。また、設置当時に奮闘した教職員からのメッセージも紹介され、名桜大学の学びの環境を良くしたいという先生方や学生達の厚い思いが伝わってきます。

### MSLCの基本理念

- (1) MSLCは、優しさ・笑顔・努力を大事にする学びの空間です。
- (2) MSLCは、学生の数理能力の向上と自主学習の促進を目的とした学習支援機関です。
- (3) MSLCピア・チューターは、寄り添う学習支援を心がけ、向上心を持ち、自己実現を目指します。

2024（令和6）年度は15周年記念として、これから学習支援活動及びセンター運営の継承・発展に資することを目的として「数理学習センター1年間の活動記録」をまとめました。新学期の授業開始とともに始まるMSLCの学習支援の準備やチューター育成の方法が分かるように、さらに学習支援の成果をMSLCの全スタッフの協働作業で記録しました。

MSLCは、リベラルアーツ機構の年度目標を達成するための学習支援として、本学の数理に関するリメディアル教育の一端を学生チューターが担っていると言っても過言ではありません。それは、2017（平成29）年以降開講された、数学基礎力に困難を抱える学生を対象とした「自然科学特別講義（統計学基礎）」の授業内・授業外での学習支援を、毎学期15週を通して計画的・継続的に行い、苦手意識克服と基礎力向上に貢献しています。

学生会館SAKURAUM 4階では、学生が学び合うピア・ラーニングが日々行われており、支援を受けた受講生の自己評価及び試験の結果から、学習支援の成果が毎年報告され、「学生の数理能力の向上と自主学習の促進」にも有益となっています。同時にチューター自身の「数学力と社会人基礎力の向上」が期待でき、本学のリメディアル教育を支える特色ある取組として、また学生の学びのコミュニティづくりに貢献している学習支援機関として、MSLCを誇りに思っています。

（数理学習センター長 高安 美智子）

## ライティングセンター

名桜大学ライティングセンター（MWC）は、2015（平成27）年度に設置されました（開室は2016年度）。文章作成を支援するためのセンターで、「自立した書き手を育てる」ことを目標にしています。他大学のライティングセンターでは大学院生がチューターを務めることが多いのですが、名桜大学では学部生がチューターとして活動している点が特徴です。現在、19名のチューターが所属しています。チューターとして採用された学生は、レポートの書き方やチュータリングに関する学びを重ねていき、独り立ち審査と呼ばれる試験を経て、1人でチュータリングを行えるようになります。チュータリングの1回あたりの時間は45分間で、文章の書き方を教えるのではなく、対話を通して、より良い文章にするにはどうすればよいのかを共に考えるという形をとっており、レポートの添削は行っていません。

センターの歩みを振り返ってみます。2016（平成28）年6月にはキックオフシンポジウム（基調講演は編集者の馬場公彦氏と当時の学長の山里勝己先生）を、これに先立つ同年1月にはジャーナリストの野嶋剛氏を講師としたキックオフ講演会を開催しました。センター設置当時のセンター長は菅野敦志先生で、以後、奥本正先生（2017～2019（平成29～令和元）年度）、大峰光博先生（2020～2023（令和2～5）年度）と続き、2024（令和6）年度からは私が務めています。

2019（令和元）年度には公式ホームページ、Instagramのアカウントを開設して広報活動を展開する一方、早稲田大学ライティング・センターから講師をお招きして研修会を開催するなど、チューター育成にも力を入れてきました。

そのような中、新型コロナウイルス感染拡大がセンターの活動にも影響を与えました。2020（令和2）年4月、5月、8月にはセンターは閉室となり、チュータリングを実施できない状態となりましたが、困難な状況下、チューターの能力を向上させるための研修会を実施したり、オンラインでのチュータリングの可能性を検討したりするなどの活動が続けられました。その結果、2021（令和3）年度にはオンラインでのチュータリングに対応することができるようになりました。

また、2020（令和2）年に名桜大学ライティングセンター監修、大峰光博・奥本正編『大学1年生のためのレポート・論文作成法』（ふくろう出版）が出版されたことも特筆すべき出来事です。1年次の必修科目「アカデミックライティングⅠ」のテキストである同書を通じて、名桜大学の全学生がレポートの書き方、ルールを学んでいます。

レポートへの対応が中心のライティングセンターですが、2022（令和4）年度からはスポーツ健康学科の卒業研究論文のチュータリングにも対応できるようになりました。2023（令和5）年度後学期からは全学部・学科の卒論に対応しています。少しずつではありますが、卒論執筆のためにセンターに足を運ぶ学生も出てきました。他にもセンターの取り組みとしては、本学への入学が決まった北部地区の高校生を対象とした入学前特別講座の実施があります。昨年度は久高利美子副センター長が大学で求められるライティング力に関して解説し、チューターたちも参加して、文章の要約などの練習が行われました。

生成AIの進化、読書量の減少が進む現代社会において、「自立した書き手を育てる」ことの重要性は増していると考えます。多くの学生にライティングセンターに足を運んでもらい、文章を書くことの楽しさを知ってもらえたと思っています。

（ライティングセンター長 屋良 健一郎）



センターのキャラクター  
「ライバー」。2023年度誕生。  
鉛筆から生まれた。

## 環太平洋地域文化研究所

環太平洋地域文化研究所の前身である総合研究所は設立されてから24年間にわたり、「沖縄県北部の地域社会へ研究成果を還元し、地域のシンクタンクとしての機能を果たすこと」を趣旨として活動してきました。しかし、総合研究所の目指すべき重要な目標である「地域のシンクタンク」としての役割については、暗中模索の時期が続いてきたといえます。名桜大学の組織の拡充に伴い、大学の研究を総じて定義することが難しくなってきたことがその要因としてありました。

その打開策として、2018（平成30）年度にそれまでの6部門（言語文化部門、経営情報部門、観光産業部門、社会政策部門、健康科学部門、看護科学部門）を廃止しました。それにより学際的な研究の推進を目指すことになりました。続けて2019（平成31／令和元）年度からは総合研究所の名称を「環太平洋地域文化研究所」と新たにし、さらなる進化を目指すことになりました。沖縄を中心に環太平洋を主体とした言語・文化、経営情報、観光産業および医療・健康分野において文系・理系を横断する学際的な研究を支援することが、部門の廃止、そして名称変更といった変革の趣旨となります。つまり端的にいえば、環太平洋地域文化研究所の主たる役割は「研究の推進」、「研究の支援」である、ということを明確にしたことになります。

こうした変革以降の6年間、環太平洋地域文化研究所はその役割をさらにはっきりとわかりやすくしてきたといえます。たとえば「地域のシンクタンク」として大学の特色ある研究の創出を担う役割については、適切な学内機関に任せることという仕組みを構築しました。「琉球文学大系事務局」、「ディアスボラ研究センター」の創出がその代表的な事例といえます。現在、環太平洋地域文化研究所は、学内研究者=所員からの要望を受けて、その研究の推進を適切な学内機関に差配する機関となったのです。

具体的な「研究の推進」、「研究の支援」の業務としては、まず研究費助成があります。なかでも出版費助成は、2014（平成26）年度から開始されました。県内他大学には見られない特色ある助成のかたちといえます。名桜大学の各教員による研究の成果を広く地域、国内に還元するもので2025（令和7）年までに11冊の研究書を刊行してきました。さらに国際文化研究科国際地域文化専攻（博士後期課程）の成績優秀の修了者に与えられる学長賞受賞者への出版助成の体制も本学教務部と連携し構築しました。新規採用者助成に関しても2023（令和5）年度から科研費のスタートアップ支援のフォローとして位置づけなおしました。

次に科研費等の競争的外部資金獲得支援も拡充してきました。科研費勉強会は、専門の業者に委託し科研費申請に関する最新の動向を学内教員に共有する機会として運営されています。科研費説明会は、7月に出される科研費の変更点について情報共有するもので、研究費支出に関する事務的な注意点に関して共有するものとして運営されています。さらに科研費申請、獲得に関する有識者を招いて個々の申請書に助言をいただく科研費採択に向けた個別相談を運営しています。また、研究倫理コンプライアンス教育研修の実施運営も環太平洋地域文化研究所が担っています。

研究成果の地域への還元活動としては、詳細は本記念誌他節に譲りますが、シンポジウムや名桜やんばるアカデミーの開催があげられます。そして『環太平洋地域文化研究』という研究所紀要の発行もその大きな活動の一つといえます。もう一つの学内紀要である『名桜大学紀要』と異なり、研究所の研究推進の成果の公表の役割を担ってきました。

環太平洋地域文化研究所は、名桜大学の発展とともにかたちを変え、進化してきました。今後も名桜大学の同伴者として歩んで参りたいと思います。

2025年度 研究所スタッフ



（環太平洋地域文化研究所所長 小嶋 洋輔）

## 地域連携機構

### ■ 地域と共に成長する大学窓口の地域連携機構

地域連携機構は北部生涯学習推進センターに併設されています。2013（平成25）年4月、エクステンションセンターとして、沖縄県北部地域ならびに沖縄県民の生活や文化の向上に寄与する、「大学と地域をつなぐ総合窓口」として開設されました。2017（平成29）年に従来の機能をさらに強化する目的で、地域連携機構へと名称を変更し、これまで以上に地域とのつながりを意識し、「地域に開かれ・地域と共に成長する」を目指しています。

地域連携機構の事業企画に関しては、地域連携機構運営委員会がその役割を担っております。地域連携活動運営の基本方針には、教育研究成果を社会に還元することや地域住民のニーズに応じた生涯学習の推進などがあり、公開講座や地域出前講座は、その一環で実施しております。公開講座においては、地域に根ざした研究を地域へ還元する講座、健康、スポーツ、自然環境、観光に関する講座、体験学習型講座などを企画してきました。地域出前講座は、希望された場所での講座開講を実施しております。2021（令和4）年からは、地域支援人材育成を目的に8～10コマ連続でのシリーズ公開講座も開講しています。開講講座の一部を紹介します。「観光・体験ガイド養成講座」は、自然体験活動事業の企画・実施ができるリーダー育成します。「しなやかに動ける動作法講座」は、からだの動きに不調を抱えておられる受講生を中心で、受講後のサークル活動もみられます。「中国語講座」は、老若男女の参加者で毎回賑やかな講座ですが、その講座の受講生が現在講師として、教授されております。「沖縄の歴史文化」も大変人気のある講座で多数の参加者がみられます。また2023（令和5）年からは、連携講座として美ら島財団様協力のもと「沖縄近海の生物・植物・沖縄の歴史文化」の講座が開講され、好評を得ております。さらに、おきなわ県民カレッジとの連携も行なながら、地域住民に多様な学習機会を提供し学びの促進および充実を図ることを目指しています。コロナ禍の期間は、地域貢献活動の一部をオンライン講義対応や感染症対策を徹底しながら、事業活動が完全に停止しないよう推進しました。地域住民との連携を深めること、教職員・学生の地域貢献を支援すること、地域課題解決のための自治体（北部12市町村）との連携を行う活動を中心的に担っているのが、健康・長寿サポートセンター（2012（平成24）年12月開設）、看護実践教育研究センター（2013（平成25）年4月開設）です。健康・長寿サポートセンターは健康づくり支援活動を12市町村の人々に提供する中核機能を担っており、学生の健康支援ボランティア団体の活動支援や取りまとめを行っています。看護実践教育研究センターは、沖縄県北部地域の保健・医療・福祉施設におけるケアの質向上のため、看護系職員の継続教育・研究支援を行っています。また、「社会貢献」「学生教育」「研究推進」への寄与を企図として、2018（平成30）年11月から弘前大学COIの連携拠点とした「やんばる版プロジェクト健診」を実施し、参加者へ健康への気付きを促す機会を提供しております。「道の駅」との連携においては地域課題解決に取り組んでおります。2024（令和6）年には、地域課題解決に向けた産学官協働の「地域プラットフォーム構築」に向けての取り組みが始動しました。地域連携機構は、これからも、地域連携事業に関するプログラムの統括と総合窓口としての役割を担い、地域住民の生涯学習支援と、本学の教育・研究を通して、地域の課題解決に取り組み、地域と共に成長する大学窓口を目指してまいりたいと思います。

（※健康・長寿サポートセンター・看護実践教育研究センター・やんばる版プロジェクト健診は各項目参照）

（地域連携機構長 前川 美紀子）

## IR室

IR (Institutional Research) とは、大学の教育・研究活動を支援するため学内の各種データを収集・分析し、大学運営の意思決定に活用する活動です。学生の学修成果や教育効果を可視化し、エビデンスに基づく教育改善を推進する重要な機能を担っています。

大学IRが求められる背景には、18歳人口の減少による大学間競争の激化、大学教育の質保証に対する社会的要請、文部科学省による教学マネジメント強化の政策的要請があります。また、限られた資源の中で教育の質を高める学内ガバナンスの必要性、入試改革に伴うアドミッション・ポリシーとの整合性、学修成果の可視化といった課題に対応するため、データに基づく大学運営が求められるようになりました。

こうした社会的要請を受けて、名桜大学ではIR室設置準備委員会を立ち上げ、設置に向けた準備を開始しました。委員会での検討を重ねた結果、2019(令和元)年度に名桜大学IR室が正式に発足しました。設立から今に至るまで、大学に求められる諸課題に対応し、エビデンスに基づく大学運営と教育改善を支える中核的な役割を担っています。

設立当初から教育の質保証に向けた包括的な取り組みを開始しました。アセスメント・ポリシーの策定と各項目のデータ収集体制の整備、ジェネリックスキル調査の実施と分析、GPA分布や入試結果の詳細な分析を継続的に行っています。また、教育評価システムの構築や教員活動評価シートの改良、ルーブリック評価の全学配布、個人情報取り扱い規程の整備も重要な成果です。

情報発信と内部質保証体制の充実を図り、2021(令和3)年度にはIR室「Newsletter」の定期発行を開始しました。このNewsletterは、関係者向けに電子配信される広報資料であり、本学の教育・研究の状況を教職員に周知するための重要な情報源となっています。あわせて、内部質保証推進部会との連携を強化し、アセスメント・ポリシー実施要領の策定も進めました。同時に、授業科目コードの統一による教育課程管理の基盤整備にも取り組みました。

また、学内データの一元管理を目指し2022(令和4)年度には「IR室Webサイト」を構築しました。このサイトは学内向けのポータルとして、各種データを一元的に管理し、視覚的にグラフ化した情報を閲覧できる機能を備えています。これにより、データの可視化と利活用がより容易になりました。アンケート調査の統合・電子化や、キャリア支援課との連携強化も併せて進めました。

2023(令和5)年度には、各部局との連携体制を一層強化し、データ分析結果を部課長会議等で共有する体制を確立しました。また、IR室Newsletterの制作体制を刷新し、各室員が担当する分担体制へと移行しました。さらに、IR室Webサイトの機能改善や、データ共有に関する権限の整備も達成しました。これらの取り組みは、学内の情報共有文化の形成にも寄与しています。

近年は、データ活用体制の組織的定着に取り組んでいます。学生部キャリア支援課と連携し、進路関連データの整備と厚生労働省指標に基づく分類システムの構築を進めました。業務効率化に向けては、各部局からの業務依頼およびIR室からの作業依頼を文書化し、責任体制の明確化を図りました。また2024(令和6)年度には、データ提供申請のシステム化やアクセス権限の管理体制の整備、予算概算要求の策定など、IR活動の持続的運営に向けた基盤を強化しました。

このように、IR室は設立から6年間で、本学の教育改善と大学運営において不可欠な存在となりました。データに基づく意思決定の文化が学内に根付き、各部局との連携体制も定着しています。今後は、これまでに築いた基盤を活用し、より高度なデータ分析と実効性ある教育改善提案を通じて、本学の教育の質向上と学生の学修成果の最大化に貢献してまいります。

(IR室長 中里 収)

## 健康・長寿サポートセンター

健康・長寿サポートセンターは2012(平成24)年10月、健康活動ボランティアサークル「ヘルスサポート」の支援目的で設立されました。「心身の健康科学に関する知見を応用し、科学的根拠に基づくヘルスプロモーション活動を学生ボランティアが地域住民に対して行うことを支援すること」を趣旨に活動してきました。当時、学生による健康支援活動団体は、「ヘルスサポート」、「The Volunteer Activity Group : VAG」、「食育推進支援サークル」の3団体でした。これら3団体は顧問教員の指導のもと学生の真摯な活動が次第に評価され、自治会や地域イベントからの依頼が増加し、活動の場が拡大してきました。それに伴い、他の学生ボランティア団体も設置されて、活動内容が多様化してきました。しかし、2020(令和2)年から約3年間にわたる新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより社会活動が制限され、対面での活動は停止しました。そのような状況下でも「ヘルスサポート」は内閣府地方創生政策アイディアコンテストにて2年連続の入賞を果たしました。また、2022(令和4)年度の「VAG」学生代表の石川淳貴氏は、「学生ボランティア団体助成事業」においてボランティア活動体験レポートを提出し優秀レポートとして個人表彰を受けました。同時に「VAG」は「COI事業・やんばる健診」事業において継続的な取り組みが評価され、弘前大学との連携事業の今後10年間の大型プロジェクトの決定要因となりました。

当センターは活動自粛期間中から支援状況と課題の検証を継続した結果、次の6つの改革をしました。

1. 2022(令和4)年度11月の健康・長寿サポートセンター運営規定の改正により、現況の学生の地域健康支援活動に即した規定へ見直しをしました。
2. 2022(令和4)年度末にホームページの刷新をしました。各サークルのSNS発信のみであったが、各団体活動紹介を大学公式サイトで公開し、高大連携による受験生の動機付けを図ることを目的に健康・長寿サポートセンターページと各学科ページのリンクをしました。加えて各団体のチラシを集約作成し関係機関に配布し、そのPDF版を同ホームページに継続的に掲載しています。
3. 2023(令和5)年度の活動支援金制度の創設は、念願の離島渡航費や活動費を補助する新制度として設計しました。
4. 2023(令和5)年度に学生リーダー会を設置し、実績入力、物品借用、機器購入などの要望・課題を共有し、学生主体の活動環境を整備しました。
5. 2025(令和7)年2月には学生ボランティア報告・交流会として、上記リーダー会を活かした本学初の会を実施しました。

5つの検討、改革は、事務局と委員会の協働支援の結果です。しかし、学生の活動評価に伴う県内外旅費の未確保は課題です。そのような中、2024(令和6)年度は「食育推進支援サークル」と「ロボットを活用した健康支援活動SIC」の学生が表彰され、この効果は北部12市町村等からの新規依頼が増えていることが活動の評価だと理解できます。

2025(令和7)年の団体数は、上記の3団体の他、「ユースクリニック」、「ふれんどまみー+」、「ビブレンディング」、「やんばるびあまーる」、「ロボットを活用した健康支援活動SIC」、「名桜生と親子運動教室」、「しなやかな身体をつくる健康動作法講座」等10団体となりました。

健康・長寿サポートセンターは学生が主体的に健康支援活動できる環境整備を目指し改革をしてきました。今後は、PDCAサイクルを活かし、適切な予算確保と広報、学生リーダー会、学生ボランティア報告・交流会の継続ができる環境を事務局と委員会で協同し目指します。名桜大学の発展とともに形を変えてきた本センターは、今後も名桜大学の発展と更に邁進してまいります。

(健康・長寿サポートセンター長 田場 真由美)

## 教員養成支援センター

### ■ 教員養成支援センターの紹介

本学の教職課程は1996（平成8）年に設置され、その後、2006（平成18）年7月に教員養成支援センター（以下、支援センター）が設立されました。

支援センターは、教職履修生に対する履修指導と適切な情報提供を行う機関です。その主な業務の一つである学生支援活動として、履修指導、教職に関する情報提供、沖縄県北部地区の学校への学習支援等のボランティア派遣調整、漢字検定の実施、教員採用試験対策講座の実施等に取り組んでいます。近年は、教職大学院への進学希望者が増えつつあり、こうした学生への支援も行っています。

主な業務の二つ目である支援センターの活動を周知する等の取り組みとして、年に2回の『教員養成支援センターだより』の発行、関係教員の教育実践・研究の成果を共有することをめざすとともに、支援センターにおける様々な取り組みをまとめた『教員養成支援センター年報』（以下、『年報』）の発刊に取り組んでいます。

この10年間における教職課程、教員養成支援センターをめぐる重要な出来事の第一として、2018（平成30）年度に行われた、文部科学省による教職課程再課程認定審査（以下、再課程認定）の実施が挙げられます。この再課程認定に向けた作業に、教職課程を有する国内の全大学・短期大学が取り組みました。本作業を行うにあたって、教職課程コアカリキュラム（「教職科目○○では、…という内容を教授-学習するべきである」という視点）が示され、「特別支援教育」や「総合的な学習の時間の指導法」が新たに教職必修科目とされました。そして、教職課程認定に値する学内体制になっているのか等が問われ、コアカリキュラムに整合するシラバス、教員の研究業績等の提出が求められました。その対策の一つとして、2016（平成28）年度からの『年報』には、関係教員の教育実践・研究の成果を共有するとともに、研究業績を積み上げる媒体として役割をもたせるようにしました。

第二に、2017（平成29）年度から、高安美智子先生（第5代支援センター長）のご尽力と、様々な方々のご協力の下に北部教育職員養成講座が立ち上げられたことが挙げられます。この講座に、支援センターが協働する形で、組織的・計画的・継続的な教員採用試験対策講座が実施されるようになりました。それによって、10年前は1・2名にとどまっていた本学学生の現役での教員採用試験最終合格者数は、二桁に近いところにまで増えてきました。

第三に、2021（令和3）年度から本格的に教職課程自己点検・評価に取り組んできたことが挙げられます。この取り組みは、関係の教職員間で本学の教職課程の成果と課題を共有し、課題克服をめざす改善策を検討する等、教職課程の質の向上に資するものだと考えます。今後も、適正に実施していく必要があります。

第四に、教職課程認定（地理歴史科）申請が認められ、教職課程認定（国語科、社会科、公民科）申請にチャレンジしていることが挙げられます。こうした取り組みは、教職志望学生の選択肢を増やし、可能性の幅を広げることに通ずるものと考えます。

本年、審査を受ける国語科、社会科、公民科の教職課程認定申請が認められた場合、教職履修生はかなり増加するとともに、かれらを支える支援内容・方法、さらには、支援体制の充実が求められます。教員養成支援センターが中心となり、今後検討していく必要があります。

（教員養成支援センター長　板山 勝樹）

## 看護実践教育研究センター

名桜大学が位置するやんばる地域は、県内でも少子・高齢化が進んでおり、人々が健康に暮らせる地域づくりは本学の使命のひとつです。人間健康学部看護学科は、2007（平成19）年の開設以来、北部地域の住民や看護職を対象として、健康相談活動や、看護系人材育成に係る研修会、講演会などを数多く開催してきました。2010（平成22）年に公立大学となり、より地域貢献のできる大学をめざし、看護実践教育研究センターの設置準備に着手しました。保健・医療・福祉施設の看護系の人的資源は、その地域の人々がうける「ケアの質」に大きな影響を及ぼします。看護実践教育研究センターは、関係機関等と連携し北部地域の保健・医療・福祉施設におけるケアの質向上に向けた看護系職員の“実践・教育・研究”支援を行い、少子・高齢化社会に対応できるケアの拠点として、2013（平成25）年4月に発足しました。

### ■ 20周年からの10年間

看護実践教育研究センターは、今年で設置後12年目を迎えます。始動もない時期は、ケアリング文化に支えられて地域に出向く企画が多くありました。2016（平成28）年からの10年間では、ICTを活用して新型コロナウイルス感染症のまん延防止対策をとりつつ、可能な限り企画を開催してきました。設置当初、人気の企画は、主に個人の研究スキルを磨く企画でしたが、業務改善に結びつく研究成果を報告し、現場が元気になる実践や、その担い手に皆で敬意を表して表彰する企画は、今も変わらず人気です。新型コロナウイルス感染症が5類になどても、参加者の意見を取り入れて、ハイブリッド開催を続けていますが、対面での参加も増えています。今年度は、看護管理者から対面での交流会を希望する声が届き、うれしい変化を感じています。これから運営は、北部地域の健康ニーズを捉え直し、ケアする人とケアされる人という垣根をこえて、人がつながる「場づくり」を意識的に企画することだと考えています。

（看護実践教育研究センター長　村上 満子）



2025年（令和7年）度 運営委員



2021年（令和3年）度 運営委員

## メディアネットワークセンター

名桜大学メディアネットワークセンター（MNC）は、2001（平成13）年6月の設置以来、大学の情報基盤整備とICT教育の推進において中核的な役割を果たしてきました。急速に進歩するデジタル技術や教育環境の変化に対応し、学生や教職員の学習、研究、業務を支える重要な組織として発展してきました。

MNCは各学部（学科）や部署から選出された教職員によって構成・運営されており、主な業務には学内情報システムの管理・運用、PC教室の運営、ICT機器の貸出、情報セキュリティの確保が含まれます。特に学内システムでは、全学生・教職員のアカウントおよびパスワードの発行・管理を担当し、安全かつ利便性の高い情報環境を提供しています。また、パスワード忘失時のリマインダー登録やリセット機能の整備により、利用者の自立的な問題解決を支援しています。

PC教室の故障対応やiPad・PCの貸出も教育活動に必要な支援として位置づけ、迅速な対応を心がけています。202教室（MNC）の利用支援でも、対面サポートと情報提供を通じて、効率的な学習環境の整備に努めています。これらの支援は、情報技術を学ぶ学生メンバーが担っており、実践的な学びの場として学生の教育に貢献し、専門知識と実践力を備えた人材を地域に送り出しています。

無線LAN環境の整備も重要な取り組みであり、学内では来学者用、学生用、教職員用、学術無線LANなど用途別に複数のSSIDを提供しています。特に学術無線LANは、名桜アカウントを通じて学内外の加盟機関で無線LANを利用できる国際的なサービスとして、研究交流の促進に寄与しています。また、Windows、iPad・iPhone、Mac、Androidなど各種デバイスに対応した接続手順を整備し、幅広いニーズに応えています。

Office365の導入と運用支援も重要業務であり、学生は在籍期間中、Word、Excel、PowerPointなどのOfficeツールを自身のPCやタブレットに最大5台まで無償でインストールできます。Windows、Mac、iPad、Online環境に対応したサポート体制を整え、学習活動の質向上に寄与しています。

近年ではMicrosoft Teamsの活用支援にも力を入れており、チーム内チャット、会議、ファイル共有、スケジュール管理など、活動に必要なツールの利用を支援しています。ログインやチーム参加、チャット、ビデオ会議の手順についても段階的なサポートを整備しました。特に2020（令和2）年の新型コロナウイルスの世界的流行時には、教育研究活動が制限される中、グループウェア活用の支援を通じて大学の活動継続に貢献しました。

Googleアカウントのログイン、Gmailの利用、Google Driveの活用についても包括的に支援しており、特にDriveではストレージの使い方やファイル共有機能を、利用者のスキルに応じて丁寧にサポートしています。

2019（令和元）年にはMNCサポートサイトをリニューアルし、より使いやすい情報提供体制を整備しました。2021（令和3）年には情報セキュリティポリシーの音声付き資料を公開し、利用者の意識向上に努めました。

名桜大学開学20周年・公立大学法人化5周年の記念事業として整備された学生会館SAKURAUMや、2025（令和7）年秋にリニューアル予定の第2講義棟（旧本部棟）においても、ネットワーク環境、IP電話、デジタルサイネージの導入に大きく貢献しました。今後も、デジタル技術の進化と教育環境の変化に対応し、本学の教育・研究活動を支える基盤として、さらなる発展を目指していきます。

（メディアネットワークセンター長 鈴木大作）

## 沖縄ディアスポラ研究センター

沖縄ディアスポラ研究センターは、今年で4年目を迎えた（2022（令和4）年4月設立）。沖縄を起点とした人々の移動と、その歴史・文化・社会的影響について、学術的に探求する場として開設されました。沖縄の歴史は、他地域への移住や海外でのコミュニティ形成を特色とし、その軌跡は世界各地に広がるウチナーンチュの存在に色濃く反映されています。ハワイ、中南米、北米、東南アジアなどに移住した人々は、現地で独自の移民社会を築き上げ、言語や習俗、祭祀など多様な文化要素を次世代に継承してきました。こうしたネットワークは、今日に至るまで沖縄のアイデンティティと深く結びつき、国境を越えて共鳴する文化的基盤となっています。

名桜大学における移民研究は、近年始まったばかりのものではありません。この30年間で多くの方が移民研究に携わってきました。これらの成果をまとめたのが、2014（平成26）年から始まった研究基盤形成事業「環太平洋を中心とする沖縄から/への〈人の移動〉に関する総合的研究」と言えます。その成果と知見が本センターの設立へとつながっています。最終報告書の巻頭言で山里勝巳前学長が、「沖縄から海外への人の移動の中心地である沖縄北部地域を中心とした研究を基礎として、名桜大学にこの分野における拠点が形成されることを期待したい」と述べています。この事業の成果は、やんばるブックレット、紀要や論集に収載された論文、博士論文として結実しています。本センターの設立は、本学の研究の流れを受け継ぎ、大学の地域的使命と国際的視座とを融合させる砂川昌範現学長の取り組みの一環として設立され、本学の教育研究のみならず沖縄や日本全国の「人の移動」の研究に大きな役割を担っています。

さて、今年2025（令和7）年は沖縄ハワイ移民125周年という大きな節目にあたります。これに関連し、本年3月にはハワイ大学（沖縄研究センター、ハミルトン図書館）、世界ウチナーンチュビジネスネットワーク（WUB）ハワイ支部、Hawaii United Okinawa Association（HUOA）を訪問し、現地の実業家や研究者たちとも交流を開始しました。さらに、近年の研究により東南アジアにおける沖縄ディアスポラも非常に興味深い歴史を歩んできましたことをわかつてきました。加えて、日本国内においても神奈川県横浜市鶴見区との交流の中から、国際的な拡がりを有する新たな研究課題や教育的実践も生まれつつあります。鶴見は戦後沖縄県人の集住地としての歴史を有しており、南米ボリビアとの歴史的に深い関わりがあり、首都圏における沖縄文化の一大拠点でもあります。こうした関東や関西等の国内の事例も踏まえながら、沖縄ディアスポラの地理的・歴史的広がりを体系的に捉える取り組みを進めています。これらの活動を通じて、世界に拡がるウチナーンチュネットワークの強靭さと、長年にわたり蓄積された文化継承の工夫に触れることができ、大きな学びを得ています。これらのネットワークが組織的に連携しながら、世代を超えて沖縄的価値観を共有・維持している姿は、沖縄ディアスポラ研究の重要性と可能性を改めて実感させるものでした。

今後は、海外の沖縄系コミュニティとのネットワークをさらに活用し、共同研究や調査活動の深化を目指します。これらの活動は、沖縄ディアスポラに対する理解の促進とともに、郷土への関心や誇りを育む場ともなり、自らのルーツや地域の歴史を再発見する貴重な機会となるでしょう。また、本センターと繋がりのあるウチナーンチュネットワークを海外拠点とし、本学学生が留学やインターンシップ等の海外経験を安全に進めていくことも役割の一つです。

本センターの活動が、沖縄の過去と未来をつなぐ架け橋となり、本学の特色ある教育・研究のさらなる発展に寄与できるよう、今後とも誠心誠意取り組んでまいります。引き続き、皆様のご理解とご支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

（沖縄ディアスポラ研究センター長 山城智史）



### 保健センター

名桜大学保健センターは「名桜大学における保健管理及び健康支援、これに関する教育を行ない、学生及び教職員の心身の健康の保持増進を図ること」を目的としています。大学保健センターは義務教育等での学校保健室の機能に加えて、大学生である利用者が適切なセルフケア、セルフメディケーションを身に着け、自立した成人としてご自分の心身の健康を保持増進する活動ができるよう支援と教育を行う場としての性質を持っています。

保健センターは2015（平成27）年10月に研究棟1階から現在の場所である多目的ホール1階に移動しました。広い大学構内において、今の場所はアクセスのしやすさとプライバシー保護の両立ができ、多人数の健診と個別の健康支援利用の双方に適している位置にあります。保健センターという名称になったのは2013（平成25）年、前年までは健康管理センターという名称でした。初代の保健センター長は前川美紀子先生（当時はスポーツ健康学科教員）、2019（平成31）年より大城（当時は国際学群教員）が引き継ぎ、2023（令和5）年からは岡部麻里先生（スポーツ健康学科教員）、そして今年2025（令和7）年から再び大城（健康情報学科教員）がセンター長の任に就いています。

保健センターの1年間で最大の事業は4月の学生健康診断、そしてその後に続く健診受診者への健康診断結果の個別返却です。健康診断には、自身の健康状態を多項目の検査等によって正確に評価しつつ、病気の早期発見や生活習慣の見直し、病気の予防につなげる意味があります。誰もが年に一度は健康診断を受けていただきたいものです。健診結果返却は完全予約制で、受診者には一人ずつ保健センターに来室していただきます。返却は看護師から手渡しで行われ、そのタイミングで健康相談や、医療機関の案内を受けることができます。多岐にわたる結果項目を目にしたときに「この数値はどういう意味？わたしの生活習慣が何か影響しているの？」という疑問は持つことは自然なことです。学生が抱く自身の健康についての疑問を、その場で看護師にたずねて解決する体制が整っています。

保健センターには学生相談室が併設されており、月曜日から金曜日まで学生相談員（カウンセラー）が勤務しています。2015（平成27）年の年間利用者数（実数）は94人でしたが、2024（令和6）年には250人を超える利用者数の大きな増加がみられます。コロナ禍で他者との関わり方が変化したと言われることがありますが、友人や教職員から学生相談室の利用を勧められて来室する学生も珍しくなくなりました。大学生活の中で悩みや困りごとを一人で抱え込まずに済むよう、相談室を活用していただければ幸いです。

最後に、保健センターが関わる障がい学生支援について述べます。2016（平成28）年に「名桜大学障がい学生支援ガイドライン」が制定されるとほぼ同時に学生課に障がい学生支援コーディネーターが配置され、「つなぐ・つながる」をキーワードに全学的な支援体制が整備されました。学生の申請とともに、保健センター・学生相談室・学生支援コーディネーターが連携して建設的対話をくり返し、社会的なバリアによって学生の学修に支障が出ないよう、合理的配慮を提供しています。

（保健センター長 大城 真理子）



## 大学と行政の共同事業 －名護市学習支援教室ぴゅあ－

### 1. 名護市学習支援教室ぴゅあの開設

名桜大学と名護市の共同事業（学習支援）の設立の背景には、学生による学校部活動の補助指導や、自治体が独自に行っている無料の学習塾への積極的な参加がありました。一方、2010年代初頭から名護市社会福祉課より、生活保護世帯の小学生や中学生への学習支援の依頼が寄せられるようになりました。そのため、市内の自治公民館や社会福祉施設に学生を派遣し、学習支援を開始しました。市民の間で子どもの貧困問題への関心が高まるきっかけとなったのは、本学の研究所主催のシンポジウム「沖縄から考える貧困と格差－沖縄の貧困の現状と、そこからの脱出－」（2012（平成24）年2月）でした。シンポジウム終了後、市社会福祉課と大学関係者、そして学生が集まり、子ども支援策として三者協力による無料塾の立ち上げが検討されました。子ども期の貧困が教育機会を奪い、それが将来の低い所得や生活水準につながっていること、さらには貧困の連鎖が生じている現状への危機感が関係者の間で共有されました。その結果、支援活動の具体策として本学の教室にて中学生への学習支援を行うことになりました。中学生の送迎バス等の経費は名護市が負担し、学生が学習支援のボランティアとして関わるという形で共同事業が立ち上りました。

2013（平成25）年5月、名護市学習支援教室ぴゅあが開設されました。大学内で行われるぴゅあの活動は、週3回の開催です。大学発着のバスは市内を巡回して生徒を乗せ、本学まで送り届けます。1回2時間の学習支援です。ぴゅあの目的は、①生活困窮世帯の生徒の学力保障と高校進学の促進をはかること、②学生との交流を通して生徒が将来の進路を考える機会を持つこと、③学生と生徒との豊かな体験活動をつくること、の3点です。ぴゅあは、これらの目的に基づき、生徒の学力保障とキャリア教育を進めてきました。ぴゅあは当初、生活保護世帯の生徒を対象に活動を始めましたが、準要保護世帯（主に非課税世帯など）へと対象を広げました。さらに、生活困窮者自立支援法の施行後は、生活困窮世帯の生徒まで対象を拡大しました。2022（令和4）年からは、市内の中学校からの要望に応じて、放課後に学生が学校に出向き、アウトリーチ的支援を行っています。

### 2. ぴゅあの活動と成果

発足当初のぴゅあの支援学生は7名ほどでしたが、近年では60～70名を超える大所帯となっており、学内の部活動やサークルの中でも大きな団体となっています。2020（令和2）年度から2021（令和3）年度のコロナ禍を除くと、活動の開催回数や生徒の登録者数、延べ参加人数、学生のボランティア数も増加しています。ぴゅあに通っていた生活保護世帯の生徒の多くが高校進学を果たしています。高校卒業後は就労するケースが中心ですが、進学や自立を実現する生徒も見られ、ぴゅあでの支援が生徒の将来の選択肢を広げる一助となっています。ぴゅあを卒業した生徒の中には、首都圏の私立大学法医学部を卒業した者や、本学に入学して、支援者としてぴゅあの活動に参加している者もいます。また、学生の中には教育や福祉に対して関心を高めている者もいます。

ぴゅあは単なる学習支援にとどまらず、地域社会における教育福祉活動として成長してきました。アウトリーチ活動の拡充や運営形態の進展も見られ、大学と行政との共同的な展開が図られていることから、地域連携型支援事業のモデルの一つとして、ますます注目されています。ぴゅあの実践は、貧困の連鎖を断ち切る一助として、子どもの学びと育ちを支える重要な実践的取り組みです。

（名護市学習支援教室ぴゅあ前顧問 嘉納 英明）

## 恩納村を支える未来塾の現状と今後について

未来塾は、村内に民間塾や県立高校が少ない現状を受け、恩納村「幸せに生きる力」育成・支援委員会（村の教育委員会）が中学生の学力向上を目的に開設した無料の学習支援事業です。この事業は2011（平成23）年頃に始まり、名桜大学と連携して開校式や講師配置が行われてきました。現在では卒業生が名桜大学に進学し、講師として戻ってくるという地元内での循環も生まれています。教育委員会が主催し、財政的な支援を行っているため講師の待遇も安定しており、長年の積み重ねによる基盤のもとで、講師たちは自由に工夫を凝らした指導を行うことができます。

私は名護市で無料塾を4年前に開校し運営している経験を活かすため、この活動に学生リーダーとして参加しています。実際に携わる中で「学校内で開かれる塾だからこそその良さ」があると感じました。一般的な塾では心理的安全性を生むまで時間がかかります。しかし、未来塾では活動場所が普段生活する教室であり、一緒に参加するのは同じ学年の友達というきわめて心理的安全性の高い環境です。それに加え、大学生講師とのフランクな指導や、友達同士で学び合う雰囲気が整っています。また、「勉強したい教材がない」という問題も学校なのですがすぐに解決できます。それによって勉強の持ち越しがなく、集中できる環境があります。

今後の未来塾は、単に進学実績を伸ばすことを目的とせず、大学生との関わりを通して子どもたちが自らのキャリアを考える機会を広げていくことを目指しています。具体的には、アントレプレナーシップ教育や非認知能力を育むプログラムなどを取り入れ、多様な選択肢を持てる子どもを育てたいと考えています。そのためには地域に向けて未来塾の価値を示し、初年度から数年にかけて確かな進路実績を残すことが重要です。さらに講師の育成や研修の仕組みを強化し、質の高い教育を北部から、恩納村から広く発信できるようにしていきたいと考えています。

今後とも未来塾をよろしくお願ひいたします。

（国際学群国際文化専攻3年次 山本 望晴）

## 2025年国頭村学習支援ボランティア

2025（令和7）年8月12～15日の第1クール、9月2～5日の第2クールの期間において、国頭村の小学校・中学校を対象とした大学生による学習支援ボランティアが実施されました。このボランティアでは、本部地域の教育環境の現状を踏まえ、生徒の学力向上や健やかな成長につながっていくことを目的としています。そこで今回、私は第2クールに参加し、奥間小学校を担当しました。4日間の活動では、児童一人ひとりの学びに寄り添うとともに、地域と学校が連携しながら子ども達を育む教育現場を体験することができました。実際に子ども達と一緒に学ぶことで、教えることの難しさや責任を感じる一方、子ども達が理解できた時に見せる笑顔や成長の瞬間に立ち会えたことは、大きなやりがいとなりました。また、活動を通して特に学んだことは、発達段階や個性に応じた指導の大切さです。児童の中には得意不得意があり、それぞれに合わせたアプローチが必要です。そのため、まず子ども達をよく理解し、褒める・励ます・待つなど多様な関わりを柔軟に取り入れていくことが、児童一人ひとりの主体的な学びや自己成長を促すことに繋がっていくと実感しました。

また、学校だけでなく保護者や地域の方々と地域全体で協力しながら子どもを支え成長を見守り、様々な体験を大切にして教育を学校が地域資源と連携して進められていることを肌で感じることで、児童への質の高い学びを実現している印象を受けました。今回の活動を振り返り、教育現場は多くの人の支えで成り立ち、児童の学びに直結していること、教育者を目指す私達に求められていることなどを知ることができ、この経験は貴重な学びになったと考えます。

最後に、本活動の実施にあたり、ご尽力いただいた国頭村教育委員会の皆様、担当校の先生方、地域の皆様に心より感謝申し上げます。この活動で得た学びを今後の成長に繋げていくことを誓い、結びの言葉といたします。

（人間健康学部 スポーツ健康学科3年次 新垣 希颯）



# ■ヘルスサポート（ヘルサポ）

## ヘルスサポート（ヘルサポ）について 「人と人がつながり、地域が活性化する健康支援」

名桜大学ヘルスサポート（以下、ヘルサポ）は人間健康学部の学生を中心に約100名が所属し、住民の健康増進とコミュニティ活性化に貢献しています。

### 受賞歴と社会的評価

ヘルサポの活動は高く評価され、多数の賞を受賞しています。主なものとしては、2014（平成26）年の厚生労働省「第3回健康寿命を伸ばそうアワード」健康局長優良賞、2017（平成29）年の沖縄県「がんじゅうさびら賞」準グランプリ、2023（令和5）年には「イオン琉球×名桜大学 健康長寿弁当コンテスト」でグランプリを獲得しました。これらの受賞実績は、ヘルサポの地域健康支援活動が行政や企業と連携し、実効性の高い取り組みであることを示しています。

また、スポーツ庁の「スポーツ推進アクションガイド」においては、国の先進的活動事例として紹介され、運動を通じた健康づくりのモデルケースとしても注目されています。

### 活動のコンセプトと組織体制

ヘルサポは、「健康問題の解決」と「地域の人とのつながり」を活動の二本柱としています。学生が主体となり、行政や企業と連携しながら、地域コミュニティの活性化や多世代交流を促す健康支援を行っています。

### 地域資源の活用とコミュニティ形成

地域には住民交流の場となる施設が点在しますが、公民館など十分に活用されていない場所もあります。地域の健康増進とコミュニティ活性化には、「ロール（役割）」「ツール（道具）」「ルール（規則）」の三要素が不可欠であり、これらが連携することで持続可能な健康支援が実現すると考えています。

### JOYBEAT（健康王国DX）を活用した運動支援

その三要素を満たす仕組みの一環として、ヘルサポはCGアニメーションを活用した運動プログラム「JOYBEAT（健康王国DX）」を実施しています。JOYBEATはプロのインストラクターの動きをアニメ化したツールで、指導者不在でも質の高い運動教室を開催可能。学生は盛り上げ役として地域の方々と一緒に体を動かす環境を作り出しています。

### JOYBEATの効果は以下の通りです。

- ・運動への興味と継続性が生まれ、健康増進と地域活性化に寄与。
- ・自然と人が集まる場が創出され、地域交流が活性化。
- ・生きがいが定着し、健康寿命延伸や新たな創造性の発展が期待される。

さらに、JOYBEATに加え、体組成測定、血管年齢、自律神経活動、AGEs（終末糖化産物）、血圧などの健康測定も実施。学生が測定結果をもとに生活習慣や食生活の改善アドバイスを行い、地域住民の健康意識向上に貢献しています。

### 大学・行政・企業の連携による地域健康づくり

ヘルサポは大学単独ではなく、行政や企業と連携して地域健康づくりを推進。連携先は沖縄県、名護市、東村、大宜味村など多岐に及びます。企業ではエクシング、ソフトバンク、イオン琉球などと協力し、健康イベントや測定会、運動教室を共同開催しています。

また、名桜大学内で展開している「JOYBEATルーム」は地域住民に無料開放し、郊外の立地にもかかわらず口コミで利用者が増加。年間延べ1500人以上が利用し、運動教室や健康測定で生理的指標の改善効果も確認されています。

### 今後の展望

ヘルサポは、学生の専門知識と地域ニーズを結びつけた先進的取り組みとして期待され、今後も持続可能な健康支援を展開し、沖縄北部・県全体の健康長寿実現に貢献していきたいと考えます。

（スポーツ健康学科 高瀬 幸一）

# ■食育

## 食を通して生きる力を育む食育活動の取り組み

食育活動は2007（平成19）年にゼミの取り組みでスタートし、奄美市、伊是名、伊平屋、伊江島、久米島や名護市内をはじめ、近隣地域の主に小学校や幼稚園を訪問し食と生活リズムの大切さを伝えてきました。食育の主な活動内容は、学生が劇を通して、子ども達へ「はやね・はやおき・あさごはん」の大切さを伝えることです。食育劇は、子ども達へ気づきを与え、動機づけを促し、食の大切さや生活リズムを見直すことに効果的でした。子ども達にとって、お兄ちゃんお姉ちゃんの存在である学生は憧れの存在であり、観劇後の子ども達の振り返りでは、学生のパフォーマンスが子ども達の行動化へ影響していることが読み取れました。食育活動スタートから2019（令和元）年までの訪問場所は述べ100カ所にも上り、2018（平成30）年には、大学の出版助成を受け、食育劇の絵本「はやね・早起き・あさごはん」を発刊、12市町村の小学校・保育園へ寄贈しました。

2021（令和3）年からの食育活動は、北部地域をはじめとする沖縄県内の食育推進活動を目的に食育推進サークルを立ち上げ現在に至っておりまます。現在のサークル人数は46人で、主に屋部中学校の家庭科室で行われているNPO主催の「屋部の浦子ども食堂」の朝食提供ボランティア活動を行っています。毎週火曜日と木曜日（学校の休暇期間除く）6時30分から朝食準備を行い食堂開店後は、生徒と一緒に朝食の食材を栄養素別に分け栄養素の役割を意識する学習を行っています。食育の日（19日）には、ベジチェックで野菜摂取の状況の確認し野菜摂取を促す活動も行っています。早朝の活動ですが、サークルメンバーは、利用生徒から元気のパワーをもらっていると話しています。もう一つの活動場所の名護さくら食堂では、毎週水曜日と土曜日に食事、学習、生活支援を行っています。

学内での食育活動は、2025（令和7）年から大学食堂とコラボの企画を始めました。食を意識する取り組みとして、食育の日（19日）には、食育推進支援サークルと大学学食とのコラボでメニュー開発、提供と学食利用者へベジチェックを活用し野菜摂取を促す機会としました。メニュー開発においては、ニードと制約の中でサークルメンバーの意見を重視して頂き、野菜を中心としたメニュー、沖縄関連メニュー、県外出身学生のソウルフードメニュー、学校給食で食した懐かしいメニュー、魚メニューなどがあり、好評が得られました。また、ベジチェック測定後の声として、野菜を意識する声が幾つかありました。学内食育活動は、これからも食育の日企画として、学食メニュー開発、ベジチェック実施を継続予定です。

今後の食育推進支援サークルの取り組みの一つに教育現場での食育劇の復活です。子ども達へ気づきを与えるためにも大学生による食育劇は大変効果的であると考えています。子ども達が現在の自分の状況を振り返り、あるべき自分の状況に劇を通して気づき、行動化できるような支援を教育現場に行いたいと考えます。食育を通して、子ども達のタイムマネジメントにも効果的な影響が得られます。「食育」＝「生活を整える」と捉え、「生きる力を育む」活動として位置づけ、今後も食育推進を子ども達、地域の皆さんに伝えられる活動を目指していきたいと考えています。

（健康情報学科 前川美紀子）



栄養素役割確認



学食とのコラボ企画 ベジチェック

## 朝市健康支援活動

朝市健康支援活動は、看護学科が開設された2007（平成19）年に、名護市宮里公民館で再開された宮里区産業部による「朝市」の会場で、看護学科の教員が健康測定を始めたことがきっかけで開始されました。その後、学生も参加するようになり、活動が本格化してきました。2009（平成21）年には、本学看護学科の学生を中心に結成されたボランティアサークル「The Volunteer Activity Group（以下、VAG）」が設立され、朝市健康支援活動はその主要な活動の一つとして位置づけられました。

具体的には2025（令和7）年6月末時点での名護市宮里公民館（宮里朝市）、為又公民館（為又朝市）、大北公民館（青空南のマルシェ）、勝山シークワーサー（勝山軽トラ市）、道の駅「ゆいゆい国頭」（国頭朝市）において朝市健康支援活動を行っています。

大北公民館（青空南のマルシェ）、勝山シークワーサー（勝山軽トラ市）、道の駅「ゆいゆい国頭」（国頭朝市）での活動は、2015（平成27）年以降に開始しました。中でも最も新しい国頭朝市は、国頭村農林水産課からの依頼を受けて始まり、自治体と協働して実施しています。国頭朝市は道の駅で開催されているため、北部地域の住民だけでなく、中南部地域からの来訪者や観光客も多く参加されています。この朝市健康支援活動を、開催地域の住民にとどまらず、多くの方に知っていただき、地域外の人々が地域を訪れるきっかけの一つとなればと願っています。

活動内容としては、血圧・脈拍・経費的酸素飽和度（SpO<sub>2</sub>）・骨ウェーブ・体組成・握力・血管年齢・ロコモ度・ヘモグロビン値・ベジチェックなどの測定を行い、それらの結果に対するアセスメントと、改善に向けた助言を行っています。ロコモ度、ヘモグロビン値、ベジチェックは、近年から測定項目として追加しました。特にベジチェックは測定項目に追加したばかりですが、地域住民の野菜摂取量が数値化され、その結果をもとに生活習慣の改善に取り組みやすいため、多くの地域住民に喜ばれています。また、地域住民の測定の合間に学生自身もお互いに測定することで、正しい測定方法の確認ができると同時に、学生自身のセルフケアにもつながっています。

かつては、測定後の総合指導や助言は教員が担当していましたが、近年では学習が進んだ2～3年次の学生も担当するようになりました。学生が測定後の総合指導等を行う中で、悩むことがあれば教員がフォローしていますが、学生はこれまで学んだ知識をもとに測定結果をアセスメントし、必要に応じて生活習慣の改善に向けてどうしたらよいのかを地域住民と学生と一緒に考えています。学生から助言を受けた地域住民は、次回の測定までの目標を確認し、笑顔で帰っていかれる様子も多く見られます。こうしたふれあいが、地域住民の活力につながっていることがうかがえます。

最も長く活動を続けている宮里朝市では、2024（令和6）年11月30日に放送された「琉銀グッドニュース」で取り上げられるなど、メディアからの取材も受けています。その他にも、これまでの朝市健康支援活動が新聞に掲載されるなど、高い評価をいただいています。

本活動は、地域住民の健康づくりを支援するだけでなく、学生にとっても地域の方々とふれあいながらコミュニケーション能力や看護技術を高める貴重な実践の場となっています。今後も、自治体や企業などと連携しながら、地域住民の健康づくりを支援するとともに、学生一人ひとりが成長できる場として、学生と教員が力を合わせて取り組んでまいります。

（看護学科 溝口 広紀）

## 思春期応援団「やんばる・がんばる・ぴあまーる」の取り組みと紹介

本サークル 思春期応援団「やんばる・がんばる・ぴあまーる」は、やんばるで年齢の近い仲間が沖縄の助け合い文化〈ゆいまーる〉の精神を携え、ともに支え合うことを願って2019（令和元）年に発足し、今年で7年目を迎えました。やんばる地域の小・中・高校生および本学学生を対象に、大学生ピアカウンセラーが「性＝生（せい）」について正しい知識を学び、共に考え、分かち合うことを目的としています。

沖縄県では10代の出産比率が2.6%と全国で最も高く、高校中退や学業中断が将来の就業機会や経済的自立に影響を及ぼしています。特に北部地域は島しょ・へき地が多く、産科医療体制の脆弱さも課題です。こうした背景が、本サークル設立の動機となりました。

日本ピアカウンセリング・ピアエデュケーション研究会の30時間以上にわたる養成講座を修了した本学学生を中心に、修了後は児童・思春期世代を対象とした健康教育を実践しています。同講座は全国規模で開講されており、看護・医療系学生など多くの同世代が受講するため、最新の知見や実践例を共有できる点も大きな魅力です。

サークル支援は助産学専攻科教員が担い、私は養成講座のコーディネーター兼認定講師として、教育面と運営面の両面から活動をバックアップしています。

現在、サークルは看護学科1～4年生で構成され、これまでにベーシック講座（30時間）を3回、フォローアップ講座（15時間）を3回開講し、延べ38名の大学生ピアカウンセラーを養成しました。修了生は、沖縄本島北部の今帰仁村・大宜味村・東村・本部町の中学校において、地域に根ざした健康教育を実践しています。また、大学祭では「ピアルーム」と題したブースを出店し、小学生から大学生までの思春期・青年期の若者だけでなく、保護者や祖父母など多世代が共に参加できるワークショップを開催し、思春期やSNSに関する情報を、楽しみながら学べる機会を提供しています。

厚生労働省「健やか親子21（第2次）」でも、同世代から学ぶピアカウンセラーの取り組みが推進されています。ピアカウンセリングを用いた健康教育では、正しい知識と自己肯定感・自己決定力を育み、主体的な行動変容を促す実践的な性教育です。ピアカウンセラーの大学生は、思春期世代への健康教育に加え、自身の性の健康やライフプランを見つめ直す機会を得ており、コミュニケーション力と共感的態度を養う場ともなっています。

本サークルは、同世代間の対話の力をいかし、知識普及にとどまらず自己決定力とリプロダクティブ・ヘルス／ライツの理解を深めることで、若者がより良い選択を行えるよう支援し続けます。今後は県内離島にも活動を広げ、地域文化と言語的背景を尊重したプログラムを共創し、地域ぐるみで若者の「いのちの学び」を支える温かな土台を育んでまいります。

最後に、本サークルを温かく見守りご支援くださる大学関係者、地域の教育機関、認定講師の先生方、そして主体的に活動する学生ピアカウンセラーの皆さんに心より感謝申し上げます。名桜大学がこれからも地域の未来を担う人材を育成し、新しい時代の課題に応える教育・研究を推進されることを祈念しています。

（助産学専攻科 長嶺 絵里子）

第1回(2019年)思春期養成講座(ベーシック30時間)

やんばる・がんばる・ぴあまーる



名桜大学祭～ぴあルーム



北部の中学校でのピア活動の場面



## 育児支援サークル ふれんどまみい♪ plus 地域まるごとハッピー活動

育児支援サークルふれんどまみい♪は、妊娠さんや子育て中のお母さん・お父さんに寄り添い、地域に根ざした育児支援を行うボランティアサークルです。2015（平成27）年の発足以来、活動の幅を広げながら地域と共に歩んできました。

活動では、子どもの見守りや創作活動を通じて、ほっと一息つける時間と家族の思い出づくりの場を提供しています。学生にとっても、乳幼児との関わりや支援の実践経験、地域とのつながり、コミュニケーション能力の向上など、学びの場となっています。

活動拠点は主に名護市内の大西公民館ですが、地域からの依頼を受けて児童センターや福祉イベントなどにも積極的に参加し、地域に根ざした育児支援の場を広げてきました。活動の場では、「子育ての悩みを誰かに聞いてもらえる」「同じ立場の親とつながれる」といった声が多く聞かれ、保護者にとっては一息つける自分時間として、また学生にとっては看護職を目指すうえでの対象理解や関わり方を学ぶ貴重な機会となっています。

活動内容は、季節ごとの創作活動や記念撮影、フォトブック作成など多岐にわたります。たとえば、クリスマスの飾り作りや手形アート、ひなまつりの装飾など、親子で一緒に楽しめる企画を準備し、思い出に残る時間を提供しています。活動のなかでは「今日は久しぶりに子どもとゆっくり向き合えた」「家ではできない体験ができるうれしい」といった感想が寄せられ、保護者同士が自然とつながりあう交流の場にもなっています。

また、名護市児童センターとの活動も展開しており、より多くの親子が参加できるように取り組んでいます。児童センターでは、大人数に対応できるように体制を整え、企画運営も学生が主体となって行っており、他機関との連携・調整、準備段階でのチームワーク、当日の対応力などが求められ、学生にとっては責任ある実践の場もあります。活動を通じて、学生は子育て支援における実践力を高めるだけでなく、地域と共に生きるという価値観を身につけていきます。参加学生の中には、「活動を通して、支援とは相手の気持ちに寄り添うことから始まる」と実感した」「将来、地域に根差した看護師になりたい」という思いが強くなった」と語る学生も多くいます。

育児支援サークルふれんどまみいは、子育て世代に限らず、地域に暮らすすべての人々を対象とし、学生と地域の方々が世代を超えてつながり、共にハッピーになれる活動を目指すという思いを込め、名称を「ふれんどまみい plus 地域まるごとハッピー活動」へと進化しました。その名称の発展とともに新たな挑戦として、2023（令和5）年度からは、島嶼での地域貢献活動が始まりました。島嶼活動は「海でつながる島とふれんどまみい♪島まるごとハッピー活動」と銘打ち、島嶼での健康フェアや地域ケア活動に継続的に参加しています。2023（令和5）年11月には、島嶼で開催された健康フェアに初めて参加し、保育園児や保護者を対象にレジンキーホルダー作りを実施しました。予想を上回る多くの方にご参加いただき、一部材料が不足する場面もありましたが、地域の方から材料の提供を受けるなど、温かな助け合いにも支えられました。

2024（令和6）年度以降も継続して島を訪問し、公民館では高齢者や小学生と共にフォトブックづくりやうちわ作りなどの交流活動を実施しています。学生は世代を超えたゆんたくを通して、島の暮らしや子育て環境、高齢者の健康意識に触れ、多くの学びを得ています。「また来てね」「孫が名桜大学の学生を作ったよ、と話してくれた」などの感謝の声も寄せられ、活動の意義を改めて実感しています。

こうした取り組みは、単なる育児支援にとどまらず、「地域まるごと=包括的支援」として、子どもから高齢者まで多世代が支え合う“ゆいまーる”的な支援となっています。これからもふれんどまみいは、地域に根ざし、地域に笑顔と安心を届ける活動を継続して参りたいと思います。

（看護学科 安仁屋 優子）

## VAG (The Volunteer Activity Group)

The Volunteer Activity Group（以下、VAG）は、看護・福祉に関する大学内および地域でのボランティア活動の窓口を担う本学の学生ボランティアサークルです。ボランティアを通して学生の視野を広げ、実践の場を提供することを目的に、2009（平成21）年に設立されました。現在は1～4年次の多くの学生が入会し、学生が主体となって健康支援活動などを行っています。

2025（令和7）年6月末時点で12チームが活動しており、活動場所は年々増えています。そのうち11チームが健康支援活動を行なっており、地域住民対象が8チーム、企業の職員等対象が2チーム、生活困窮者（日雇い労働者含む）対象が1チームとなっています。健康支援活動の内容としては、血圧・脈拍・経皮的酸素飽和度（SpO<sub>2</sub>）・骨ウェーブ・体組成・ロコモ度・血管年齢・ヘモグロビン値・握力測定などを行なっています。そして、1チームは経済的問題や発達障害などを背景に居場所がなくなってしまったように、親子を対象とした居場所づくりを行なってきました。うち健康支援活動7チーム、居場所づくり1チームは2015（平成27）年以降に開始され、特に働き盛り世代の健康支援の開始および北部地域12市町村での活動範囲を広げられたことが大きな変化といえます。

かつては、活動の多くが北部12市町村のうち名護市内に集中していたことが課題でしたが、地域における活動や本学の健康長寿サポートセンターが発行する広報誌等を通して、地域においてVAGの認知が広がり、名護市外の北部12市町村での健康支援活動が実現するようになりました。また、看護学科の1年次科目「ケアリング文化実習Ⅱ」において、学生が地域で行った健康支援活動を、VAGが引き継ぎ、継続的な活動として根付かせています。以前は活動を希望する学生数が参加枠を上回り、参加制限を行わざるを得ないこともありましたが、現在は活動場所の増加により、学生が継続的に同じ地域の健康支援活動に参加し、住民と関わることが可能になったことで、地域住民との信頼関係を構築したうえでの活動につながっています。

VAGが実施する健康支援活動では参加する地域住民の年齢制限等は設けていませんが、これまでの参加者の多くは高齢者であり、20～50歳代の「働き盛り世代」の参加は少ない状況でした。この世代は、運動不足、ストレス、睡眠不足、食生活の乱れなどから生活習慣病リスクが高まる傾向があるため、支援の必要性を強く感じていました。そこで、働き盛り世代の健康意識向上と必要に応じた日常生活の改善などを目的に、名護市内の企業で健康支援活動を実施するチームを立ち上げました。加えて、企業などからの依頼に応じた出張型の健康支援活動も行っています。学生たちはこれまでの学びをもとに、測定結果に基づいた生活習慣改善の提案を、地域住民と一緒に考える姿勢を大切にしています。継続的な活動により、翌月には住民の生活習慣の変化や継続状況を聞くことができ、課題を再検討したり、成果を共に喜ぶ様子も見られています。

今後もVAGでは、北部12市町村で看護職を目指す学生が実践を通して成長しながら、地域の健康維持・増進に貢献できるよう、看護・福祉に関するボランティア活動に尽力してまいります。学生が日々の学びを実践しながら地域に貢献している本活動が今後も継続できるよう、担当教員も全力で支えていきたいと考えています。

（看護学科 溝口 広紀）



VAGのイメージキャラクター

## 学生による地域活動支援（学長裁量経費）

学生の斬新かつ特色ある課外活動  
及び地域貢献プロジェクト等

2025(令和7)年

代表者名	プロジェクト名
緒方 卓己	北部広域市町村圏におけるハンドボール競技の普及及び発展
新城 碧唯	伊江村立伊江中学校における生活習慣病予防対策
長浜 宗汰	謝名城健康支援活動
高橋 拓人	レクリエーションを活用した生活困窮世帯の中学生と大学生の交流—名護市学習支援教室びゅあーの活動—
後藤 未希	エコみらい
安富祖 麗	名桜大学育児支援サークルふれんどまみい plus 地域まるごとハッピー活動
天願 有紀	第3回名桜やんばる映画祭
徐芽 唯実	思春期応援団やんばるがんばるびあまーる
奥野 稀葉	チーム"ImMe"のLGBTQ教材の開発活動～誰もが自分らしく生きていくために～
山下 心夢	出張ゆんたく健康測定会！in沖永良部2025

2024(令和6)年

代表者名	プロジェクト名
長浜 宗汰	謝名城共同売店健康支援活動
重見 夏輝	北部広域市町村圏におけるハンドボール競技の普及及び発展
安富祖 麗	名桜大学育児支援サークルふれんどまみい plus 地域まるごとハッピー活動
具志堅 妃乃	令和6年度名桜大学生による地域活動「伊平屋村の10年後を考えたデジタル技術活用促進に向けた連携活動」
赤嶺 乃愛	琉球藍染プロジェクト
上里 陽菜	思春期応援団やんばるがんばるびあまーる
藤井 徳	東村キャンプファイヤーイベント
東江 圭祐	月経を学ぶ、伝える、広げる
金城 佳菜子	第2回名桜やんばる映画祭に向けて
松茂良 花音	出張ゆんたく健康測定会！in 沖永良部
長濱 利弥	新種ブドウ「メイヴ」学内栽培プロジェクト

2023(令和5)年

代表者名	プロジェクト名
富吉 桜梨絵	地域のことばをマルチリンガルに学ぶ・応用言語学の実践研究プロジェクト
玉城 光乃	名桜大学育児支援サークルふれんどまみい♪ Plus 地域まるごとハッピー活動
中谷 恵音	地域資源の活用と地域事業者との連携による商品開発・販売の実践
柏岡 恵里	マイブプロジェクト
富川 優斗	やんばるハンドボールフェスタ 2023
上林 理乃	思春期応援団やんばるがんばるびあまーる
金城 万里愛	名桜やんばる映画祭
大城 沙純	

2022(令和4)年

代表者名	プロジェクト名
安谷屋 春妃	思春期健康応援団 やんばるがんばるびあまーる
新崎 莉世	伊平屋村 地域支援活動（保育所の清掃活動）
賀数 ななつ	
大沢 詩音	島嶼の子供たちの学習支援と健康教育活動又は住民への生活支援活動
重見 夏輝	やんばるハンドボールフェスタ2022
茂木 歩	健康教育サークル・ヘルスコミュニケーションクラブ離島へき地における健康支援活動
與那嶺 真弓	名桜大学看護学科育児支援サークル ふれんどまみい♪

2021(令和3)年

代表者名	プロジェクト名
上原 駿介	謝名城健康支援活動
與那嶺 真弓	名桜大学看護学科育児支援サークルふれんどまみい
比屋定 美空	思春期健康応援団やんばるがんばるびあまーる
高島 謙	やんばるハンドボールフェスタ2021
山下 寛人	名桜カッピング 高校招待サッカーフェスティバル
比嘉 すみれ	サンゴにやさしい町づくり

## 産官学プロジェクト

本学は地域に開かれた、地域とともに成長する大学を目指しています。そのため地域や企業等との連携は必要不可欠なものであり、現場での実践的な体験を通して人材育成が可能になると考えます。ここ数年は多くの締結が行われ、新たなプロジェクトが始動し、現在も進行しています。

もともと学生のインターンシップ受け入れや地域のボランティア活動の協働参加など連携を図っていたイオン琉球株式会社と、2022（令和4）年8月5日に豊かな地域社会の形成・発展に寄与することを目的に産学連携包括協定を締結しました。学生との健康長寿弁当の開発やあらゆる世代の健康促進を目的として、店舗内オープンスペースを活用し、適度な運動を取り入れた講習会の実施、そして環境・社会貢献活動について公益財団法人イオン環境財団による寄付講座の提供など豊かな沖縄の自然を次世代に残すための生きた学びを提供していただいている。

2023（令和5）年2月20日には株式会社ジャパンエンターテイメントと観光事業領域でのキャリア形成を志向する人材を対象に、やんばる、沖縄、そして日本の観光産業の発展に寄与する高度な観光人材を育成することを目的として、日本の観光をリードし地域活性化を促進する人材を輩出できるよう、共に取り組むことを目指し締結しました。

沖縄経済における基幹産業としての観光の重要性は非常に高く、観光産業を牽引する人材の育成は喫緊の課題です。本学でも2023（令和5）年4月から学部再編を行いました。ジャパンエンターテイメントにおいても沖縄経済の発展を目指し、2025（令和7）年7月には沖縄北部における新テーマパークを開業し、それぞれが持つ教育・実践・調査研究における人的・物的資源を活用した連携を進めています。

2023（令和5）年には人間健康学部にビックデータを活用した教育を推進することで、あらゆる業界・分野で必要とされるデータサイエンティストを育成し、将来的に国内外で活躍できる人材を輩出することを目的に掲げ、健康情報学科が開設されました。

この領域において同年11月6日に、ソフトバンク株式会社と北部地域住民の社会課題の解決に取り組む次世代デジタル人材育成や北部地域でのデジタルリテラシーの向上を目指すことを目的に締結しました。ICT等を活用して次世代デジタル人材育成とそれを通じて地域社会の持続可能な発展の貢献や高齢者の社会参画企画の拡大に関する取り組みを実施しています。そして、2024（令和6）年9月25日にはシステムズ株式会社とネットワンシステムズ株式会社と3者による名護地域を始めやんばる地域全体の発展に寄与する地域課題解決に貢献できるデータアナリスト人材を育成することを目的に締結しました。日々変化していく地域や社会が抱える課題。その課題などに向き合い解決策を導ける人材の育成に努めています。

さらに2025（令和7）年4月7日には沖縄セルラー電話株式会社と、医療、健康、福祉、ライフスタイル等の分野での研究・開発、人材育成、地域貢献について緊密に連携・協力し、それぞれが有する資源を活用した協働の取組みを実施することにより、地域課題の解決と地域の発展に寄与することを目的に締結しました。

また、近年沖縄観光中において多発している水難事故に関して、沖縄県警察と琉球大学病院と3者において水難事故の未然防止を図るため、水難事故事例の医学的原因究明、予防及び一次救命処置要領の研究等に係る相互連携に関する協定を2025（令和7）年8月26日に締結しました。本学はスポーツ健康科学の知見に基づき、水泳誘発性肺水腫を含む水難事故全般に関する予防および一次救命処置要領の研究について連携協力を図っています。

大学を取り巻く環境も地域の状況も日々変化していますので、変化に柔軟に対応できる人材の育成のためには企業との連携は必須と考えます。

（副学長・地方創生担当 林 優子）

## COI (Center Of Innovation)

名桜大学の開学30周年を記念し、この10年の歩みを振り返るにあたり、本学が地域と共に推進してきた特色ある活動の一つ、「やんばる版プロジェクト健診」をご紹介します。

かつて長寿の県とされた沖縄県ですが、厚生労働省の2016（平成28）年度報告によると、平均寿命は女性7位、男性36位に低下し、もはや長寿の県とは言えなくなっていました。さらに、平均寿命に占める日常生活動作が自立している期間を示す健康寿命の割合は全国ワーストレベル（男性47位、女性46位）であり、長生きしても介護を必要とする期間が長いという健康課題を抱えています。特に、認知症、大腸がん・肝臓がんを含むがん、生活習慣病（循環器疾患、糖尿病、メタボリックシンドローム）が健康寿命に影響する重要な要因とされ、早世予防が喫緊の健康課題となっています。

これらの背景から、本学は2018（平成30）年度より弘前大学Center Of Innovation (COI) の沖縄におけるデータ連携拠点大学として参画し、「やんばる版プロジェクト健診」を開始しました。本プロジェクトは、沖縄県北部地域に在住する働き盛りの方（20歳以上65歳未満）を対象に健診を行い、血液、生理検査、生活習慣等の問診データから、生活習慣病、アルツハイマー型認知症、がんの発症およびそのリスク因子と生活習慣との関連を明らかにすることを目的としています。これにより、疾患リスクに対する予兆法および予防法のモデル開発の示唆を得て、沖縄県内の健康寿命延伸に貢献することを目指しています。2018（平成30）年から2024（令和6）年までの6年間で、延べ1,950名が本健診に参加していただき、着実に活動を広げてきています。健診の運営は本学教職員に加え、学生や住民ボランティアが参加し、地域との連携を深めています。また、健診測定項目の公募を行い、企業が健診事業に参画するユニークな取り組みも実施しています。

この健診は、弘前大学COIが進めている「岩木健康増進プロジェクト」と同様に、企業・大学・行政の産学官連携による社会実装を目指しています。また、国内4カ所で行った住民健診データを集約し、比較することによって地域の特有の健康増進活動に資する知見を得ることを目指します。弘前大学COIは2022（令和4）年3月に終了しましたが、本学はその後継のJST「共創の場形成支援プログラム（COI-NEXT）」プログラムにも引き続き連携拠点として参加しています。

2025（令和7）年からはこれまでの横断研究（毎年異なる対象者）に加え、沖縄県住民の12疾患（高血圧、動脈硬化、変形性膝関節症、骨粗鬆症、認知症、脂質異常症、慢性閉塞性肺疾患、肥満症、II型糖尿病、慢性腎不全、ロコモティブシンドローム、脂肪肝）の予兆法アルゴリズム開発のため、本部町住民を対象とした「もとぶコホート」を立ち上げ、特定健診対象者（40歳以上75歳未満）を継続して追跡するコホート研究を開始します。

本プロジェクト健診は、職員の健康把握促進や医療従事者の保健活動への貢献に加え、長期間のデータ蓄積と解析により、疾患のリスク要因把握、予兆法・予防法の開発を目指します。これにより、自治体における保健医療事業への利活用資料作成、将来の予防医療、そして次世代の健康寿命延伸に資する方策提案が可能となると考えています。今後もこの健診事業を通じ、地域社会のwell-beingに貢献したいと考えています。

（学長補佐・COI担当 奥本 正）

## 名桜文学賞

名桜文学賞は、その前身となる名桜大学懸賞作品コンクールを継承するかたちで現在に至ります。2005（平成17）年度に第1回懸賞作品コンクールが開催されました。論文と短編小説の2部門でスタートしましたが、第10回に論文部門を廃止し、第11回で詩歌部門を新たに設け、第12回にはこれを詩と短歌の2部門に分け、全3部門としました。第15回の節目を迎えた2019（令和元）年度には、エッセイ・俳句・琉歌を加えた6部門となりました。さらに翌2020（令和2）年に名称を名桜文学賞に改め、本年度の第6回を迎えて、第1回懸賞作品コンクールから数えて21回目ということになります。

公立大学である本大学の大きな使命のひとつに地域貢献があります。名桜文学賞は、前身の懸賞作品コンクール以来、地域貢献事業の一環として文化的香りに満ちた地域づくりを目的に実施しています。県内在住の高校生以上の方を対象に作品を募っていますが、これまで高校生をはじめ、様々な世代の方々から多くの優れた作品を応募いただいています。現行の6部門となった第15回懸賞作品コンクールから第5回名桜文学賞までの応募総数は508作品（短歌は一人5首、俳句は一人5句、琉歌は一人1～5首をそれぞれ1作品）となります。部門毎の応募数と受賞作品数を紹介しますと、小説部門が59作品（最優秀賞3作品・奨励賞12作品）、詩部門が130作品（最優秀賞5作品・奨励賞22作品）、短歌部門が112作品（最優秀賞5作品・奨励賞22作品）、エッセイ部門が60作品（最優秀賞6作品・奨励賞10作品）、俳句部門が98作品（最優秀賞5作品・奨励賞17作品）、琉歌部門が49作品（最優秀賞3作品・奨励賞13作品）となります。

審査員による評価が極めて高かった最優秀賞作品、また、大きな可能性を秘めた奨励賞作品それについても紹介したいのですが、紙幅の都合で叶いません。受賞作品については、懸賞作品コンクールの第1～10回までは『名桜大学懸賞作品コンクール作品集 10回記念号』、第11回のものは図書館報『Bibliotheca』27号に、第12～15回懸賞作品コンクールおよび第1～5回名桜文学賞は選評とともに各回の『作品集』に収められています（写真参照）。何れも附属図書館で所蔵していますので、ぜひ読んでいただければと思います。

応募数は年度によって多寡があったり、県内の他の文学賞に比べて少ない傾向の部門があったりと課題はありますが、本文学賞が多くの方々に支えられながら地域に定着しつつあることを実感しています。今後、より多くの方々に応募していただけるような仕組みづくりを検討し、また、引き続き学内外の審査員のご助力も得ながら、地域社会の文化的発展に寄与できるよう努めていきたいと考えます。

（附属図書館長 小畠達）



## 各団体の地域貢献活動

2015



### 名桜祭実行委が、慰霊の日清掃活動に参加

慰霊の日を前に、6月14日、名桜大学祭実行委員会のメンバーが、名護岳にある「和球の碑」で清掃活動に参加しました。活動は、本学卒業生で名護青少年の家職員の與儀滝太さんの呼び掛けで実施されました。参加した経営専攻4年次の宇野晃一さんは「とてもすがすがしい気持ちになった」、同専攻4年次の島袋弘光さんは「和球の碑が、沖縄戦や平和について考える機会を与える場所になってほしい」と願いを込めました。



### 第41回大正区エイサー祭りに参加

名桜エイサーは、9月に開かれた第41回大正区エイサー祭りに出演しました。エイサー祭りは、就職などで沖縄を離れた人々が故郷である沖縄を懐かしみ、大阪という地を介して沖縄文化を広く伝えたいという思いから、毎年さまざまな団体が参加します。名桜エイサーは出店近くでの演舞や地元子ども会との共演、那覇市から参加した松島青年会とのオーラセーなどを行いました。出店近くでの演舞は、予定よりも多くの店舗から依頼があり、多くの人に名桜エイサーを知ってもらうことができました。

報告：仲本 明史（経営専攻3年次）  
松尾 一成（国際文化専攻3年次）

エイサー祭りには、26年前から参加しています。



### 名桜大学総合研究所シンポジウム（観光環境部門）開催

9月23日、学生会館SAKURAUMで、総合研究所の観光環境部門によるシンポジウム「バードウォッチングとエコツーリズム～地域活性化と観光促進」が開催され、約70人が参加しました。基調講演では、慶應義塾大学の樋口広芳氏が、野鳥の面白さと日本の鳥類、これまで取り組んできた渡り鳥等の研究について話しました。事例報告では、新垣が東南アジアでのバードウォッチングの取り組みについて、マレーシアで行われた「Asian Bird Fair」大会での経験を通して講演しました。

報告：新垣 裕治（国際学群観光産業教育研究学系 教授）



### 第1回世界ウチナーンチュ学生サミット開催

世界若者ウチナーンチュ連合会北部支部主催の「第1回世界ウチナーンチュ学生サミット」が、11月22日に学生会館SAKURAUMで開催され、約150人が参加しました。県出身海外移住者子弟留学生が、それぞれの母国であるアルゼンチン、カナダ、ペルー、ボリビア、ブラジルの沖縄移民・コミュニティについて発表しました。移住先によって当時の状況や移民条件等が異なり、現在でも各国の沖縄コミュニティに特徴があることを紹介しました。「意見チャンブルタイム」では、多世代・多国籍グループを作り、「沖縄のイメージ」、「ウチナーンチュってどんな人？」などのトピックについて、意見を交わしました。

報告：比嘉 和佳奈（国際学群2年次）、伊佐 正（国際交流センター 係員）

サミットは、新型コロナウイルスの影響で中止になった2020（令和2）年を除いて毎年開かれており、2025（令和7）年10月26日に第10回が開かれました。

広報誌「meio」より抜粋  
※肩書きや所属は当時のものです。

2016

### 沖縄美ら島財団と包括連携協定を締結

2月29日、一般財団法人美ら島財団との包括連携協定に関する協定締結式が行われました。協定は、財団と本学が、相互の連携協力を包括的に強化し、両者が持つ資源の有効的な活用により、地域社会の発展に寄与することを目的としています。山里勝己学長は、「グローバル社会の中、学生を通訳ボランティアで派遣する等、大変有意義な機会も増えていくと思います。よりよい協力関係の中で幅広い分野で交流を推進したい」と話しました。



### 名護市学習支援教室「きじむな～」開室

名護市学習支援教室ぴゅあ／第二教室（きじむなー）が、同市大中区にて、いよいよ始まりました。初日は12人の小学生が参加しました。開級式では、名護市役所の職員挨拶、大学生と小学生の自己紹介などを进行了。学校の宿題をしたり、トランプやDVDなどを観たりして、とても和やかな雰囲気で2時間という時間はあっという間に過ぎました。子どもたちが気軽に足を運べる、そして、また来たいと思えるような居場所になるよう、私たちにできる支援や教室運営に精一杯努めていきたいです。子どもたちの笑顔がたくさんあふれる教室でありたいと心から願います。

報告：比嘉 ちなつ（名護市学習支援教室ぴゅあ副教室長・第二教室長）



### 道の駅と大学の連携企画協定調印式

6月17日、学生会館SAKURAUMにて、道の駅4施設と県総合事務局北部国道事務所と連携企画（観光プラン作成、土産品開発など）に関する基本協定調印式が行われました。道の駅は、「許田」「ゆいゆい国頭」「おおぎみ」「ぎのざ」の4カ所です。調印式には、「許田」を運営するやんばる物産の比嘉幹弘社長、山里勝己学長ら6人が出席しました。協定は、各道の駅と大学が互いのニーズに合致する新たな付加価値を創出する企画・立案等を行い、将来の地域活性化の担い手になる学生に学習の場を提供するとともに、道の駅が地域活性化の拠点となることを目的としています。



### 小学生対象サマー合宿の実施

8月27、28日、国際学群語学教育と国際文化の両専攻学生とNPO法人沖縄NGOセンターの職員は、沖縄県立名護青少年の家で、小学生を対象にした1泊2日のサマー合宿を開きました。児童たちがさまざまな国の文化に触れ、多文化共生について理解を深め、国際感覚を養うことを目的として、2016（平成28）年度学生・教育支援等プロジェクト経費を利用し、今回の合宿を企画しました。学生は、児童たちと一緒に、メキシコのお祝い事で使われるくす玉人形のような「ピニャータ」と一緒に作ったり、いろいろな国の民族衣装を試着して写真を撮ったりしました。沖縄・外国のことを学ぶワークも行いました。

報告：吉川 尚吾（語学教育専攻3年次）  
川原 大尚（国際文化専攻4年次）  
金城 彩紀（同専攻3年次）  
富永 慎一（同専攻3年次）  
西平 将紀（同専攻3年次）





### 本学卒業生が発案「世界のウチナーンチュの日」制定

10月27日、アルゼンチン出身で本学大学院国際文化研究科修了の比嘉アンドレスさんと、国際交流センター係員の伊佐正アンドレスさん（2014年度国際学群国際文化専攻卒業）が山里勝己学長と住江淳司副学長を表敬し、「世界のウチナーンチュの日」の活動結果を報告しました。2人は、沖縄と海外にいるウチナーンチュの絆を深め、失われつつある「ウチナーンチュ」としてのアイデンティティを強化して、次世代に沖縄の文化や価値観を継承しようと名護市に意見書を提出。同市議会経由で県議会で審議され、制定が決まりました。報告を受けた山里学長は「海外出身のウチナーンチュならではの素晴らしい発想です。国内外にいる200万人のウチナーンチュが一緒に祝う日を制定することで、皆の心や絆が一つになり、ウチナーンチュとしての求心力が生まれてくると思います」と2人の功績を讃えました。

### 2017



#### 講演会＆シンポジウム「明日のやんばるの教育を語る」開催

学生会館SAKURAUMで2月4日、講演会＆シンポジウム「明日のやんばるの教育を語る」が開催され、教員ら70人が参加しました。樺山敏郎氏（大妻女子大学）が「これから時代に求められる資質や能力の育成～学びの文脈を創るアクティブ・ラーニングの推進～」と題して講演し、次期学習指導要領の概要説明、読解力の育成の重要性について事例を豊富に示しながら解説しました。やんばるの教育の現状と課題、そしてこれからのるべき姿を語るシンポジウムなどがありました。

報告：コーディネーター 嘉納 英明（国際学群教授 併任学長補佐）



#### 国立青少年教育振興機構よりボランティア賞を受賞

勉学とボランティアを両立させ、法人ボランティアとしてその活動が他の模範として高く評価されたとして、スポーツ健康学科4年次の三浦梢さんが独立行政法人国立青少年教育振興機構から表彰されました。2016年度全国23大学33人のうちの1人。2月2日、山里勝己学長室で表彰式が行われ、三浦さんは「ボランティアを通して、視野や価値観が広がり、人との出会いや繋がりが大切なことだと気づかされました。将来は養護教諭を目指しているので、子どもを観るという視点や子どもたちの興味・関心、リスクマネジメントなどの配慮についても学ぶことができ、とても有意義でした」と振り返りました。



#### 認知症サポーター養成講座を開催

「認知症サポーター」とは、何か特別なことをするわけではなく、認知症に対する正しい知識を持ち、自身のできる範囲で認知症の人やその家族に関わってもらう支援者のことです。6月、名護市の仲尾次公民館で、本学学生と永田美和子教授と共に地域に住む高齢者を対象に、認知症サポーター養成講座を行いました。学生は認知症の人役と地域の人役に分かれて寸劇を披露。認知症の人に対する良い対応を紹介しました。講座を受けた高齢者の方に認知症の人への関わりを考えてもらうきっかけになり、2カ所とも盛況に終りました。

報告：吉岡 萌（看護学科 助手）



#### サイバー防犯ボランティア団体を委嘱

本学は、名護警察署長からサイバー防犯ボランティア団体として委嘱を受けました。8月28日、本部棟4階第1会議室で「名護大学サイバー防犯ボランティアに対する委嘱状交付式」があり、名護警察署の山田聰署長よりサイバー防犯ボランティア代表となった大山祐貴さん（国際学群情報システム専攻4年次）に委嘱状が手渡されました。山里勝己学長は「県内で初めて本学学生がボランティアとして、安全・安心できるサイバー空間の実現に取り組むのは大変嬉しいことです。この取り組みが社会に生きることを誇りに思います」と激励しました。

### 2018

#### 名桜エイサーの企画が中国派遣事業に採択される

国際交流基金日中交流センターが実施する大学生交流事業に、本学の名桜エイサーの有志6人の企画が採択され、6人は3月12～20日、中国・成都に派遣されました。同事業に応募し、派遣されたのは石田真矢さん（国際学群2年次）、平野さゆりさん（同）、沖丸雄一郎さん（国際学群1年次）、山下紀子さん（同）、久保地茉梨さん（同）、松本育也さん（同）。6人は、四川外国语大学成都学院日本語学科の大学生と交流し、彼らが沖縄の文化を中国で継続的に発信する担い手になるよう、エイサーと食文化などを沖縄の伝統文化を紹介しました。



#### スポーツ庁の運動・スポーツガイドラインに名桜大学ヘルサポが全国唯一で掲載

3月に文科省の「スポーツ推進アクションガイド～Enjoy Sport, Enjoy Life～」が完成し、“全国の大学の中から唯一”本学のヘルスサポート（以下、ヘルサポ）の取り組みが、「スポーツへの興味・関心を喚起する取り組み」として取り上げされました。また、ガイドラインでは取組の効果を高めるポイントとして9つのポイントが示され、そのうちの2項目（1. 誰もが参加しやすい場づくり 2. 指導者不足の解消）にヘルサポの活動が具体的な実践例における参考として取り上げされました。

報告：健康・長寿サポートセンター長 高瀬 幸一（スポーツ健康学科 教授）



#### 国頭中学校での初の禁煙に関する健康教育を実施

6月8日、公衆衛生看護実習Ⅲの一環として、看護学科4年次の阿部真采さん、上原光さん、我那覇早絵さんの3人が、国頭中学校の3年生46人を対象に、「No smoking～かけがえのない今を大切に～」と題して、健康教育を実施しました。学生は中学生が対象であることから、身体のしくみ（解剖生理学）、煙草の害、病気等について、パワーポイントや動画を用いた分かりやすい教材を作成し、実施しました。さらに、将来ある中学生に夢を抱き学習を深めてもらう趣旨で、名護大学での生活も紹介しました。中学生は約1時間の講義を静かに聞き、質問もしていました。

報告：田場 真由美（看護学科 教授）



#### 伊平屋村で高齢者の介護予防運動を指導

神谷ゼミを中心とする「Meioフィットネスサポート」のメンバーは、北部広域市町村圏事務組合による地域貢献活動支援金を活用し、「伊平屋村における地域高齢者への介護予防のための運動指導」を実施しました。9月25、26日に伊平屋村の田名公民館、村高齢者生活福祉センター「とらず園」で行いました。脳の活性化を促すトレーニングや「チャーチャンジング体操」など全身を使った運動を行いました。参加者と学生がコミュニケーションをとりながら楽しく活動することができました。

新城 さき（スポーツ健康学科3年次）



#### 名護警察署と「犯罪の起きにくい社会づくり」協定締結

12月20日、本学は名護警察署と「犯罪の起きにくい社会づくりに関する協定」を締結しました。締結式は同日、名護警察署で行われ、山里勝己学長、山田聰名護署長が協定書に署名しました。子どもや女性への犯罪防止を目的とした「ヤンバルちゅらさんガールズ」の委嘱式も行われ、本学応援団チアリーディング部へ委嘱状が手渡されました。同部の高橋真央さん（スポーツ健康学科3年次）は、「私たちは笑顔と元気には自信があります。これからも、大学生らしく活動し、地域のために頑張っていきたい」と抱負を語りました。



## 2019



### 県内初：健康経営に向けた産学連携 第1号モデル事業所の健康支援

4月24日、看護学科ヘルスボランティアグループは、名護市の新垣産業株式会社で、「ゆいまーるヘルスケアプロジェクト」の一環として同社内での健康測定支援活動を実施しました。「ゆいまーるヘルスケアプロジェクト」は、働く世代の重症化予防とヘルスリテラシー向上に向けた協働体制の構築を目的に、看護学科学生のヘルスボランティアチームが毎月1回企業を訪問し健康チェックを行うものです。



### やんばる健康シンポジウム開催

6月16日、学生会館SAKURAUM 3階で本学主催のやんばる健康シンポジウムが開催され約90人が参加しました。シンポジウムは、2018年11月3日から始まった「北部地域が一丸となって取組む健康づくりプロジェクト」の一環です。11月29、30日に実施された「やんばる版プロジェクト健診」の結果から「日々の健康づくりについて考える」とのテーマが掲げられました。人間健康学部の砂川昌範教授は同年11月に実施された「やんばる版プロジェクト健診」の結果から、沖縄県の健康課題について報告し「今後は認知症・生活習慣病・がんを中心にリスクの検討と適切な予防対策をとり、健康寿命延伸に繋げていきたい」と話しました。



### やんばる版プロジェクト健診を実施

名桜大学は、弘前大学COI<sup>\*1</sup>の連携拠点として、11、12月の3日間、「やんばる版プロジェクト健診」<sup>\*2</sup>を実施し、県内在住の418人の心身の健康状態に関するデータを収集しました。収集したのは、血液（血糖値等）、生理検査（動脈硬化に関するデータ等）、生活習慣（食、喫煙、飲酒等）、全ゲノム（遺伝子）データなどです。今後、データを解析し、生活習慣病や脳血管疾患、心疾患などの発症及びそのリスク因子と生活習慣との関連を調べる予定です。

報告：本村 純（看護学科 上級准教授）弘前大学COI(Center of Innovation, 略称：COI, <http://coi.hirosaki-u.ac.jp/web/>)

<sup>\*1</sup> 2013（平成25）年に、COI全国12拠点の一つに採択された、「真の社会イノベーションを実現する革新的『健やか力』創造拠点です。本学は、平成30年度よりデータ連携拠点大学の一つとして弘前大学COIの一員となりました。

<sup>\*2</sup> やんばる版プロジェクト健診 社会実装を視野に入れた産学連携の取り組みで、本学が参画しています。この取り組みを通して、やんばるにおける健康産業の創出、やんばるの地域活性化にもつながればと願っています。



### 琉球フットボールクラブと包括協定締結

2019年12月19日、本部棟4階会議室にて、琉球フットボールクラブ株式会社と本学の包括連携事業の協定調印式が執り行われました。事業は、琉球フットボールクラブ株式会社と本学との間で人材・情報を活用し、両者の発展と沖縄県のスポーツの普及・振興と健康増進に貢献することを目的としています。協定書への署名後、同社の三上昂社長は、「本協定を通して、学生の皆さんのエネルギー、そして先生方の知見をクラブに活かし、アカデミックで科学的な視点からも成長できればと思います。歴史のあるクラブになっていくためにも名桜大学と連携し、新しい形の協定として取り組んでいきたい」と期待を述べました。

## 2020

### IT津梁まつり2020にて最優秀賞・優秀賞をW受賞

1月17、18日、「IT津梁まつり2020」で、「情報システムズ特別講義Ⅰ」のプロジェクト成果を出展しました。本学は最優秀賞（ハード+ソフト部門）と優秀賞（学生プレゼンテーション部門）をW受賞するという快挙を達成しました。情報システムズ特別講義Ⅰは、宜野座村の課題を解決するためのプロジェクトチームを立ち上げ、「問題解決型学習（PBL）」を実施する特別講義です。受講生は、多くの来場者へ出展内容の説明および学生プレゼンテーションを行い、大勢の来場者の前で発表するという緊張感を味わいました。

報告：田邊 勝義（国際学群経営情報教育研究系 教授）



### 学長裁量経費「地域の国際化に伴う外国語人材育成の推進に向けた地域貢献の模索—オンライン講座提供の試み」

中国語（10月15・29日、11月5・12日）美ら島財団美ら海水族館の職員向けに中国語オンライン講座を開講しました。全4回の講座では、①発音・声調、②文法、③外国語習得の方法を中心に、座学と実践を取り入れました。今後は、事前にオンデマンド方式でコンテンツを配信し、講座では実践練習に取り組むなどして、質の高い講座を目指していきます。

山城 智史（リベラルアーツ機構 上級准教授）



言語の教授は対面形式が最も望ましいと思いますが、オンライン形式ではパワーポイント等の視覚資料を活用することで、理解度の向上につながると感じました。中国語の拼音の発音練習に加え、シンプルな文法规則によって文を生成する方法を示しました。受講者の方からは積極的に質問があり、高い学習意欲が感じられました。

報告：李 梦迪（リベラルアーツ機構 准教授）

英語（10月30日、11月13・20日、12月11・18・23日）上本部学園（旧上本部小学校・中学校）の英語教育支援活動を行っています。名桜大学と中学校で電子端末をつなぎ、中学生が本学学生（日本人、外国人学生とも）に、英語でインタビューをします。中学生にとってはもちろん、相手役の大学生にとってもさらにその英語実用能力を向上させようという意欲につがっている様子が伺えます。

報告：玉城 本生（リベラルアーツ機構 助教）



## 2021

### 国際ボランティア研究会 村井吉敬賞を受賞

2月27、28日に本学で開催した第22回国際ボランティア学会学術大会（オンライン）において、本学の国際ボランティア研究会（I.V.L: International Volunteer Lab.）が村井吉敬賞を受賞しました。村井吉敬賞は、日本に活動拠点を置き、世界の「小さな民」とつながる実践活動を行っている個人または団体に授与されます。3月15日、同研究会に所属する堀之内裕一さん（国際文化専攻4年次）と服部翼さん（国際学群2年次）、飛田ほのかさん（国際学群2年次）、栗林珠優さん（国際学群2年次）が顧問のタンエンハイ准教授、大会長の小川寿美子教授と共に砂川昌範学長を訪れ、受賞を報告しました。



### 「つなげる長寿のふるさと」制作（沖縄県とのコラボ）

ヘルサポ☆Plus happiness☆チームのメンバーが、大宜味村の長寿を題材にショートムービーを作成しました。「つなげる長寿のふるさと」と題して、長寿の秘訣がいつまでも引き継がれることを願うショートムービーです。同村の長寿の秘訣を探しに集落を探求し、出会う人々との交流や学びを通して、なぜ世界的に長寿として有名な地域となったのか、その理由の一つである「継承される大宜味の心」を伝えるほのぼのした情緒溢れるムービーです。

報告：ヘルサポ☆Plus happiness☆チーム





### 名護市学習支援教室ぴゅあ 七タイイベント開催

本学の学生ボランティアが学習支援を行う「名護市学習支援教室ぴゅあ」で、7月8、9、13の3日間で七タイイベントがあり、国語、英語、理科、社会の4教科を七夕に関連づけて学習を行いました。国語では、七夕の読みものを読み、英語では、英語を使って短冊にお願い事を書きました。理科では、星座や天体などの問題を、社会では、世界や日本各地の七タイイベントについてクイズ形式で学びました。支援を行う学生が教科ごとに工夫を凝らした学習を企画することで、中学生も3日間の七タイイベントで楽しく学習に取り組めた様子でした。

報告：ぴゅあ教室長 横山 綾華（語学教育専攻3年次）



### 第6回世界ウチナーンチュ学生サミットを開催

10月23日、学生会館SAKURAUM 6階スカイホールBにて「第6回世界ウチナーンチュ学生サミット」が開かれました。人数を制限してのオンライン開催で、学生や海外在住者計20人が参加しました。2グループに分かれて、自己紹介を行い、「LINE」での事前交流で共有した動画についての質疑応答、コロナ禍における移民学習と交流のあり方について議論を交わしました。交流会では、新垣アンドレさんによるペルー音楽フェスティッドと日本のラジオ体操のコラボレーション動画や、本学学生の末吉りんかさんによる琉球舞踊が披露され、沖縄文化と沖縄県系移民先の各国文化との交流がなされました。

報告：上原 なつき（国際文化教育研究学系 准教授）、長尾 直洋（同学系 准教授）



### やんばるハンドボールフェスタ2021を開催

11月27日、本学ハンドボール部は体育館で「やんばるハンドボールフェスタ2021」を開催しました。日本リーグへ参戦している「ザ・テラスホーテルズ・ティーダ」（以下ザ・テラスホーテルズ）を講師に招き、市内の小学生チーム「名護ユナイテッド」、東江、屋部、大宮の3中学校、県立北部農林高校の各チームが参加しました。競争形式でのシュート練習や2対2などの実践練習を行ったり、ザ・テラスホーテルズの選手との交流試合を行ったりして、選手同士の交流を深めることができました。

報告：女子ハンドボール部 飯田 紗月（スポーツ健康学科1年次）



### 食育推進支援サークルが、子ども食堂ボランティアを実施

食育推進支援サークルは、スポーツ健康学科の前川美紀子先生を顧問に、6月に設立されました。コロナ禍により活動が制限されていましたが、12月から屋部中学校での子ども食堂ボランティアを開始しました。午前6時半から同9時まで、朝食の準備や会場整備、体調確認、栄養指導などをしています。活動を通して、子どもたちの笑顔や成長を感じる一方、好き嫌いや偏食などの課題も見えてきました。今後は、子どもたちが楽しく食べられるメニューづくりや、生徒との交流を深めながら、地域に根ざした食育推進活動をさらに広げていきたいと考えています。

報告：小寺 麻琴、佐藤 蒼果（スポーツ健康学科2年次）



## 2022

### イオン琉球と「産学連携に関する包括協定」を締結

8月5日、本部棟4階第一会議室で、イオン琉球株式会社と本学の「産学連携に関する包括協定」締結式がありました。同社と本学双方の有する人的・物的資源を有効に活用して、豊かな地域社会の形成・発展に寄与することを目的に締結されました。砂川昌範学長が包括協定の経緯や概要を説明し、「これらの活動を通じて、地域貢献や地域活性化、人材育成、また持続可能な社会の発展に寄与できるよう相互の連携に取り組んでまいりたい」と語りました。

## 2023

### シンポジウム「ウチナーンチュの移民－軌跡と紐帯－」の開催

6月18日、沖縄市民会館中ホールにて、国際文化研究科主催のシンポジウム「ウチナーンチュの移民－軌跡と紐帯－」が開かれ、県内外から90人が参加しました。うるま市文化財課主査の榮野川敦氏から「戦前のウチナーンチュの移民と日本の敗戦による『引揚げ』」というテーマで基調提案がありました。続くシンポジウムでは、榮野川氏の発表のほか、同学科の長尾直洋准教授が「ブラジルのウチナーンチュとエスニック・メディア」、同学科の屋良健一郎上級准教授が「20世紀前半の台湾におけるウチナーンチュと短歌」、スポーツ健康学科の小川寿美子教授が「やんばる世界を拓く－沖縄北部地域の〈人の移動〉－」というテーマについて、それぞれ発表しました。

報告：上原 なつき（国際文化学科 准教授）



### 学習支援教室ぴゅあが社会貢献表彰を受賞

名護市学習支援教室ぴゅあは、第59回社会貢献者表彰（主催：公益財団法人 社会貢献支援財団）を受賞し、7月31日に帝国ホテル（東京）で行われた授賞式に参加いたしました。今回の表彰では、社会の各分野で顕著な功績を挙げた30の団体等が受賞しました。2013（平成25）年5月、ぴゅあは、名護市と名桜大学の共同事業として始まりました。名護市内の生活困窮世帯の中学生への学習支援と居場所づくりを目的に、週3回、大学のマイクロバスで生徒を送迎し、2時間の無料学習支援をしています。

ぴゅあの中学生の高校合格率はほぼ100%であり、ドロップアウトする生徒もほとんどないことも嬉しいです。高校を卒業し、大学や専門学校に進学した話を聞くと、ぴゅあの存在意義をあらためて確認できたようで、心躍るものでした。今後は、キャリア教育や性教育等についても、限られた学習時間内で実施できるよう、学生とも考えていきたいです。

報告：名護市学習支援教室ぴゅあ顧問 嘉納 英明（国際文化学科 教授）



### 公開講座「名桜大学×FC琉球キッズサッカー教室」を開催

8月19日、本学多目的グラウンドで「名桜大学×FC琉球キッズサッカー教室」を開催しました。FC琉球のコーチが講師となり、小学校2年生以下、3年生以上の2グループに分けて行いました。2年生以下グループでは、ボールに慣れるような動きを取り入れながら、遊びの要素を入れたトレーニングを行いました。3年生以上のグループでは、基本的なパスの練習や試合要素を取り入れたミニゲームを行いました。子どもたちは学生と一緒にプレーをしたり、本格的な指導を受けたりしていく中で、楽しそうにボールを追っていました。

報告：半谷 風花（スポーツ健康学科3年次、女子サッカー部キャプテン）



### ソフトバンク株式会社と産学連携協定を締結

本学は、ソフトバンク株式会社と「公立大学法人名桜大学とソフトバンク株式会社との産学連携に関する協定（教育パートナーシップの確立によるデジタル人材育成と持続可能な地域振興に向けて）」（以下「本協定」）を締結しました。双方の有する資源を有効活用し、次世代デジタル人材育成や沖縄県北部地域でのデジタルリテラシーの向上を目指し共創していきます。



### マウイ島火災支援募金を活動

12月26日に、折原陽香さん（語学教育専攻4年）が学長室を訪れ、マウイ島火災支援募金活動の報告を行いました。募金活動は、同年8月8日に発生し、102人の死者を出したハワイ州マウイ島での大規模な山火事に対する支援です。折原さんは2022年に、協定大学であるハワイ大学カピオラニコミュニティカレッジに留学をしており、「お世話になったハワイに恩返しをしたい」と考えているとき、ゼミ担当教員の板山勝樹教授から募金活動を提案され、始めました。大学内のカフェと売店に募金箱を約1カ月半設置したところ、計20,000円の募金が集まりました。





### マンゴローブ外来種（ヒルギダマシ）駆除ボランティアを実施

11月12日に、羽地内海へ注ぐ我部祖河川下流域の中州干潟で、外来種マンゴローブの分布拡大を抑制することを目的としたボランティア駆除作業を、屋我地エコツーネット（代表：梅村宙子さん）の協力を得て実施しました。参加者6人で、作業中も断続的に降り続く小雨の中、濡れながら作業しました。中州干潟での伐採、カヌーへ積載しての搬出、伐採樹木の枝落とし、ゴミ袋へ詰める作業は約3時間に及び、ボランティアゴミ袋（45L）で37袋のごみが出ました。

報告：新垣 裕治（国際学部国際観光産業学科教授）



### 2024

#### プロジェクト学習（沖縄北部方言）の成果を北部地域の小中学校へ

2021～2023年度の課題解決型の実践的授業「プロジェクト学習」（沖縄北部方言）内で作成した絵本を、国頭教育事務所を通じて6月24日に管轄の小中学校へ配布しました。本プロジェクトでは、学生27人が、県北部地域に焦点を当て、方言に関する問題や課題を探り、解決方法を検討・実施してきました。伝統方言の継承の一歩として、子ども達への方言の周知には絵本が有効ではないかと考え、沖永良部方言（鹿児島県大島郡）の擬音語をまとめた絵本「シマノトベ」の作者である国立国語研究所の横山晶子先生に快諾いただき、同絵本の枠を使用し、名護市（大北）版と本部町（東）版を作成しました。

報告：麻生 玲子（国際文化学科 准教授）



#### シスコシステムズ、ネットワンシステムと产学連携協定を締結

大学とシスコシステムズ合同会社（東京都）、ネットワンシステムズ株式会社（同都）は、地域課題を解決するデータアナリスト人材育成を目的として、产学連携協定を締結しました。地域社会の課題として、大学を卒業後に地元企業への就職を志しても、就職先企業が少なく都心部に人材が流出してしまうという課題があります。本協定は、3者それぞれが有する教育研究における人的・物的資源を有効に活用した連携により、名護地域をはじめ、やんばる地域全体の発展に寄与する地域課題解決に貢献できるデータアナリスト人材を育成することを目的とします。



#### 「第48回沖縄の産業まつり」でヘルサポが健康支援を展開

10月25～27日、那覇市奥武山公園内で「第48回 沖縄の産業まつり」が開催されました。本学の健康支援団体・ヘルスサポート（以下ヘルサポ）は沖縄県健康産業協議会と協働で、健康支援に関するブースへ出店しました。ヘルサポは健康測定（身体組成、血管年齢など）を行いながら、健康食品の機能的な説明を行い、県の県産素材を原料にした機能性食品や健康食品ブランドを認定する「WELLNESS OKINAWA JAPAN 認証制度」認証の健康食品の試食・試飲を実施して、県民の健康意識の向上やの普及に貢献いたしました。健康測定には3日間で584人が参加しました。

報告：ヘルスサポート 竹森 友南、大内 彩世（スポーツ健康学科2年次）、顧問：高瀬 幸一（同学科 教授）



#### 「子やぎのキラリとキララ」出版記念絵画展を開催

10月1～31日の1ヶ月、図書館の展示スペース（ミニギャラリー）で、絵本「子やぎのキラリとキララ」出版記念の絵画展を開催しました。絵本の原画や新作など、全14作品とお薦め絵本などを展示しました。期間中には約150人が来場しました。スペース入り口のボードは、スポーツ健康学科2年次の神谷仁唯夏さんと吉長凜さんが飾り付けました。来場者からは、「図書館内に癒しの空間があってリラックスできた」、「絵画が展示されている場所が学内に他にもあると良い」などの感想をもらいました。

報告：岡部 麻里（スポーツ健康学科 准教授）

### 2025

#### やんばるアカデミー「平和について考える」講座を開催

2月5、12、19の3日にわたり、令和6年度名桜やんばるアカデミーを開催しました。本学教員による学問研究の成果を地域の皆様に広く知ってもらうことを目的とした公開講座で、令和元年度から環太平洋地域文化研究所主催で実施しています。今年度は本学の建学の精神である「平和・自由・進歩」のうち、「平和」に焦点を当て、「いま、『平和』について考える—歴史学・文学からの視座」というテーマで行いました。講師は小嶋洋輔教授（日本近現代文学研究）、坪井祐司教授（東南アジア史）、山城智史上級准教授（国際関係史）の3人で、歴史学と文学の知見から、新たな「平和」のあり方やその意義を考えるきっかけとなる講義でした。



#### 学生が児童養護施設の子どもたちの生活を体験（神戸）

名護市学習支援教室びゅあでは、本学学生が中学生の学習支援活動を行っています。支援活動をする学生は、毎年1月、沖縄の旅に来る神戸市の児童養護施設の小学生の滞在サポートも行っています。旅は神戸・三宮商店街関係者が主催する「KOBE夢・未来号・沖縄」プロジェクトで、今年で17回目になります。滞在中のサポートをさらに充実させる目的で今年は初めて、高橋拓人さん（国際文化学科2年次）と福知未悠さん（スポーツ健康学科2年次）が養護施設を訪問して児童の生活を体験しました。2人は「子どもたちの生活を見ることで、ボランティアとしての活動やびゅあの中学生との接し方に参考になることが得られた」などと話しました。

報告：名護市学習支援教室びゅあ副顧問 横原 伴子（スポーツ健康学科 教授）





## 外部委員会（名護市との関わり）

年 度	所 属	氏 名	委 員 会 等
2015(平成27) 年度	経営情報教育研究学系	大城 渡	名護市男女共同参画審議会委員
	学生部	渡具知 伸	名護市史ワーキンググループ会議
	国際文化教育研究学系	渡慶次正則	ビデオ会議システムを用いた交流授業
	看護学科	松下 聖子	名護市子ども・子育て会議委員
	学生部	松田 勇	キャリア教育に係る地域連携の研究会
	観光産業教育研究学系	宮城 敏郎	名護市都市計画審議会
	学長	山里 勝己	名護市立教育研究所運営審議会
	総務課	池原 秀人	名護市立学校評議委員
	観光産業教育研究学系	伊良皆 啓	観光庁事業「観光地域経済の「見える化」の推進事業」のプロジェクト委員
	経営情報教育研究学系	大城美樹雄	名護市グッジョブ連携協議会
	経営情報教育研究学系	大城美樹雄	名護市教育行政点検・評価に係る学識経験者懇話会
	経営情報教育研究学系	大城美樹雄	キャリア教育に係る地域連携の研究会
	看護学科	大城 凌子	名護市生活支援協議体
	看護学科	大城 凌子	名護市総合戦略推進会議
	経営情報教育研究学系	大城 渡	名護市男女共同参画審議会
	観光産業教育研究学系	大谷健太郎	観光庁事業「観光地域経済の「見える化」の推進事業」のプロジェクト委員
	看護学科	金城 利雄	「暴力団進出阻止運動」名護地区出発式
	看護学科	金城 利雄	名護地区安全なまちづくり推進協議会総会
	学生部	渡具知 伸	名護市史ワーキンググループ会議
2016(平成28) 年度	看護学科	本村 純	名護市国民健康保険運営協議会委員
	国際文化教育研究学系	渡慶次正則	ビデオ会議システムを用いた交流授業の講師
	看護学科	大城 凌子	権利擁護意見交換会
	スポーツ健康学科	小川寿美子	名護市住生活基本計画等策定委員会
	経営情報教育研究学系	大城美樹雄	名護市教育行政点検・評価に係る学識経験者懇話会
	スポーツ健康学科	高瀬 幸一	名護市食生活改善推進員養成講座の講師
	スポーツ健康学科	小賦 肇	第45回名護市南陸上競技大会の役員
	国際文化教育研究学系	渡慶次正則	文部科学省ICTを活用した教育推進自治体応援事業について
	観光産業教育研究学系	新垣 裕治	名護市地球温暖化対策実行計画（区域施策編）策定委員
	図書課	赤嶺 達也	図書館協議会
	経営情報教育研究学系	林 優子	名護市景観まちづくり条例に伴う景観審査会
	観光産業教育研究学系	新垣 裕治	仲尾次・真喜屋区間内水面周辺利活用検討委員会
	国際文化教育研究学系	与那覇恵子	名護市小中英語支援（ALT）英語教育担当者研修会の講師
	国際交流課	伊佐 正アンドレス	『世界のナゲンチャビジネスフォーラム』の司会者
	学生部	渡具知 伸	名護市史写真集専門部会
2017(平成29) 年度	リベラルアーツ機構	高安美智子	教育研究所研究協力校に係る連絡会（仮称）
	国際文化教育研究学系	嘉納 英明	
	スポーツ健康学科	前川美紀子	「学童期・思春期出前講座」の講師
	経営情報教育研究学系	大城美樹雄	名護市教育行政点検・評価に係る学識経験者懇話会
	スポーツ健康学科	前川美紀子	名護市学校給食センター運営委員会に係る委員
	看護学科	田場真由美	名護市地域包括支援センター及び地域密着型サービス等運営会

年 度	所 属	氏 名	委 員 会 等
2017(平成29) 年度	学生部	渡具知 伸	名護市史「市制50周年記念写真集」専門部会
	図書課	赤嶺 達也	図書館協議会
	国際文化教育研究学系	嘉納 英明	講師（名護市名種団体 女性代表ネットワーク協議会）
	看護学科	松下 聖子	第12回名護市子ども・子育て会議
	観光産業教育研究学系	伊良皆 啓	名護市空家等対策審議会
	学生部	渡具知 伸	名護市史セミナー「写真の記録と記憶」一写真を読んでみよう
	副学長	鈴木 啓子	「第4次名護市地域保健福祉計画」策定部会員
	図書課	赤嶺 達也	図書館協議会
	学生部長	池原 秀人	名護市市制50周年記念事業検討部会
	看護学科	松下 聖子	第14回名護市子ども・子育て会議
2018(平成30) 年度	看護学科	本村 純	名護市国民健康保険運営協議会
	リベラルアーツ機構	山城 智史	名護市公共事業評価監視委員会
	国際文化教育研究学系	与那覇恵子	市英語教育担当者研修会の講師
	国際文化教育研究学系	板山 勝樹	名護市男女共同参画審議会
	観光産業教育研究学系	伊良皆 啓	第2次名護市観光振興基本計画策定懇話会
	看護学科	大城 凌子	国立療養所沖縄愛楽園土地等利活用検討懇話会
	看護学科	大城 凌子	名護市経済講演会の参加
	看護学科	大城 凌子	名護市公共事業評価監視委員会
	観光産業教育研究学系	大谷健太郎	名護市都市計画審議会委員会
	観光産業教育研究学系	大谷健太郎	第2次名護市観光振興基本計画策定懇話会
	スポーツ健康学科	小川寿美子	図書館協議会
	スポーツ健康学科	奥本 正	第28回やんばる駅伝競走伊江島大会（コーチ・競技選手）
	国際文化教育研究学系	嘉納 英明	名護市指定研究社会科グループ研究会事業研究会講師
	スポーツ健康学科	神谷 義人	名護市宮里区健康づくり懇談会のアドバイザー
	経営情報教育研究学系	木村 堅一	国立療養所沖縄愛楽園土地等利活用検討懇話会
	助産専攻科	小柳 弘恵	母子保健推進員養成講座講師
	スポーツ健康学科	砂川 恵子	名護市手話施策推進協議会委員
	スポーツ健康学科	高瀬 幸一	名護市「願寿教室」における介護予防講座
	リベラルアーツ機構	高安美智子	全国高等学校総合体育大会 名護市実行委員会
	経営情報教育研究学系	天願 健	名護市観光情報インフラ（Wi-Fi）整備計画策定懇話会
	スポーツ健康学科	遠矢 英憲	名護市青少年育成協議会屋我地支部定期総会の講師
	事務局長	渡具知 伸	名護市史「市制50周年記念写真集」専門部会
	事務局長	渡具知 伸	名護市史編さん委員
	看護学科	永田美和子	認知症サポートー養成講座のキャラバンメイト
	理事長	比嘉 良雄	名護市市政50周年記念事業実行委員会

年 度	所 属	氏 名	委 員 会 等
2019(令和元) 年度	観光産業教育研究学系	新垣 裕治	名護市自転車活用推進計画策定検討会
	観光産業教育研究学系	伊良皆 啓	名護湾沿岸基本構想策定業務に係る有識者懇談会
	観光産業教育研究学系	伊良皆 啓	第2次名護市観光振興基本計画策定懇話会
	経営情報教育研究学系	大城美樹雄	名護市立教育研究所入所式における講話
	観光産業教育研究学系	大谷健太郎	第2次名護市観光振興基本計画策定懇話会
	スポーツ健康学科	高瀬 幸一	名護市「願寿教室」における介護予防講座
	看護学科	田場真由美	認知症サポーター養成講座のキャラバンメイト
	経営情報教育研究学系	天願 健	名護市観光情報インフラ整備推進懇話会
	看護学科	永田美和子	名護市認知症ケアパス策定会議
	看護学科	永田美和子	名護市「願寿教室」における認知症予防講座
	看護学科	永田美和子	認知症サポーター養成講座のキャラバンメイト
	観光産業教育研究学系	朴 在徳	「世界のウチナーンチュの日」講演会
	看護学科	松下 聖子	名護市子ども・子育て会議
	経営情報教育研究学系	宮平 栄治	名護市工場適地抽出検討会
2020(令和2) 年度	学長	山里 勝己	名護市総合計画審議会
	経営情報教育研究学系	佐久本功達	名護市情報公開・個人情報保護制度運営審議会
	副学長	鈴木 啓子	名護市地域保健福祉計画等策定委員会（地域保健福祉計画部門）
	スポーツ健康学科	砂川 恵子	名護市手話施策推進協議会
	看護学科	田場真由美	名護市地域包括支援センター及び地域密着型サービス等運営会議
	看護学科	永田美和子	名護市地域保健福祉計画等策定委員会（高齢者及び介護保険部門）
	副学長	林 優子	名護市景観まちづくり条例に伴う景観審査会
	観光産業教育研究学系	東恩納盛雄	名護市観光振興基本計画懇話会
	看護学科	松下 聖子	子育てサポーター養成講座の講師
	国際文化教育研究学系	板山 勝樹	名護市男女共同参画審議会
2021(令和3) 年度	観光産業教育研究学系	伊良皆 啓	名護湾沿岸（名護漁港周辺エリア）実地計画策定業務に係る有識者懇談会
	観光産業教育研究学系	卯田 卓矢	名護市都市計画審議会
	看護学科	大城 凌子	名護市生活支援サービス協議体
	地域連携研究推進課	新城 敦	名護市教育行政点検・評価に係る学識経験者懇話会
	学長	砂川 昌範	第2期名護市総合戦略推進会議
	看護学科	田場真由美	認知症サポーター養成講座のキャラバンメイト
	リベラルアーツ機構	玉城 本生	名護市英語担当者研修の講師
	国際文化教育研究学系	長尾 直洋	世界のウチナーンチュの日関連企画「姉妹都市ロンドリーナオンライン交流」の講師
	看護学科	永田美和子	第1回名護市認知症ケアパス検討会
	スポーツ健康学科	前川美紀子	母子保健推進員定例会の講師依頼
	看護学科	松下 聖子	名護市子ども・子育て会議委員
	看護学科	本村 純	名護市国民健康保険運営協議会
	看護学科	松下 聖子	「子育てサポーター養成講座」の講師
	経営情報教育研究学系	宮平 栄治	第2次名護市中小企業・小規模企業振興ビジョン策定委員会
2022(令和4) 年度	看護学科	安仁屋優子	民生委員・児童委員のための学習会の講師
	学生課	池原 秀人	名護市地域公共交通協議会

年 度	所 属	氏 名	委 員 会 等
2022(令和4) 年度	スポーツ健康学科	奥本 正	名護市公用公共用施設設置検討委員会（名護市武道場）
	スポーツ健康学科	神谷 義人	名護中央公民館講座の講師
	看護学科	鬼頭 和子	名護市障がい者住まい暮らし支援専門部会
	経営情報教育研究学系	島 康貴	地域子どもパソコンクラブ「キッズビルダー」の指導及びサポート
	地域連携研究推進課	新城 敦	名護市教育行政点検・評価に係る学識経験者懇話会
	学長	砂川 昌範	名護市総合戦略推進会議
	看護学科	田場真由美	認知症サポーター養成講座のキャラバンメイト
	看護学科	田場真由美	名護市地域保健福祉計画等策定委員会（健康増進及び食育部門）
	経営情報教育研究学系	天願 健	名護市情報公開・個人情報保護制度運営審議会
	国際文化教育研究学系	長尾 直洋	第7回世界のウチナーンチュ大会関連企画「県系移民の歴史学習で学ぶ多文化共生に向けたこれからの沖縄」に伴う小学生向け「人物誌テキスト」の制作
	看護学科	永田美和子	第2回名護市認知症ケアパス検討会
	看護学科	永田美和子	第3回名護市認知症ケアパス検討会
	副学長	林 優子	一般社団法人名護スマートシティ推進協議会代表理事
	観光産業教育研究学系	東恩納盛雄	名護市観光振興基本計画懇話会
	看護学科	松下 聖子	名護市総合戦略推進会議
2023(令和5) 年度	看護学科	松下 聖子	「子育てサポーター養成講座」の講師
	国際観光産業学科	宮平 栄治	名護市中小企業・小規模企業振興懇話会
	副学長	林 優子	名護市水道事業・下水道事業審議会
	健康情報学科	太田佐栄子	名護市教育行政点検・評価に係る学識経験者懇話会
	看護学科	田場真由美	名護市地域保健福祉計画等策定委員会（高齢者及び介護保険部門）
	副学長	林 優子	一般社団法人名護スマートシティ推進協議会代表理事再任
	看護学科	安仁屋優子	出前講座（認知症予防講座）
	学長	砂川 昌範	名護市総合戦略推進会議
	副学長	永田美和子	第1回名護市認知症ケアパス検討会
	国際文化学科	玉城 福子	名護市男女共同参画審議会
	スポーツ健康学科	樋原 伴子	名護市地域保健福祉計画等策定委員会（障害福祉部門）
	国際観光産業学科	上原 明	久辺地区まちづくり計画策定事業に係る検討委員会
	副学長	永田美和子	
	健康情報学科	太田佐栄子	
	健康情報学科	木暮 祐一	
	看護学科	阿部 正子	
2024(令和6) 年度	スポーツ健康学科	高瀬 幸一	名護市体力・健康測定会の役員
	看護学科	大城 凌子	名護市生活支援サービス協議会
	国際観光産業学科	東恩納盛雄	名護市観光振興基本計画懇話会
	国際観光産業学科	大城美樹雄	地方独立行政法人名護市行政事務機構評価委員会
	国際観光産業学科	卯田 卓矢	名護市都市計画審議会
	健康情報学科	佐久本功達	名護市公共事業評価監視委員会
	国際観光産業学科	伊良皆 啓	名護市中心市街地まちづくり推進協議会
	附属図書館参与	渡具知 伸	名護市博物館協議会
	看護学科	松下 聖子	「子育てサポーター養成講座」の講師

年 度	所 属	氏 名	委 員 会 等
2024(令和6)年度	看護学科	大城 凌子	久辺三区まちづくり計画算定事業に係る分科会
	健康情報学科	太田佐栄子	
	スポーツ健康学科	樋原 伴子	
	健康情報学科	木暮 祐一	
	健康情報学科	前川美紀子	
	健康情報学科	太田佐栄子	
	健康情報学科	太田佐栄子	
	国際文化学科	嘉納 英明	
	教員養成支援センター	新城 敦	
	スポーツ健康学科	高瀬 幸一	
	スポーツ健康学科	高瀬 幸一	
	健康情報学科	天願 健	
	附属図書館参与	渡具知 伸	
	副学長	林 優子	
	副学長	林 優子	
	国際観光産業学科	東恩納盛雄	
	健康情報学科	前川美紀子	
	健康情報学科	本村 純	
	看護学科	松下 聖子	
2025(令和7)年度	副学長	林 優子	一般社団法人名護スマートシティ推進協議会代表理事再任
	健康情報学科	太田佐栄子	名護市教育行政点検・評価に係る学識経験者懇話会
	教員養成支援センター	新城 敦	名護市教育行政点検・評価に係る学識経験者懇話会
	学長	砂川 昌範	第3期名護市総合戦略推進会議
	国際観光産業学科	大城美樹雄	名護市空家等対策審議会
	副学長	永田美和子	認知症サポートー養成講座の開催
	国際観光産業学科	仲尾次洋子	名護市中小企業・小規模企業振興懇話会員
	学長	砂川 昌範	名護地域ウォーク実行委員
	国際観光産業学科	東恩納盛雄	名護市宿泊税導入検討懇話会
	スポーツ健康学科	仲田 好邦	名護市地域クラブ活動の在り方に関する検討懇話会
	国際観光産業学科	仲尾次洋子	名護市男女共同参画審議会
	スポーツ健康学科	濱本 想子	名護市地域クラブ活動の在り方に関する検討懇話会

 **名桜大学公開講座一覧**

2015(平成27)年度

講 座 名	対 象 者
救急法救急員養成講習会（赤十字救急法救急員養成講習会）	一般市民
ハブ（蛇）対策講座	一般市民、大学生、中・高校生
「摂食嚥下障害の理解とケア」～食べる喜びを支える～	一般市民、医療従事者（看護師・介護士・栄養士）、地域で生活する摂食嚥下障害者またはその介護者
ゆんたくしながら健康づくりin名護市場	一般市民
ゆんたくしながらヘルスアップ出前（Part 8）	一般市民
外交文書の世界への招待	一般市民（中学生以上）
一般市民のための普通救命講習I	名護市および近隣に在住の一般市民、スポーツ少年団等の指導者および関係者
これからの市民社会において当事者（主人公）として生きる力を育成する 一カードメソッドの理論と実際一	一般市民
しこりを見つけた、これって乳がん？	一般市民、大学生、高校生
子どもの豊かな学びと成長を育む　一学校と地域の連携を考える一	保護者、学校関係者、社会教育関係者、一般市民
ヤンバルクイナ保護の現場視察	一般市民、大学生、中・高校生
軍装備品の視点から見た中世今帰仁勢力の性格　異色の天馬意匠ならびにシンメトリー 十字紋は語る	一般市民
数学を築いた人々ー夢が広がる数学の学びー	小・中・高校生の保護者、一般市民
子どもの応急手当	子どもを養育している方
健康づくりのための身体活動基準2013　身体活動指針（アクティブガイド）	健康づくり指導に携わる方、健康づくりに興味のある方
日韓の言語行動のダイジェスト（1）－円滑なコミュニケーションの暗黙のルール－	一般市民（韓国語の学習歴やレベルは問わない）
キネステティクス -持ち上げない体の動かし方を体験しよう-	一般市民
子どもの事故予防	子どもを養育している方
名護市屋部地域の歴史文化を探訪する	一般市民（中学生以上）
身につけよう救急救命法！（心肺蘇生法（CPR）とAED「ガイドライン2010」）	心肺蘇生法講習の受講経験がある一般市民、スポーツ等を指導する関係者
動脈硬化予防・改善のための運動講座（講義編と運動実践編）（あなたの血管年齢は？）	動脈硬化が気になる一般市民
「みんなで元気！筋力アップ」教室（健康運動指導士がサポート）	名護市と近隣に在住・在職の40代以上の方、筋トレ実施にあたり医学的に問題の無い方
高齢者の骨折とリハビリテーション	一般市民
戦後沖縄の短歌を読む	一般市民、大学生、高校生
島尾敏雄と沖縄	一般市民、大学生、高校生
女性のからだを認識し、健康対策をしよう　一腰痛と尿失禁の対策に沖縄の文化をとりいれる－	一般女性
明治日本の産業革命遺産と琉球・薩摩	一般市民、大学生、高校生
海外で活躍している看護師の話をきこう	興味関心のある看護師、助産師、学生
環境汚染の調査方法（赤土・農薬・PCB等化学物質）	一般市民

# 名桜大学公開講座一覧

## 2016 (平成28) 年度

講座名	講師名	対象者
救急法救急員養成講習会（赤十字救急法救急員養成講習会）	前川美紀子、学外講師	一般市民（大学生以上）
ゆんたくしながらヘルスアップ出前講習会（Part 9）	永田美和子、学外講師	一般市民
ゆんたくしながら健康づくりin名護市場	安仁屋優子、永田美和子、佐和田重信、吉岡萌	一般市民
ハブ（蛇）対策講座	新垣裕治、学外講師	一般市民（大学生以上）
ウォーキング＆「脳」活性化プログラムの理論と実践	平識善盛	一般市民（40～70歳）
臨床医学と診療情報管理学	大城真理子、上門要、真喜屋尚美、学外講師	一般市民（高校生以上）
ヤンバルクイナ保護の現場視察	新垣裕治、学外講師	一般市民（中学生以上）
医療福祉介護領域で働く人のための足爪フットケアの基本のキ	大城凌子、伊波弘幸、学外講師	医療福祉領域に係る方
キネステティク体験会 一相手を抱えたり、持ち上げたりしない介助法	伊波弘幸、大城凌子、学外講師	医療福祉、介護に関わる方、一般市民
中世今帰仁勢力と娯楽～ナルド（陣取り遊び）の観点から～	上間篤	一般市民
名護市羽地中部地域の歴史文化探訪	中村誠司、学外講師	一般市民（中学生以上）
子どもの応急手当	安里葉子、名城一枝	子どもを養育している方
英文法再考：なにがどう理解しがたいかを明らかにする	中村浩一郎	一般市民（高校生以上）
生涯スポーツのための卓球講座	玉城将	一般市民
短歌入門	屋良健一郎、大城真理子、学外講師	一般市民（高校生以上）
筋力アップでますます元気！マシンを使った実践講座（9回コース）（健康運動指導士がサポート！）	山本薰、学外講師	名護市と近隣に在住・在職の40代以上の方。筋トレ実施にあたり医学的に問題の無い方
スウェーデン生まれのニュースポーツKUBBを体験しよう	平野貴也、学外講師	一般市民（小学生以上）
中世日本と琉球の関係史	屋良健一郎	一般市民（高校生以上）

## 2017 (平成29) 年度

講座名	講師名	対象者
救急法救急員養成講習会（赤十字救急法救急員養成講習会）	前川美紀子、学外講師	一般市民（大学生以上）
ゆんたくながらヘルスアップ出前講習会（Part10）	永田美和子、学外講師	一般市民
ゆんたくながら健康づくりin名護市場	安仁屋優子、学内講師	一般市民
ハブ対策講座	新垣裕治、学外講師	一般市民（中学生以上）
東屋部川ナイト・カヌー探検	なぐまさの会、新垣裕治	一般市民（小学生以上） ※小・中学生は大人同伴
ヤンバルクイナ保護の現場視察	新垣裕治	一般市民（小学生以上） ※小・中学生は大人同伴
ジユリ馬とクラージュ<Curraj>の系譜をめぐって	上間篤	一般市民
摂食嚥下障害の理解と食事介助～安心・安全においしく口から食べる～	野崎希元、学外講師	一般市民、医療従事者、看護学生
近世南やんばるの番所と宿道を探訪する	中村誠司、学外講師	一般市民（高校生以上）
子どもの応急手当	安里葉子、名城一枝	子どもを養育している方またはテーマに関心がある方
医療通訳入門講座（基礎編）～日本で外国の人たちが安心して医療を受けられるようにサポートをしよう！～	横川裕美子、学外講師	医療通訳に関心がある人、または語学を学んでいる人

## 2018 (平成30) 年度

講座名	講師名	対象者
母乳で育てたいママのためのクラス①基礎編②実践編	小柳弘恵、涌谷桐子	①これから妊娠・出産する女性 ②母乳育児中のお母さん
救急法救急員養成講習会（赤十字救急法救急員養成講習会）	前川美紀子、学外講師	一般市民（大学生以上）
沖縄の米軍基地による生活環境問題	田代豊、学外講師	一般市民
水辺野外活動のためのOFA(OxygenFirstAid:酸素ファーストエイド法)	遠矢英憲、学外講師	水辺活動を実践している一般・教職員・学生で、CPR及びAEDの知識技術を取得済の者。その他見学者
ハブ対策講座	新垣裕治、学外講師	中高生、大学生、一般市民
東屋部川ナイト・カヌー探検	なぐまさの会、新垣裕治	一般市民、小学生以上（小中は大人同伴）
健康づくり事業における運動（身体活動）	東恩納玲代、神谷義人、奥本正	健康運動指導士、健康運動実践指導者、その他健康づくり事業従事者
騎馬武者像ならびにマンジ紋をあしらった発掘史料の文化史的意義	上間篤、上原なつき	一般市民
日本語と英語の比較対照と英文法再考	中村浩一郎	一般市民（高校生以上）
スケジュール表で覚えるやさしい中国語	賀南	一般市民
医療通訳入門講座（基礎編）～日本で外国の人たちが安心して医療を受けられるようにサポートをしよう！～	横川裕美子、学外講師	医療通訳に関心がある人、または語学を学んでいる人

## 2019 (令和元) 年度

講座名	講師名	対象者
救急法救急員養成講習会（赤十字救急法救急員養成講習会）	前川美紀子、学外講師	一般市民（大学生以上）
ハブ対策講座	新垣裕治、学外講師	一般市民（中学生以上）
ヤンバルの森を舞う蝶と環境	田代豊、学外講師	一般市民（中学生以上）
誤用から学ぶ中国語形容詞の使い方	賀南	一般市民
東屋部川ナイト・カヌー探検	なぐまさの会、新垣裕治	一般市民（小学生以上）（小・中学生は保護者同伴）

## 2021 (令和3) 年度

講座名	講師名	対象者
ハブ（蛇）対策講座	学外講師	一般市民（大学生以上）
FC琉球コーチによるキッズサッカー教室 FC琉球コラボ企画	前川美紀子、仲田好邦、学外講師	一般市民（大学生以上）
人生100年時代を健康に生きる力（ヘルスリテラシー）向上講座 専門医が教える「肝臓の健康を守るコツ」	島袋尚美	一般市民（大学生以上）
自然体験活動におけるインターパリテーション論	新垣裕治、学外講師	一般市民（大学生以上）
統計入門講座Excelによるデータ分析、仮説検定、回帰分析	仲程基経	一般市民（大学生以上）

## 2022 (令和4) 年度

講座名	講師名	対象者
「これからの世代のために社会を変えるには」－地球と地域の環境を巡る世代間利害相反と若者の活動－	田代豊、岩野さおり（フライデイ・フォー・フューチャー・ジャパン） 真喜屋美樹（沖縄持続的発展研究所）	一般市民
救急法救急員養成講習会（赤十字救急法救急員養成講習会）	日本赤十字社救急法指導員（講師：5名）前川美紀子、新垣裕治	一般市民
ハブ（蛇）対策講座	新垣裕治、学外講師	一般市民
東屋部川ナイト・カヌー探検	なぐまさの会、新垣裕治	一般市民
からだを弛めてリラックスしなやかに動けるからだづくり動作法講座	神谷義人、金城淳、金城太志	一般市民
観光・体験ガイド養成講座	小林政文（ホールアース自然学校沖縄校がじゅまる自然学校）	一般市民


**名桜大学公開講座一覧**

2023（令和5）年度

講座名	講師名	対象者
ハブ（蛇）対策講座	新垣 裕治、学外講師	一般市民
救急法救急員養成講習会（赤十字救急法救急員養成講習会）	前川 美紀子、日本赤十字社救急法指導員（講師：5名）	一般市民
東屋部川ナイト・カヌー探検	なぐまさの会、新垣 裕治	一般市民(小学生以上及び保護者同伴)
FC琉球コラボ企画第3弾！FC琉球コーチによる キッズサッカー教室	FC琉球コーチ・選手	小学生（保護者同伴）
パラ知ル FIT in 沖縄 パラスポーツが地域を育む 誰もが自分らしくくらせる地域づくり	パラリンピアンズ協会 河合 純一、三阪 洋行 沖縄ハリケーンズ 仲里 進	一般市民
からだを弛めてリラックス しなやかに動けるからだづくり動作法講座	神谷 義人、金城 淳（理学療法士、Lifewave）、金城 昇	一般市民（60歳までの方）
観光・体験ガイド養成講座	小林 政文（ホールアース自然学校沖縄校がじゅまる自然学校）	一般市民
統計入門講座 ~ Excelによるデータ分析、仮説検定、回帰分析~	仲程 基経	一般市民
中国語講座	山城 智史、李 梦迪	一般市民
沖縄近海の生物	(沖縄美ら島財団総合研究所) 野中 正法、富田 武照、宮本 圭、前田 好美	一般市民
沖縄の歴史文化	(沖縄美ら島財団総合研究所) 鶴田 大、嘉手苅 なつき、幸喜 淳、佐久本 純	一般市民
沖縄の植物	(沖縄美ら島財団総合研究所) 阿部 篤志、佐藤 裕之、砂川 春樹	一般市民

2024（令和6）年度

講座名	講師名	対象者
現代短歌の世界	穂村 弘（歌人）、屋良 健一郎	一般市民
ハブ（蛇）対策講座	寺田 孝紀（沖縄県衛生環境研究所主任研究員）	一般市民
東屋部川ナイト・カヌー探検	なぐまさの会、新垣 裕治	一般市民
救急法救急員養成講習会（赤十字救急法救急員養成講習会）	日本赤十字社救急法指導員、前川 美紀子	一般市民
からだを弛めてリラックスしなやかに動けるからだづくり動作法講座	金城 昇、神谷 義人	一般市民
観光・体験ガイド養成講座	小林 政文（ホールアース自然学校沖縄校）	一般市民
中国語公開講座	山城 智文、李 梦迪	一般市民
統計入門講座 ~ Excelによるデータ分析、仮説検定、回帰分析~	仲程 基経	一般市民
沖縄美ら島財団連携講座 「沖縄の歴史文化」	(沖縄美ら島財団) 中野 稚里、高嶺 瑞貴、鶴田 大、嘉手苅 なつき、泉 千尋	一般市民
沖縄美ら島財団連携講座 「沖縄の動物」	(沖縄美ら島財団) 富田 武照、宮本 圭、笹井 隆秀、小林 希実	一般市民
沖縄美ら島財団連携講座 「沖縄の植物」	(沖縄美ら島財団) 松原 智子、砂川 春樹、米倉 浩司	一般市民
中国語公開講座（初級）	山城 智史	一般市民
中国語公開講座（中級）	李 梦迪	一般市民
琉球に対する日・米・清の歴史認識 -ペリー来航から琉球処分まで-	山城 智史	一般市民


**名桜大学地域出前講座一覧**

2015（平成27）年度

講座名	講師名	機関・団体名	対象者
海外活動体験から「いま」活かせること	金城 壽子	名護市民生委員、児童委員協議会	名護市民生委員児童委員
精神障害者とのかかわり方	伊礼 優	名護市民生委員、児童委員協議会	名護市民生委員児童委員
「心肺蘇生法-ガイドライン2010-」みんなで学ぼう救急救命法（心肺蘇生法とAEDの実施手順）	山本 薫	医療法人博寿会もとぶ記念病院	看護師看護助手
目でみるがん細胞のかたち	大城真理子	名護市大西区公民館	一般市民
高齢者に多い拘縮（関節の運動障害）について	金城 利雄	今帰仁村古宇利区公民館	一般市民
最新の健康運動を楽しく実践！ -JOYBEATを利用した健康教室-	高瀬 幸一	名護市呉我区公民館	一般市民
ファーストフードの秘密「知ると怖い食べ物」	高瀬 幸一	名護市古我知区公民館	一般市民
・精神障害者とのかかわり方・うつ病の早期発見 ・自殺への正しい理解	伊礼 優	県立名護高等学校	教職員
相手をその気にさせる心理学	木村 堅一	恩納村立仲泊小中学校	教諭
動脈硬化予防・改善のための運動講座	山本 薫	今帰仁村役場(今帰仁保健センター)	食生活改善推進委員
自宅でエクササイズ	東恩納玲代	県立名護特別支援学校	名護特別支援学校寄宿舎指導員
歌で学ぶ韓国語のあいさつ	許 点淑	県立南風原高等学校	沖縄県代表訪韓予定の生徒
目でみるがん細胞のかたち	大城真理子	北部地域ITまちづくり協働機構	一般市民、琉球大学地域医療研究会
沖縄の健康が危ない	高瀬 幸一	名護市立中央図書館	一般市民
認知症のことを知りたいと思いませんか	永田美和子	本部町婦人会	本部町婦人会
北部地域の医療の現状を知る	大城真理子	特定非営利活動法人結の里	介護支援専門員
キネステティク -持ち上げない体の動かし方を体験しよう-	大城 凌子 伊波 弘幸	特定非営利活動法人結の里	介護事業所職員
福祉と教育 ~子どもを支える大人をつなぐ~	竹沢 昌子	名護市要保護児童対策地域協議会	要対協実務者及び関係機関
キネステティク -持ち上げない体の動かし方を体験しよう-	大城 凌子 伊波 弘幸	NPO法人ぐぐく会デイサービスふさと苑	施設職員
福祉と教育 ~子どもを支える大人をつなぐ~	竹沢 昌子	北部地区民生委員、児童委員協議会	北部市町村民生委員
健康長寿県長野に学ぼう	高瀬 幸一	北部地区民生委員、児童委員協議会	北部市町村民生委員
あなたの気持ち、うまく伝わっている？	金城 亮	沖縄県企画部統計課	家計調査員
高齢者に多い拘縮（関節の運動障害）について	金城 利雄	NPO法人ぐぐく会デイサービスふさと苑	施設職員
最新の健康運動を楽しく実践！-JOYBEATを利用した健康教室-	高瀬 幸一	名護市赤十字奉仕団	名護市赤十字奉仕団団員
「心肺蘇生法-ガイドライン2010-」みんなで学ぼう救急救命法（心肺蘇生法とAEDの実施手順）	山本 薫	医療法人博寿会もとぶ記念病院	看護師看護助手
正しい油の知識で健康を手に入れよう ～脂質の代謝と生理学的なお話～	高瀬 幸一	名護市古我知区公民館	一般市民
キネステティク -持ち上げない体の動かし方を体験しよう-	大城 凌子	名護市役所市民福祉部社会福祉課	生活保護対象者
沖縄の健康が危ない最新の健康運動を楽しく実践	高瀬 幸一	県立北部農林高等学校	職員定時制学生
糖尿病ってなあに -急増する沖縄県の糖尿病-	高瀬 幸一	伊江村役場	一般住民
福祉と教育 ~子どもを支える大人をつなぐ~	竹沢 昌子	沖縄県北部福祉保健所	市町村母子担当者
自宅でエクササイズ	東恩納玲代	名護市役所健康増進課	名護市食生活改善推進員


**名桜大学地域出前講座一覧**

2016 (平成28) 年度

講座名	講師名	機関・団体名	対象者
最新の健康運動を楽しく実践！ -JOYBEATを利用した健康教室-	高瀬 幸一	名護市古我知公民館	一般市民
出張健康鑑定団！あなたの健康度測定してみませんか？	高瀬 幸一	名護市古我知公民館	一般市民
ウォーキング、ジョギング講座 -科学的知見からのアプローチ-	高瀬 幸一	名護市古我知公民館	一般市民
キネステティク -持ち上げない体の動かし方を体験しよう-	伊波 弘幸	NPO法人ぐすく会デイサービスふさと苑	一般市民
精神障害者の家族支援	伊礼 優	国頭村立保健センター	一般市民
「心肺蘇生法-ガイドライン2015」-みんなで学ぼう救急救命法（心肺蘇生法とAEDの実施手順）-	山本 薫	介護老人保健施設もとぶふくぎの里	施設職員
摂食・嚥下障害を考える-むせなければ安全でしょうか?-	金城 利雄 (加藤 節子)	NPO法人ぐすく会デイサービスふさと苑	一般市民
介護予防・機能回復運動を楽しく実践FESTAを利用した易しい運動教室	高瀬 幸一	古宇利農村環境改善サブセンター	一般市民
セルフコーチング	仲田 好邦	県立名護特別支援学校	寄宿舎指導員、舍監
摂食・嚥下障害を考える-むせなければ安全でしょうか?-	金城 利雄	さわやか介護連絡会北部支部	一般市民
「心肺蘇生法-ガイドライン2015」-みんなで学ぼう救急救命法（心肺蘇生法とAEDの実施手順）-	山本 薫	県立陽明高等学校	教職員
相手をその気にさせる心理学 (対人コミュニケーション論入門)	木村 堅一	県立名護特別支援学校	寄宿舎指導員、舍監
正しい油の知識で健康を手に入れよう ～脂質の代謝と生理学的なお話～	高瀬 幸一	県立名護特別支援学校	寄宿舎指導員、舍監
キネステティク-持ち上げない体の動かし方を体験しよう-	伊波 弘幸	沖縄愛楽園	職員
健康の維持・増進、老化防止に役立つ食べ物 -科学的エビデンス（証明）をもとに-	高瀬 幸一	名護地区ろうきん友の会	一般
最新の健康運動を楽しく実践！ -JOYBEATを利用した健康教室-	高瀬 幸一	北部保健所	労働衛生管理推進大会参加者
沖縄の健康が危ない！	高瀬 幸一	名護市社会福祉課	職員
最新の健康運動を楽しく実践！ -JOYBEATを利用した健康教室-	高瀬 幸一	名護市社会福祉課	職員
セルフコーチング	仲田 好邦	名護すいらんマリーンズ	監督・コーチ、保護者
沖縄発国際協力の可能性	小川寿美子	金武町立図書館	一般市民
健康づくりのための身体活動基準2013、身体活動指針 (アクティブガイド)「1日10分プラスで健康になろう！」～実践編～	山本 薫	名護市役所健康増進課	食生活改善推進養成講座受講生
いただきますの意味を考えよう	高瀬 幸一	県立名護特別支援学校	寄宿舎指導員、舍監、保護者
出張健康鑑定団！あなたの健康度測定してみませんか？	高瀬 幸一	名護市古我知公民館	一般市民
沖縄の健康が危ない！	高瀬 幸一	宮里区老人会	老人会
健康づくりのための身体活動基準2013、身体活動指針 (アクティブガイド)「1日10分プラスで健康になろう！」～実践編～	山本 薫	名護市保健推進員	保健推進委員
出張健康鑑定団！あなたの健康度測定してみませんか？	高瀬 幸一	伊江村役場住民課国保係	特定保健指導者対象者、一般
ウォーキング、ジョギング講座-科学的知見からのアプローチ	高瀬 幸一	伊江村役場住民課国保係	特定保健指導者対象者、一般

2017 (平成29) 年度

講座名	講師名	機関・団体名	対象者
琉球と薩摩の交流史	屋良健一郎	県立球陽高校	国際英語科2年生
現代ママへの子育てサポート ～新しい情報で楽しい育児を支援しよう～	小柳 弘恵	本部町役場保険予防課	母子推進員、保険所、市町村職員
自宅でエクササイズ！	東恩納玲代	NPO法人ぐすく会デイサービスふさと苑	職員、一般
介護予防・機能回復運動を楽しく実践！ -FESTAを利用した易しい運動教室-	高瀬 幸一	古宇利農村環境改善センター	古宇利区民
あなたの気持ち、うまく伝わってる？(人間関係論入門)	金城 亮	名護特別支援学校寄宿舎	指導員、教諭
看取り(End-of-Life-Care) -誰かを看とり、誰かに看とられるために-	大城 凌子	NPO法人ぐすく会デイサービスふさと苑	職員、一般
健康長寿県長野に学ぼう	高瀬 幸一	名護地区ろうきん友の会	友の会会員
月経前症候群(PMS)と対処法について	小西 清美	沖縄県高等学校養護教諭研究会	養護教諭
「相手の立場になって考える」とは	名城 一枝 安里 葉子	介護老人保健施設もとぶふくぎの里	施設職員
沖縄発 国際協力の可能性	小川寿美子	県立球陽高校	国際英語科2年生
短歌をよむ	屋良健一郎	今帰仁村社会福祉協議会	村内の中高年
観光接客実用中国語①～⑧	中山 登偉	大西公民館	一般市民
認知症の事を知りたいと思いませんか	永田美和子	(有)介護センターかんな	施設職員他
介護予防・機能回復運動を楽しく実践！ -FESTAを利用した易しい運動教室-	高瀬 幸一	本部町北里公民館	ミニデイ参加者
ファーストフードの秘密「知ると怖い食べ物」	高瀬 幸一	北部地区高体連	学生、職員
健康の維持・増進、老化防止に役立つ食べ物 -科学的エビデンス（証明）とともに-	高瀬 幸一	本部町北里公民館	ミニデイ参加者
キネステティク～持ち上げない体の動かし方を体験しよう～	大城 凌子	(有)介護センターかんな	介護職員
最新の健康運動を楽しく実践！ -JOYBEATを利用した健康教室-	高瀬 幸一	伊江村役場	一般市民
出張健康鑑定団！あなたの健康度測定してみませんか？	高瀬 幸一	伊江村役場	一般市民
「相手の立場になって考える」とは	名城 一枝 安里 葉子	(有)介護センターかんな	施設職員
ちゃーがんじゅう健康セミナー	比嘉 憲枝	東村福祉保健センター	一般市民
観光接客実用中国語①～⑧	中山 登偉	大西公民館	一般市民

## 名桜大学地域出前講座一覧

### 2018（平成30）年度

講座名	講師名	機関・団体名	対象者
認知症のこともっとしりたいと思いませんか	永田美和子	(有)介護センターかんな	施設職員
看取り（End-of-Life-Care） －誰かを看とり、誰かに看とられるために－	大城 凌子	沖縄県さわやか介護連絡会北部支部	支部会員
認知症のこともっとしりたいと思いませんか	永田美和子	NPO法人ぐすく会デイサービスふさと苑	職員・家族
自宅でエクササイズ！	東恩納玲代	名護特別支援学校寄宿舎	職員
自宅でエクササイズ！	東恩納玲代	生活支援課就労支援員中央図書館	一般
健康の維持・増進、老化防止に役立つ食べ物	高瀬 幸一	本部町「つわぶきの会」	会員
最新の知見を応用しながら健康寿命について考えよう	高瀬 幸一	嘉陽公民館	区民
ちゃーがんじゅう健康セミナー	比嘉 憲枝	東村地域包括支援センター	一般
ジュニアアスリートのための食事法 ～強くなるための食品選び～	奥本 正	県立名護高校	部員、保護者
介護予防・機能回復運動を楽しく実践！ －FESTAを利用した易しい運動教室－	高瀬 幸一	宮里100歳体操クラブ	宮里区老人会
最新の知見を応用しながら健康寿命について考えよう	高瀬 幸一	瀬嵩公民館	区民
糖尿病ってなあに－急増する沖縄県の糖尿病－	高瀬 幸一	名護市健康増進課	名護市保健推進委員
介護予防・機能回復運動を楽しく実践！ －FESTAを利用した易しい運動教室－	高瀬 幸一	本部町役場地域包括支援センター	65歳以上のミニデイ参加者

### 2019（令和元）年度

講座名	講師名	機関・団体名	対象者
認知症のことを知りたいと思いませんか	永田美和子	名護市地域包括支援センター	ミニデイサービスに参加する高齢者、老人会
メタボリック症候群 －メタボを理解して生活習慣病を予防しよう－	高瀬 幸一	名護市役所健康増進課	食生活改善推進員
子どもと語ろう性教育～思春期の子供たちの性の現状を把握し、命の大切さを伝えていきませんか～	長嶺絵里子	県立名護特別支援学校	名護特別支援学校職員
ファーストフードの秘密	高瀬 幸一	名護市役所生活支援課生活サポート係	一般市民
出張健康鑑定団 あなたの健康度測定してみませんか	高瀬 幸一	名護地区ろうきん友の会	一般市民
認知症のことを知りたいと思いませんか	永田美和子	名護市地域包括支援センター	ミニデイサービスに参加する高齢者、老人会
ヒューマンエラーの心理学	金城 亮	北部支部高校養護教諭研究会	養護教諭
オリンピックの歴史	大峰 光博	(一社) 沖縄県労働基準協会北部支部	北部地区事業所
戦後沖縄の子どもと社会	嘉納 英明	沖縄科学技術大学院大学 (OIST)	OIST, PhD学生
認知症のことを知りたいと思いませんか	永田美和子	名護市地域包括支援センター	ミニデイサービスに参加する高齢者、老人会
ちゃーがんじゅう健康セミナー	比嘉 憲枝	東村地域包括支援センター	一般市民

### 2022（令和4）年度

講座名	講師名	機関・団体名	対象者
レクリエーションスポーツ	東恩納玲代	名護市21世紀の森屋内運動場	小学生以上30人以上
アニメのプログラムを作ってみよう	ピーター・アラスーン	あけみおSKYドーム・会議室	7歳から17歳 10人
自宅でエクササイズ	東恩納玲代	体育館・寄宿舎ロビー	名護特別支援学校14人
健康の維持・増進、老化防止に役立つ食べ物 －科学的エビデンス（証明）をもとに－	高瀬 幸一	北部会館3階	80～100人
沖縄の健康が危ない！～健康長寿を取り戻そう～	高瀬 幸一	名護市中央公民館第1・2会議室 21世紀の森体育館 会議室	名護市食生活改善推進協議会 会養成講座20人
子育て広場～気分転換しながら育児の時間～	大浦 早智	マハイナウェルナスリゾート MHN 津梁の間	

### 2023（令和5）年度

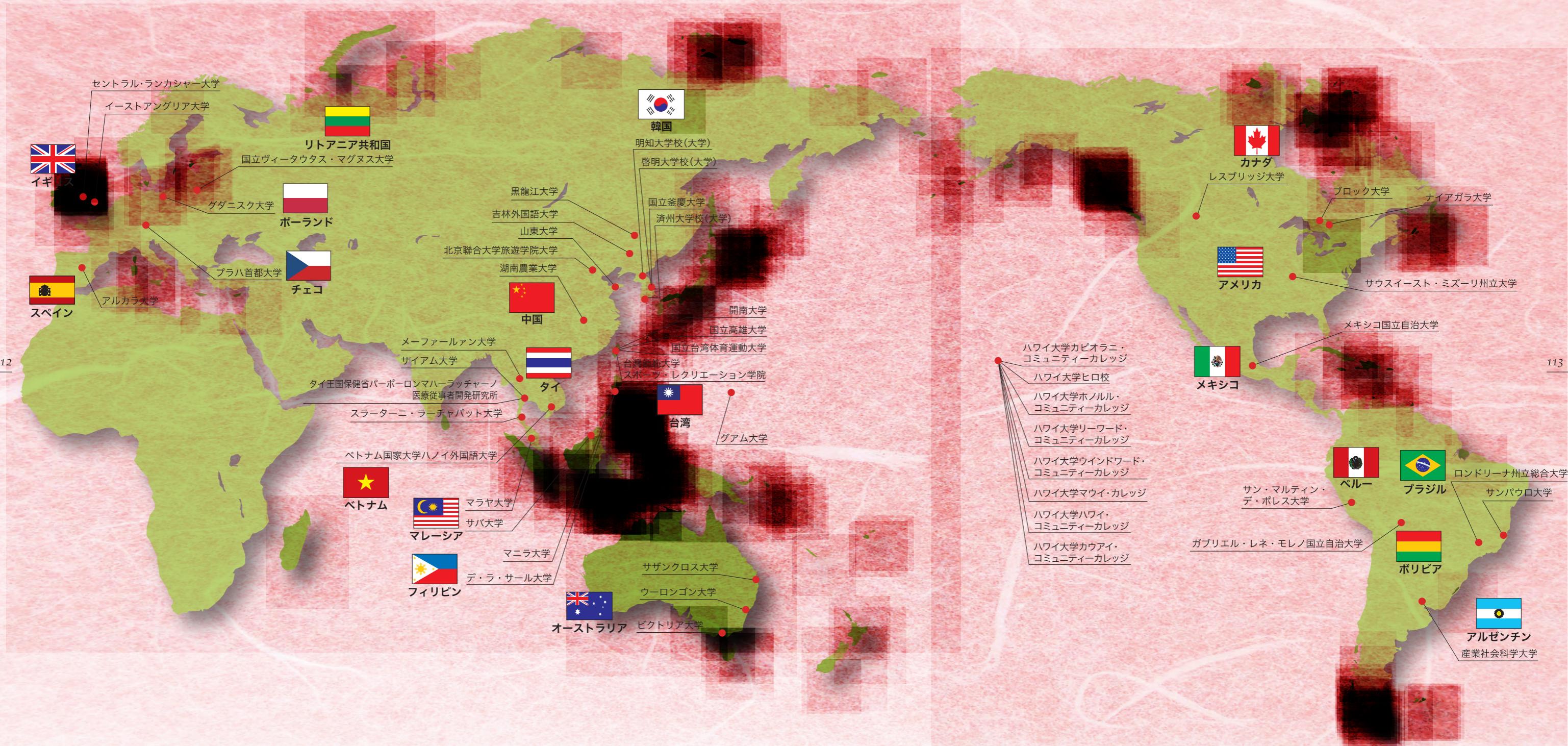
講座名	講師名	機関・団体名	対象者
キネステティク －持ち上げない体の動かし方を体験しよう－	伊波 弘幸 大城 凌子	名護市大浦区	大浦区民ミニデイ
琉球語ってどんなことば？	麻生 玲子	名護市大浦区	大浦区民ミニデイ
琉球と薩摩or現代短歌の鑑賞	屋良健一郎	名護市大浦区	大浦区民ミニデイ
防災教育：守ろういのちと生活	松下 聖子	沖縄県労働基準協会北部支部	北部地区安全管理推進大会
ハンドボールをやってみよう	仲田 好邦	名護市青少年育成協議会屋部支部	地域のスポーツ指導者や保護者等
超やさしい情報リテラシー入門	島 康貴	屋我地支所	3世代交流に参加する保護者
看取り（End-Life-Care） －誰かを看取り、誰かに看取られるために－	大城 凌子	今帰仁村中央公民館	シルバー学級受講生
第二言語習得研究と効果的な英語学習法	渡慶次正則	名護中央公民館	住民
相手をその気にさせる心理学（対人コミュニケーション）	木村 堅一	南城市民生委員、児童委員連絡協議会	民児委員、職員
看取り（End-Life-Care） －誰かを看取り、誰かに看取られるために－	大城 凌子	南城市民生委員、児童委員連絡協議会	民児委員、職員
キネステティク －持ち上げない体の動かし方を体験しよう－	伊波 弘幸 大城 凌子	名護市大東区健寿老人会	住民
防災教育：守ろういのちと生活	松下 聖子	東村役場	東村民
琉球語ってどんなことば？	麻生 玲子	もとぶ記念病院	職員、患者
看取り（End-Life-Care） －誰かを看取り、誰かに看取られるために－	大城 凌子	名護市社会福祉協議会	職員

### 2024（令和6）年度

講座名	講師名	機関・団体名	対象者
健康の維持・増進、老化防止に役立つ食べ物 －科学的エビデンス（証明）をもとに－	高瀬 幸一	名護市役所生活支援課	利用者、職員
災害発生時における被災者と支援者への心のケア	松下 聖子	南城市社会福祉協議会	民生・児童委員、職員
同窓会で差をつけよう －最新の科学から老化を防ごう－	高瀬 幸一	南城市社会福祉協議会	民生・児童委員、職員
糖尿病ってなあに－急増する沖縄県の糖尿病－	高瀬 幸一	医療法人中央外科	職員、当院患者
キネステティク －持ち上げない体の動かし方を体験しよう－	伊波 弘幸	いきいきゆんたくケア	地域住民
看取り（End-Life-Care） －誰かを看取り、誰かに看取られるために－	大城 凌子	今帰仁村教育委員会	シルバー学級受講生
看取り（End-Life-Care） －誰かを看取り、誰かに看取られるために－	大城 凌子	いきいきゆんたくケア	地域住民
相手をその気にさせる心理学 (対人コミュニケーション論入門)	木村 堅一	今帰仁村社会福祉協議会	職員



## 大学間交流

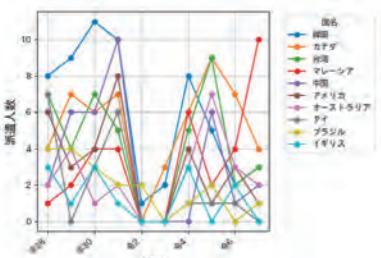


## 国際交流を通じた人材育成と地域貢献の未来 —創立30周年を迎えて—

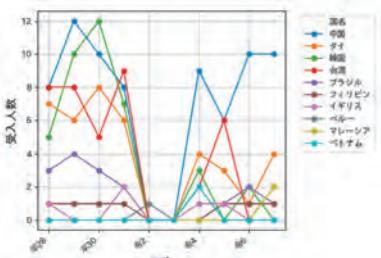
本学は、「平和を愛し、自由を尊重し、人類の進歩と福祉に貢献する国際的教養人と専門家の育成」という建学の精神のもと、教育・研究・地域貢献を三本柱とした多様な取り組みを進めてまいりました。なかでも国際交流は、本学の理念を具現化する重要な柱の一つです。異なる文化や価値観をもつ人々との出会いを通じて、学生一人ひとりが視野を広げ、平和的共存と相互理解を学ぶ重要な場として、また学生・教職員双方の学びと成長を促す大きな力となっております。

この数年、私たちは新たな課題と可能性の両方に直面してきました。新型コロナウイルス感染症の影響により、対面での国際交流は一時的に制限されました。一方で、オンライン交流や学内留学プログラムを通じ、時代に即した柔軟な国際教育の形が模索されました。多くの国内外の大学も同様に新しい手法を試行錯誤し、その知見は本学にとっても貴重な学びとなりました。

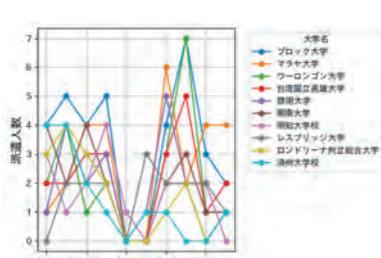
現在、ポストコロナの流れの中で、対面での交流が再び活発化し、学生の派遣や留学生の受入も徐々に回復傾向にあります。直近10年間の実績について、派遣では台湾、中国、韓国などのアジア圏の国々、そしてカナダやオーストラリアなどの英語圏の国々との交流が特に盛んです。また、2023（令和5）年度以降、マレーシアの派遣人数が増加しています（図1：国別派遣人数推移）。受入では中国、台湾、タイからの学生が多数を占め、特に中国からの学生は2021（令和3）年度以降、2023（令和5）年度に減少したものの、増加傾向にあります（図2：国別受入人数推移）。これは、本学の国際教育が、特定の地域に偏ることなく、多様な国や地域との双方向の交流を築けていることを示しています。



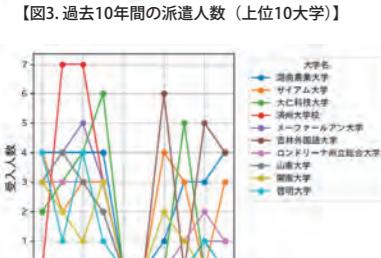
【図1.過去10年間の派遣人数（上位10カ国）】



【図2.過去10年間の受入人数（上位10カ国）】



【図3.過去10年間の派遣人数（上位10大学）】



【図4.過去10年間の受入人数（上位10大学）】

（国際交流センター長 本村 純）

## 名桜大学の国際交流 —海外交換留学を中心に—

私は2008（平成20）年に名桜大学に入職し、役職定年した2025（令和7）年3月までの17年間、一筋に本学の国際交流の促進に携わってきました。この項では、「名桜大学20年史」が刊行された2014（平成26）年以降の本学の国際交流について、国際交流協定大学の締結を年代順に振り返り、合わせて本学の海外交換留学制度の特徴、改善し続けるサポート体制、新たな取り組みと今後の課題、留学前と留学後の学生の変化について述べます。

### 国際交流課への昇格と国際交流センターの設置

本学は、「平和・自由・進歩」という基本理念、「国際社会で活躍できる人材を育成する」という教育理念のもと、1994（平成6）年の開学以来、国際交流を推進してきました。従来、学生部学生課国際交流係はその役割を担っていましたが、更なる国際交流を発展させるため、2015（平成27）年、当時の山里勝己学長と金城正英事務局長が、国際交流係を国際交流課に昇格させ、私を国際交流課長に任命しました。そして、グローバルの時代にふさわしい高等教育機関として眞の国際教養人を育成するためには、学生交流をリードする教員間の国際的学術交流も重要だということで、教員全体も国際交流に関わるという目的で、国際交流センターを設立しました。国際交流センターでは、各学部・学科から選出された教員が委員に就任しました。これは開学以来、国際交流を推進してきた本学において、本当に画期的な出来事だったと思います。

### 国際交流協定大学の新規開拓

#### 10年間で倍増

2014（平成26）年に28校だった国際交流協定大学（以下、協定校）は、2025（令和7）年7月現在で50校にまで増加しています。この10年で、約2倍に増えたわけです。私が本学に入職した2008（平成20）年の時点では、国際交流協定大学は14校。受け入れ留学生は2人、派遣留学生は7人しかいませんでした。それが、国際交流センターが設立された2015（平成27）年には、34人の留学生を受け入れるまでになりました。17倍の増加です。派遣留学生も5倍以上の38人に増えています。

#### 各地域の協定校の増加と地域の拡大

本学の国際交流は、環太平洋地域が中心でしたが、2010（平成22）年に私立大学法人化してからは、県内外から、さらにさまざまな希望を持った学生が集まるようになりました。学生から環太平洋地域だけではなく、ヨーロッパへ留学したいという要望も高まっています。よって、この10年間は、各地域の協定校の数を増やしつつ、ヨーロッパの協定校も開拓するという大きな方針で進めてきました。2014（平成26）年以降に開拓した協定校を年代順に紹介します。まず2016（平成28）年に、5校と立て続けに協定を結びました。2月にペルーのサン・マルティン・デ・ポレス大学、4月に台湾の国立高雄大学、6月に中国の山東大学、8月にカナダのレスブリッジ大学、10月に台湾師範大学スポーツ・レクリエーション学院（部局間の協定のため、派遣はスポーツ健康学科の学生のみ）。2017（平成29）年には、2月に韓国の国立釜慶大学、5月にフィリピンのデ・ラ・サール大学、8月にアメリカのハワイ大学カピオラニ・コミュニティーカレッジ。2018（平成30）年には、11月にスペインのアルカラ大学。2019（令和元）年には1月にタイ王国保健省パートナーランマハーラッチャーノ医療従事者開発研究所（現在学生の派遣は行いません。看護学科との部局間協定）、9月に中国の吉林外国语大学、11月に黒龍江大学と協定を締結しました。2020（令和2）年はコロナ禍が起

り、留学生の交換は一時滞ってしまいましたが、協定校の新規開拓は継続的に進めました。2020（令和2）年の1月にベトナム国家大学ハノイ外国語大学、2月にイギリスのイーストアングリア大学（現在学生の派遣は行っていません。国際学群との部局間協定）。2021（令和3）年には、5月にタイのスラータニ・ラーチャパット大学、6月にリトアニア共和国の国立ヴィータウタス・マグヌス大学。2022（令和4）年の12月に台湾の国立台湾体育運動大学運動産業学院（スポーツ健康学科との部局間協定）。2023（令和5）年には、アメリカのハワイ大学のホノルル、リーワード、ウインドワード、マウイ、ハワイ、カウアイの各コミュニティーカレッジと一緒に協定を結びました。2024（令和5）年には、3月にオーストラリアのビクトリア大学とサザンクロス大学、9月にブラジルのサンパウロ大学、12月にマレーシアのサバ大学。そして2025（令和7）年には、1月にポーランドのグダニスク大学、2月にチェコの首都大学が協定校に加わりました。

## 協定校選定の基準

### 専攻とのマッチング

協定校選定は、まず学生の専攻とマッチングする大学かどうかを基準とします。留学に行くには、専攻の勉強を深めることができる大学というのが最初の基準となります。同時に、専攻が同じであれば、教員も共同研究がしやすいという側面もあります。専攻から考えると、環太平洋地域が中心となってきます。開学当時は、国際文化学部の中南米コース・東南アジアコース、そして語学教育（国語、英語）が本学の3つの柱でした。そのため、最初はこの3つの地域に特化していました。

### 東南アジア・東アジア

1994（平成6）年の開学当時は、東南アジアの経済発展が進んでいました。そのため、2007（平成19）年の時点で東南アジア5校と協定を結んでいました。一方、中国はなぜか1校も協定校はありませんでした。2008（平成20）年の北京オリンピックを機に、中国もこれからの経済発展の中で必要になってくるだろうということで、2008（平成20）年に2校と締結したのを皮切りに、中国の協定校を増やしていきました。東アジアでは、もちろん、台湾と韓国にも力を入れています。韓国は、韓流ブームという背景もありました。要は国際情勢に合わせて、学生のニーズに応えて、協定校を増やしてきたということです。

### 中南米

中南米については、本学では開学当時から中南米コースがあり、国際交流に力を入れてきました。なぜ中南米を重要視しているかというと、やんばる地域からたくさんのウチナーンチュが移民しており、地域的・血縁的なつながりが深いためです。中南米との交流は、本学にとって重要であり、今後もずっと続していくことでしょう。

### 英語圏・ヨーロッパ

英語圏がなぜ重要なかというと、英語は国際的な共通語であり、日本国内でも就職の際に英語力は欠かせないからです。しかも本学には語学教育専攻もありましたので、なおさらです。そのため、できるだけ英語圏の協定大学を増やす努力を重ねてきました。近年では、円安の影響もあり、英語圏に留学したいけれどなかなか難しいという事情もあります。そこで、非常にきれいな英語を使っているマレーシアとも協定を締結しました。ヨーロッパの伝統文化は、学生にとって非常に魅力的に感じられるようです。ですから、ヨーロッパの文化に触れたいというニーズがあります。実際、国際文化学部の国際文化学科の学生に「なぜ名桜大学は、ヨーロッパの協定校が少ないのか？」と言わされました。特に女子学生からは、ジェンダーの先進地域であるヨーロッパでジェンダーについて勉強したいという要望が高まっています。

## 名桜大学海外交換留学の特徴

### 単位交換制度

本学の交換留学制度の大きな特徴は、1年間留学しても4年間で卒業可能という点です。単位交換制度により、協定校で取得した単位を本学の単位に読み替えることができます。

### 授業料相互免除制度

授業料相互免除制度もあり、協定校とは、お互いに授業料を免除し合っています。ただし、英語圏の一部には、人気がありすぎて授業料が免除できない協定校もあります。その場合、本学の授業料を免除する措置を取ります。本学の授業料を奨学金として留学費用にあててください、ということですね。これは授業料が免除されない協定校に留学したい学生にとって非常に助かる制度です。

### 海外派遣留学奨学金制度

私たちは学生の留学を促進するため協定校を増やしてきましたが、経済的に留学が難しい学生もいます。国際交流センターができてすぐ、経済的に困っている優秀な学生を留学支援しましょうということで奨学金制度を提案しました。2017（平成29）年から、毎年、学業成績と家庭収入を基準に選定した15人を支援してきました。英語圏、中南米は年間1人50万円、アジアの場合は25万円を支給しています。これは、留学に行きたくても行けない学生にとって大きな手助けになっていると思います。一方、受入れ留学生に関しては、海外に移民したウチナーンチュの子弟を、おじい・おばあの故郷へ勉強しに来られるよう支援しています。本学の瀬名波榮喜名誉学長が、旧・沖縄県立農林学校の同窓会のメンバーである縁から、瀬名波名誉学長および同窓会と話し合い、3,000万円を寄付金していただいて奨学金制度を作りました。中南米からの受入れ留学生も、中南米への派遣留学生も支援しています。この制度は10年経過した今でも続いています。

## 改善し続けるサポート体制

### 派遣留学生へのサポート体制

留学生を協定校に送り出すにあたっては、「危機管理保険」と「海外留学保険」のダブルセキュリティをかけています。また、留学前にはオリエンテーションを実施し、国別の注意事項を説明しています。留学中には、学期ごとに「現状報告書」の提出を義務付け、生活と学習状況を確認しています。さらに帰国後には「終了報告書」を提出してもらっています。派遣留学生の報告書は国際交流課の情報コーナーに協定校別にファイリングして、次期留学生への情報提供に活用しています。毎年、前期・後期の2回、留学生を派遣しますが、送り出す6ヶ月前に留学フェアを開催しています。留学フェアでは、私たちが全体的なことを説明しますが、地域ごとに設けているブースでは、帰国した派遣留学生にも留学希望学生の相談や質問に対応してもらっています。また、同時に会場で海外留学中の派遣留学生とZoom（ズーム）でつなぎ、リアルタイムで留学先の現状を説明してもらっています。

### 受入れ留学生のためのサービス

海外交換留学は、“Give & Take”的精神が大事です。学生を交換しなければ成り立ちません。派遣するからには、協定校の学生も受け入れます。送つてこない場合は、「どうぞ送ってください」と呼びかけます。「なぜ来ないの？ 本学には何が足りないの？」と率直に聞くことも重要です。できるだけ協定校の学生の方に来てもらえるように、努力して体制を整えています。具体的なサービスは大きく次の4つです。

① 入学時と帰国時の空港送迎。本人もご家族も見知らぬ国への留学は不安があるでしょうから、本学は空港から遠いので必ず私たちが送迎し、母国にも無事に到着しましたと報告します。受入れ留学生が少なかった時には、1人ず

私たちが空港まで送迎に行っていました。1日に2、3回迎えに行ったこともあります。今は留学生の数も増えたので、同じ日時に空港に来てもらい、私たちはバスで迎えに行きます。帰国時は、今でも個別に送ることもあります。

② 安価な受入れ留学生専用寮の提供。大学の入口付近に、4階建て・100室の留学生専用寮である「留学生センター」があります。留学生専用寮は、県内では琉球大学・OISTそして本学にしかありません。Wi-Fi、キッチン、バス、トイレ、冷蔵庫、食器棚、ベッド、クーラーが完備しており、留学生はベッド用品のほかは何も準備する必要はありません。自炊も可能です。各フロアには無料の洗濯機も設置しています。この寮を月1万円という安価な寮費で提供しています。

③ 全学規模の「留学生新歓パーティ」、「留学生タレントコンテスト&忘年会」、「送別会」などの開催。留学生新歓パーティは、新入受入れ留学生による自己紹介、食事タイム、集合写真、記念撮影などのプログラムで構成されています。留学生新歓パーティには、日本人学生との交流の場を提供するという目的もあります。友だちになれば、お互いに勉強をサポートし合えるようになります。年末の留学生タレントコンテスト&忘年会は、受入れ留学生に母国や日本・沖縄の文化を音楽や舞踊などで発表してもらっています。審査員が審査し、記念品も渡しています。送別会は、修了証授与式、食事タイム、記念撮影というプログラムです。

④ 受入れ留学生の沖縄への理解を深めるための学外活動。6月23日の慰靈の日には、南部へのフィールドトリップを実施しています。なぜ南部かというと、本学の基本理念は平和・自由・進歩だからです。受入れ留学生に対して平和教育を行うため、摩文仁の丘の沖縄県営平和祈念公園に連れて行き、沖縄県平和祈念資料館を見学してもらっています。その後は、沖縄の伝統・文化を知ってもらうため首里城を見学します。後期末には、名護さくら祭りや今帰仁グスク桜まつりに参加して地域の文化に触れてもらい、海洋博公園で沖縄の自然に触れてもらっています。フィールドトリップを通して、座学で勉強できないことを学んでもらっているわけですね。過去には、ウミガメ放流会を行ったこともあります。また、レクリエーションとして、21世紀の森公園でビーチパーティとBBQを開催しています。海外からの受入れ留学生には、内陸育ちできれいな海を見たことがないという学生は、とても感動するようです。

## オンライン留学制度の開始

### コロナ禍と円安の影響

コロナ禍前の2019（令和元）年に、本学の留学生の数は派遣・受入れともにピークを迎えるました。派遣留学生57人・受入れ留学生41人で、バランスも取っていました。当時、本学の派遣留学生の人数は琉球大学よりも多く、県内1位で、全国公立大学のベスト3にもランクインしました。これからもっと増やそうと思っていた矢先に、2020（令和2）年のコロナ禍です。2年間、留学生の交換はストップしました。2022（令和4）年にやっと派遣できるようになりましたが、国によってはまだ制限があり、2019（令和元）年の半分ほどの水準となってしまいました。2023（令和5）年以降は円安の影響で、派遣留学生にとって厳しい時代となっています。

### オンライン・アカデミック英語プログラム

今の大学生は、コロナ禍の時期に中学生・高校生だったため、オンライン授業に慣れています。そこで、砂川昌範学長の指示により、私はそれを企画し、海外の協定大学と交渉した結果、オーストラリアのサザンクロス大学と提携し、2025（令和7）年からオンライン留学生制度「オンライン・アカデミック英語プログラム」をスタートさせることになりました。7週間で、1年間の留学と同じ効果を得ること、英検準一級レベルの英語力を身に付けること

を目的とした画期的なプログラムです。夏季休暇の期間中、毎年25人が7週間・全160時間の留学プログラムに参加します。オンラインで現地とつなぎ、学生は本学内のコンピューター室で受講するという形式です。なぜオーストラリアかというと、時差が1時間しかないからです。オーストラリアが唯一、オンライン授業が実施できる国なわけです。本プログラムによって海外留学前に本格的なアカデミック英語力を養成し、将来の留学や国際的な学びへのスムーズな移行を支援します。学内で受講可能なため、実際に海外留学するよりも大幅にコストを抑えた非常に有意義な機会となります。これはおそらく全国的にも初の試みではないかと思います。看護学科の学生や教員免許を取得する学生は、4年間で留学しようと思うと、カリキュラムの都合上、なかなか留学に行きにくいという事情がありますが、夏休みに集中的に受講できるプログラムであれば、受講が可能という利点もあります。

## 今後の名桜大学国際交流の課題

本学の今後の国際交流の課題は次の3つです。①数の重視から質の重視へ。語学留学にとどまらず、留学先で所属する学部の専門課程を学ぶことが求められます。②教員による国際学術交流の推進へ。学生中心の交換留学を維持しながら、教員主導の学術交流を推進することも課題です。③国際交流エキスパートの育成と人材確保。国際交流課は海外との交渉が必要な部署なため、英語を含む高い多言語力と国際教養を持つ専門職員が必要となります。協定校は、昔はほとんど自動更新だったのですが、最近は3年間なり5年間なり、年限を区切って締結する場合が多いです。更新をせず協定が終了する大学もあるので、常に新しい協定校を開拓する努力をしないと、協定校の数はどんどん減っていき、学生の留学先を確保できなくなります。それに対応できる職員の育成と確保は非常に重要です。

## 留学前と留学後の学生の変化

最後に、留学前と留学後の学生の変化について紹介しましょう。派遣留学生は成長して帰ってきます。報告をしに来た時の挨拶すぐに感じます。生き生きして、自信を持つようになっています。海外でいろいろな人と接触し、人と話すことに慣れ、うまくなっています。帰国後の派遣留学生と話をしてみると、日本でテレビやインターネットを通して知ったイメージと、現地で直接生活して感じたイメージが違ったという話をよく聞きます。日本の常識が海外では通用しないことも多く、実体験を通して、学生の考え方も変化します。おおむね、たくさんの友達ができてとても楽しかった、と話します。留学は間違いなく、いいことばかりだと私は思っています。語学力も当然つきまずし、留学前は将来やりたいことが見つかなかった学生が、目標が見つかったということが多いです。派遣留学生のほとんどはいい就職ができます。特に海外と関係の深い業種では、大きなプラスとなります。若い時に海外に出ることは、将来の大きな財産になると感じています。

※以上の文章はインタビューをもとに作成しました。

(前国際交流課長 中山 登偉)

## 協定校からの交換留学生に対する日本語教育

本学は、中国、台湾、タイ、フィリピン、ペルー、イギリスといった世界中の国々の大学と国際交流協定を結んでおり、各協定校からの交換留学生を受け入れています。この協定校からの受け入れは開学当初の1994（平成6）年から始まっており、2024（令和6）年現在までに受け入れた留学生の数は426名です。また、コロナ禍で一時期中断していたものの、日本（沖縄）にルーツのある海外子弟の研修生・留学生も多く受け入れています。

交換留学生は毎年、前期と後期にそれぞれ10名前後が留学のために来学します。彼らの国籍、日本語レベルは様々であるにもかかわらず、これまで本学が提供している日本語クラスは初級と中・上級のみであり、またその科目数も不十分なものでした。そのため、「自分のレベルにあったクラスを受けられない」「受けられる日本語クラスの数が少ない」という声が聞かれるようになりました。このような交換留学生の声を受け、日本語カリキュラムを再構築し、2023（令和5）年度から本格的に運用を開始しました。具体的にはこれまで2つであった日本語レベルクラスをレベル1～レベル4の4段階とし、レベル1、レベル2については会話を中心とした総合クラスの科目群を配置し、レベル3、レベル4については4技能に応じた科目群を配置しました。また、これまで各日本語科目的開講時期は前期のみあるいは後期のみでしたが、前期と後期で同じ科目を開講することとし（一部前期または後期のみ開講の授業あり）、前期と後期にそれぞれ来る交換留学生に対応しました。

各レベルクラスの大きな教育目標は次のとおりです。レベル1・レベル2は日本語の基礎力固めとして位置付けられており、基本的な文法や語彙に対する知識と運用力を高めます。留学生がある場面や状況に置かれた時に日本語を使って表現できることを目指します。レベル3・レベル4は日本語の応用・実践段階として位置付けられており、レベル1・レベル2で学んだ基礎的な文法知識をベースとし、ある場面や状況、相手との関係性に応じた適切かつ自然な日本語表現を選択・表現できることを目指します。特にレベル3・4では単純に日本語を教えるのではなく、「なぜそう思うか」を考えさせるような授業構成にしています。これは本学の交換留学生に対する日本語教育の大きな特徴の一つといえるでしょう。彼らがこれまで本国で受けた日本語の授業とは大きく異なるようで、最初は戸惑いもみられます。しかし、次第に慣れてきて留学が終わって帰国する頃には大きく日本語運用力を伸ばすことができます。このほか留学生のためのアカデミッククライティング、日本事情といった授業も用意されており、多角的に日本語・日本文化について学ぶことができます。

交換留学生は来学したのち、授業開始前にプレイスメントテストを受け、テストの点数及び授業担当教員間の話し合いにより日本語レベルに応じたクラスに配置されます。授業の様子はスプレッドシートを使った授業報告日誌により各教員間で共有されます。また、学期開始前と学期終了後には教員間でミーティングを行い、何か問題や気になる点がある場合には迅速に対処できるよう体制を整えています。さらに、言語学習センター（LLC）とも積極的に連携し、授業でわからないことがある場合には日本語チューターに質問したり、あるいは会話パートナーとして日本語会話の練習をしたりといった、授業外の日本語使用環境も十分に整えています。

このほか、日本語チューターが中心となり日本語・日本文化に関するワークショップを定期的に開いており、日本人とも積極的に交流する場を設けています。

これからも本学は留学生たちが充実した留学生生活を送り、「名桜大学に留学してよかった」と思ってもらえるように、全力でサポートするよう心がけてまいります。

## 2015-2025年に国際交流協定を結んだ大学

国際交流協定大学（19カ国・1地域の29大学）2025年9月19日現在

ペルー Peru	サン・マルティン・デ・ポレス大学 Universidad de San Martín de Porres	2016年2月18日 February 18, 2016
台湾 Taiwan	国立高雄大学 National University of Kaohsiung	2016年4月29日 April 29, 2016
中国 China	山東大学 Shandong University	2016年6月8日 June 8, 2016
カナダ Canada	レスブリッジ大学 University of Lethbridge	2016年8月19日 August 19, 2016
台湾 Taiwan	台灣師範大学スポーツ・レクリエーション学院 △ College of Sports and Recreation National Taiwan Normal University	2016年10月19日 October 19, 2016
韓国 Korea	国立釜慶大学 Pukyong National University	2017年2月20日 February 20, 2017
フィリピン Philippines	デ・ラ・サール大学 De La Salle University	2017年5月24日 May 24, 2017
アメリカ USA	ハワイ大学カピオラニ・コミュニティーカレッジ University of Hawaii Kapiolani Community College	2017年8月30日 August 30, 2017
スペイン Spain	アルカラ大学 Universidad de Alcalá	2018年11月22日 November 22, 2018
タイ王国 Thailand	タイ王国保健省パーボーランマハーラッチャーノ医療従事者開発研究所 ▲◆ The Prabhornarachanok Institute for Health Workforce Development Ministry of Public Health, Thailand	2019年1月25日 January 25, 2019
中国 China	吉林外国语大学 Jilin International Studies University	2019年9月29日 September 29, 2019
中国 China	黒龍江大学 Heilongjiang University	2019年11月4日 November 4, 2019
ベトナム Vietnam	ベトナム国家大学ハノイ外国语大学 University of Languages and International Studies - Vietnam National University, Hanoi	2020年1月8日 January 8, 2020
イギリス UK	イーストアングリア大学 ◇◆ University of East Anglia	2020年2月20日 February 20, 2020
タイ王国 Thailand	スラーターニ・ラーチャパット大学 Suratthani Rajabhat University	2021年5月18日 May 18, 2021
リトアニア Lithuania	ヴィータウタス・マグヌス大学 Vytautas Magnus University	2021年6月23日 June 23, 2021
アメリカ USA	ハワイ大学ホノルル・コミュニティーカレッジ University of Hawaii Honolulu Community College	2023年11月29日 November 29, 2023
アメリカ USA	ハワイ大学リーワード・コミュニティーカレッジ University of Hawaii Leeward Community College	2023年11月29日 November 29, 2023
アメリカ USA	ハワイ大学ウンドワード・コミュニティーカレッジ University of Hawaii Windward Community College	2023年11月29日 November 29, 2023
アメリカ USA	ハワイ大学マウイ・カレッジ University of Hawaii Maui College	2023年11月29日 November 29, 2023
アメリカ USA	ハワイ大学ハワイ・コミュニティーカレッジ University of Hawaii Hawaii Community College	2023年11月29日 November 29, 2023
アメリカ USA	ハワイ大学カウアイ・コミュニティーカレッジ University of Hawaii Kauai Community College	2023年11月29日 November 29, 2023
オーストラリア Australia	ビクトリア大学 Victoria University	2024年3月06日 March 6, 2024
オーストラリア Australia	サザン・クロス大学 Southern Cross University	2024年3月07日 March 7, 2024
台湾 Taiwan	国立台湾体育運動大学運動産業学院 △ College of Sport Industry, National Taiwan University of Sport	2024年3月11日 March 11, 2024
ブラジル Brazil	サンパウロ大学 University of São Paulo	2024年9月2日 September 2, 2024
マレーシア Malaysia	サバ大学 Universiti Malaysia Sabah	2024年12月13日 December 13, 2024
ポーランド Poland	グダニスク大学 University of Gdańsk	2025年1月31日 January 31, 2025
チェコ Czech Republic	プラハ首都大学 Metropolitan University Prague	2025年2月18日 February 18, 2025

**国際交流協定大学 派遣・受入実績**

2025年9月19日現在

大学名	年度	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	合計
		平27	平28	平29	平30	令元	令2	令3	令4	令5	令6	令7	
ロンドリーナ州立総合大学	派遣	2	3	4	3	2	0	0	1	2	0	1	18
	受入	2	3	3	3	2	0	0	0	1	2	1	17
産業社会科学大学	派遣	2	1	0	0	0	2	0	0	0	0	0	5
	受入	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
ガブリエル・レネ・モレノ国立自治大学	派遣	/	/	/	/	0	0	0	0	0	0	0	0
	受入	/	/	/	/	0	0	0	0	0	0	0	0
パシフィコ大学	派遣	1	0	0	0	0	0	0	0	/	/	/	1
	受入	0	0	0	0	0	1	0	0	/	/	/	1
ベトナム国家大学ホーチミン市人文社会科学大学	派遣	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	受入	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
チェンマイ大学	派遣	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	0
	受入	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	0
マラヤ大学	派遣	0	1	2	4	4	0	0	6	2	4	4	27
	受入	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
ハワイ大学ヒロ校	派遣	2	1	1	0	1	0	0	0	0	0	0	5
	受入	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
マニラ大学	派遣	0	0	0	0	0	0	0	/	/	/	/	0
	受入	1	1	1	1	1	0	0	0	1	1	1	8
ジョージ・フォックス 大学	派遣	0	0	0	0	0	0	0	/	/	/	/	0
	受入	0	0	0	0	0	0	0	/	/	/	/	0
ハサヌディン大学	派遣	0	0	0	0	0	0	0	/	/	/	/	0
	受入	0	0	0	0	0	0	0	/	/	/	/	0
メーファールアン大学	派遣	3	4	0	1	2	0	0	0	1	0	0	11
	受入	2	3	4	5	3	0	0	0	0	1	1	19
グアム大学	派遣	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	受入	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
ウーロンゴン大学	派遣	5	2	4	1	2	0	0	3	7	1	1	26
	受入	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
耽羅大学	派遣	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	0
	受入	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	/	0
ロングアイランド大学	派遣	0	0	0	0	0	0	0	0	/	/	/	0
	受入	0	0	0	0	0	0	0	/	/	/	/	0
セントラルランカシャー大学	派遣	3	3	1	3	1	0	0	3	0	2	0	16
	受入	0	1	0	0	2	0	0	1	1	0	0	5
大仁科技大学	派遣	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	受入	4	2	3	4	6	0	0	0	5	0	0	24
湖南農業大学	派遣	4	0	1	1	3	0	0	0	0	0	0	9
	受入	4	4	4	4	4	0	0	1	3	3	4	31
北京聯合大学旅遊学院大学	派遣	1	2	1	2	4	0	0	0	0	0	0	10
	受入	2	1	4	3	2	0	0	0	0	0	0	12
啓明大学	派遣	1	1	4	2	3	0	1	5	2	0	1	20
	受入	4	4	1	4	1	0	0	0	0	1	0	15
済州大学校	派遣	1	4	4	2	1	0	1	1	0	0	1	15
	受入	0	0	7	7	3	0	0	0	0	1	0	18
サウスイーストミズーリ州立大学	派遣	2	4	0	1	2	0	0	1	1	1	0	12
	受入	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
サイアム大学	派遣	0	3	0	2	4	0	0	1	0	1	0	11
	受入	3	4	2	3	3	0	0	4	3	0	3	25

大学名	年度	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	合計
		平27	平28	平29	平30	令元	令2	令3	令4	令5	令6	令7	
中州科技大学	派遣	0	0	0	0	0	0	0	0	/	/	/	0
	受入	3	3	3	0	0	0	0	0	/	/	/	9
ブロック大学	派遣	4	4	5	4	5	0	0	4	7	3	2	38
	受入	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
メキシコ国立自治大学	派遣	1	0	0	3	1	2	0	0	0	0	1	8
	受入	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
開南大学	派遣	4	4	2	4	2	0	0	2	3	1	1	23
	受入	2	3	2	1	3	0	0	2	1	0	0	14
明知大学校	派遣	2	3	1	2	4	1	0	2	2	2	0	19
	受入	5	1	2	1	3	0	0	3	0	0	0	15
ナイアガラ大学	派遣	0	1	2	2	2	0	0	1	0	1	0	9
	受入	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
サン・マルティン・デ・ポレス大学	派遣	-	0	1	0	0	1	0	0	1	0	0	3
	受入	-	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
台湾国立高雄大学	派遣	-	2	2	3	3	0	0	3	5	1	2	21
	受入	-	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
山東大学	派遣	-	0	4	3								



ありがとう、  
名桜大学  
カイル・バロン・ウォル

ペルーで育った私は、名桜大学に来る以前に日本を訪れたことがあります。その後、日本について「もっと深く知りたい」と思うようになり、2020（令和2）年、日本語を学ぶために交換留学生として名桜大学に来ました。

名桜でのある夕暮れ、沖縄の空を見上げながら、日本語がうまく話せなかつた私を温かく迎えてくれたこの場所に「本当の幸せ」を感じました。その時から、「日本に戻って、この大好きになった場所に貢献したい」と思うようになりました。沖縄の自然や文化、穏やかな雰囲気に強く惹かれ、滞在は特別なものになりました。

日本に戻る機会を広げるため、故郷のアメリカに戻り、現在は医療機関で働いています。名桜での経験から、専攻のファイナンスとは違う、言語への新しい興味を持つようになりました。その影響もあり、来月から日本に渡り、英語教育プログラムの一員として地域に貢献する予定です。

留学当初、何も分からなかった私にとって、国際交流センター職員の伊佐 正アンドレスさんの存在はまさに名桜の顔でした。丁寧なサポートが心強かったです。高江洲由美子先生は日本語だけで温かく接してください、おかげで自信を持って話せるようになりました。岸本孝根先生の明るさにも励まされ、授業が楽しめになりました。先生方に感謝しています。

特に感謝しているのが、当銘盛之先生と上原なつき先生です。英語教育プログラムへの申請をサポートしてくださり、学びの大切さを教えてくださいました。

当銘先生の授業では、アニメのセリフを一文ずつ理解する中で、学ぶ楽しさと達成感を知りました。ゆっくり進めることで語彙が自然に身につき、今の学習スタイルの基盤となりました。

上原先生は日本語担当ではないにもかかわらず、スペイン語の授業で私をティーチングアシスタントとして迎えてくれました。先生の教え方をそばで見て、言語教育には文化理解が欠かせないことを学びました。今、私が日本で英語を教えるのも、語学だけでなく、自分の育った文化を伝える機会だと思うからです。それは上原先生が実践されていた姿と重なります。

沖縄は本土とは異なる文化を持つとも言われますが、私にとっては初めて「日本に住む」経験を通して親しんだ場所であり、日本の思い出のほとんどがここにあります。そんな沖縄を、少し誇らしく感じています。

この素晴らしい出会いと学びをくれた名桜大学と先生方に、心から感謝しています。



沖縄での充実した  
カラフルな留学生活  
方 婧怡

名桜大学の先生方、そして現在名桜大学で学んでいる学生の皆さん、こんにちは。

2022（令和4）年6月、私はコロナ禍の最中に初めて中国から来日しました。当時は、未知のウイルスへの恐怖や、たった一人で故郷を離れて異国で生活することへの強い不安と毎日闘っていました。出発前の私は、自分の選択が正しかったのかどうかを何度も自問自答していました。

自分の日本語は授業についていくほど流暢だろうか、行動や振る舞いは日本の社会規範に沿っているだろうか、うまく友達を作れるだろうか、このまままで無事に卒業できるだろうか——これらは、当時の私にとってすべてが未知のものでした。

しかし、私はとても幸運でした。沖縄という土地は美しく、人々もとても温かく友好的でした。名桜大学の先生方は優しく親切で、私たち留学生を温かく迎えてくださいました。先生方のご支援があったからこそ、私は少しずつ自信を持てるようになりました。「自分から積極的に表現したい」という気持ちが芽生えました。与えられた導きを信じ、自分が受け入れられるかどうかに関係なく、不安をすべて捨てて、とにかくまず行動しようと決めました。今でも、それは私の人生における最も賢明な決断だったと思っています。

人類学の言葉を借りれば、「自分を壊す」という行為によって、私は自分の狭い世界から飛び出し、新しいものを探求・追求するようになりました。その結果、日本語力は順調に向上し、以前は触れる機会のなかった興味深い知識に出会い、生涯の宝となるようなアドバイスをくださる恩師にも巡り会いました。

私の人生における多くの「初めて」は、この半年間に集中しています。初めて専門外の科目を選択し、初めて日本人の先生と腹を割って長時間話し合い、初めて日本人の友達ができ、初めて日本語で別の言語を学び、初めてボランティアに参加し、初めて大勢の前でスピーチをし、初めて市議会議員との会議に参加するなど、数えきれないほどの経験を積むことができました。「異国でも、充実した、カラフルな生活を送ることができた」と、私は胸を張って言えます。この半年間は、私にとって最も楽しく、そして決して忘れられない思い出でいっぱいです。この留学経験は、私の人生に計り知れないほど大きな影響を与え、今なおその影響は続いている。

本日こうして、名桜大学で私を導き、助けてくださった先生方への感謝の気持ち、そしてこの美しく、温かく、善良な沖縄への懐かしさ、さらに全ての素晴らしい瞬間を大切に思う心を込めて、このコメントを残します。



理論と実践から  
沖縄文化を学ぶ  
クララ・キアラモンテ・デ・ソウザ

名桜大学で学ぶことは、特にこの大学が30周年を迎えるこの時期に、留学生であり国際文化を専攻する私にとって非常に意味のある経験です。私はブラジルで演劇を学び、7年間エイサーを続けてきました。この経験を通して沖縄文化に強い関心を持つようになりました。現在、沖縄で国際文化を学ぶことは、私の二つの大きな情熱—演劇と日本文化—を結びつける貴重な機会です。名桜大学の授業や様々な体験を通して、沖縄の歴史、芸術表現、文化的価値観について、理論的にも実践的にも深く学ぶことができ、自分の芸術的な視野も広がっています。

沖縄には豊かな歴史と、日本の中でも独自のアイデンティティ、そして私を魅了する文化遺産があります。そんな沖縄の地で直接学ぶことができる私は、私にとって非常に貴重でありがたいことです。名桜大学では、伝統芸能や踊り（例えはエイサー）だけでなく、沖縄の言語や歴史、そして太平洋地域との文化的つながりなどについても学ぶことができます。授業や文化イベント、専門知識を持つ先生方との出会いによって、学びのプロセスはさらに深く豊かなものとなっています。ここでの学びを通して、私は学術的な知識だけでなく、異文化に対する感受性も大きく高まりました。この30周年という節目の時期に名桜大学の一員でいらっしゃることに、誇りと感謝の気持ちでいっぱいです。

名桜大学では、日本語と日本文化の両方を深く学ぶ機会に恵まれています。現在、「日本事情」「日本語演習」「沖縄文化」といった授業を履修しており、日本社会や特に沖縄の独自のアイデンティティへの理解を深めています。授業以外にも、私はエイサー部に所属しております、この地域の代表的な伝統芸能を実践的に学んでいます。また、毎週木曜日にはポルトガル語を学んでいる日本人学生との交流会にも参加しております、言語と文化を相互に学び合う貴重な時間を過ごしています。これらの活動を通して、日本語の練習だけでなく、友情や異文化交流のつながりを築くことができ、私の留学生活はますます充実したものになっています。

このように、名桜大学での学びは、私の演劇の学びと沖縄文化への深い関心を結びつける、非常に実りあるものとなっています。授業、実践的な活動、異文化交流を通じて得られた知識や経験は、今後の人生においても大きな財産となることでしょう。この30周年という特別な時期に名桜大学の一員として学べることに、心から感謝しています。



勉強になって  
楽しかった留学生活  
ジ アリム

名桜大学で過ごした半年間は、これまでの人生の中でも特に幸せで、楽しい思い出がたくさん詰まった時間でした。韓国の大学では日本語を専攻していましたが、日本に行くのはそのときが初めてで、日本語にもあまり自信がなく、不安な気持ちでいっぱいでした。そしてその時、大学4年生ということもあったので、将来のことや就職についても悩みながらの留学生活を始めました。

初めは緊張の毎日でしたが、名桜大学で出会った優しい友人たちや先生方のおかげで、少しずつ自分らしく過ごせるようになりました。毎日がとても充実していました。授業や色々な友達との交流を通して、日本語だけではなく、日本や沖縄の文化や歴史などにも触ることができ、「日本」という国をより深く知るきっかけになりました。

留学生活の中で、それまで気づかなかった自分的一面に出会うことができました。慣れていない環境の中で自分の力で問題を解決し、色々な人々に出会いながら、少しずつ「私もできる」と思えるようになりました。自然と自信もつきました。

現在社会人になり、また自信を失ってしまう日も多く、毎日が簡単ではありません。しかし、あの頃の自分や、大切な思い出を思い出しながら、もう一度前を向こうとしています。名桜大学での経験は、今でも私の心の中にあり、辛い時に支えになっています。

今は韓国で、日本語の児童向けコンテンツの企画の仕事をしています。この仕事をしながら、留学の時に得た経験をとても大切に活かしています。日本で学んだ日本語や文化への理解は、今の仕事でも大きく役に立っていて、あの時の貴重な思い出が、今の私をさらに成長させてくれています。



**伝えようとする  
姿勢こそ大切**  
人間健康学部  
スポーツ健康学科3年  
**安里 紘**

約9カ月間に及ぶオーストラリア・ビクトリア大学への留学を通して、私は異文化の中で多くの学びと気づきを得ることができました。学業面では、グループプレゼンテーションが主な評価方法であり、日本のような筆記試験や個人レポートとは異なる形で、主体的に他者と協働する力が求められました。英語力に関しても、「ミスなく流暢に話すこと」が目標だった留学前の意識から、「相手に伝えようとする姿勢こそが大切である」という考え方へと変化しました。ジェスチャーや限られた語彙でも、相手に思いを伝えようとする努力は、相互理解につながると強く実感しました。

生活面では、多民族社会に身を置いたことで、アジア人として差別を受けることなく、メルボルンという多文化都市で、多様な人々が互いを尊重し、誰もが安心して暮らせる雰囲気を肌で感じることができました。一方で、貧困や薬物など社会の抱える課題も目にし、「福祉・健康は個人だけの問題ではなく、社会全体で取り組むべき課題である」という認識が強まりました。

これらの経験は、現在の学業にも大きく影響を与えています。異なる文化や価値観に触れる中で、自分の視野が大きく広がり、これまで以上に柔軟な考え方を持つようになりました。

グループワークやディスカッションでは、相手の立場に立って意見を聞く姿勢や、異なる意見に対して柔軟に対応する力が養われ、協働的な学びに積極的に関わるようになりました。この留学を通じて得た経験や気づきは、今後の学びや実践にしっかりと活かていきたいと考えています。



**培った対話力  
自信に**  
2024（令和6）年度  
国際学群国際文化専攻卒業  
**永利 千夏**

名桜大学開学30周年および公立化15周年、心よりお祝い申し上げます。このたび、卒業間もない私に記念誌への寄稿という貴重な機会をいただき、深く感謝いたします。

私は2021（令和3）年に当時の国際学群に入学し、2023（令和5）年9月より中国・黒龍江大学へ交換留学生として派遣されました。留学中は中国語の習得に励むとともに、多国籍の友人と出会い、中国の文化での生活や人々との交流を通してかけがえのない経験を重ねました。出発前に抱いていたメディアを通じて間接的に得ていたネガティブな印象や偏った情報は、自分が直接取り入れた現地での体験によって次第に塗り替えられていきました。また、北京や上海、蘇州、武漢などの都市を訪れ、日本では見ることの出来ないような中国の広大な国土と多様な風土に圧倒されました。

とりわけ印象に残っているのは、現地の人々の政治への高い関心です。尖閣諸島の領有問題や福島の処理水放出について考えや意見を求められること何度もありました。それは親しい友人に限らず、飲食店で隣り合わせた人から質問されることもありました。いずれも高圧的な態度ではなく、語気を強められるようなこともなかったため、日本人に反日感情を向けようという事ではなく、純粋に日本人の意見を知りたいという姿勢が感じられました。その一方で、これらの問題に対する自分自身の知識や考えが不十分であることを痛感しました。相手に自分の意見をしっかり伝えるには、語学力だけでなく、自身の考え方や立場を持つことが不可欠だと強く認識した瞬間でした。

卒業後は地元の商工会議所に就職し、地域の事業者の支援に携わっています。異文化環境での様々な国の人との対話経験や培ったコミュニケーション能力は、現在の業務にも大いに役立ち、自分のコミュニケーション能力の自信となっています。また、留学をきっかけに歴史や政治への関心が高まったことで、より鋭く、広い視野で物事を判断できたり、意思決定を行ったりできるようになったと感じています。

最後になりますが、貴重な留学の機会を与えてくださった名桜大学ならびに、渡航前や渡航後、留学生活を常に温かく支えてくださった国際交流課の皆様に、心より感謝申し上げます。



**予期せぬ出来事も  
前向きに**  
2024（令和6）年度  
国際学群国際文化専攻卒業  
**江口 美礼**

私はGenkiJACSという日本語学校で日本語教師として働き始め4カ月になります。2週間から最長6カ月、欧米人を対象に日本語を教えている学校です。東京、名古屋、京都、福岡に加え、2025（令和7）年6月、那覇市小禄に沖縄校を新規オープンしました。

2023（令和5）年2月から1年間、ブラジルのロンドリーナ大学へ留学したきっかけは1人の教授との出会いでした。英語圏への留学を考えていましたが、教授のブラジル留学話に背中を押され、ポルトガル語も勉強しようと決心したのです。

行ってみると、下宿先ご夫婦の離婚危機や大学教員による無期限ストライキなど想像外の出来事に見舞われます。このために自主的にポルトガル語指導者を探す中、偶然、現地日本語学校に行くことに。遠く離れた地でも日本語が勉強されていることになんだか不思議な気持ちになると同時に、ブラジルでも愛されている日本をさらに好きになりました。

帰国後、日本語教師に興味を持った私は大学の副専攻である日本語教師養成課程の履修を決めます。またLLC（言語学習センター）でポルトガル語と日本語のチューターを務め、面白いイベント企画に頭を悩ませる日々を経験しました。現在、私は教務に加え、毎週土曜日にオプションで開催される文化コースプラン作りも担当しています。意外にも先の経験が大変役立っています。

"Só Deus sabe"（神のみぞ知る）というポルトガル語があります。小学校の卒業文集の将来の夢は航空管制官でした。しかし気が付けば、地元の札幌から遠く離れた那覇で日本語教師をしています。私の人生は、想像通りに進んだことがありません。様々な人の出会い、気付けばそうなっていた人生に感謝しています。自分が前向きであれば、予期せぬ人生も、きっと良いものにできるのだ信じています。



## ■プロジェクト学習

### プロジェクト学習 —地域と共に未来を拓く学び—

AIとビッグデータ、ロボットが高度に融合する「Society 5.0」時代が目前に迫り、社会が目指すべき未来の姿が大きく変わろうとしています。これに伴い、教育もまた大きな変革を求められています。従来、教育現場では「与えられた問題に対し、正しく、早く、多く答えを導く能力」が重視されてきました。しかし、与えられた問題に対して答えを出す作業はAIが最も得意とする領域であり、これから社会を担う学生たちには、答えのない、あるいは答えが一つに定まらない複雑な問題に対して、他者と協働しながら新たな価値を創造する力が不可欠となります。

また、公立大学の重要な役割として地域創生の推進が挙げられます。「象の塔」と揶揄された大学も、今や「社会に開かれた教育課程」を理念に地域との連携が求められています。教育と地域創生の目的を融合させたプログラムが不可欠な時代となり、その要請に応える教育手法が本学の「プロジェクト学習」です。

#### ■「生きた地域社会」から学ぶということ

プロジェクト学習の意義を考えるとき、いつも『スルメを見てイカがわかるか!』(養老孟司・茂木健一郎、2014年)というタイトルが頭に浮かびます。死んだイカの解剖では、その構造は分かっても、墨を吐き、擬態し、瞬時に姿を消す、生きているイカのダイナミックな生態は決して理解できません。従来の大学教育を、動きを止めた「社会スルメの解剖」とするなら、プロジェクト学習は学生が「生きて動き回っている社会」に直接触れる試みです。この両者が揃って初めて、真に社会で活躍する力が育まれます。教室で学ぶ理論(形式知)と、現場での実践から得られる感覚(暗黙知)とを往還する学びこそが本学習の神髄であり、各プロジェクトは1年から3年の期間をかけ、地域に具体的な成果をもたらす社会実装を目指しています。

この新しい授業スタイルは、前例も教材もない「無い無い尽くし」からの挑戦でした。その確立は、地域社会の皆様の温かいご理解とご協力なくしてはあり得ませんでした。意欲の高い学生が未熟さゆえにご迷惑をおかけすることもあったかと存じますが、常に温かく見守り、支えてくださったやんばる地域の皆様、そして本プロジェクト学習を支えてくださった担当教員をはじめ、ご協力いただいた全ての皆様に心より感謝申し上げます。

#### ■地域に支えられたこれまでの歩み

本学のプロジェクト学習は、2017(平成29)年度の開講以来、着実に実績を重ねてきました。当初の「スポーツ・ウェルネスツーリズム」や「朝市健康支援」から、「空き家活用」「道の駅連携」、近年では「沖縄北部方言」「障がい者のヘルスリテラシー向上教育」など、多様な専門分野にまたがるプロジェクトが生まれています。2020(令和2)年度のコロナ禍による一時休止を乗り越え、学びはさらに深化しました。例えば「空き家活用」や「道の駅連携」プロジェクトでは、学生が主体となり地域資源を調査し、新たな活用案や商品を提言するに至っています。

#### ■未来へ続く挑戦

これまでの成果を礎に、挑戦はさらに続きます。今年度は、「食をとおしたコンヴィヴィアリティの実践」「名護親方(程順則)と六諭衍義」「観光・民泊プロジェクト」「伊江島ファン創出」「大浦・二見活性プロジェクト」といった、地域の歴史や文化、未来の可能性を深く掘り下げるプロジェクトが開講しています。これらの活動は、学生、教員、職員そして地域が一体となった挑戦であり、開学以来、本学が目指してきた地域貢献の姿そのものです。この地域密着型の公立大学から、やんばるの地から、次の10年、20年先も新たな時代を切り拓く学生たちが、ここから巣立っていくことを心から祈念しています。

(リベラルアーツ機構 遠矢英憲/プロジェクト学習担当: 2017年度~現在)

## ■海外スタディツアー

### 国際的教養人の育成と海外スタディツアー

本学が実施している「海外スタディツアー」(リベラルアーツ機構)は、学生が主体的に課題を設定し、現地での学びを通じて多角的な視野を育むことを目的とする、実践的な国際教養プログラムです。環太平洋地域、とくにアジア諸国を中心に展開しており、これまで中国(天津市、北京市)、シンガポール、台湾などを主な訪問先としてきました。2020(令和2)年度以降は新型コロナウイルス感染症の影響により、やむを得ず中止となっていました。2024(令和6)年度には4年ぶりに再開され、多くの学生が再び国境を越えた学びの場に挑むことができました。

本授業は「事前学習」「現地研修」「事後学習」の三段階から構成されており、学生は渡航前の授業で自らの関心分野について調査を進め、明確な課題意識をもって現地に臨みます。現地では、文化施設の視察、大学や地域団体との交流、街頭でのインタビューや観察などを通じて課題を検証します。そして、帰国後の事後報告会で成果を発表することにより、学びのプロセスをふり返り、仲間と共有する機会が設けられています。

現代社会は、インターネットやSNSを通じて世界中の情報を瞬時にアクセスできる時代となりました。しかしその一方で、発信される情報の真偽や背景、立場の違いを見極める力、すなわち「メディアリテラシー」がこれまで以上に求められています。本授業では、現地の人々や空気に直接触れる体験を通じて、机上の知識では得られない複眼的なものの見方を身につけることができます。

学生たちは多様な文化や価値観に接することで、先入観を超えて相手社会を理解する努力を重ねてきました。例えば、デジタル社会の実情、医療現状の比較、学食からみる異文化の比較など、さまざまなテーマが現地課題として取り上げられてきました。学生は、それぞれの視点から問い合わせ、現地での観察やインタビューを通して、自らの仮説を検証し、理解を深めています。こうした経験は、情報の受け手にとどまらず、情報を自ら検証し発信する主体へと成長するきっかけとなっています。

また、本授業では、海外現地大学との交流も重視しています。現地大学の学生との対話や文化紹介などの活動を通して、同世代の学生同士が互いの生活文化や社会的課題について率直に語り合い、理解を深めています。こうした関係は、一過性の交流にとどまらず、SNSなどを通じた持続的な国際ネットワークへと発展することもあり、学生たちにとって大きな財産となっています。

このような学びの積み重ねは、外国語運用能力や異文化理解力の向上のみならず、グローバルな視野から地域社会の課題を捉え直す力にもつながっています。国際教養人としての資質とは、単に海外に関心を持つことととどまらず、地域の現実と世界の動向をつなげて考えることのできる「眼差し」を持つことがあります。海外スタディツアーは、まさにそうした力を養うための、かけがえのない機会となっています。

本学の目標の一つである「国際的教養人の育成」を体現する本授業を、今後もより発展的に展開していくとともに、学生一人ひとりがその中に確かな視座と行動力を育んでくれることを心より期待しています。

(国際文化学科 山城智史)

## ■ 本学におけるアカデミックライティング・ライティングの歩み

全学生必修であった「レポート作成論」は、2016（平成28）年度から「アカデミック・ライティングⅠ」に名称変更されました。本講義では、レポート・論文作成に必要な基礎能力を身につけることが目的とされ、現在は以下の3点が到達目標になっています。

- ① レポートを作成する上での作法や基本ルールを理解し、根拠に基づいた説得力のあるレポートを書く能力を養う。
- ② 図書館および検索エンジンを利用し、レポート作成にかかる情報収集および情報整理能力を養う。
- ③ 正しい文献の引用および文献リストの作成方法を理解する。

以上の目的や到達目標を達成するために、これまで「レポート作成論」や「アカデミック・ライティングⅠ」を担当した教員とライティングセンター運営委員の教員を中心に、名桜大学独自のアカデミック・ライティングのブックガイド作成に着手しました。それまで本講義のテキストは、『これから研究を書くひとのためのガイドブック ライティングの挑戦15週間』（ひつじ書房）を採用していました。2020（令和2）年度に、ライティングセンター監修の『大学1年生のためのレポート・論文作成法：書く意義に気づく15回のライティング講義』（ふくろう出版）を発刊し、2021（令和3）年度から本講義のテキストとして採用しました。その後、学生の実態や授業担当教員からの要望に合わせて改訂を繰り返し、現在は第3版の発刊まで至っています。

本書は大学1年生を主たる対象とし、理論と実践（練習問題）を15回のセッションで体系的に示しています。また本書は、レポートや卒業論文を執筆するためのテクニックのみならず、なぜライティングスキルが必要であるのかに多くの紙幅を割いており、その点が本書の特徴の1つになっています。現在は補講の章も追加し、下記のような構成になっています。

第1講義 ライティングスキルを磨く意義 第2講義 レポート・論文作成の作法 第3講義 レポート・論文作成の基本ルール 第4講義 テーマを決める 第5講義 異なる意見をあげる 第6講義 図書館活用法・資料の探し方・資料検索法 第7講義 引用を示す① 第8講義 引用を示す② 第9講義 参考文献リストを示す 第10講義 剽窃・盗作・盗用をしない 第11講義 レポート・論文の組み立て方① 第12講義 レポート・論文の組み立て方② 第13講義 図表の使用と作成方法 第14講義 推敲する 最終講義 努力が報われやすいライティング 補講① 読書の意義 補講② 書くことがつらい人のために

本講義は、学生に3回のレポート提出を義務付け、提出から1週間後に教員の採点・フィードバックを行います。そのため、担当教員にとっては大きな負担を伴いますが、そこで得られた学びは他の講義のレポートのみならず、卒業論文作成時の基礎になっています。

これまで、他大学の教職員に本講義のような科目が大学に設定されているかをきいてきましたが、全く存在していないという大学もあれば、教員個人が自身の担当する専門科目でレポートの書き方を伝えているといった回答が多数でした。アカデミック・ライティングやレポート作成について、体系的に学習内容が設定されているという授業はないという回答ばかりでした。さらには本学のように、全学生に対する必修科目として設定している大学も少ない現状にあると言えます。

生成AIの登場によってレポートや論文の評価のみならず、レポートや論文を執筆する意義が見えにくくなる時代に突入しました。このような時代においても、自らの力で執筆するスキルと意義を本講義で伝えていくことが、本講義の意義であると思われます。

（ライティングセンター副センター長 大峰光博）

## ■ 現地実習

### ■ 中南米コース（スペイン語圏・ポルトガル語圏）

本学創立20周年から30周年にかけての10年間、中南米コースは新型コロナウイルス流行の影響などを受けつつも、柔軟に対応して継続的に実施してきました。

2016（平成28）年度からは、中南米コースをスペイン語圏・ポルトガル語圏に分離することになり、地域を限定することでさらに深い学びが得られる内容となりました。ポルトガル語圏コースではブラジルのリオデジャネイロ・サンパウロ・ロンドリーナやイグアスの滝など、またスペイン語圏コースではペルーのリマ・クスコ・ナスカなどを巡り、両コース共に現地の本学協定校や沖縄県人会との交流を行っています。

2018（平成30）年度には、日本国内における多文化共生の観点からポルトガル語圏コースにて初の国内実施が試みられ、ブラジル国籍住民が集住する群馬県邑楽郡大泉町や、南米系住民のルーツである日本人移民史を学べるJICA横浜海外移住資料館を訪問しています。スペイン語圏コースではメキシコのクエルナバカやメキシコシティを巡り、協定校訪問やスペイン語集中講義の受講、沖縄県人会との交流を行いました。

2020（令和2）年度は新型コロナウイルス流行の影響により国外・県外での実施が困難となりましたが、静岡県のペルー人学校とのビデオレター交流会など創意工夫によってコースが実施されました。翌年度以降も影響は続きましたが、両コース合同で県内や県外の移民・文化人類学関連施設を巡りつつ、国外での開催再開の時期を待ちました。

2024（令和6）年度にはポルトガル語圏コースがブラジルでの実習を再開し、サンパウロやロンドリーナなどでブラジルの歴史や社会、経済や自然について学び、また協定校訪問や沖縄県人会との交流を通して沖縄と中南米とのきずなを再確認しました。この10年間で、75名の学生が国外・県内外にて中南米に関する実地での学びを経験しています。今後も継続して学生たちへ中南米での実地の学びを提供していきたいと思います。

（国際文化学科 長尾直洋）



中南米コース  
(イグアスの滝2024年度)

### ■ 東アジアコース

2017（平成29）年から2024（令和6）年までの実施状況をまとめることで、本コースの紹介としたいと思います。

○2017（平成29）年

- ・東アジアコース（韓国） 担当：李鎮榮  
9月5日～18日 韓国（釜山、鎮海、馬山、慶州、ソウル）
- ・東アジアコース（台湾） 担当：菅野敦志  
9月3日～17日 台湾、サイパン、グアム、マニラ

○2018（平成30）年

- ・東アジアコース（韓国） 9月9日～19日 担当：李鎮榮  
9月9日～19日 韓国（釜山、慶州、ソウル、仁川）
- ・東アジアコース（台湾） 担当：菅野敦志  
9月10日～24日 台湾、タイ、香港

○2019（平成30/令和元）年

- ・東アジアコース（台湾） 担当：菅野敦志  
8月10日～24日 台湾、タイ

※東アジアコース（韓国）は実施せず

○2020（令和2）年

- ・東アジアコース（韓国） 担当：李鎮榮  
11月24日、30日、12月1日、7日、8日、15日、22日、23日
- 名護市
- ・東アジアコース（台湾） 担当：菅野敦志  
10月30日～11月4日、11月19日～25日
- 神戸市、横浜市
- ※新型コロナウイルスまん延のため、国内実習

○2022（令和4）年

- ・東アジアコース（韓国） 担当：李鎮榮  
沖縄本島にて実施
- ・東アジアコース（台湾） 担当：清水美里  
8月24日、9月1日、9月3日、9月8日、9月11日（オンライン交流会）  
9月16日～23日（東京・神奈川実習）
- ※新型コロナウイルス感染拡大防止のため、国内実習

○2023（令和5）年

- ・東アジアコース 担当：清水美里  
9月1日～5日（高雄）、9月6日～10日（台北）

○2025（令和7）年

- ・東アジアコース 担当：坪井祐司、屋良健一郎  
8月16日（オンライン）、23日～9月2日（ソウル、春川、釜山）

(国際文化学科)

### ■ 東南アジアコース

私が初めて現地実習（東南アジアコース）を企画したのは2019（平成31／令和元）年です。当時は全く手探りでしたが、専門であるマレーシアを中心に、クアラルンプルからペナン、そしてタイ、バンコクへ北上するルートを設定しました。知己が勤務していたマレーシア国際イスラム大学と提携し、2泊3日で大学寮に宿泊して先方の学生と共同生活をしながら交流しました。参加者は、ムスリムの生活習慣との違いを体感して貴重な体験になったと話していました。

しかし、翌年からコロナ禍による出入国の制限により、予定していた海外実習ができなくなりました。沖縄県内での実施を余儀なくされたため、県内在住の東南アジアの人々との交流をメインに据えました。沖縄モスクや那覇市の外国人相談窓口を訪問するなど、在沖縄インドネシア人、ミャンマー人の交流会を開催しました。緊急対応ではありましたが、在留外国人の増加



東南アジアコース  
マレーシア国際イスラム大学との  
交流（2019）



ワット・アルン  
(タイ・バンコク) (2023)



ワット・プラシーサンペット  
(タイ・アユタヤ) (2024)

という日本の現実に即した企画でもあり、意外な発見もありました。沖縄モスクには、現在でも定期的な訪問を続けています。

2022（令和4）年も当初は国内開催のつもりでしたが、春ごろから制限緩和の動きが出てきたため、海外実習を復活させようと急遽企画を練り直しました。比較的の制限の緩和が早かったタイに行き先を絞り、期間も1週間に限定し、それまでオンラインで交流していたチェンマイ大学、サイアム大学（バンコク）を訪問しました。状況を見つ、いち早く海外実習を復活させたことは大きな成果だったのではないかと思います。

2023（令和5）年からは、従来の2週間の海外実習には戻すことができました。上記の2大学にくわえてマレーシアのマラヤ大学とも提携し、タイ・マレーシアの3つの都市で学生交流を行うコースを設定しました。コロナ期におけるオンラインの経験も生かして、事前にオンラインで交流を重ねて実習で対面の交流という形をとっています。コロナ禍の試行錯誤を経て、アップデートした現地実習となっているのではないでしょうか。

(国際文化学科 坪井祐司)

### ■ 沖縄コース

本学へ赴任した当初、担当したのは「現地実習」（日本・沖縄コース）で、国内で一つのコースとなっていました。しかし、奄美～八重山諸島までに広がるいわゆる琉球諸島は、かつて琉球王国という一つの国家が存在し独自の文化圏を形成していました。そこでコースと一緒に担当していた屋良健一郎先生と相談して、2014（平成26）年度から沖縄コースと日本コースの2つに分けることとなりました。以来、沖縄コースでは、奄美群島から八重山列島までの琉球文化圏をフィールドワークの場としています。

奄美地域では、例えば奄美大島の女流琉歌人、笠利鶴松の碑を訪れ子孫の方からの講話を拝聴し、あるいは与論島や喜界島を訪れ、伝統行事である「十五夜祭」や「八月踊り」に参加して、奄美特有の祭祀行事に触れるなどしてきました。

沖縄島および周辺離島では、特に大学のある北部ヤンバル地域の史跡を巡って足元の歴史・文化を掘り下げ、また伊江島へは毎年訪れ、戦争体験者でもある謝花悦子さん（阿波根昌鴻資料館・わびあいの里館長）のお話を拝聴しています。

宮古を訪れる際には、南静園（ハンセン病資料館）で苛烈な差別の歴史を学び、あるいは宮古を代表する染め織り物、宮古上布の元となる苧麻を紡ぐ作業に参加するなどしています。

八重山地域では、石垣市立博物館で八重山の歴史、民俗等を学び、石垣島から船で竹富島や波照間島を訪れる島の区長さんや神役の女性と交流し、モザイクのように重なった八重山文化の詳細を体感するなどしています。

「現地実習」とは、大学構内でさまざまに学んだ事柄について、大学の外へ飛び出して、実際に現地で歴史や言語、民俗・慣習などの異文化環境のど真ん中に身を置きつつ、時に実践も行うワークショップ型の授業です。小さな島々の集まりである琉球諸島でも、フィールドに出ないと学べないことが沢山あります。これからもこの「現地実習」で学びを深める学生が増えることを期待しています。

(国際文化学科 照屋理)



ワット・プラタート・ドイステープ  
(タイ・チェンマイ) (2024)



135



沖縄コース  
現地実習 2013年度 宮古島巡見の様子



日本コース

## ■ 日本コース

日本コースでは日本の歴史・文化を学びます。1996（平成8）年度に初めて「現地実習」が実施された際、中南米コースと共に開講されました。受講者数は中南米コースが106名、日本コースは3名でした。当初、日本コースは海外からの留学生を対象としていたそうですが、のちに日本人学生も参加可能となりました。開設以来、上江洲均先生、新城敏男先生、中村誠司先生などが担当し、「国内コース」というコース名だった時期もあるようです。私は名桜大学に採用された2013（平成25）年度に照屋理先生と一緒に「日本・沖縄コース」として初めて担当しました。2014（平成26）年度にコース名は「日本コース」に戻りました。照屋理先生、上原なつき先生、小嶋洋輔先生などにも引率にご協力いただき、実施してきました。

実習先は年によって異なり、北海道、岩手、東京、神奈川、愛知、京都、奈良、和歌山、鹿児島をはじめ、各地を訪れています。実習期間は例年、8月・9月のうちの約2週間ですが、コロナ禍の2020（令和2）年度は県外での実施が困難であったため、2021（令和3）年2月から3月にかけて沖縄島内で行いました。この時は琉球王国時代の史跡をめぐって琉球と日本の交流の歴史を考え、戦跡をめぐって沖縄戦について知ることで日本コースの学びとしました。2021（令和3）年度は感染状況を見ながら11月に県外で実施しましたが、通常よりも日数の少ない7泊8日でした。

日本コースでは史料（古文書など）の閲覧を実習に取り入れており、これまで東京大学史料編纂所、奈良文化財研究所、国際日本文化研究センターなどを訪れました。普段は見られない貴重な史料を間近で、専門家の解説を聴きながら閲覧するのは「現地実習」ならではの学びです。また、上野公園（東京都）、房総のむら（千葉県）を歩きながら短歌・俳句を作る吟行会も実施し、日本の伝統的な詩型に触れる機会としました。日本コースは歩いて、見て、考えることを目標としています。

（国際文化学科 屋良 健一郎）

## ■ 国際協力コース

私が「現地実習国際協力コース」を担当するようになった2013（平成25）年から2025（令和7）年度までの期間、延べ120人を越える学生たちが、夏休期間中に2週間のインターンシップを様々な国際協力実施機関にて経験しました。参加学生たちは、国際協力や発展途上国援助に関する実務補助を行ったり、職員、海外研修員、その他交流した方々から貴重な実務体験談を聞いたりしました。こうして、本学での座学を通して学んだ「理論」や「知識」を、国際協力や援助の現場での「実践」を通して確認し知見を広げる貴重な機会を得ました。また、実習期間中は、国内外での英語による職務を体験したり、講習会や研修の運営補助をしたり、様々な国籍を持つ方々と交流したりもしました。

今回はその中から主な事例を簡潔に紹介します。「JICA沖縄」での実習に参加した学生たちは、ソロモンなど大洋州諸国からの研修員を対象とした水資源管理・水道事業運営についての講座の実施補助をさせて頂きました。また、カンボジアのトゥール・スレン虐殺博物館での展示方法や平和教育方法を改善するため、この分野で沖縄県がこれまでに蓄積した経験を生かした草の根協力プログラムを実施していることを学びました。また、神戸市のNGO「アジア女性自立プロジェクト」では、売春目的でインドへ人身売買されているネパールの少女達の救済活動についても学んだようです。さらに、東京の国

際NGO「CARA（西アフリカ農村自立協力会）」でインターンシップを実施した学生たちは、マリ共和国での水の確保、野菜の栽培、自然保護、識字教育、女性適正技術の伝授、保健事業に関する支援内容について知見を広げたようです。

これまで、本カリキュラムの趣旨をご理解いただきインターンシップを快くお引き受け頂いた国内外の各受入機関の担当者各位に、心より感謝の意を表します。丁寧なご指導のおかげで、参加学生たちは多くを学び将来のキャリア設計に資する貴重な示唆を得たようです。

（国際文化学科 高嶺 司）

## ■ 日米関係コース

日米関係コースは、「日本にとって唯一の条約上の同盟国アメリカとの関係、つまりは日米関係の現在を、政治・外交・安全保障の観点から客観的に分析し、日米関係の将来を展望できる人材の育成」という理念の下、2023（令和5）年度に新設し、2025（令和7）年度まで3年間にわたって本コースを開催してきました。コースの主な内容は、外務省沖縄事務所、沖縄県警、自衛隊、在沖アメリカ総領事館といった沖縄県内の関係機関等の施設訪問や関係者との意見交換の実施を踏まえて、東京を訪問し、外務省、外務省外交史料館、防衛省、在京アメリカ大使館、海上保安庁資料館（横浜）等の施設訪問や意見交換の実施です。オンラインや対面で専門家や実務家による講話も複数開催し、日米関係の現在を適切に理解することにも努めました。状況に応じてコースは日英両言語で行いました。

これらの学びを通し、履修生は日米関係のみならず日米を取り巻く変化の激しい国際情勢への関心を強く持つようになり、コース修了後、大学での学びに一層励み、また自分の判断でキャンパスの外へと活動の範囲を拡大し、知見を広めることに前向きな学生が多かったことが印象的でした。履修した学生のなかには、外務省インターンシップ、外務省主催「アメリカで沖縄の未来を考える」（TOFU）プログラムへの参加や日米学生大使としての活動、また台湾の国立政治大学大学院や韓国の高麗大学大学院への進学等、沖縄を中心とした環太平洋地域を拠点に、地域の平和と安定のための日米関係の現場で研鑽をさらに積むことで、世界的に有名な国際関係研究の拠点へ進む学生もいます。

日米関係コースでは、名桜大学の学生と実務家、専門家との「対話」を重視しました。「対話」を通じた沖縄をはじめ日本、地域、さらには国際平和や安全に貢献するための日米関係の在り方についての学生の知見を実務の世界にインプットする機会を提供できたことも本コースの特色の一つです。

（国際文化学科 志田 淳二郎）

## ■ 英語圏コース

名桜大学では英語学習や英語圏地域の文化理解をある程度終了した頃（2年生から3年生）に「現地実習（英語圏）」の講義があります。次の英語圏地域の大学と国を訪れました。2012（平成24）年：ウーロンゴン大学（オーストラリア）、2013（平成25）年：ウーロンゴン大学（オーストラリア）、2014（平成26）年：ウーロンゴン大学（オーストラリア）、2015（平成27）年：ハワイ大学（米国）、2016（平成28）年：ハワイ大学（米国）、2017（平成29）年：ハワイ大学（米国）、2018（平成30）年：ウーロンゴン大学（オーストラリア）、2019（令和元）年：ミシシッピ大学（米国）。2024（令和6）年には初めて非英



日米関係コース（2023年度）



英語圏コース（2012年度）



英語圏コース（2024年度）

語圏地域であるマレーシアのアジアパシフィック大学で実習を行いました。現地実習プログラムは実習前に事前学習を行う「地域文化演習」（2単位）と実際の実習である「現地実習」（4単位）に分かれます。ウーロンゴン大学（2012（平成24）年、2013（平成25）年、2018（平成30）年）の現地実習プログラムを例にして簡単に説明します。まず、「地域文化演習」（4月から7月）の講義ではオーストラリアの言語、地理、歴史などを学習しながら、渡航の手続きをします。

8月下旬には日本を出発して、入国審査で緊張しながらオーストラリアに入国しました。その日からホストファミリーと英語で意思疎通をしながら、オーストラリアの家庭生活の体験が始まりました。ウーロンゴン大学では、

約2週間の午前中は語学学校で集中的に英語学習を行いました。平日の午後はキャンパスから出て実際に英語を使いながら様々な体験をします。毎年行ったのは現地の小学生との交流で、学生が講師になり日本の伝統的な文化を伝えるために英語を使いながら折り紙やあやとりを教えた事は貴重な体験でした。

「現地実習（英語）」はその地域に精通した教員の知見や人脈を生かした希な体験や学習ができる機会でもあります。

（国際文化学科 渡慶次 正則）

## ■ 教育支援コース

名桜大学の国際学群 国際文化教育研究学系 語学教育専攻では、2005（平成17）年から「現地実習＜教育支援＞」を実施し、大きな教育効果をあげてきました。本専攻は、「国際的な視野に立って行動する学生を育てる」と、「地域に貢献できる人材」の育成を教育目標としてきました。また同時に、「実践力を有する英語科教員養成」をもめざしてきました。

こうした教育目標を達成するための方途の一つとして、3年次学生を主な対象として、前学期の「地域文化演習＜教育支援＞」において事前学習を行い、夏期休業期間中の約3週間を利用した実践的科目である「現地実習＜教育支援＞」を取り組んできました。

2020～2023（令和2～5）年度は、コロナ禍の影響により本専攻が実施してきた「現地実習＜英語圏＞」が中止となるなか、「現地実習＜教育支援＞」は、実施時期を2月に変更したケースはあったものの、沖縄県北部の教育機関のご協力によって毎年継続実施してきました。実習へのご理解とご支援を頂戴した教育機関の関係者の方々に深く感謝致します。

現地実習報告会では、教育現場において児童・生徒や教職員が、どのように考え、感じ、行動し、関わり合い、支え合っているのか等に関する学生たちの学び、気づきが語られました。本実習を通した経験は、学生たちが次年度に取り組む教育実習や、さらには、今後の人生の糧となったものと考えます。

国際文化学科への改組後、「地域文化演習＜教育支援＞」は「教育支援演習」へと、「現地実習＜教育支援＞」は「教育支援実習」へと科目名は変わりましたが、これまでの取り組みの成果と課題を踏まえ、学生たちが貴重な学校現場経験を積む科目として、さらに発展させていきたいものです。



教育支援コース

（国際文化学科 板山 勝樹）

## 海外インターンシップ

海外インターンシップは、「海外の企業等における実習並びに生活をとおし、学生の国際感覚、国際的ビジネスマインドを養い、世界に羽ばたける人材を育成する。沖縄県の地理的優位性を活かし、経済成長著しく、国際化の進むアジア諸国を実習先とすることにより、将来日本とアジアを結ぶ架け橋となる人材を輩出する。」ことを目的として実施されている学科の専門科目です。

現在、国際観光産業学科で提供されてる海外インターンシップは、名桜大学が私立時代の2002（平成14）年に遡ります。この年にマレーシアのグランドブルーエーブホテル・シャーラム（以下GBWHS）へ学生を派遣したのがこの科の開始になります。当時、沖縄県の人材育成事業の支援を受けて開始され、当初は、派遣先はGBWHSだけであったのですが、その後、学群制へ移行してからは観光産業専攻の先生方が積極的に派遣先を開拓し、韓国（ロッテホテル済州、ホテルインタープルゴ大邱、ハナツアーチューズ）、台湾（OTS台湾事務所、ロイヤル日航台北）、シンガポール（シンガポール沖縄県事務所）及びマレーシア（Mardhiyyah Hotel & Suites：GBWHSのオーナー変更によりホテル名称が変更した）が加えられました。更に新たに、韓国（済州観光公社）とカンボジア（旅行代理店クローマーツアーズ）も加えられ現在に至っています。

しかし、一方で学生の受入を停止したホテル等の派遣先もあり、年により派遣先の増減がありました。2020（令和2）年と2021（令和3）年は新型コロナウィルスの世界的な流行の影響により学生の派遣がでなくなりました。2022（令和4）年には海外への渡航は新型コロナウィルスの検査が課せられる等のコロナ禍の影響が未だある中で、唯一シンガポール沖縄県事務所で1名の学生を引き受けた頂きました。また、この年は、従来の派遣先へ学生派遣が出来ず、この年だけの特別対応として、海外インターンシップを希望する学生1名に県内の外資系ホテル（シェラトン沖縄サンマリーナリゾート）へ海外インターンシップのプログラムとして派遣しました。2024（令和6）年の時点で、80人の学生を派遣し、内訳では女子学生が多く派遣されました（約8割）。最も多いのは、マレーシアで約48名、台湾14名、韓国12名及びシンガポール5名、また、コロナ禍での特別派遣（上述）で1名でした。

コロナ禍以前の課題としては、マレーシア（GBWHS）はホテルの客室を学生に格安の料金で提供をして頂けましたが、他の派遣先では学生の宿泊先を探すに毎回苦慮しました。派遣先での宿泊費が高額になることで学生の本科目への参加意欲が削がれていきました。シンガポールへの派遣では、学科の教員の尽力により格安のホームステイ先を探すことができました。派遣先での個別の対応によりこの問題を何とか回避してはいますが、派遣先の宿泊先及び宿泊費は本プログラムの大きな課題の一つです。

コロナ禍で観光業界全体として大きな影響を受けました。その中でも、旅行業は非常に大きな影響を受けました。これまで派遣をしてきた旅行業系の派遣先は今後も派遣は難しい状況にあります。一方で、台湾の日系ホテルではロイヤル日航台北に加え、ソラリア西鉄、相鉄グランドフレッサ及びホテルサンルートも派遣先として調整が進んでいます。これによりこれまで以上に多様な学生の要望を満たすことができると言えています。

海外インターンシップの確実な実施においては、確実に受け入れて頂ける派遣先の確保が最重要です。また、学生の要望を満たすためには、宿泊業や旅行業、また、公社等の行政機関等の多様な業態の派遣先を開拓する必要があると考えています。今後も「国際観光」の名を冠する学科として、国際的ビジネスマインドを養い、世界に羽ばたける人材を育成する教育を実践していくことは学科として必須であると考えます。

（国際観光産業学科 新垣 裕治）

## 観光関連実務

観光関連実務は、「様々な観光関連企業等で長期間にわたる実務（実習）を通して、観光産業の発展に貢献できる人材育成をすることを目的とし、これを通じ「理論」と「実践」を備えた観光業界にニーズに対応できる学生を育成する。」を目的として実施してきています。観光関連実務は、ホテル実務を参考として、観光業界でホテル（宿泊業）だけの実習に留まらず、旅行代理店や観光協会などの観光に関連する様々な企業や団体等へ広く学生を派遣することを目指み立ち上げた専門科目です。参加した学生は、大学の講義を通して得た知識をさらに深化させ、派遣先におけるキャリア・デザインについての幅広い知識を得ることができますようにデザインされています。この科目の特徴は、6単位と単位数が多いのに加え、総勤務時間が680時間（当初）の長時間に亘るインターンシップ（企業体験）で、派遣される企業等の規定に依りますが有給であることです。実習期間が長すぎるとの指摘があり、現在は540時間の総勤務時間になっています。観光業界に対する広い知識が要求されるので、3・4年次を対象とした専門性の高い科目です。

科目が開始されたのは2019（令和元）年で、東村観光推進協議会へ1名の女子学生を派遣しました。7月20日に実習が開始され、終了したのが2020（令和2）年2月10日でした。680時間の実習期間を修了するに約7カ月間かかりました。学生はこの期間の業務としては、東村観光推進協議会が指定管理者となっている福地川海浜公園の管理業務が主でしたが、これに加え、東村役場への協力や人材育成のプログラムの手伝い、LINEを使っての予約のシステムの構築や公園利用者へのキャッレス支払い導入等、また、SNSを使っての施設のプロモーション等を行ったとのことでした。この体験を通して、地域の人や訪問者との繋がり等、人との繋がりが重要であると実感したとことを述べていました。

2回目の学生派遣は2023（令和5）年度です。この年も派遣先は、上記と同じ東村観光推進協議会で、男子学生1名を派遣しました。業務の内容としては、指定管理者になっている福地川海浜公園の管理業務（来園者の受付、予約管理や公園内のゴミ拾いや施設の清掃等の公園管理等）が主で、これに加え、海水浴場・マリンアクティビティ補助業務、ツールドオキナワの手伝い、また、自主的に施設利用者の満足度や改善点を把握するためのアンケート調査も実施していました。彼の場合は、実習時間が540時間に減少されたことにより、年内には実習を終えることができました。彼は実習終了後もアルバイトとして業務を行っていました。

これら2名の学生は、両名ともに卒業後に東村観光推進協議会へ就職をしています。最初に実務を受講した女子学生は、3年余り東村観光推進協議会に勤務をしていました。2人目の学生は、現在、同協議会に勤務をしています。この2名が派遣先へ就職したこと見ていると、ホテル実務でも同じように派遣先のホテルに就職をした学生が少なくありませんが、この実務科目が学生の就職に直結していることを実感しています。この科目が目的として掲げている、実施を通じ「理論」と「実践」を備えた観光業界のニーズに対応できる学生を育成していることが達成されているように感じています。

これまで、派遣先としては東村観光推進協議会だけでしたが、2025（令和7）年度からエアーエクスプレス社と7月に開業したジャングリアと観光関連実務の協定を締結し、それぞれ4名と11名の学生を派遣しています。これら業界へも学生を派遣することができたことで、この科目がより多くの学生のニーズに応えことができることを期待しています。

(国際観光産業学科 新垣 裕治)

## ホテル実務

名桜大学では、沖縄という世界有数の観光地を生かし、学生がリゾート地の最前線で本物のホスピタリティに触れながら学べる環境を整えており、「ホテル実務」は、理論と実践の両面から自らを高め、将来あらゆる分野で通用する力を身につけることができる、他にない魅力的な授業のひとつです。国内外で評価の高い名だたる高級リゾートホテルまで、キャンバスから車にて30分ほどで行けるロケーションだからこそ成立する科目であり、ホテルに将来就職を希望している学生だけでなく、ワンランク上のラグジュアリーなサービスやきめ細かいホスピタリティを身につけたいと思う学生には最適な授業です。

540時間にもわたる実習では、トップレベルの高級リゾートホテルを舞台に、宿泊部門と料飲部門の両方を実体験でき、ホテルマンとしての経験を様々な方向からしっかりと学ぶことができます。実習では、フロントサービス業務や客室管理、レストランサービスなど、多岐にわたる業務を経験することで、ホテルの全体像を理解し、自身の得意分野や関心を深めることができます。現場で直接お客様と接する中で、敬語の使い方や身だしなみ、表情、立ち居振る舞いに至るまで、プロのホスピタリティとして求められる高い意識が自然と育まれます。

この授業の最大の魅力は、ただ「学ぶ」のではなく、「体感し、考え、動く」ことに重点を置いている点です。例えば、チェックイン業務一つをとっても、マニュアル通りでは通用しない場面に多く直面します。そのたびに自分で判断し、チームと連携して対応する力が求められます。こうした経験を通じて、現場で本当に必要とされる「応用力」や「実行力」、そして何より「人と向き合う力」が自然と養われていきます。

観光業は、机上だけでは学べない「現場のリアル」が詰まった産業です。接客の一瞬の判断力や、現場スタッフの連携、予期せぬ状況への対応力などは、実際の現場でしか体得できません。「ホテル実務」は、まさにその“生きた学び”を経験できる貴重な機会であり、グローバルなマナーや洗練された立ち居振る舞いを身につけたい方にもおすすめです。また、インバウンド観光が急増するなか、多言語対応や異文化理解の重要性も高まっており、この授業では国際的な視点からのホスピタリティ教育も重視されています。さらに、授業を通して得られるのは職業的なスキルだけではありません。お客様のニーズを読み取り、相手の立場になって行動する姿勢や、多様な価値観を受け入れる柔軟性、そして自らの課題を認識し、成長へとつなげる自己省察の力も養われます。こうした力は、観光業に限らず、医療・福祉、教育、国際協力など、人と関わるすべての分野において生かすことができます。

本学の「ホテル実務」は、単なる就職対策にとどまらず、学生一人ひとりの人間力を高め、社会で自信を持って活躍できる力を育てる授業です。ホテルという“非日常”的空間で、日々の積み重ねがどれだけお客様に感動を与えるかという視点を学ぶことで、サービスの本質に迫ることができます。

観光のプロをめざすあなたの背中を押すだけでなく、自分の可能性を広げたいすべての学生にとって、大きな一歩となる授業です。教室では得られない“リアル”を、ぜひこの授業で体験してください。そこには、机上の知識では決して気づくことのできない、自分自身の成長が待っています。

(国際観光産業学科 東恩納 盛雄)

## 名桜大学における日本語教師養成課程

本学における日本語教師養成課程は、2009（平成21）年に副専攻という形で始まりました。当時グローバル社会が急速に進む中、増加傾向にあった日本語学習者とそれに伴う日本語教師の人材育成のニーズに応えることを目的に設置されました。2019（令和元）年には文化庁の指針（日本語教育の教員養成について）に迅速に対応し、「言語」「言語と教育」「社会・文化・地域」「言語と社会」「言語と心理」の5区分に応じた科目を配置し、各区分で決められた所定の単位数及び全体の単位数（26単位）を満たした者に、「日本語教育（日本語教師養成課程）修了証」を授与することになりました。各区分で履修できる授業科目は、本学のリベラルアーツ教育の特徴を活かし、日本語学、国際政治、日本の歴史、沖縄の文学、異文化接觸論といったように幅広く、かつ特色あるものとなっています。

日本語教師養成課程（当時は副専攻）が開始された2009（平成21）年から2024（令和6）年現在まで副専攻の資格あるいは日本語教師養成課程修了証を授与された人数は232名です。これらの資格を取得した卒業生たちは、県内、県外、海外の各方面で幅広く活躍しています。その中には沖縄や自身の地元で実際に日本語教師として働いている方、国際交流基金の日本語パートナーズで海外に派遣され、現地の日本語教育に関わっている方、企業で外国人の方の日本語教育を任される方などがあります。また、日本語教師を目指すために本学に入学してくる高校生や、日本語教師の資格を取得するために他大学から編入してくる学生もあり、日本語教師のニーズの高まりを実感しています。

本学は幅広い知識と実践力をもった人材を輩出するために、2009（平成21）年の副専攻の設置から現在に至るまで、必修科目を中心として質の高い日本語教師養成カリキュラムを構築してきました。教育方針として特に意識しているのは、「自分なりの日本語教育観を醸成する」という点です。日本語教育においては、「唯一絶対の教え方」は存在しません。日本語学習者の母語、ニーズ、ビリーフ、日本語の習熟度といった様々な要因により教え方は変わります。そのため、自分の教育の軸をもったうえで、かつ柔軟に対応することが肝要です。本学の日本語教師養成課程では、この点に留意し理論と実践の両面から日本語教師の育成を行っています。

これまで様々な教授法が開発され時流に従って移り変わってきました。また、日本語学習者を取り巻く環境も急速に変化しています。近年ではChatGPTに代表されるように、これまでの言語学習を根底から覆す可能性を秘めたツールも開発され、浸透してきています。このような状況の中、「日本語教師から日本語を学ぶ意義や強みは何なのか」ということを考えていく必要があり、今後ますます日本語教師の役割が問われる時代になっていくでしょう。

2024（令和6）年から「登録日本語教員」制度が開始され、日本語教師が国家資格化されました。また、このことに伴い、これまでの伝統的な「文型積み上げ方式」による日本語教育から、「日本語教育の参照枠」に基づいた日本語教育に変わりつつあります。これは大きなパラダイムシフトであり、日本語教師養成においても「日本語教育の参照枠」に基づいた日本語教育を行うことができる日本語教師の育成が重要になると考えられます。こうした動きに柔軟に対応し、質の高い教育を行うことのできる人材を育成するためには、日本語教師養成課程のカリキュラムを今後一層充実させていく必要があります。

沖縄をはじめとして、日本、海外で活躍できる日本語教師の育成のために、本学はこれからも全力で取り組んでまいります。

（国際文化学科 当銘 盛之）

## 看護学科実習の10年のふり返り

看護学科は、2007（平成19）年4月に開設以来、「人間とは何か」、「生きるとはどういうことか」という根源的な問いを大切にし、「人間をホリスティックに理解すること」を教育理念に掲げて、参画型看護教育を進めてまいりました。その中でも、学生が人と向き合い、看護の本質に触れる実習は、カリキュラムの中核をなす貴重な学びの機会です。文部科学省は、看護実習を、「看護の知識・技術・態度を統合し、実践へ適用する能力を育成する教育方法」と位置付けており、複数の現場環境（病院、在宅など）での学習を通して、批判的・創造的思考力や倫理的省察能力、チーム医療に必要な対人関係能力を育むことが目的とされています。本学科では、病院やクリニックなどの介護福祉施設、訪問看護ステーション。自治体や保健所（選択）など多様な場において実習を行っています。また、新カリキュラムからは、学年ごとに、名護市を中心とした北部地域においてケアリング文化実習Ⅰ～Vを展開しています。これは地域に根差した包括的な看護を学ぶ貴重な機会です。学生は、住民の方々の暮らしに寄り添いながら「人にとって健康とは何か」「健康に暮らすとは何か」を実践的に学んでいます。

2015（平成27）年からの10年間を振り返ったときに、特に印象深いのは2020（令和2）年から始まった新型コロナウィルス感染症のパンデミックです。未知の新型ウィルス感染症の拡大防止と保健医療体制の維持、そして医療人を守ることが最優先とされ、施設や事業所、大学だけでなく、一般家庭でも3密の回避や感染対策の徹底が求められました。その中で実習は、全ての学年、全ての看護領域において、少人数体制による学内実習への切り替えを余儀なくされました。これは、「患者や支援対象者と向き合い、理解を深めて、実際に看護ケアを提供する体験を通して、看護の知識と技術を統合し、専門職の態度を養う看護教育・看護実習」において経験したことのない挑戦的な出来事でした。可能な限りリアルな学びに近づけるために、実在する患者さんや支援対象者の情報をもとにした模擬事例の作成と看護過程への活用、現場で働く看護師・保健師など臨地実習指導者からのオンライン講義や、実習指導者と教員のロールプレイによる実際の保健指導の再現など、学びの質を担保するために、日々、創意工夫を重ねました。教員と学生、臨地実習指導者が対面で行っていた実習ディスカッションは、全員が画面越しのオンラインディスカッションに変わりました。オンラインディスカッションは3密回避と感染防止に非常に効果的でしたが、通信環境や操作・設定の慣れへの差によって対話が中断することもあり、もどかしさを感じることもありました。学生達は、患者さんや支援対象者さんへ看護ケアを提供することも、臨地で経験を積むこともできず、言葉には出さなかったものの、「卒業して本当に看護職としてやっていけるのか」という大きな不安を抱えていたに違いありません。やがてパンデミックが終息し、臨地で実習ができたと話す学生の充実した表情や、対面による実習カンファレンスが白熱した時の感激を忘ることができません。この出来事は、「看護を学ぶプロセスに必要な要素は何か」や、「人と人との触れ合いから何を学んでいたのか」という本質的な問いに向き合せ、教員にとっても、学生にとっても、看護の本質を改めて見つめ直す時間となりました。困難な状況のなかでも「学びをとめない」という強い思いと、それを支えてくださった多くの関係者の皆様のご理解とご協力があつてこそ継続できたと感じています。現在は、以前のように多様な場での実習を実施できるようになりました。どのような時にも貴重な学びの場を提供してくださる関係者の皆様、地域の皆様に心より感謝申し上げます。この10年の実習の歩みには、様々な挑戦と変化がありました。今後とも、学生が「名桜ナース」として育つ過程をともに見守り、励ましていただけますようお願い申し上げます。

（看護学科 比嘉 憲枝）

## 看護学科における「グローバル・ナーシング」シリーズ・海外研修

### 正規科目としての看護学科の海外研修の歩みとこれから

人間健康学部看護学科では、2013（平成25）年度より正規科目として「海外研修」を実施してきました。異文化理解を深め、国際保健に関する知識と技術を実践的に学ぶことを目的とし、海外現場においてNGOや地域の方々と交流し、参画的に活動・考察する機会を設けています。事前学習（6～10コマ程度）を経て、現地で学びを深め（海外研修）、振り返りを経た後、報告会で学科内外の方々へ向けて広く発信しています。

### プログラムの進化

初回は「国際看護学II」の一環として、ハワイ大学ヒロ校にて実施されました。その後、学生の关心や学びの深化に応える形で、国際保健分野のNGOである国際協力市民の会（SHARE）やタイの社会的弱者支援団体のヘルスケアファンデーション（Health Care Foundation: HSF）の協力を得ながら多彩なプログラムを開催してきました。本海外研修の大きな特徴は、学生に沿う形で、研修日程を組み立てている点です。国内では経験できないような実践的な学びになるよう、教員も日々努力してきました。以下に昨年度（2024（令和6）年度）の活動を紹介します。

1. ラオスへと陸路で国境を超えて、病院や保健センターを見学する
2. タイで様々な医療レベルの公立病院訪問による医療制度や格差の比較考察をする
3. タイ東北部のウボンの村落でのホームステイによる生活文化の体験で理解を深める
4. HIV陽性者、AIDS患者やLGBTQ当事者との交流から当事者視点について学ぶ
5. 在宅療養者の家庭訪問と村落ボランティアの活動と役割を理解する
6. 薬物依存者支援団体を訪問する
7. 首都バンコクでの富裕層対象の私立病院（特に日本人クリニック）を見学する
8. 現地大学生との交流や伝統文化体験を通して多様性への理解を深める



海外研修の12年の歩み



### 成果と今後の展開

活動を通じ、学生は国際保健・看護の実践力と異文化対応力を高めてきました。事前学習に現地語学習を導入し、英語に偏らない国際理解の姿勢を養うことも意識してきました。一方、運営における課題も明らかになってきました。例えば、学生の費用負担は大きな壁であり、多数の病院見学も、日本の医療制度についての理解が十分でなく比較の視点を持ちにくいという問題もありました。

このため2025（令和7）年度より、事前学習で日本の社会保障や医療制度の学習を強化し、海外との比較ができるよう、関心のある分野や質問事項を明確にして渡航するようカリキュラムを見直しました。費用の軽減も試みたため、参加学生の増加が見込まれています。

さらに、海外志向の強い学生に限らず、国内のグローバル化にも対応できる教育を進めています。在留外国人数が過去最高を記録するなど、日本国内においても多文化共生への理解と対応が求められる時代となりました。そのため、国内実習として、外国人患者受け入れ体制を整えた医療機関での学びも取り入れました。沖縄県中部徳洲会病院はJMIP（外国人患者受入れ医療機関認証制度）認証済み病院として年間9,000人以上の外国人患者を受け入れ、医療通訳や多言語対応、研修制度の整備などを行っています。今年度から国際医療支援部での実習を開始し、多文化における医療を学べる環境を提供します。これは沖縄県内の看護系大学では初の実習となる見込みです。

### グローバル・ナーシングの今と未来へ

これらの取り組みを土台として、「グローバル・ナーシング I・II・III」はシリーズ化としての側面を強化し、最終段階である「III」では、グローバル化した社会において柔軟に対応できる医療人、また国際的な場で活躍する人材の育成を目指します。大学院でもグローバル・ナーシングを学べるよう環境を整え名桜大学としても30年を経て益々発展していきます。

（看護学科 藤井まい）





スノーケリング海洋実習



現代版組踊



登山実習

## 理論と実践を融合させ、地域で学ぶ初年次教育 —スポーツ健康学総論・演習—

本学科は、ウェルネスの理念を基盤とし、沖縄北部の豊かな自然環境を生かした地域社会の中で、人間のこころとからだを一体として捉える「健康支援人材」の養成します。その理念を体現し、専門教育への扉を開くのが、1年次必修科目「スポーツ健康学総論」と「スポーツ健康演習」です。

### ■ 理論と実践を往還する、一年を通した学びの設計

本学科の初年次教育は、理論と実践の往還を重視し設計されています。その中心「スポーツ健康学総論」と「スポーツ健康演習」は、独立した科目ではなく、年間を通して連続したプログラムとして意図的に構成されています。

これら2つの科目は、実質的に一体として運用されるのが大きな特徴です。「総論」で多様な学問分野に触れて学術的な思考法を養い、同時に「演習」で実践的なスキルや協働する力を学ぶ。初年次からこの二つの学びを並行して経験することで、学生は学問と実践を結びつけて考える姿勢を自然と身につけます。この経験こそが、大学での学びで陥りがちな理論と実践の乖離を防ぎ、「文武合一」の考えに基づいた4年間の学びの土台を強固にするのです。

### ■ 講義パート：多様な専門分野への扉

講義パートでは、学科所属の全教員が1コマずつオムニバス形式で専門分野を紹介します。スポーツ科学、健康科学、コーチング、スポーツマネジメント、学校保健、社会福祉、公衆衛生など、多岐にわたる「スポーツと健康」の世界への扉を開きます。学生は、この授業を通して各分野の魅力や奥深さに触れ、自身の興味・関心の幅を広げることができます。それは、2年次以降のコースや専門ゼミの選択、さらには将来のキャリアを考える上で重要な羅針盤となります。多様な学問領域との出会いが、多角的な視点を持って物事を捉える力を養う第一歩となるのです。

### ■ 演習パート：地域をフィールドにした実践

演習パートは、大学周辺の豊かな自然や文化といった「地域資源」を教材とします。前学期に全員必修で実施される「スノーケリング実習」は、初年次教育の重要な柱です。この実習では、技術習得（スノーケリングを学ぶ）だけでなく、より広範な能力（スノーケリングで学ぶ）を養うことを重視しています。安全管理や仲間との協働を通じ、状況判断力、リーダーシップ、責任感を育むと共に、実習全体のタスク管理、そして仲間、教職員、上級生といった多様な立場の人々と正確に意思疎通を図るコミュニケーション能力も養います。これらは全て、将来の健康支援人材に不可欠な実践的能力です。後学期には、沖縄の伝統文化に根差した「現代版組踊」、やんばるの森を歩く「登山実習」、優美な古宇利島の景色の中を駆け抜ける「ハーフちょいマラソン」から一つを選択。地域に根差した活動は、学生が社会の一員としての自覚を深める機会ともなっています。

### ■ 先輩から後輩へ、学びをつなぐ「ニアピア・サポート」

これらの授業のもう一つの特色が、上級生が下級生の学びを支える「ニアピア・サポート」の仕組みです。総論ではスチューデント・アシスタント（SA）が、演習では初年次教育チーフーや各ゼミ等の上級生が、計画から指導・運営まで主体的に参画します。上級生は、支援する側として関わることで、企画力、指導力、運営力、そして責任感を育む絶好の実践訓練の場となります。一方、1年次学生は、身近な先輩の姿から多くを学び、支援人材としての素養を自然と育んでいきます。教員から学生へ、先輩から後輩へと続くこの「学びの循環」こそ、本学科の一体化的な教育を支える基盤なのです。

このように「スポーツ健康学総論」と「スポーツ健康演習」は、理論と実践、そして地域と大学、さらには上級生と下級生を有機的につなぐ、本学科の教育の出発点となる重要な科目です。

(スポーツ健康学科 遠矢 英憲)

## 本学独自の奨学金

本学には、地域に貢献する人材の育成、研究活動の促進などを目的とした独自の奨学金や授業料減免の制度があります。下記の奨学金は2015～2024（平成27～令和6）年の間に創設された奨学金制度です。

### ■ 名桜大学看護学科学生の北部12市町村への貢献を促進するための奨学金

(2016（平成28）年～2022（令和4）年募集終了)

### ■ I.K生涯学習奨励奨学金（2016（平成28）年～）

### ■ 名桜大学大学院平恒次ホモサビエンス研究奨励奨学金（2019（令和元）年～）

### ■ 名桜大学大学院 Matsuro and Tsuruko Nakasone scholarship（2020（令和2）年～）

### ■ 名桜大学独自の授業料減免（2023（令和5）年～）

### ■ 名桜大学奥本弘文奨学金（2024（令和6）年～）

## 贈呈式の様子



2023（令和5）年度 I.K生涯学習奨励奨学金



2021（令和3）年度 名桜大学大学院平恒次ホモサビエンス研究奨励奨学金



2024（令和6）年度 名桜大学大学院 Matsuro and Tsuruko Nakasone scholarship



2024（令和6）年度 名桜大学奥本弘文奨学金



2025（令和7）年度 看護学科学生北部12市町村への貢献を促進するための奨学金

6  
章

## 研究活動



## 10年間の研究活動を振り返って

永田 美和子 副学長（研究国際交流担当）

大学の根幹をなす活動である研究は、社会の発展に貢献し、本学の特色を確立する上で不可欠なものであります。創立以来、本学は各教員がそれぞれの専門性を活かし、自発的かつ独創的な学術活動を推進できるよう努めてまいりました。ここ数年においては、地域の社会課題に関連した研究が多いことはもとより、地域に根差した大学としての使命を果たすべく、琉球文学の総合的な学術書である「琉球文学大系」を発刊するなど、地域文化の継承と発展にも貢献しております。教員一人ひとりの熱意と専門性が詰まった研究の軌跡は、本学ホームページのResearchmapを通してご覧いただけます。ぜひ一度ご覧いただければ幸いです。

研究活動は、国民の皆様からの信頼と負託があつて初めて成り立つものです。そのため、研究者には高い倫理観が求められます。本学では、この社会的責任を果たすべく、研究活動の透明性と健全性の確保に積極的に取り組んでまいりました。具体的には、2015(平成27)年に「研究者行動規範」を制定するとともに、「研究活動における不正行為への対応等に関する規程」を整備しました。これらは、教職員への定期的な啓発活動と併せて、公正な研究環境の基盤を築く上で重要な役割を果たしています。また、研究活動のグローバル化が進む今日、外国政府や外国機関からの不当な影響による利益相反や技術流出といった新たなリスクが顕在化しています。このような課題に対応しつつ、国際的に信頼される研究環境を構築するため、2024(令和6)年度に「研究インテグリティの確保に関する規程」を制定しました。加えて、「名桜大学利益相反マネジメント規程」の改訂も行い、研究の公平性を一層高めています。さらに、2025(令和7)年度には「安全保障輸出管理規程」の制定を予定しており、国際的な研究協力を健全に進めるための体制整備を継続的に進めています。このように30

年の歳月は、本学の研究推進において、多くの課題と向き合い、それを乗り越えてきた歴史でもあります。特にこの数年は、社会の変化に対応するべく、組織的な改革として、学長主導のもと環太平洋地域文化研究所、附属図書館、地域連携研究推進課等と協働し、2023(令和5)年度には「研究推進委員会」が発足しました。これにより、研究に関する情報や支援の窓口が一元化され、教員の研究活動がより効果的に推進できる環境が整いました。研究活動促進策の一つとして、これまで教員からの要望があったサバティカル制度を導入しました。この制度を活用し、博士号取得などの新たな知見や研究成果を生み出しています。また、学長裁量経費を継続するとともに、科学研究費助成事業等の研究費獲得に向けた勉強会や説明会、外部講師による個別相談会などを定期的に開催しています。これらの支援が実を結び、科研費の申請率および代表者率は微増傾向にあります。目標とする申請率にはまだ届いていませんが、今後も継続的な支援を行い、教員の皆様の研究活動を力強く後押ししてまいります。さらに、学際的な研究を推進するためには、産学官の連携が不可欠です。本学では共同研究や受託研究を積極的に推進しており、その件数は年々増加し、着実に成果を上げています。今後、さらなる研究活動を推進していくためには、研究計画書の作成支援、研究ニーズとシーズのマッチング、共同研究・受託研究の情報収集・調整などを行う専門職員(URA)の役割が重要となります。この重要な役割を担う専門職員として、2025(令和7)年度より1名のURAが採用されました。これにより、研究活動を推進するための環境が整いつつあります。

創立30周年を機に、これまでの成果を礎とし、今後も教員の皆様が存分に研究に打ち込める環境を整備し、社会に貢献する研究成果を創出できるよう邁進してまいります。

## やんばるブックレットの歩み：地域を読み解き、未来を拓く

奥本 正 やんばるブックレット編集委員長

やんばるブックレットは、名桜大学開学20周年事業の一つとして始められました。当時の山里勝己学長から、沖縄北部、通称「やんばる」を多角的な視点から掘り下げ、その潜在的な価値を再発見することを目的として、高校生も読める、比較的短い読み物を作りたいと提案を受け企画されました。本シリーズは、21世紀の沖縄はどこに向かうのか、どのような新しい生き方が私たちを待っているのか、沖縄北部を斬新な切り口から見つめ直すことで沖縄ひいては日本全体の未来が見つめることで、人間の生き方を根源から問い直そうという思いが込められています。名桜大学があるやんばる地域を単に地理的な「辺境(Edge)」として捉えるのではなく、むしろ未来を切り拓く「最先端(cutting edge)」と位置づけ、新しい時代の「やんばる像(=自己像)」を発見し、構築しようという思いも込められています。

このブックレットは、名桜大学の専任教員・職員が応募でき、編集委員会による審査を経て採択された多様なテーマの原稿が形になります。採択されるキーワードは「やんばる」を主テーマとしたものです。2016(平成28)年12月に第1巻として『文学と場所』が刊行されて以来、継続的に出版が進められて

おり、2025(令和7)年4月現在までに11冊(別冊2巻を含む)が既に刊行されています。これらのブックレットは、『文学と場所』から始まり、『やんばるとスポーツ』や『やんばると観光』といった地域資源に焦点を当てたもの、さらには『やんばると台湾・パインと人形劇にみるつながり』のように国際的な視点を取り入れたもの、そして『やんばる学びのボリューム』や『ウチナーンチューの移民』といった社会や教育、歴史に関するテーマまで、多岐にわたる分野を網羅しています。それぞれの巻が、やんばる地域の多様な側面を深く掘り下げ、新たな価値の発見と発信に貢献しています。当初5年間で15冊の刊行が予定されていましたが、事業開始から10年が経過した現在も精力的に活動が続けられており、2025(令和7)年度中には目標とする全15冊の刊行を完了する見込みです。

やんばるブックレットは、高校生、大学生、そして一般住民といった幅広い読者層を対象とするもので、地域社会に深く根差し、未来を志向する名桜大学の具体的な取り組みを示すものとして、その意義は大きいと考えられます。



これまで発刊したやんばるブックレット

### これまで発刊したブックレットタイトル一覧

No	タイトル	編者または著者	発行年
1	文学と場所	名桜大学	2016年
2	やんばるとスポーツ	奥本正・大峰光博	2017年
3	やんばると台湾・パインと人形劇にみるつながり	菅野敦志	2018年
4	やんばると観光	大谷健太郎・新垣裕治	2018年
5	やんばるとオリンピック	大峰光博・神谷義人	2020年
6	やんばると産業	仲尾次洋子	2020年
7	やんばる世界を拓く	小川寿美子	2022年
8	やんばる学びのボリューム	名桜大学リベラルアーツ機構	2023年
9	ウチナーンチューの移民	名桜大学大学院国際文化研究科・沖縄ディアスpora研究センター	2025年
別冊1	沖縄/日本の文化・社会・共同体と国際環境	菅野敦志	2017年
別冊2	子どもの貧困問題と大学の地域貢献	嘉納英明	2017年

## 『琉球諸語と文化の未来』の刊行

小嶋洋輔 国際文化学科

2021（令和3）年、岩波書店から波照間永吉・小嶋洋輔・照屋理編『琉球諸語と文化の未来』は刊行されました。

本書の刊行のきっかけとして、2020（令和2）年2月15日に名桜大学主催、琉球新報社共催で開催された国際シンポジウム「琉球諸語と文化の未来」があります。その模様に関しては本書の第Ⅰ部にまとめられています。その「開会あいさつ」の山里勝己前学長の言葉を読めば、本シンポジウム、そして本書の意義が端的に理解できるように思います。山里前学長はそこで、「言葉は一度失われると、復活させるのはほぼ不可能です。琉球語は恐らく19世紀から現在まで100年かけて駆逐され、失われてきた」とその危機感を表明しています。琉球諸語と、

その言語から生じる豊かな文化を「継承する」には「現在」待ったなしということです。こうした問題意識を共有し、本シンポジウムではまず基調講演を本学大学院国際文化研究科の波照間永吉教授（当時）にお願いしました。そしてその内容を受けて、県出身者初の芥川賞作家である大城立裕氏、日本の言論界を代表する評論家であり、本学名誉博士である佐藤優氏、ハワイの言語復興に取り組まれてきたハワイ大学ヒロ校のケイキ・カヴァイアエア教授と大原由美子准教授、そして琉球語を専門的に研究されてきた沖縄国際大学西岡敏教授が報告を行い、その後会場からの質問に対して質疑応答が行われました。とくにこの年の10月にご逝去された大城立裕氏の言葉は公的な場面での最後のご発言ということもあり、重いものです。琉球語の「丁寧語」を作る必要性を説かれた報告は、今も我々の宿題として残されています。同様に佐藤優氏が話された、琉球語の正書法の確立という提言も、かなり挑戦的で琉球諸語継承の問題を考えるものにとって大きなご発言でした。なお、本書を明治以来日本のアカデミズム

の一般への浸透に大きな影響を与えてきた出版社である岩波書店から刊行できたのは、佐藤優氏のご紹介があったからこそです。岩波書店からの刊行というのは、それだけで琉球諸語にとって重要なことでした。ここであらためて感謝の意をささげたく思います。

第Ⅱ部「研究報告」では、国際シンポジウムで提示された問題意識を共有した14名の執筆者に各専門の立場から論を寄せてもらいました。本書「はじめに」（波照間永吉）の言葉を援用させていただきまとめるならば、まず第1章から第5章は「危機言語からの脱却を実現するためにはどうすべきか」について、各専門家のそれぞれの現段階での「答え」がまとめられています。次いで第6章から第10章では、「近代日本に組み込まれて、日本語社会に生きて表現活動をしなければならなかった琉球の人々の営みについて分析した論考」をまとめています。そして第11章から第13章では、「琉球語が何らの制約も受けずに、自らの生活の言葉として生動していた時代の文学作品について論じ」ています。そして、最後に第14章では、「琉球語が日本語とは異なる言語であることを理論的に証明」を試みた論を置きました。詳細な目次に関しては図として画像を上げていますのでそちらを参照いただければと思います。

琉球諸語に未来を見出す。これへの多様なアプローチを一つの書籍として編めたことは大きな成果といえます。しかし本書は、本書を契機として様々な場で様々な意見や動きが立ち上がってくることを期待して刊行されたということを忘れてはならないと思います。刊行された2021（令和3）年3月は新型コロナウィルス感染症のまん延防止のための緊急事態宣言の最中でありそれも災いしてか、以降も活発な議論が行われたとは言い難いです。最後に、本書の「帯」にも紹介された、波照間先生の「基調

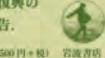
講演」の言葉を引用して、改めて本書のそうした意図を示し、終わりたいと思います。

（前略）日本語の圧倒的な量に対して私たちができるのは、自分の家、自分の地域で、自分の地域の言葉を自分たちの力で残そうとする取り組みを、一人ひとりがやって行くことしかないだろうと思うのです。（本書p.12）



### 「私の言葉」「私の文化」を生かし続けるために

危機に瀕する琉球諸島の言語の継承に、いま何が必要か。作家の大城立裕など知識人やハワイ語復興の専門家によるシンポ、多角的な研究報告。



定価(本体)3500円+税

目 次	
はじめに	困難の向こうにある言語復興の未来を共に目指して　波照間永吉
第Ⅰ部 國際シンポジウム「琉球諸語と文化の未来」	
1. 基調講演	
開会あいさつ	山里勝己 3
自分たちの言葉を自分たちの力で残していくために　波照間永吉	4
2. 報 告	
報告1 沖縄の「丁寧語」を創造する	大城立裕 13
報告2 正書法の制定が不可欠	佐藤 優 16
報告3 いつでもどこでも自分たちの言葉を話す	ケイキ・カヴァイアエア(通訳: 大原由美子) 19
報告4 多様な発音をどう表記するか	西岡 敏 22
3. 質疑応答	28
第Ⅱ部 研究報告	
第1章 学校教育におけるハワイ語の復興及び常用化の現状	大原由美子 39
第2章 アイデンティティ維持のための言語継承	カナニノヘア・K.C.マーカイモク(大原由美子 訳) 51
おわりに	
方言への愛着が拓く未来	照屋 理 265
可能性の集積として	小嶋洋輔 268

## 小さな大学による地域創生文化事業

渡具知 伸 「琉球文学大系」編集刊行事務局 事務局長

2019（平成31）年4月1日に名桜大学が編集刊行事務局を開始する「琉球文学大系」編集刊行事業（全35巻）のプレスリリースが本学構内でマスコミ各社を集め行われました。翌2日の琉球新報1面トップ記事では“新元号「令和」という大見出しに並び、「琉球文学大系発刊へ」という記事が写真入りで掲載されました。2019（令和元）年という年は5月1日に元号が「平成」から「令和」に変わり、10月末には首里城が焼失するなど激動の年度であったかもしれません。一方、名桜大学にとっては「国際文化研究科大学院博士後期課程」が同年4月1日に開設されたことにより、教育組織として学部教育課程、大学院修士課程に加え、新たに大学院博士課程が設置され、成熟した大学へ成長する年度となりました。

「めぐり合わせ」「天の配剤」という言葉がありますが、今振り返ると2019（令和元）年4月1日を境に展開した文化事業は、幸運と時機に恵まれた事業であったかと思います。これまで不思議なほどの偶然、大学が引き合せた人の出会いなど、見えない力によって「琉球文学大系」を推進していく人々が参集し、県内大学の研究協力も得られるなど、何ものかに導かれて同事業はスタートしました。

2019（令和元）年4月からさかのぼる半年前の2018（平成30）年9月9日に開催された「大学院国際文化研究科国際地域文化専攻（博士後期課程）キックオフシンポジウム」での波照間永吉先生（大学院博士後期課程研究科長予定者）発表の中で「琉球文学全体のテキスト、たとえば『日本古典文学大系』や『漢文大系』などに類する『琉球文学大系』のようなテキストの集成は、早急に手がけなければならぬ大きな課題である。これらのテキストに基づく精密な作品研究・注釈研究などが今後目指さなければならない」という波照間先生の言葉を拾い、山里勝己学長が比嘉良雄理事長に意義を伝え、同年12月27日の名桜大学理事会において同事業開始が承認されました。つまり、事業が開始されるまで、

わずか半年の速さで自主財源による地域創生文化事業の組織決定がなされたのです。“改革の名桜”と呼ばれる所以がここにあります。スピード違反に映る壮挙の裏側には「琉球諸語の保存と継承」を願う先人たちの見えない力が作用したかもしれません。

2019（令和元）年4月1日に波照間先生が名桜大学に入職されると同時に、同博士課程に沖縄学のベテラン教授陣も加わり、さらに学内沖縄学、若手・中堅教員が名桜大学に集結した幸運と縁も重なり、同先生が構想した全35巻のテキスト編纂事業は飛躍的なスピードで開始されるに至ったのです。

通常このような長期シリーズ刊行物については、「予算」と「人」という内部要因と「出版社」や「学外執筆者」などの外部要因もあり、事業を始める前準備として本来なら5年程度の準備期間が必要だという見立てもあります。ところが、名桜大学では、種が出て事業が開始に至るまでわずか半年という異例のスピードで事業を開始したばかりでなく、この5年間で走りながら準備を整え、これまで11冊の刊行を果たすことができました。さいさき良いすべり出しとして、その第1・2巻『おもろさうし』上・下（波照間永吉著）は、第51回伊波普猷賞を受賞しました。

本事業最大の目標は全35巻刊行（2032年度完了予定）達成にあります。そのためには「琉球文学大系」関係各位の健康保持を第一にしつつ、「产学連携長期プロジェクト事業」として多くの皆さまのご協力を仰ぎながら「琉球文学・琉球諸語の保存と継承」に役立てる地域創生事業を今後とも推進してまいります。

名桜大学は、沖縄県北部やんばるに位置する小さな大学ですが、やりとげようとしている「琉球文学大系」編集刊行事業（全35巻）刊行は、沖縄にとどまらず世界に誇れる大きな文化事業と言えます。

## 学術シンポジウム

※敬称略。肩書きは当時のものです。

開催年度	教員名	タイトル	講師・シンポジスト
2015 （平成27 年度）	10/22（木）	沖縄／日本の歴史・文化・共同体と国際環境	<p>[第Ⅰ部] 開会挨拶 林基煌（開南大学 副学長） 基調講演Ⅰ 趙順文（開南大学人文社会学院 院長）「台日関係と開南大学」 基調講演Ⅱ 菅野敦志（名桜大学国際学群 国際文化専攻副専攻長）「沖縄の公立大学・名桜大学の魅力と個性」 沖縄/日本の共同体と制度 司会：北嶋徹（開南大学 教授） 李鎮榮（名桜大学国際学群 教授）「日本における『家族』の生成」 嘉納英明（名桜大学国際学群 教授）「戦後沖縄の教育と制度」 李台元（開南大学 助理教授）「台湾原住民の言語教育」 [第Ⅱ部] 沖縄/日本の歴史と文化 司会：尾崎学（開南大学 副教授） 屋良健一郎（名桜大学国際学群 准教授）「江戸時代の種子島と琉球・薩摩」 山田均（名桜大学国際学群 教授）「日本人の異界観」 照屋理（名桜大学国際学群 上級准教授）「琉球・沖縄の民族文化—『おもろさうし』と創作才モロー」 呂青華（東方設計学院 副教授）「中台両地の沖縄学—戦後の研究動向」 [第Ⅲ部] 沖縄/日本からの人の国際的移動 司会：佐野誠（開南大学 助理教授） 住江淳司（名桜大学国際学群 教授）「沖縄人のブラジル・ロンドリーナへの移動—ロンドリーナ市における沖縄系の人びとの文化触変と文化挿入の事例研究」 高嶺司（名桜大学国際学群 上級准教授）「日本人のオーストラリアへの移動—真珠ダイバーたちのみた夢」 菅野敦志（名桜大学国際学群 上級准教授）「終戦・引き揚げと沖縄—台湾の人の移動」 全体討論と総括 閉会挨拶 王玉玲（開南大学 応用日本語学科長）</p>
2016 （平成28 年度）	9/13（日）	やんばる（山原）で安心して子どもを産み育てるとはー支え合うやんばるの母性を考えるー	<p>[第Ⅰ部] 「童神のこころ」 古謝美佐子（沖縄民謡歌手） [第Ⅱ部] バネリストによるプレゼンテーション 島田友子（名桜大学人間健康学部 看護学科長） 佐藤香代（福岡県立大学大学院 看護学研究科教授） 荒木善光（国頭村役場福祉課保健師） 浦崎公子（美容師、ホメオパス、自然療法士、アロマコーディネーター） 仲本剛（沖縄県立北部病院産婦人科 医長） ディスカッション</p>
2016 （平成28 年度）	2/4（土）	明日のやんばるの教育を語る	<p>[第Ⅰ部] 講演会 はじめの挨拶と講師紹介 板山勝樹（名桜大学教員養成支援センター長） 樺山敏郎（大妻女子大学、国語科教育）「これからの時代に求められる資質や能力の育成～学びの文脈を創るアクティブ・ラーニングの推進～」 [第Ⅱ部] シンポジウム「明日のやんばるの教育を語る」 コーディネーター：嘉納英明（名桜大学 学長補佐） 登壇者 渡久地政孝（国頭教育事務所 主任指導主事） 座間味法子（名護市教育委員会 教育長） 堀越泉（名護市立東江小学校 校長） 総括 園原實（国頭村教育委員会 教育長） 閉会の挨拶 板山勝樹</p>
2017 （平成29 年度）	11/4（土）	日タイ国交樹立130周年記念2017国際シンポジウム	<p>[第Ⅰ部] アジアの文化接触・文化変容 基調講演：「日本仏教とタイ仏教の出会いータイへ留学した日本人青年僧たち」 山田均（名桜大学国際学群） 「オーストラリアにおける沖縄県出身契約移民労働者の足跡」 高嶺司（名桜大学国際学群） 「琉球・シャムとの交流～琉球文化の視点から～」 照屋理（名桜大学国際学群） 「沖縄のタイ語教育」 山田均 「タイの螺鈿屏に見られる外国の影響」 高田知仁（サイアム大学） 「日本の多文化共生教育のこれからー人口減少と移民政策をめぐる議論と関連してー」 嘉納英明（名桜大学国際学群） 「中世・近世日本の対外認識」 屋良健一郎（名桜大学国際学群） 「韓国における『伝統の創造』と文化変容の一局面」 李鎮榮（名桜大学国際学群） 「中華文化復興運動にみる台湾の政治変容と華人社会」 菅野敦志（名桜大学国際学群）</p>

## 学術シンポジウム

## 環太平洋地域文化研究所主催のシンポジウム

※敬称略。肩書きは当時のものです。

開催年度	教員名	タイトル	講師・シンポジスト
	9/9 (日)	環太平洋という視点に立って 沖縄(琉球)・アジア(ハワイを含む)南北アメリカの地域文化研究を深化する ～名桜大学大学院博士後期課程の特色と役割	[第Ⅰ部] 名桜大学大学院国際文化研究科 国際地域文化専攻(博士後期課程)設置構想紹介 [第Ⅱ部] 研究分野照会 1.琉球・沖縄文学: 波照間 永吉(沖縄県立芸術大学 名誉教授) 2.南島地域の民俗文化: 山里 純一(琉球大学 名誉教授) 3.中国・琉球関係史: 赤嶺 守(琉球大学大学院 教授) 4.アメリカ環境文学: 山里 勝己(名桜大学学長・名桜大学大学院 教授) 5.中南米地域文化: 住江 淳司(名桜大学大学院 教授) [パネルディスカッション] パネリスト 波照間 永吉、山里 純一、赤嶺 守、住江 淳司 コーディネーター 山里 勝己
2018 (平成30 年度)	11/3 (土)	国際コンソーシアム協定連携 シンポジウム ～沖縄の健康長寿復活～	[Ⅰ部 基調報告] 中路 重之(弘前大学) Bradley J.Wilcox, Richard Allsopp(ハワイ大学) Greg Shaw(国際高齢者団体連盟) 大屋 祐輔(琉球大学) 砂川 昌範(名桜大学人間健康学部 教授) [Ⅱ部 健康宣言] 北部12市町村首長 [Ⅲ部] 分科会A ヘルスリテラシー向上のための活動 糸数 公(沖縄県)、神出 計(大阪大学)、石川 清和(北部地区医師会)、 宮里 好一(医療法人タピック)、花城 和彦(琉球大学) 分科会B やんばるの産業と健康増進 小野 雅春(名護市)、中島 滋(文教大学)、長山 真由美(前田産業)、 芳野 幸雄(クックソニア)
156	1/25 (金)	国際シンポジウム 港・観光と自然 ～クルーズ船受入れに関する やんばる産官連携～	[主催者挨拶] 山里 勝己(名桜大学学長)、伊集 盛久(北部振興会長、東村長) [基調講演] 王 凱(南開大学外国语学院 副学長/東アジア文化研究センター長) テーマ「地域発展と大学の役割」 [学生発表] 南開大学日本語学科学生 [パネルディスカッション] コーディネーター: 伊良皆 啓(名桜大学観光産業教育研究系 上級准教授) 大谷 健太郎(名桜大学観光産業教育研究系 上級准教授) 高良 文雄(名桜大学理事/前本部町長) 松田 美貴((有)沖縄シップスエージェンシー 会長) 新垣 力太(沖縄北部法人会 副会長) コメンテーター 王 凱 [閉会挨拶] 鈴木 啓子(名桜大学 副学長)
2019 (令和元 年度)	6/16 (日)	やんばる健康シンポジウム ～「やんばるの医療を守る宣言」と「やんばる健康宣言」の推進～	[開会挨拶] 山里 勝己(名桜大学 学長) [来賓挨拶] 當眞淳(北都市町村会長、宜野座村長) [Ⅰ部: 基調報告] 「健康づくりを地方創生のメインテーマに! : 短命県青森をフィールドとしたオープンイノベーション」 中路 重之(弘前大学COI拠点長) [基調報告2やんばるプロジェクト健診] 砂川 昌範(名桜大学人間健康学部 学部長) 「健康経営有料法人2019認定と具体的取り組み・当社における喫煙対策～沖縄電力の取り組みについて～」 與那嶺 勝枝(沖縄電力株式会社安全健康グループ健康支援チーム) [Ⅱ部: 平成30年度やんばる版プロジェクト健診結果説明会] ・スマホのアプリの使い方 ・健診結果をどう考えるか～やんばる版プロジェクト健診測定結果の概要説明～ ・個別相談

開催年度	教員名	タイトル	講師・シンポジスト
2015 (平成27 年度)	6/6 (土)	移民・デカセギ・亡命・ホスト社会 ～ラテンアメリカとアジアの事例から～	[司会] 住江 淳司(名桜大学国際学群 教授) [基調講演者] アラセリ・ティナヘロ(シティーカレッジ・オブ・ニューヨーク 人文芸術学部 教授) 加藤 隆浩(南山大学外国語学部 教授) [パネルディスカッション] コーディネーター 菅野 敦志(名桜大学国際学群 上級准教授) パネリスト アラセリ・ティナヘロ 加藤 隆浩 田島 久歳(城西国際大学国際人文学部 教授) 酒井 アルベルト(琉球大学法文学部 准教授) 住李 鎮栄(名桜大学国際学群 教授) 住江 淳司
9/23 (土)		バードウォッチングとエコツーリズム ～地域活性化と観光促進～	[基調講演] 桶口 広芳(慶應義塾大学大学院) [事例報告] 新垣 淳治(名桜大学国際学群 教授) 嵩原 健二(沖縄野鳥研究会) Lim Kim Seng(シンガポール自然協会) Kyungwon Kim(韓国エコツーリズム協会) Victor Yu(エコツーリズム台湾) [総合討論コーディネーター] 花井 正光(沖縄エコツーリズム推進協議会)
10/11 (日)		がんのリハビリテーション ～がん看護の新たな潮流～	[開会挨拶] 金城 利雄(名桜大学人間健康学部 学部長) [基調講演] 辻 哲也(慶應義塾大学医学部 腫瘍センター/リハビリテーション部門 部門長) [シンポジスト] 神里 みどり(沖縄県立看護大学大学院 教授) 吉澤 龍太(那覇市立病院 がん専門看護師) 小橋川 初美(社会医療法人友愛会・南部病院 緩和ケア認定看護師・緩和ケア病棟 師長) [座長] 金城 利雄、玉井 なおみ(名桜大学人間健康学部看護学科 教授) [閉会挨拶] 砂川 昌範(名桜大学人間健康学部看護学科 教授)
12/5 (土)		マイナンバーの勘どころ ～企業・個人がとるべき行動と対応～	[司会] 中里 収(名桜大学国際学群 教授) [シンポジスト] 倉富 和幸(名護市役所総務部人事行政課ICT推進係 係長) 古林 忠史(NTTアドバンステクノロジネットワークソリューション事業本部 セキュリティソリューションビジネスユニット 担当課長) 飯田 剛史(社会保険労務士法人D・プロデュース代表社員 社会保険労務士) [パネルディスカッション] コーディネーター 田邊 勝義(名桜大学国際学群 教授) パネリスト 倉富 和幸 古林 忠史 飯田 剛史
2/18 (木)		ペリー、メキシコと日本・沖縄における交流の歴史・現在・未来 ～環太平洋間交流のさらなる発展に向けて～	[シンポジスト] パブロ・アラニバル(サンマルティンデボレス大学) 大浦 敏文(沖縄メキシコ協会) 屋良 健一郎(名桜大学国際学群 准教授) 上原 なつき(名桜大学国際学群 准教授)
3/26 (土)		「糖尿病を身体活動、運動で予防・改善する」	[シンポジスト] 宮地 元彦(独立行政法人国立健康・栄養研究所 健康増進研究部長) 仲地 健(医療法人翔南会翔南病院 副院長) 長嶺 敦司(ハートライフクリニック 理学療法士 健康運動指導士)

## 環太平洋地域文化研究所主催のシンポジウム

※敬称略。肩書きは当時のものです。

開催年度	教員名	タイトル	講師・シンポジスト
2016(平成28)年度	2/4 (土)	オリンピックから考えるスポーツの価値 ～2020東京へ向け私たちにできること～	[挨拶] 山里勝己 (名桜大学 学長) [総合司会] 奥本正 (名桜大学人間健康学部 教授) [基調講演] 山崎一彦 (順天堂大学) [ファシリテーター] 小賦肇 (名桜大学人間健康学部 上級准教授) [シンポジスト] 山崎一彦 桐生祥秀 (東洋大学) 諸久里武 (アスリート工房)
	12/8 (木)	沖縄美ら島財団総合研究センター サンゴシンポジウム 「サンゴの移植⑪—サンゴ移植の成功へ向けて—」	[開会挨拶] 後藤和夫 (一般財団法人沖縄美ら島財団 総合研究センター長) [講演Ⅰ] ① 西平守孝 (一般財団法人沖縄美ら島財団参与 名桜大学 名誉教授) ② 比嘉義視 (恩納村漁業協同組合) ③ 山里祥二 (NPO法人 コーラル沖縄) ④ 金城浩二 (有限会社 海の種) [講演Ⅱ] ⑤ 藤原秀一 (いであ 株式会社) ⑥ 中村明毅 (沖電開発 株式会社) ⑦ 岡田亘 (株式会社 エコー) ⑧ 池田智・木寺莉菜 (ミスワリン) [総合討論] ⑨ 司会者講演: 中野義勝 (琉球大学 热帯生物園研究センター 濕底研究施設)
	12/17 (土)	第2言語としての英語習得と学力増進	[基調講演] 白井恭弘 (ケースウェスタンリザーブ大学) バトラー後藤裕子 (ペンシルバニア大学) 李鎮榮 (名桜大学総合研究所 所長) コーディネーター 中村浩一郎 (名桜大学国際学群 教授)
	3/23 (木) ～ 3/26 (日)	美ら島研究センター サンゴワーキングシンポジウム 「サンゴの分類と同定2017」	[講師] 西平守孝 (一般財団法人沖縄美ら島財団参与、名桜大学 名誉教授) 永田俊輔 (一般財団法人沖縄美ら島財団) 山本広美 (一般財団法人沖縄美ら島財団)
	12/7 (木)	総合研究センター サンゴシンポジウム 「サンゴの移植⑫—サンゴの移植活動と白化現象—」	[開会挨拶] 中野正法 (一般財団法人沖縄美ら島財団総合研究センター) [講演Ⅰ] ① 西平守孝 (一般財団法人沖縄美ら島財団総合研究センター) ② 中野義勝 (琉球大学熱帯生物園研究センター 濕底研究施設) ③ 比嘉義視 (恩納村漁業協同組合) ④ 横倉厚 (いであ 株式会社) ⑤ 酒井一彦 (琉球大学熱帯生物園研究センター 濕底研究施設) ⑥ 吉田稔 (有限会社 海游) [講演Ⅱ] ⑦ 山里祥二 (NPO法人 コーラル沖縄) ⑧ 高嶺翔太 (沖電開発 株式会社) ⑨ 川崎貴之 (株式会社 エコー) ⑩ 上原直 (グロービングコーラル) ⑪ 豊澤也寸志 (エコガイドカフェ) [司会者講演] ⑫ 鹿熊信一郎 (沖縄県海洋深層水研究所) [総合討論] 司会進行 鹿熊信一郎
2017(平成29)年度	2/11 (土)	言語学講演会 なぜ外国語の発音は難しいか?	[司会] 中村浩一郎 (名桜大学総合研究所 所長) [講師] 川原繁人 (慶應義塾大学言語文化研究所 准教授)
	2/18 (日)	文学と場所— 〈切っ先〉としての「やんばる」	[司会進行] 小嶋洋輔 (名桜大学国際学群 上級准教授) [研究報告] 照屋理 (名桜大学国際学群 上級准教授) 西岡敏 (沖縄国際大学 教授) 小畠達 (名桜大学国際学群 教授) 屋良健一郎 (名桜大学国際学群 上級准教授) [シンポジウム] 小嶋洋輔 山里勝己 (名桜大学 学長) 大城貞俊 (作家) 吉川安一 (名桜大学名誉教授、詩人)

開催年度	教員名	タイトル	講師・シンポジスト
2018(平成30)年度	2/2 (土)	沖縄社会の貧困と格差 教育・文学・歴史・移民	[司会進行] 李鎮榮 (名桜大学国際学群 教授) [報告] 森本雅人 (宜野湾市立志真志小学校 教頭) [特定研究報告] 嘉納英明 (名桜大学国際学群 教授) 小嶋洋輔 (名桜大学国際学群 教授) 屋良健一郎 (名桜大学国際学群 上級准教授) 李鎮榮
	2/23 (土)	英語教育再生に向けての提言	江利川春雄 (和歌山大学 教授) 鳥飼玖美子 (立教大学 名誉教授) 大津由紀雄 (明海大学 教授) 斎藤兆史 (東京大学 教授)
	2/24 (日)	沖縄とオリンピック・パラリンピック—東京2020に向けて—	[第1部] 田原亮二 (名桜大学人間健康学部スポーツ健康学科 教授) 大峰光博 (名桜大学人間健康学部スポーツ健康学科 准教授) [第2部] 吉本久也 (沖縄県東村役場) 壹納翼 (モモトレーシング) 奥本正 (名桜大学人間健康学部スポーツ健康学科 教授) 小賦肇 (名桜大学人間健康学部スポーツ健康学科 上級准教授)
2019(令和元)年度	3/10 (日)	「種子島と東アジア海域」	[講演] 村井章介 (立正大学文学部教授・東京大学名誉教授) [報告1] 伊川健二 (早稲田大学文学学術院 教授) [報告2] 屋良健一郎 (名桜大学国際学群 上級准教授) [報告3] 村川元子 (松寿院研究家) [コメント] 鮫島安豊 (種子島開発総合センター「鉄砲館」参与)
	12/14 (土)	日本観光研究学会第34回全国大会 (名桜大学) シンポジウム 「持続可能な観光のあり方を考える—沖縄の取組みと課題から—」	[司会] 宮城敏郎 (名桜大学国際学群 上級准教授) [基調講演] 下地芳郎 (一般財団法人沖縄観光コンベンションビューロー 会長) [パネルディスカッション] コーディネーター 大谷健太郎 (名桜大学国際学群 上級准教授) パネリスト 寺崎竜雄 (公益財団法人日本交通社 理事、観光研究部長) 二神真美 (名城大学 教授) 新垣裕治 (名桜大学国際学群 教授、国際学群長) 下村彰男 (東京大学大学院 教授) [閉会の辞] 朴在徳 (大会実行委員長)
	2/15 (土)	琉球諸語と文化の未来	[司会] 仲尾次洋子 (名桜大学環太平洋地域文化研究所 所長) [開会挨拶] 山里勝己 (名桜大学 学長) [共催挨拶] 波照間永吉 (名桜大学大学院国際文化研究科 博士後期課程 研究科長) [パネルディスカッション] コーディネーター 波照間永吉 パネリスト 大城立裕 (芥川賞作家) 佐藤優 (作家、元外務省主任分析官、名桜大学客員教授) K-eiki Kawai'a'e'a (ハワイ大学ヒロ校ハワイ語学部 准教授) 西岡敏 (沖縄国際大学総合文化学部 教授) [閉会挨拶] 鈴木啓子 (名桜大学 副学長、人間健康学部 教授)
2020(令和2)年度	3/13 (土) オンライン開催	「With/Afterコロナにおけるやんばるの産業」	[挨拶] 砂川昌範 (名桜大学 学長) [総合司会] 仲尾次洋子 (名桜大学環太平洋地域文化研究所 所長) [ファシリテーター] 林優子 (名桜大学 副学長) [シンポジウム] 安村弘充 (有限会社勝山シークワーサー) 並里康次郎 (株式会社アセローラフレッシュ) 平良昭 (オリオンビール株式会社) 城間秀幸 (やんばる物産株式会社)

**環太平洋地域文化研究所主催のシンポジウム**

※敬称略。肩書きは当時のものです。

開催年度	教員名	タイトル	講師・シンポジスト
年令 度 2 0 2 0 ( 令 和 3 ) 1			
2 0 2 2 ( 令 和 4 ) 度	11/16 (日)	選ばれる持続可能な観光地と多様性	<p>[司会] 許点淑 (名桜大学国際学群 教授)  [開会挨拶] 嘉納英明 (名桜大学国際学群 教授)  [基調講演] 親川修 (バリアフリーネットワーク)  [シンポジウム]    ファシリテーター    大谷健太郎 (名桜大学国際学群 教授)    シンポジスト    新垣裕治 (名桜大学国際学群 教授)    東恩納盛雄 (名桜大学国際学群 教授)    親川修  [閉会挨拶] 大谷健太郎</p>
2 0 2 3 ( 令 和 5 ) 度	6/18 (日)	ウチナーンチの移民軌跡と紐帯	<p>[司会] 麻生玲子 (名桜大学国際学部 准教授)  [開会挨拶] 嘉納英明 (名桜大学大学院 国際文化研究科長)  [趣旨説明] 麻生玲子  [基調講演] 榮野川敦 (前うるま市立中央図書館 館長)  [シンポジウム]    ファシリテーター    上原なつき (名桜大学国際学部 准教授)    シンポジスト    榮野川敦    長尾直洋 (名桜大学国際学部 准教授)    屋良健一郎 (名桜大学国際学部 上級准教授)    小川寿美子 (名桜大学人間健康学部 教授)  [閉会挨拶] 清水美里 (名桜大学国際学部 准教授)</p>
11/2 (木)			<p>[司会] 本村純 (名桜大学健康情報学科 上級准教授 ※COI副責任者)  [開会挨拶] 砂川昌範 (名桜大学 学長 ※COI責任者)  [来賓挨拶] 喜舎場健太 (沖縄県保健医療部 統括監)  [基調講演] 正路章子 (東京大学大学院薬学系研究科 医薬政策学)  [シンポジウム]    ファシリテーター    花城和彦 (名桜大学COI担当 学長補佐 ※COI副責任者)    シンポジスト    石川清和 (北部地区医師会会長 業務執行理事)    當間晶子 (名護市健康増進課 地域保健係長)  [クロス討論]    石川清和    當間晶子    砂川昌範    五十嵐中 (横浜市立大学 准教授)  [閉会挨拶] 奥本正 (名桜大学 人間健康学部長 ※COIデータ解析委員)</p>

開催年度	教員名	タイトル	講師・シンポジスト
2 0 2 4 ( 令 和 6 ) 度	7/20 (土)	ウチナーンチの移民境界と移動	<p>[司会] 坪井祐司 (名桜大学国際学部 教授)  [開会挨拶] 嘉納英明 (名桜大学大学院 国際文化研究科長)  [名桜大学沖縄ディアスボラ研究センターの設立について]    砂川昌範 (名桜大学 学長 名桜大学沖縄ディアスボラ研究センター長)  [シンポジウム趣旨説明] 坪井祐司  [基調講演] 比嘉久 (名護博物館特任館長)  [解説] 上原なつき (名桜大学国際学部 准教授・名桜大学沖縄ディアスボラ研究センター所員)  [シンポジウム]    ファシリテーター    屋良健一郎 (名桜大学国際文化学科 上級准教授)    シンポジスト    上原なつき    長尾直洋 (名桜大学国際学部 准教授・名桜大学沖縄ディアスボラ研究センター所員)    我那覇宗孝 (名桜大学客員教授、名桜大学沖縄ディアスボラ研究センター所員)  [総括] 坪井祐司  [閉会挨拶] 屋良健一郎</p>
2 0 2 5 ( 令 和 7 ) 度	8/31 (土)	医療・健康分野のデジタルトランスフォーメーション ～医療アクセス改善からPHR活用まで、デジタル技術が医療・健康をどう変えるのか？～	<p>[開会挨拶] 奥本正 (名桜大学 学長補佐)  [基調講演] 宮田俊男 (早稲田大学大学院 先進理工学研究科 教授)  [シンポジウム] &lt;第1部&gt;    ファシリテーター    木暮祐一 (名桜大学人間健康学部 健康情報学科 教授)    シンポジスト (パネルディスカッション)    黒木春郎 (医療法人嗣業の会理事長)    大石怜史 (ヘルスケアテクノロジーズ株式会社代表取締役社長 兼 CEO)  [シンポジウム] &lt;第2部&gt;    ファシリテーター    本村純 (名桜大学人間健康学部 健康情報学科 上級准教授)    シンポジスト (パネルディスカッション)    石見拓 (京都大学大学院医学研究科 社会健康医学系専攻教授)    田里大輔 (沖縄県北部地区医師会病院/沖縄県北部の地域医療支援病院)    田中健介 (沖縄セルラー電話株式会社ソリューション営業本部ビジネス開発部長)  [閉会挨拶] 奥本正</p>
10/25 (土)		ウチナーンチの移民 琉球・沖縄と南米の祖先崇拜	<p>ファシリテーター: 坪井祐司 (名桜大学国際学部 教授)  [開会挨拶] 嘉納英明 (名桜大学大学院 国際文化研究科長)  [基調講演] 照屋理 (名桜大学国際学部 教授)  「琉球・沖縄の祖先崇拜～仏壇・位牌・墓に注目して～」  [シンポジウム] 移民と祖先崇拜    コーディネーター 照屋理    シンポジスト    長尾直洋 (名桜大学国際学部 准教授・名桜大学沖縄ディアスボラ研究センター研究員)  「ブラジルのウチナーンチと祖先崇拜 (Sosen Suhai)」    我那覇宗孝 (名桜大学客員教授、名桜大学沖縄ディアスボラ研究センター研究員)  「ペルーのウチナーンチと祖先崇拜」    月野楓子 (沖縄国際大学 准教授・名桜大学沖縄ディアスボラ研究センター協力研究員)  「アルゼンチンの沖縄移民社会と祖先崇拜の現在」  [閉会挨拶] 坪井祐司</p>

## 学長裁量経費（教員対象）

教育研究及び地域貢献の充実を図り、学外の競争的資金の獲得を支援するもの。

2016(平成28)年度

所属	教員名	研究名
<b>学習支援センターと授業との連携に関する研究</b>		
リベラルアーツ機構	高安 美智子	「学習センターと連携授業の効果的学習支援」
経営情報教育研究学系	大城 真理子	数理学習センターにおける診療専門科目の授業連携e-learning化
経営情報教育研究学系	木村 堅一	数理学習センターと医療統計学との授業連携に関する研究
<b>ライティング関連授業研究費</b>		
看護学科	下地 紀靖	成人看護（急性期）関連科目における看護アセスメント記録用紙の検討
看護学科	清水 かおり	学部・大学院の「看護教育学」関連科目における到達度に応じたタームペーパーの導入とリーブリック評価の開発
スポーツ健康学科	小川 寿美子	アカデミック・ライティング（リベラルアーツから卒論まで）の継続モデルの試行 — ゼミでのコラム執筆「名桜タイムス」の実施
国際文化教育研究学系	菅野 敦志	学部生同士によるライティング指導に関する実例研究
リベラルアーツ機構	真喜屋 美樹	ライティングセンターと科目連携の方途に関する研究
<b>英語（外国語）授業推進関連調査・準備費</b>		
観光産業教育研究学系	許 点淑	観光の実践場面で求められる韓国語運用スキルの基礎データベース構築
観光産業教育研究学系	伊良皆 啓	英語による観光関連科目的教授にかかる試行および資料収集
看護学科	砂川 昌範	「沖縄の健康課題とヘルスプロモーション」に関する英語による講義構築Notable health issues and health promotion inOkinawa
<b>科学研究費等獲得インセンティブ経費</b>		
看護学科	鬼頭 和子	長期入院をする精神障害者の在宅生活への移行推進のためのピフレンディング活動の実施とその評価
看護学科	金井 優子	異文化で暮らす在留外国人への健康支援を目的とした実習の検討
スポーツ健康学科	山本 薫	中強度レジスタンストレーニングが高齢者の動脈スティフネスに及ぼす影響
看護学科	松田 めぐみ	沖縄県過疎地域に暮らす高齢者の移民手段と閉じこもりに関する要因
<b>地域貢献研究萌芽的プロジェクト</b>		
看護学科	砂川 昌範	沖縄県北部地域における健康管理の課題とその対策について
看護学科	小柳 弘恵	やんばる地域における妊産婦受診行動および育児相談に対する支援体制の検討
スポーツ健康学科	小川 寿美子	「ヤンバル・移民資料室（仮名）」立ち上げプロジェクト第6回世界のウチナーンチ大会参加者を通じたソーシャルネットワーク構築
<b>中期計画推進に必要な調査旅費等支援</b>		
国際文化教育研究学系	小嶋 洋輔	講演会・シンポジウム「詩を書くということ・読むということ」開催

162

2017(平成29)年度

所属	教員名	研究名
<b>地域貢献研究萌芽的プロジェクト</b>		
看護学科	比嘉 憲枝	沖縄県北部12市町村の保健師在任教育プログラムの開発
助産学専攻科	小柳 弘恵	沖縄県北部僻地（東村）における育児支援
看護学科	鬼頭 和子	長期入院をする精神障害者の在宅生活への移行推進のためのピフレンディング活動の構築
看護学科	砂川 昌範	沖縄県北部地域における健康管理の課題とその対策について
経営情報教育研究学系	大城 渡	名桜大学における「大学アーカイブズ」（大学文書館（室））設置の意義とアーカイブズ活用による地域貢献について（仮）
<b>学習支援センターと授業との連携に関する研究</b>		
リベラルアーツ機構	高安 美智子	学習センターと連携授業の効果的学習支援
<b>ライティング関連授業研究</b>		
スポーツ健康学科	奥本 正	共同学習を取り入れた「アカデミックライティング！」の教材研究
スポーツ健康学科	小川 寿美子	英語でのゼミでのコラム執筆から卒論のAbstracts執筆まで—アカデミック・ライティング（リベラルアーツから卒論まで）の継続モデル—
リベラルアーツ機構	真喜屋 美樹	ライティングセンター運営に関わる現状視察および資料収集
<b>科学研究費等獲得インセンティブ経費</b>		
看護学科	卯田 卓矢	復帰後の沖縄本島および先島諸島のリゾート空間化に伴う宗教実践の変容に関する研究
看護学科	木村 安貴	進行・再発がん患者の終末期の話し合いにおける看護支援モデル開発に関する基礎研究
看護学科	安仁屋 優子	ナグンチュ（名護の人）によるナグンチュのための地域包括ケアシステム構築に向けた基礎研究—都市地区と農漁村地区をモデルとして—
看護学科	野崎 希元	方言でもなんのその、フィジカル・アセスメントに役立つ用語集の開発に関する研究—やんばる地域に焦点を当てて—
人間健康学部	松田 めぐみ	沖縄県過疎地域に暮らす高齢者の移動手段と閉じこもりに関する要因
地域連携機構	當間 健明	Aprioriアルゴリズムを使った外国人観光客の山原観光及びショッピングの嗜好についてのデータマイニング
<b>教員名</b>		<b>研究名</b>
<b>基盤形成事業：沖縄から/沖縄への人の移動に関する名桜大学基盤研究</b>		
照屋 理、屋良 健一郎、山城 智史		東アジア班
高嶺 司、Dr.Sandra Wilson、Dr.Yuriko Nagata、若杉 大介		オセニア班
下地 紀靖、佐和田 重信、八田 早恵子、金 慎英、石原 イカリ		東南アジア班
住江 淳司、我那覇 宗孝		中南米班
小川 寿美子、中村 誠司、ノーマン・フィーウェル、上原 なつき、山里 紗子、玉城 直美、金 慎英		北米班
宮平 栄治、伊良皆 啓、大谷 健太郎、宮城 敏郎、卯田 卓也、草野 泰宏		沖縄班

163

2018(平成30)年度

所属	教員名	研究名
<b>地域貢献研究萌芽的プロジェクト</b>		
国際文化教育研究学系	中村 浩一郎	日本語・中国語比較による文法構造、主題構造の研究より専門性の高い修士論文作成を目指す大学院生教育と日本語構造の理解に基づく学部生への中国語教育
スポーツ健康学科	前川 美紀子	やんばる地域における幼児・児童および保護者の健康教育プログラムの開発
リベラルアーツ機構	賀 南	本部町のクルーズ観光における多言語（中国語・英語）対応の状況と沖縄北部グローバル語学人材の育成について
助産学専攻	島田 友子	企業戦士だった男性が孫育てを通して「養育性」を獲得するプロセス
看護学科	鬼頭 和子	精神科長期入院患者へのピフレンディング活動の構築—ピフレンディングボランティアに参加する看護学生の経験—
スポーツ健康学科	玉城 将	動的バランス能力の簡易計測システムの開発
看護学科	砂川 昌範	沖縄県北部地域における健康管理の課題とその対策について
<b>学習支援センターと授業との連携に関する研究</b>		
リベラルアーツ機構	笠村 淳子	学生チューター（ピアラーニング）による英語基礎学力向上ワークショッププロジェクト
<b>科学研究費等獲得インセンティブ経費</b>		
国際文化教育研究学系	迫田 幸栄	文学作品における「してしまう」の使用
リベラルアーツ機構	玉城 本生	観光人材育成に向けた小学校英語教育及び大学生の実用英語習得へのモチベーション向上とその維持へのアプローチ
看護学科	西田 涼子	A大学生における麻疹の認識および感染予防行動の現状と課題
<b>教員名</b>		<b>研究名</b>
<b>基盤形成事業：沖縄から/沖縄への人の移動に関する名桜大学基盤研究</b>		
照屋 理、屋良 健一郎、山城 智史		東アジア班
高嶺 司、Dr.Sandra Wilson、Dr.Yuriko Nagata、若杉 大介		オセニア班
下地 紀靖、佐和田 重信、八田 早恵子、金 慎英、石原 イカリ		東南アジア班
住江 淳司、我那覇 宗孝		中南米班
小川 寿美子、中村 誠司、ノーマン・フィーウェル、上原 なつき、山里 紗子、玉城 直美、金 慎英		北米班
宮平 栄治、伊良皆 啓、大谷 健太郎、宮城 敏郎、卯田 卓也、草野 泰宏		沖縄班

2019(令和元)年度

所属	教員名	研究名
<b>科学研究費等獲得インセンティブ経費</b>		
リベラルアーツ機構	立津 康幸	サマリウム系永久磁石材料の高性能化に向けた計算科学的アプローチ
看護学科	木村 安貴	外来がん患者の就労におけるセルフアドボカシーを高める支援プログラムの開発
スポーツ健康学科	岡部 麻里	ミアンマー連邦共和国の生徒における低成長とその因子
リベラルアーツ機構	タンエンハイ	Task-based Learning Approach in Business English-Using 21st century communication tools in authentic setting
スポーツ健康学科	神谷 義人	地域住民の身体活動に対する近隣の物理的環境と社会的環境の交互作用効果の検討
看護学科	安里 葉子	小児救急電話相談（#8000）における対応者の相談支援の思考プロセス
看護学科	大浦 早智	沖縄県におけるリフレッシュママクラスを活用した子育て支援方針の検討
看護学科	九津見 彩子	「高齢者にもたらす笑いヨガ生理的・心理的影響と効果」
看護学科	永田 美和子	過疎地域の共同売店を拠点とした地域包括ケアシステムの構築
スポーツ健康学科	奥本 正	沖縄生育者の暑熱環境下の体温調節の特徴—本土生育者と比較して—
国際文化教育研究学系	/ノーマン・フィーウェル	Utilizing cloud-based technologies to enhance L2 communication skills
経営情報教育研究学系	大城 真理子	老齢イルカに対するベスト・サポート型・ケアに必要な臨床指標作成の試み
国際文化教育研究学系	菅野 敦志	日本統治下台湾におけるスポーツと台湾人選手
<b>基盤形成事業：アジアの平和と未来プロジェクト</b>		
国際文化教育研究学系	菅野 敦志	対立／紛争／共生から考えるアジアの平和と未来
<b>地域貢献研究萌芽的プロジェクト</b>		
看護学科	小西 清美	O市における産後ケア事業の有効性の検討—産後ケア評価の尺度開発—
観光産業教育研究学系	田代 豊	海水中マイクロプラスチック汚染調査手法の開発とヤンバル地域海岸における施行
経営情報教育研究学系	ビータ・アラスーン	水面画像解析による河川・沿岸海域における上空からの水質調査方法の開発
経営情報教育研究学系	中里 収	初等教育におけるプログラミング教育の実践とその効果について
観光産業教育研究学系	新垣 裕治	やんばるフィールド・フェア（YBF）2019
観光産業教育研究学系	許 点淑	やんばるブランド形成への取り組みの現状と今後の課題—本部町の「アセローラフレッシュ」を事例に—
<b>学習センターと授業との連携に関する研究</b>		
リベラルアーツ機構	立津 康幸	学習センターにおける安価かつユーチューフレンドリーな管理システムの構築
リベラルアーツ機構	高安 美智子	「数理学習センターと連携授業の効果的学習支援」
リベラルアーツ機構	タンエンハイ	Renewal and Creation of Language Learning Center Website- through the using G Suite for Education functions

## 学長裁量経費（教員対象）

2020(令和2)年度

所属	教員名	研究名
<b>基盤形成事業</b>		
国際文化教育研究学系	菅野 敦志	対立／紛争／共生から考えるアジアの平和と未来
<b>地域貢献萌芽的プロジェクト</b>		
観光産業教育研究学系	田代 豊	海域マイクロレイヤー汚染調査手法の開発とヤンバル地域における試行
観光産業教育研究学系	新垣 裕治	やんばるバード・フェア（YBF）の開催を通じた地域活性化と観光振興
経営情報教育研究学系	アリ・ファヘルアリム	IoTを活用した北部地域の自転車利用実態調査に関する研究
看護学科	下地 紀靖	戦前のイロイロ（フィリピン）における平安座漁民の繁栄とその末路
経営情報教育研究学系	中里 収	北部地域小中高等学校における遠隔授業実施方法の検討と支援
リベラルアーツ機構	山城 智史	地域の国際化に伴う外国語人材育成の促進に向けた地域貢献の模索－オンライン講座提供の試み－
看護学科	本村 純	事例検討会を用いた保健師の対人支援能力向上をめざす介入研究
看護学科	新里 美智子	沖縄における自死遺族の体験と自死遺族互助グループの活動支援－地域文化に根差した支援の検討－
<b>学習支援センターと授業との連携に関する研究</b>		
リベラルアーツ機構	高安 美智子	ICTを活用した学習支援及びチューター育成
リベラルアーツ機構	タンエンハイ	Development of On-line Tutoring Pedagogic System for LLC Tutors
リベラルアーツ機構	立津 慶幸	Google Jamboardを活用したオンラインチュータリングの新しい指導方法の検証
<b>科学研究費等獲得インセンティブ経費</b>		
看護学科	村上 満子	精神障害者を対象とした地域包括ケアシステム構築（やんばるのソーシャルネットワークづくり）のための基礎的研究－制度精神療法の視点から－
国際文化教育研究学系	/ノマンフィーウェル	Videoconferencing as a means of expanding opportunities to communicate and developing oral communication skills for EFL learners
リベラルアーツ機構	タンエンハイ	Inculcating Global Mindedness and Intercultural Collaboration through Virtual Exchange among High School Students
看護学科	九津見 彩子	「高齢者にもたらす笑いヨガの生理的・心理的影響と効果」
経営情報教育研究学系	草野 泰宏	関係人口としてのクリエイティブ人材が都市に求める条件に関する研究
看護学科	溝口 広紀	地域活動に参加していない一人暮らし高齢者の孤立対策の課題に関する研究

2023(令和5)年度

所属	教員名	研究名
<b>基盤形成事業</b>		
国際文化学科	山城 智史	アジアの平和と未来
<b>科研費等獲得補助（実験系）</b>		
国際観光産業学科	田代 豊	南米大陸陸水環境におけるマイクロプラスチックの発生源と消長、生物蓄積に関する研究

2024(令和6)年度

所属	教員名	研究名
<b>基盤形成事業</b>		
健康情報学科	水山 克	ChatGPT/LangChainによる沖縄に特化した大規模言語モデルの構築
<b>地方創生プロジェクト支援</b>		
看護学科	高畠 孝児	ノビレチンによる異所性石灰化抑制効果についての基礎的研究
<b>科研費等獲得補助（非実験系）</b>		
国際観光産業学科	タンエンハイ	Enhancing Cross Cultural Communication through an Innovative Online Platform
国際文化学科	/ノマンフィーウェル	Innovative Approaches to EFL University Writing Skill Development Cloud-Based Collaboration
スポーツ健康学科	神谷 義人	アクティブラベル促進を目指したAcceptable Walking Time の指標の有用性の検証
<b>科研費等獲得補助（実験系）</b>		
国際観光産業学科	田代 豊	南米での汎用型ガスクロマトグラフ質量分析計によるPFAS分析技術の導入と汚染研究

2025(令和7)年度

所属	教員名	研究名
<b>基盤形成事業</b>		
健康情報学科	水山 克	ChatGPT/LangChainによる沖縄に特化した大規模言語モデルの構築
<b>地方創生プロジェクト支援</b>		
スポーツ健康学科	神谷 義人	働く世代における加速度計で評価した移動歩行を規定する要因の解明：COM-Bモデルを用いた包括的検討
<b>科学研究費獲得支援（非実験系）</b>		
国際観光産業学科	小山 聖治	旅行会社従業員のコンピテンシー構成要因に関する研究
<b>科学研究費獲得支援（実験系）</b>		
看護学科	高畠 孝児	エネルギー代謝調節因子ATPIF1の欠失がミクログリア活性変化に及ぼす影響

2021(令和3)年度

所属	教員名	研究名
<b>基盤形成事業</b>		
リベラルアーツ機構	山城 智史	対立／紛争／共生から考えるアジアの平和と未来
<b>地方創生プロジェクト支援</b>		
観光産業教育研究学系	田代 豊	沖縄県産蜂蜜の含有成分特性に関する研究－本島北部地域における特産品開発に向けて－
観光産業教育研究学系	東恩納 盛雄	コロナ禍の新たな観光～沖縄初オンラインバスツアー企画制作～
スポーツ健康学科	神谷 義人	働き盛り世代における歩行促進を目指したAcceptable Walking Distance の有効性に関する研究プロジェクト
<b>科学研究費等獲得支援</b>		
国際文化教育研究学系	半嶺 まどか	琉球諸語とニュースピーカーの育成プロセス－第二言語としての言語習得とアイデンティティの育成をめざして－
看護学科	村上 満子	精神障害者を対象とした地域包括ケアシステム構築（やんばるのソーシャルネットワークづくり）のための基礎的研究－制度精神療法の視点から－
リベラルアーツ機構	李 梦迪	『中国語における事態把握の主観性と客觀性』
看護学科	溝口 広紀	地域活動に参加していない一人暮らし高齢者の孤立死対策の課題に関する研究
国際文化教育研究学系	当銘 盛之	覚えやすい漢字単語は忘れにくいのか：日本語漢字単語の学習に及ぼす母語の影響
看護学科	九津見 彩子	ICTを用いて自宅で参加した地域在宅高齢者への笑いヨガの影響－高齢者とその家族の語りからとらえた事例研究－

2022(令和4)年度

所属	教員名	研究名
<b>基盤形成事業</b>		
リベラルアーツ機構	山城 智史	対立／紛争／共生から考えるアジアの平和と未来
<b>地方創生プロジェクト支援</b>		
観光産業教育研究学系	田代 豊	やんばる地域における森林セラピー効果の差別化によるセラピーツアーの振興
<b>科学研究費等獲得支援（非実験系）</b>		
看護学科	村上 満子	沖縄北部の村落共同体（あざコミュニティ）における住民参画型ケアネットワークの開発
看護学科	富山 千穂	沖縄県北部A 地域の看取り文化を踏まえた看取りケアに関する訪問看護師の認識
リベラルアーツ機構	タンエンハイ	Integrating Cross—Cultural Communication Skills in ESP (Hotel and Hospitality)

# 科学研究費助成事業

採択年度	研究代表者名	部局名	研究種目	研究課題名
2015	永田 美和子	人間健康学部	基盤研究(C)	「認知症もナンソノ」公民館を拠点とした地域住民が創る認知症ケアに関する研究
	板山 勝樹	国際学群	基盤研究(C)	高等教育機関における人権教育についての基礎的研究
	鈴木 啓子	人間健康学部	挑戦的萌芽研究	精神疾患患者へのハンドマッサージを用いたケア技術の開発に関する研究
	小西 清美	人間健康学部	挑戦的萌芽研究	へき地における産後ケア促進のための産後院モデルシステム開発
2016	小嶋 洋輔	国際学群	基盤研究(C)	琉球弧における島尾敏雄受容史の構築
	嘉納 英明	国際学群	基盤研究(C)	沖縄の字公民館幼稚園を支える地域の教育自治に関する研究
	玉井なおみ	人間健康学部	基盤研究(C)	乳がん患者の生命予後に影響するオーダーメイドのウォーキングプログラムの開発と普及
	伊波 弘幸	人間健康学部	基盤研究(C)	終の棲家で最期を安心して迎えるための入所者参画型看取り看護ガイドラインの構築
	平上久美子	人間健康学部	挑戦的萌芽研究	困難事例を抱えるイマドキ看護大学生のビアサポート効果の検討
	玉城 将	人間健康学部	若手研究(B)	卓球において打球の時空間特徴が得点に与える影響の定量化
2017	坪井 祐司	国際学群	基盤研究(C)	国民国家建設期の東南アジアにおけるマレー・ムスリムのネットワーク
	佐久川政吉	人間健康学部	基盤研究(C)	「オオキナ和」プロジェクトによる相互扶助を活かした地域包括ケアシステム開発
2018	グレッグ美鈴	大学院看護学研究科	基盤研究(C)	新卒看護師のプロアクティブ行動を促すスタッフナースのための教育実践ガイドの開発
	小柳 弘恵	人間健康学部	基盤研究(C)	『離島の子育て"届ける"支援プロジェクト』～村・医・学連携システムの構築～
	安仁屋優子	人間健康学部	基盤研究(C)	都市部と農漁村部における地域力を活かした「近助」ケアシステムの開発
	島袋 尚美	人間健康学部	基盤研究(C)	ヘルスリテラシーの向上に着目した島民の「肝臓を守る健康教育プログラム」の開発
	千野謙太郎	環太平洋地域文化研究所 研究員	基盤研究(C)	筋の活動・活動様式を考慮した呼吸筋のウォーミングアップ・トレーニングに関する研究
	鈴木 啓子	人間健康学部	挑戦的萌芽研究	沖縄の地域文化に根ざした自死遺族支援の構築―相互扶助の中で忌避される自死―
	小川寿美子	人間健康学部	挑戦的萌芽研究	島嶼地域における女性の主体的移動と近現代社会に与えた普遍的インパクトに関する研究
	麻生 玲子	国際学群	若手研究	日本の消滅危機言語を対象とした大量の言語資料収集・蓄積方法に関する基礎研究
	山城 智史	リベラルアーツ機構	若手研究	明治期における条約改正交渉と「琉球処分」政策のトランサンショナルな連動性
	仲尾次洋子	国際学群	若手研究	台湾進出日本企業を対象とした国際財務報告基準の戦略的適用に関する研究
2019	卯田 卓矢	国際学群	若手研究	近現代の比叡山におけるツーリズム空間化による教団システムの変容
	中村浩一郎	国際学群	基盤研究(C)	ヨーロッパ言語と日本語・中国語比較による主題構造のカートグラフィー研究
	渡慶次正則	国際学群	基盤研究(C)	談話と理解度を中心とした小学校英語教員のオンラインによるスピーキング能力の開発
	清水かおり	人間健康学部	基盤研究(C)	離島・へき地で働く看護職者のキャリア発達支援と継続教育方法の検討
	西田 涼子	人間健康学部	基盤研究(C)	輸入感染症の脅威にさらされている沖縄県在住大学生の危機意識の実態と支援体制の構築
	鬼頭 和子	人間健康学部	基盤研究(C)	精神障害者の生活行動に急速な改善をもたらすフットケアによる看護援助モデルの開発
	阿部 正子	人間健康学部	基盤研究(C)	不妊治療の終結をめぐる夫婦の意思決定支援に有用な看護アセスメントガイドの開発
	下地 幸子	人間健康学部	基盤研究(C)	認知症支援困難事例から始まる地域と大学との協働による地縁ネットワーク開発
	屋良健一郎	国際学群	若手研究	和歌・和文から見た琉球・日本の文化交流
	田場真由美	人間健康学部	若手研究	へき地のソーシャル・キャピタルを「8050」世帯の支援に活かす介入研究
2020	平野 貴也	人間健康学部	若手研究	国際的スポーツイベントを通じた都市プランディングに関する実証的研究
	玉城 将	人間健康学部	若手研究	卓球において回転戦術が得点に及ぼす影響の定量化
	板山 勝樹	国際学群	基盤研究(C)	戦後日本における同和教育思想の形成・変容過程についての研究
	玉井なおみ	人間健康学部	基盤研究(C)	乳がん患者の持続可能なオーダーメイドウォーキング・ケアプランの構築と標準化の確立
	木村 安貴	人間健康学部	基盤研究(C)	がん化学療法患者の離職予防に向けた就労関連スティグマ低減の双方向支援ツールの開発
	志田淳二郎	国際学群	若手研究	旧ソ連圏秩序再編をめぐるクリントン外交の研究
2021	玉城 福子	国際学群	若手研究	沖縄の平和教育に関する社会学的研究：マイノリティの沖縄戦体験に着目して
	大浦 早智	人間健康学部	若手研究	へき地における若年母親のベビーマッサージプログラムをきっかけとした居場所づくり
	清水 美里	国際学群	基盤研究(C)	帝国の遺産の脱植民地化－台湾の水資源開発における技術の重層性
	立津 慶幸	リベラルアーツ機構	基盤研究(C)	計算科学と機械学習の組み合わせから紐解く永久磁石材料の電子論
	長嶺絵里子	人間健康学部	基盤研究(C)	島しょ・僻地の強みを活かした青年期・思春期間のビアカウンセリング・プログラム開発
	伊波 弘幸	人間健康学部	基盤研究(C)	ハンセン病療養所再興プロセスの構造化「住み慣れた場所で生き生き暮らす拠点へ」
2022	奥本 正	人間健康学部	基盤研究(C)	夏季日常生活時の温度環境が日本人の発汗機能に影響を与える一生育地域からの検討－
	島袋 尚美	人間健康学部	基盤研究(C)	人生100年を健康に生きる離島中学生のヘルスリテラシー教育プログラムの開発

採択年度	研究代表者名	部局名	研究種目	研究課題名
2021	下地 紀靖	人間健康学部	基盤研究(C)	戦後フィリピン人軍人・軍属に嫁いだ沖縄女性たちの生涯
	仲尾次洋子	国際学群	若手研究	テキストマイニングによる台湾会計基準設定主体の存在意義の解明
	濱本 想子	人間健康学部	若手研究	保健体育科教員養成課程におけるTPACK育成プログラムの開発的研究
	玉城 福子	国際学群	特別研究員奨励費	沖縄の性的マイノリティに関する社会学的研究
2022	渡慶次正則	国際学群	基盤研究(C)	小学・中学英語教員オンライン合同研修による音韻認識能力とリタラシー能力の育成
	坪井 祐司	国際学群	基盤研究(C)	マレー半島における民族の枠組みの形成：マレー民族をめぐる相互作用の研究
	嘉納 英明	国際学群	基盤研究(C)	多文化の沖縄社会における学校と地域の協働的実践に関する研究
	高安美智子	リベラルアーツ機構	基盤研究(C)	自己調整学習を促す文系数学における学修支援を組み込んだ授業デザインの効果検証
	大城 凌子	人間健康学部	基盤研究(C)	ウィズコロナ時代の看取りを支えるコミュニケーションアシスター養成プログラムの開発
	平上久美子	人間健康学部	基盤研究(C)	"まるで病棟にいるような"臨地協同学内実習の構築と実証
	吉澤 龍太	人間健康学部	基盤研究(C)	がんとの共生社会を目指したがん看護専門看護師による地域がん緩和ケアモデルの構築
	安仁屋優子	人間健康学部	基盤研究(C)	離島・僻地の地縁を活かした持続可能なベストミックス近隣ケアシステムの構築
	本村 純	人間健康学部	基盤研究(C)	ヘルスリテラシーを高め行動変容を促すALD・NAFLD予兆モデルの社会実装試行
	藤居 貴子	人間健康学部	基盤研究(C)	動脈硬化予防に最適な身体活動プログラムの開発
2023	比嘉 慶枝	人間健康学部	基盤研究(C)	親子分離が青年期の発達課題である自己概念の形成に及ぼす影響
	石川 恵吉	環太平洋地域文化研究所 研究員	若手研究	琉球沖縄における男性歌唱者のうたう儀礼歌謡の構造と文学的表現研究
	半嶺まどか	国際学群	若手研究	言語文化的多様性と言語権からみたニュースピーカーのためのことばの継承アプローチ
	当銘 盛之	国際学群	若手研究	覚えやすい漢字単語は忘れにくいのか：日本語漢字単語の学習に及ぼす母語の影響
	卯田 卓矢	国際学群	若手研究	人口減少地域における巡礼ツーリズムの高まりによる靈場空間の再編に関する研究
	小嶋 洋輔	国際学部	基盤研究(C)	中間小説はどこにいたか、その終わりの始まりを巡って昭和40年代以降の小説誌研究
	神崎 園子	人間健康学部	基盤研究(C)	養護教諭のフィジカルアセスメント能力向上のためのWebマニュアルの開発
	グレッグ美鈴	大学院看護学研究科	基盤研究(C)	新卒看護師の職場適応を促す情報探索ナビゲーションガイドの開発
	吉村 千草	人間健康学部	基盤研究(C)	病院と大学の連携によるマイクロラーニング型看護職者復職教育プログラムの開発と検証
	流郷 千幸	人間健康学部	基盤研究(C)	予防接種を受ける子どもの「親のためのプレバレーションガイド」の開発
2024	村上 満子	人間健康学部	基盤研究(C)	沖縄の「新しい住民的相互扶助（ユイマール）」の再構造化
	溝口 広紀	人間健康学部	基盤研究(C)	地域とつながらない高齢者を住み慣れた地域の強みで支える『結モデル』の構築
	樋口 京一	人間健康学部	基盤研究(C)	マウスヒトを用いたインターパル運動の健康増進機序の解明と効果評価法の開発
	玉城 将	人間健康学部	基盤研究(C)	卓球トップアスリートの回転サービスを実現するラケット操作の解明
	水山 克	人間健康学部	基盤研究(C)	サンゴ礁の隠蔽空間と隠蔽生物群集の解明
	麻生 玲子	国際学部	若手研究	琉球諸語を対象とした効率的かつ大規模な言語資料収集・蓄積方法に関するメタ研究
	林 智昭	国際学部	若手研究	言語変化の漸進性に関する記述研究：量的・質的アプローチの融合を目指して
	志田淳二郎	国際学部	若手研究	クリントン政権の経済安全保障政策に関する政治外交史的研究
	玉井なおみ	人間健康学部	基盤研究(B)	乳がんサバイバーの運動促進に特化したオーダーメイド型アプリの開発と運動支援の検証
	屋良健一郎	国際学部	基盤研究(C)	近代沖縄における短歌の展開に関する研究
2025	山城 智史	国際学部	基盤研究(C)	琉球をめぐる国際的な歴史像の構築-日本・中国・米国の歴史認識を中心に-
	上原なつき	国際学部	基盤研究(C)	鉱山開発と社会変化に対するアンデス先住民のレジリエンスとアニミズムの人類学的研究
	高倉 実	大学院スポーツ健康科学 研究科	基盤研究(C)	青少年における健康の社会的決定要因とその経時的变化に関する社会疫学研究
	木村 安貴	人間健康学部	基盤研究(C)	離職予防に向けたがん就労関連スティグマ評価ツールの開発
	吉武 裕	大学院スポーツ健康科学 研究科	基盤研究(C)	1日の総歩数と総死亡の関連-70歳から100歳までの30年間にわたる長期縦断的研究-
	小畠 達	国際学部	基盤研究(C)	『平治物語』第一類本の本文変容に関する研究-古態性の再検討-
2026	鈴木 啓子	大学院看護学研究科	基盤研究(C)	"ゆいまーる"を自明としない自殺予防および遺族支援のための実践知の解明
	藤井まい	人間健康学部	基盤研究(C)	教育を受けずに暮らす日本の外国籍児の人のネットワークと健康度:WEB母子手帳での支援
	嘉納 英明	国際学部	基盤研究(C)	困難を抱える子どもへの地域支援の機能に関する研究
	鶴巣 陽子	人間健康学部	基盤研究(C)	大学と地域の協働によるSRHRに特化したユースカフェ教育モデルの構築
	松下 聖子	人間健康学部	基盤研究(C)	医ケア児と家族のための災害時の避難所での共助を育む減災教育プログラムの開発

## 環太平洋地域文化研究所出版助成

出版年度	著者	部局名	タイトル
2015年度	高嶺 司	国際学群	日本の対中国関与外交政策—開発援助からみた日中関係
2016年度	大峰 光博	人間健康学部	野球における暴力の倫理学
2017年度	住江 淳司	国際学群	カヌードスの乱—19世紀ブラジルにおける宗教共同体
	迫田 幸栄	国際学群	現代日本語における分析的な構造をもつ派生動詞—「してある」「しておく」「してしまう」について
2018年度			該当者なし
2019年度	仲尾次 洋子	国際学群	台湾の会計制度—会計基準の国際化と国家戦略—
2020年度	波照間 永吉	大学院国際文化研究科 (博士課程)	琉球諸語と文化の未来
	小嶋 洋輔	国際学群	
	照屋 理	国際学群	
2021年度	板山 勝樹	国際学群	戦後日本における反差別教育思想の源流—解放教育思想の形成過程—
2022年度			該当者なし
2023年度	山城 智史	国際学部	琉球をめぐる十九世紀国際関係史：ペリー来航・米琉コンパクト、琉球処分・分島改約交渉
2024年度	渡慶次 正則	国際学部	小学校と中学校の英語教育接続に関する実践的研究
2025年度			該当者なし

168

## 各教員による出版 [本学教員の単著または筆頭（監修）]

### 学術書・教科書等

氏名	タイトル	著者・編者・監修者等	出版社・発行元	出版年
板山 勝樹	教職へのいざない：名桜大学教職入門書	板山 勝樹	編集工房 東洋企画	2019
板山 勝樹	戦後日本における反差別教育思想の源流：解放教育思想の形成過程	板山 勝樹	明石書店	2022
大峰 光博	野球における暴力の倫理学	大峰 光博	晃洋書房	2016
大峰 光博	スポーツにおける逸脱とは何か：スポーツ倫理と日常倫理のジレンマ	大峰 光博	晃洋書房	2019
大峰 光博	これからのスポーツの話をしよう：スポーツ哲学のニューフロンティア	大峰 光博	晃洋書房	2022
大峰 光博	大学1年生のためのレポート・論文作成法：書く意義に気づく15回のライティング講義（第3版）	大峰 光博・奥本正編/名桜大学ライティングセンター監修	ふくろう出版	2024
嘉納 英明	沖縄の子どもと地域の教育力	嘉納 英明	エイデル研究所	2015
嘉納 英明	沖縄の教師の語り	嘉納 英明	新星出版	2024
グレッグ 美鈴	よくわかる質的研究の進め方・まとめ方 看護研究のエキスパートをめざして 第2版	グレッグ 美鈴 他編著	医歯薬出版	2016
グレッグ 美鈴	看護教育学：看護を学ぶ自分と向き合う 改定第2版	グレッグ 美鈴・池西 悅子編	南江堂	2018
木暮 祐一	デジタルヘルスの最新動向	木暮 祐一 他監修/ 木村純執筆（2章1節3項）	インプレス	2023
小嶋 洋輔	中間小説とは何だったのか：戦後の小説雑誌と読者から問う	小嶋 洋輔/高橋 孝次/西田一豊/牧野 悠	文学通信	2024
志田 淳二郎	米国の冷戦終結外交：ジョージ・H・W・ブッシュ政権とドイツ統一	志田 淳二郎	有信堂	2020
志田 淳二郎	ハイブリッド戦争の時代：狙われる民主主義	志田 淳二郎	並木書房	2021
志田 淳二郎	ハイブリッド戦争：揺れる国際秩序	志田 淳二郎	並木書房	2024
清水 美里	帝国日本の「開拓」と植民地台湾：台湾の嘉南大圳と日月潭発電所	清水 美里	有志舎	2015
住江 淳司	カヌードスの乱：19世紀ブラジルにおける宗教共同体	住江 淳司	春風社	2017
高嶺 司	日本の対中国関与外交政策：開発援助からみた日中関係	高嶺 司	明石書店	2016
玉城 福子	沖縄とセクシュアリティの社会学：ポストコロニアル・フェミニズムから問い直す沖縄戦・米軍基地・観光	玉城 福子	人文書院	2022
坪井 祐司	『カラム』の時代VII：カラム「千一問」にみるマレー・ムスリムの宗教実践	山本 博之・坪井 祐司編	京都大学地域研究情報統合センター	2016
坪井 祐司	『カラム』の時代VIII：マレー・ムスリムの越境するネットワーク	山本 博之・坪井 祐司編	京都大学東南アジア地域研究研究所	2017
坪井 祐司	『カラム』の時代IX：マレー・ムスリムの越境するネットワーク2	山本 博之・坪井 祐司編	京都大学東南アジア地域研究研究所	2018
坪井 祐司	『カラム』の時代X：マレー・イスラム世界における自然と社会	山本 博之・坪井 祐司編	京都大学東南アジア地域研究研究所	2019
坪井 祐司	ラッフルズ：海の東南アジア世界と「近代」	坪井 祐司	山川出版社	2019
寺本 潔	観光教育への招待：社会科から地域人材育成まで	寺本 潔・澤達大 共編著	ミネルヴァ書房	2016
寺本 潔	教師のための地図活	寺本 潔	帝國書院	2016
寺本 潔	地理認識の教育学：探検・地理区から防災・観光まで	寺本 潔	帝國書院	2021
寺本 潔	観光市民のつくり方：地域の価値を磨く子ども時代からの学び	寺本 潔	日本橋出版	2024
渡慶次 正則	小学校と中学校の英語教育接続に関する実践的研究	渡慶次 正則	ひつじ書房	2024
仲尾次 洋子	台湾の会計制度：会計基準の国際化と国家戦略	仲尾次 洋子	同文館出版	2020
山城 智史	琉球をめぐる十九世紀国際関係史 ペリー来航・米琉コンパクト、琉球処分・分島改約交渉	山城 智史	インパクト出版会	2024

169

### その他

氏名	タイトル	著者(翻訳者)	出版社・発行元	出版年
嘉納 英明	82さいの中学生はっちゃん：沖縄発→平和を願う絵本	嘉納 英明/鈴木智香子	沖縄時事出版、沖縄学版(発売)	2018
嘉納 英明	おきなわの少年ぼくはサム：沖縄発→平和を願う絵本	文かのうひであき/絵まるやまかなこ	沖縄時事出版	2025
木暮 祐一	Gが教える超A級アウトドアサバイバル術	木暮 祐一 他監修	小学館	2022
高瀬 幸一	ジョートームン体操 沖縄の唄で健康体操×カラオケ DVD	高瀬 幸一	ACHILAS (アチラス)	2022
タン エンハイ	Self-Portrait of a Neurotic : A Collection of Poems	タン エンハイ	Amazon Kindle Direct Publishing	2021
許 点淑	恨をかかえて：ハラボジの遺言	許 点淑	でいて印刷所	2016
前川 美紀子	まもううねはやね・はやおき・あさごはん (紙芝居)	前川 美紀子/前川ゼミ生	名桜大学	2018
前川 美紀子	まもううねはやね・はやおき・あさごはん (絵本)	前川 美紀子/前川ゼミ生	名桜大学	2018

## 教員・団体の受賞歴 (2015–2025年)

氏名	授与された賞の名前	授与した団体(組織)名	受賞年
安仁屋優子	優秀演題賞	文化看護学会	2025
板山 勝樹	社会教育功労賞	恩納村教育委員会	2023
板山 勝樹	学校ボランティア功労賞	恩納村教育委員会	2025
上原 明	優秀論文賞	日本観光研究学会	2021
大城 凌子	在宅ケアイノベーション奨励賞	日本在宅ケア学会	2025
大峰 光博	浅田学術奨励賞	日本体育学会	2016
小賦 肇	優秀指導者賞	沖縄県スポーツ協会	2015
小賦 肇	栄章・功労賞	九州学生陸上競技連盟	2019
小賦 肇	栄章・功労賞	日本学生陸上競技連合	2019
小賦 肇	功労賞	沖縄陸上競技協会	2021
小賦 肇	功労賞	沖縄陸上競技協会	2023
嘉納 英明	文化の窓エッセイ賞(佳作)	沖縄市文化協会	2021
嘉納 英明・文 鈴木智香子・絵	沖縄タイムス出版文化賞(児童部門賞)	沖縄タイムス社	2018
木村 安貴	Paper of the Year and Highly Commended Paper	Japanese journal of clinical oncology	2021
木暮 祐一	東北総合通信局長賞	総務省	2017
小西 清美	日本助産師会長賞	日本助産師会	2025
志田淳二郎	清水博賞	アメリカ学会	2021
下地 紀靖	功労感謝状	東洋大学甫水会	2018
下地 紀靖	沖縄県看護協会会長賞	沖縄県看護協会	2025
高倉 実	学会賞	日本学校保健学会	2024
高安美智子	発表優秀賞	日本リメディアル教育学会	2023
田場真由美	沖縄県看護協会会長賞	沖縄県看護協会	2022
玉井なおみ	学術奨励賞	日本がん看護学会	2021
寺本 潔	教育・啓蒙著作賞	観光学術学会	2017
寺本 潔	学会賞観光著作賞(一般)	日本観光研究学会	2018
遠矢 英憲 田原 亮二	最優秀発表賞	全国大学体育連合	2017
波照間栄吉	地方出版文化功労賞特別賞	ブックインとつり実行委員会	2021
波照間栄吉	伊波普猷賞	沖縄タイムス社	2024
比嘉 憲枝	沖縄県看護協会会長賞	沖縄県看護協会	2025
溝口 広紀	在宅ケアイノベーション奨励賞	日本在宅ケア学会	2025

## 団体

氏名	授与された賞の名前	授与した団体(組織)名	受賞年
名護市学習支援教室びゅあ (顧問:嘉納 英明)	タイムス地域貢献賞	沖縄タイムス社	2021
名護市学習支援教室びゅあ (顧問:嘉納 英明)	社会貢献者表彰	社会貢献支援財団	2023
名護市学習支援教室びゅあ (顧問:嘉納 英明)	内閣府特命担当大臣表彰	こども家庭庁	2023
名護市学習支援教室びゅあ (顧問:嘉納 英明)	文部科学大臣賞	住友生命	2024
名護市学習支援教室びゅあ (顧問:嘉納英明)	日本財団特別賞	社会貢献支援財団	2024
名桜大学ヘルスサポート (顧問:高瀬 幸一)	地域活動部門 準グランプリ	沖縄県	2016
名桜大学ヘルスサポート (顧問:高瀬 幸一)	内閣府沖縄総合事務局長賞	沖縄県総合事務局	2020
名桜大学ヘルスサポート (顧問:高瀬 幸一)	角川アスキー総研賞	内閣府	2021
名桜大学ヘルスサポート (顧問:高瀬 幸一)	協賛企業賞:損保ジャパン賞、日本政策投資銀行賞、True data賞、三菱UFJリサーチ&コンサルティング賞	内閣府	2022
名桜大学ヘルスサポート (顧問:高瀬 幸一)	内閣府沖縄総合事務局長賞	沖縄県総合事務局	2022

## 在職中に学位を取得した教員 (2015–2025年)

氏名	取得大学・大学院名	学位種(分野)	取得年
板山 勝樹	九州大学大学院 人間環境学研究院 教育システム専攻	博士(教育学)	2024
伊藤 智美	聖路加国際大学看護学研究科看護学専攻	博士(看護学)	2025
佐和田重信	琉球大学大学院保健学研究科保健学専攻	博士(保健学)	2022
島 康貴	Universiti Kebangsaan Malaysia, Institute of Visual Informatics	Ph.D. (Visual informatics)	2021
下地 紀靖	名桜大学国際文化研究科国際文化地域専攻	博士(国際地域文化)	2023
天願 健	琉球大学大学院理工学研究科総合知能工学専攻	博士(工学)	2019
仲尾次洋子	近畿大学大学院商学研究科	博士(商学)	2017
永田美和子	筑波大学大学院人間総合科学研究科ヒューマン・ケア科学専攻	博士(ヒューマンケア科学)	2017
濱本 想子	広島大学大学院教育学研究科	博士(教育学)	2021
林 優子	熊本学園大学大学院商学研究科	博士(商学)	2019
本村 純	大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻	博士(保健学)	2024
屋良健一郎	東京大学大学院人文社会系研究科	博士(文学)	2016



7

章  
寄稿





## 『名桜大学開学30年記念史』 「大学の未来への提言と名桜大学への期待」

佐藤 優

(本学客員教授・本学名誉博士)

1960年1月18日生まれの私は現在65歳だ。名桜大学よりも2倍以上、歳を取っていることになる。過去10年間、教壇に立つことによって私にとってこの大学は人生の一部になっている。

名桜大学で教壇に立つことを強く勧めてくださったのは作家の大城立裕先生（故人）だ。大城先生は、「あなたが沖縄人としてのアイデンティティーを最終的にこう確立するか」という問題を取り組む上で、この大学でウチナーンチュとそれ以外の学生たちと向き合うことがとても重要だ」と言って、当時、名桜大学学長をつとめていた山里勝巳先生を紹介してくださった。

2015年4月27日、私は名護市を訪れ、名桜大学（山里勝巳学長）で講義をした。名桜大学は、創設20年の比較的新しい公立大学だ。他の大学と比較して、学生と教師の距離が近い。私の講義に対しても学生から積極的かつポイントをついた質問が出たし、言い足りないことがある学生が、学長室まで私を追いかけてきた。沖縄北部にある大学だが、学生の半数は沖縄県外の出身者だ。この大学は地域と密着している。地元の人々が大学生を大切にする。大学も一部の講義や資料室などの知的インフラを市民に開放している。公立大学で学費も安く、リーズナブルな家賃できれいな学生マンションを借りることができる。就職支援も熱心なので、口コミで本土からの受験生が増えているという。

私の印象に強く残ったのは、創立20周年を記念して建設された6階建てのサクラウム（学生会館）だ。ゼミ室、リーディングルーム、舞台、展示場などがある。英語と理数系のチューターが常時待機して、学生の学習を個人的に支援するシステムが整っている。高校レベルの英語や数学に不安があっても、チューターの指導を受けることで、欠損を埋めることができる。英語のチューターは、米国で英語教育の資格を取った人たちだ。この大学で4年間学ぶと

学力と人間力の双方が着実に強化される。素晴らしいシステムがあることに感銘を受けた。

この大学には独自の魅力があるので、今後、短期間で大きく発展するという強い印象を受けた。この原稿を書いている2025年末の時点から振り返って、この印象は間違っていなかった。第1に、他の大学と比較して、教師と学生の関係が近い。私の講義に対しても、複数の学生から積極的かつポイントをついた質問が出た。学生と踏み込んだ議論をすることもよくある。教師たちと学生の人間的信頼関係が構築されている。第2に、名桜大学は、地域と密着している。地元の人々が学生をたいせつにしている。大学も市民に対して一部の講義や資料室、図書館などの知的インフラを開放している。繰り返しになるが沖縄の大学であるが、学生の半数は県外出身者だ。名桜大学は、公立なので学費も安く、また東京では月8～10万円するワンルームの学生マンションを名護市ならば3万円程度で借りることができる。最近は、ジャングリアができた関係でアパート代が1～2万円上がってしまった。学生たちの負担を減らす方策を具体的に考えなくてはならない。就職支援も熱心なので、口コミで県外からの受験生が増えていくようだ。何よりも重要なのは、学生生活と一緒に過ごすことによって沖縄人と日本人の相互理解が進むことだ。県外出身の学生と話をしたが、世代が近いので何となく仲良くなるのではなく、差異を認識しながら相互理解を深めていくという姿勢を感じられた。さらに名桜大学は、米国のハワイ州、中南米諸国などに在住する沖縄人との知的ネットワークを強化しようとしている。こういう地道な学術的、教育的活動が沖縄人のアイデンティティーを強化する基盤になる。

2016年4月から私は名桜大学の客員教授をつとめることになった。この年は12月23、24日に集中講義を行った。ジョージ・H・カー（1911～1992年）の『沖

縄——島人の歴史』（勉誠出版、2014年）をテキストにして、1609年の琉日戦争（薩摩の琉球入り）、1954年の琉米修好条約締結前後の情勢について、学生たちと議論を交わしながら講義を進めた。受講生は21人で、沖縄出身者と県外出身者が半々だった。講義の途中で、こんなテストをした。

問1：時間概念に関して、「カイロス」と「クロノス」の違いについて、図解し、説明せよ。

問2：歴史については、ドイツ語で言う「ヒストリエ（Histoie）」と「ゲシヒテ（Geschichte）」の違いがある。このうち、「ゲシヒテ」の特徴について説明せよ。

問3：1609年の琉日戦争（薩摩の琉球入り）について、伊波普猷は「侵入」、仲原善中は「進入」と評価する。2人の認識の違いについて簡潔に説明した上で、あなたはどちらの見解がより妥当と考えるか記せ。

全員が合格点で、約半数の学生が満点（100点）だった。興味深いのは、問3に対する回答で、県外出身学生のほとんどが薩摩の琉球入りは明白な侵略であるので、伊波普猷の「侵入」を支持すると見解を明確にしたのに対し、沖縄出身の学生は「侵入」と「進入」が半々に分かれた。「進入」という答案を書いた学生と話をしていると、興味深いことに気づいた。日本の琉球への拡張に明白な侵略的意図はなく、「何となく拡大していった」というのが当時の実態で、それ故に明白な意図をもたない無意識の植民地支配が成立したので、「进入」の方が妥当といういう認識を複数の学生が示した。意図的な植民地主義よりも無意識のうちに構造化されてしまった植民地主義の方が脱構築が難しいということに認識を「进入」と書いた学生はもっていることを知ったのが私にとって大きな成果だった。

さらに学生たちが興味を強く示したのが、琉日戦争で日本に連行されたが、薩摩の用意した屈辱的な文書への署名を拒否した謝名利山親方の運命だ。<薩摩側ではすべての準備が整い、あとはその穏やかならぬ書面への正式な署名を待つのみだった。国王と直臣の面々が島津藩の役人の列席する神社の境内に連行された。それは屈辱感に打ちひしがれる場には違ひなかった。尚寧には、しかし、ほかに手だてがあろうはずもない。一人ひとりが前へ進み出て署名し押印した。突如、あたりに険悪な空気が流れた。王の重臣で三司官の一人である者が宣誓文と非情極

まりない諸条件事項への押印を拒んだのであった。

/（中略）薩摩の武士によって最も簡単な手が打たれた。傍らに引き出された謝名はその場で斬首された。いかにも見苦しい場面には違ひなかった。しかし、同時に、そのような場に居並ぶ沖縄の高官、役人に一体何ができたであろう。そのような感慨が居並ぶ沖縄の重臣らの心中を占めていたに違いない。>（ジョージ・H・カー『沖縄——島人の歴史』、185頁）。日本の圧倒的な暴力の前で、耐えることが抵抗することだった。そして、沖縄人は、文化によつて政治を包み込んで、沖縄人のアイデンティティーを保全する。そして、この屈辱を晴らすことが出来るときを待ち続けたのである。過去の歴史から沖縄流の抵抗の仕方を学生と一緒に学ぶことができたのが私の大きな宝になった。

この大学では、他の大学ではできないような冒險的講義もした。2017年2月18、19日の集中講義のことが今でも印象に残っている。午前8時45分から午後4時15分までの長時間講義だが、学生たちは熱心に受講してくれた。初日は、廣津和郎『さまよへる琉球人』（同時代社）、2日目は大城立裕『カクテル・パーティー』（岩波現代文庫）を全文輪読しながら、構造化された差別について学んだ。『さまよへる琉球人』に描かれている日本人リベラル派が「同情」という形で持つ沖縄への差別意識と『カクテル・パーティー』で提示されている大日本帝国のシステムに組み込まれた沖縄人の中国における加害責任についての読み説きに力を入れた。難しいテーマであるにもかかわらず学生たちは筆者の話を注意深く聞いた上で、さまざまな見解を述べた。

前述の通り名桜大学の学生の半数は沖縄県出身者、半数は本土出身者だ。筆者の講義でも、沖縄、奄美、本土の学生がさまざまな角度から意見を述べた。「政治問題を文化に包み込む」という私の考えについても、少なくとも私の論理を正確に理解してくれた。知によって、沖縄出身者、奄美出身者、本土出身者が、自らの歴史的、文化的基盤についての理解を深め、眞の対話をを行う場が名桜大学には存在する。この大学が沖縄と本土の眞の相互理解のために果たしている役割は大きいと確信した。今後とも名桜大学が、沖縄人と日本人、その他の民族に属する人々の相互理解の場になり、ここから地域の経済に貢献し、平和を作り出す人々が多数輩出されると私は確信している。

## 国際学群 観光産業専攻（2012年度卒業）



上原 明

## 学びの原点から始まる旅—名桜大学で拓かれた私の歩み

名桜大学が開学30周年、そして公立大学法人化15周年という節目の年を迎えられたことに、心よりお慶び申し上げます。30年にわたり、沖縄県北部における高等教育の中核として地域に根ざし、多くの優れた人材を輩出してこられた名桜大学の歩みは、国内外のさまざまな分野で活躍する人材の育成へつながっており、その実績に深く敬意を表します。また、公立大学法人化からの15年間においても、時代の変化に柔軟に対応しながら特色ある教育・研究を展開されてきたことに、あらためて感銘を受けております。この節目を機に、名桜大学が今後ますます発展されることを、心よりお祈り申し上げます。

私が本学に入学したのは、2008（平成20）年のことでした。在学時代を振り返ると、その出会いはまさに人生の大きな転機だったと感じています。高校時代の私は、どちらかといえば勉強に前向きではなく、教科書の内容もどこか遠い世界の話のように感じていました。大学進学も「これといった明確な目標があったわけではなく」、進路の一つとして自然な流れで選んだものでした。しかし、本学での学びは、そんな私の価値観を大きく変えるものとなりました。

最初に驚いたのは、授業の面白さでした。ただ知識を詰め込むのではなく、自分の中で漠然としていた疑問や興味を、理論的に解きほぐしてくれる授業に出会ったとき、「こんなに納得できる学びがあるのか」と、目から鱗が落ちるような気持ちになったのを今でも覚えています。それまで苦手だった勉強が、「知りたい」「もっと深く理解したい」という気持ちに変わり、授業に前のめりで参加するようになりました。

観光に関する授業では、沖縄という地域の特性や歴史的背景に深く触れる機会があり、地元への見方が一変しました。「当たり前」だと思っていたことが、実は他の地域や国では全く異なる価値観で見られている。その違いに気づいたとき、「もっと外の世界を見てみたい」「異文化に触れてみたい」という思いが強く芽生えました。

そうした思いに背中を押されて挑戦したのが、マレーシアでの海外インターンシップでした。慣れない環境、異なる文化や宗教観に戸惑いながらも、現地のホスピタリティ産業の現場に立ち、実践の中で多くを学びました。言葉が通じないもどかしさもありましたが、その分、相手の立場に立って考える姿勢や、自分自身の価値観を見つめ直す大きな機会になりました。この経験がさらに世界への興味を深め、次なる挑戦としてオーストラリアの協定校への留学へつながっていました。

オーストラリアでは、授業やフィールドワークを通じて、多様な考え方や価値観に触れる中で、表現する力を養いました。異なる視点を学ぶことで、物事を多面的に捉える力が育まれ、「学ぶとは、自分の世界を広げることなのだ」と実感しました。気がつけば、勉強は「やらされること」から「やりたいこと」へと変わっていました。最初はなんとなく始まった大学生活が、自分の進むべき方向や、大切にしたい価値を見つけていく旅になっていたのです。名桜大学は私にとって「自分の可能性に気づく場所」だったのだと思います。

そして現在、私は2020（令和2）年から本学の教員として勤務しております。かつての私と同じように学びに戸惑いながらも何かを見つけていと願う学生たちと日々向き合っています。学生のインターンシップ先には、私の同級生や後輩が指導者として活躍している場面も多く見られ、かつての仲間たちと仕事の場で再会するたびに、名桜大学で育まれた経験の大きさを実感しています。また、卒業生と打ち合わせを重ねる機会も増え、学生時代に築いた学びの延長線上に、今の仕事があることを日々感じています。

今後とも学生の皆さんができるだけ自分の可能性に気づき、未来に向かって一歩を踏み出せるよう、教員として精一杯支えてまいります。授業、課外活動、海外留学、インターンシップなど、多様な経験を通して成長できる環境づくりに貢献し、広い視野と主体性を持った人材の育成に尽力していく所存です。

(国際観光産業学科 准教授)

## 国際学部 経営情報学科（2001年度卒業）



島 康貴

## 続・故郷に根を張り、志は高く

## 名桜大学（30歳）へのラブレター。To名桜大学

名桜大学さま、開学30周年及び公立大学法人化15周年をお迎えになりましたこと、心よりお祝い申し上げます。貴方が開学した1994（平成6）年、当時、私は14歳で、開学前にも関わらず「貴方の元へ進学し、一緒に歩もう。と心に決めていました。」と、開学20年史のラブレター（寄稿）にそう書きましたね。あれから10年、お互い、すこし歳をとりました。前回お送りしたお手紙どおり、沖縄北部で貴方と共に「情報」について研鑽し、人材育成できることが私にとっての大きな魅力であることは今でも変わりません。あの寄稿から10年が経ち、現在はあの時の縁がさらに強まり、2022（令和2）年に経営情報学系情報システム専攻の教員としてともに歩み始め、現在は健康情報学科の教員として今もなお共に歩んでいます。今回のお手紙は、開学時の理念に触れながら、所属している健康情報学科への想いを一緒に語れたらと思います。

沖縄県は太平洋戦争における悲劇的な地上戦が繰り広げられた歴史的背景をもっています。貴方はこのことを知っていて、「平和を愛し、自由を尊重し、人類の進歩と福祉に貢献する国際的教養人と専門家の育成」という理念を掲げましたね。地域の希望となることを目指し、「平和・自由・進歩」という建学の精神を持って、今も強く生き続けています。そこから現在に至るまで、貴方は2005（平成17）年のスポーツ健康学科設置、2007（平成19）年の看護学科設置及び国際学群国際学類への改組、2010（平成22）年の公立大学法人化など、社会の多様なニーズを捉えながら、柔軟かつ積極的に体質改善を行って自身に投資し続けている素敵なお存在です。そして、2023（令和5）年は国際学群から国際学部へと生まれ変わり、同年4月、人間健康学部に健康情報学科を開設しました。そして、まだまだ志は高く、大学院の設置にも希望を抱いているかと思います。

貴方が歩んだ30年という歴史は、地元に深く根を張り、固く強い教育基盤を築いてきました証ですが、驚くべきは、現状に満足せず、常にチャレンジし、開学の初志から逸脱することなく未来に対して真摯な姿勢を示してきたことです。健康情報学科設置の背景にもそういったチャレンジ精神が色濃くでおり、「データサイエンスとAIを駆使して健康分野の課題を解決する人材を育成する」という教育目標を掲げています。昨今のニュースでは、日本の課題として医療費の増大と国民の健康寿命の延伸がよく取り上げられますね。この新学科の教育目標は、こうした社会背景を踏まえ、将来の地域社会に大きな影響を与える役割と明確な意義を担っているかと思います。

この30年にわたって醸成された教育基盤は、地域とともに歩んで連携してきた実績の上に成り立っています。そこに時代の最先端技術が学べる健康情報学科を新たに加えたことで、未来を切り拓く革新的な知識・技術を習得できる環境が整ったかと思います。貴方とこれから関わる学生やその保護者にとって、沖縄の豊かな自然の地で健康分野や情報分野を学べることに魅力を感じていただけるはずです。その一助になれるよう、貴方に負けずに自身を研鑽し、引き続き頑張ります。これからも一緒に沖縄の未来を想像して、自分のペースで故郷に根を張り巡らせ、今日よりも明日、すこしでも高い志を持って貴方と共に歩めたらと思います。開学30周年及び公立大学法人化15周年、誠におめでとうございます。引き続きどうぞよろしくお願ひいたします。

## 続・黄金なる経験を胸に。To学生のみなさま

健康情報学科では、数理・データサイエンス・AIの最先端の手法が学べます。そして、情報分野や保健・医療・福祉を含む健康分野において新たな価値やサービスを創出し貢献できる人材を育成しています。将来的には、ここで学んだ皆様が、各々の「個性」や「大好きなコト」を活かして幅広い分野で横断的に考える力を身につけてほしいと思っています。ぜひ、「学び」という黄金経験をしっかりと楽しんでもらえたら嬉しいです。

(健康情報学科 准教授)

## 国際学部 観光産業学科（2007年度卒業）



窪田 誠志

## 「いちゃりばちょーでー」の学び舎で

名桜大学が開学30周年、そして公立大学法人化15周年という大きな節目を迎えることに、心よりお祝い申し上げます。このような記念すべき年を、卒業生として、また現在は教職員の一人として母校と共に迎えられることを、大変嬉しく思っております。あわせて、この日を迎えるにあたって、これまでの歩みを振り返り、深い感慨を覚えております。

私が本学に入学したのは2004（平成16）年4月のことです。小学校6年生の頃から「いつか沖縄に住みたい」と願っていた私にとって、この場所で過ごした日々はまさに夢が叶ったような時間でした。沖縄本島北部・やんばるという、私が育った環境とは大きく異なる地域での暮らしは、毎日が新しい発見の連続であり、豊かな自然や地域の方々の温かさにふれながら、多くのことを学びました。この経験は、私の人生においてかけがえのない財産となっています。

学生時代を振り返って特に印象深いのは、キャンパスに息づく「多様性を尊重する文化」です。教職課程の講義やゼミでのディスカッションを通じて、他者を理解し、受け入れる力を育むことができました。それを可能にしてくださったのは、「いちゃりばちょーでー（出会えば皆兄弟）」の精神のもと温かく接してくださった仲間や先生方の存在です。出身地や文化、価値観の異なる仲間たちと過ごす中で、互いの良さを認め合い、学び合うことの大切さを実感しました。

また、本学の教育環境は、学生一人ひとりの可能性を最大限に引き出してくれるものでした。自然豊かな環境に加え、就職活動や部活動に対する手厚いサポート体制が整っており、安心して日々の学びや挑戦に向き合うことができました。現在もその「学生ファースト」の精神が息づいていることを、教職員として日々実感しており、大変喜ばしく思います。

研究の面においても、私の人生に大きな影響を与えてくれました。恩師・知念一郎先生からは、「スポーツとは何か」という根本的かつ奥深い問いをいただき、この学びは、私自身の研究や教育の礎となっております。「Sport for ALL」や「スポーツは文化である」という考え方方は、現在私が取り組む「スポーツ機会の平等」というテーマへつながる重要な視点となりました。また、恩師・高瀬幸一先生には、地域と大学の関係性について、特にスポーツを通じた地域貢献の在り方を、卒業論文の執筆を通して実践的にご指導いただきました。

こうした学びを礎として、2025（令和7）年度からはゼミ学生と共に「名桜ゆいスポきっず」という学生団体を立ち上げました。この団体は、地域の子どもたちに運動やスポーツの楽しさを伝えるとともに、学生たちが主体的に活動を企画・運営することを通じて、指導力やコミュニケーション力を高めることを目的としています。今後は、より多様な子どもたちに対応できるようプログラムの内容も工夫し、継続的に地域との連携強化に努めてまいります。

本学が地域に開かれた大学として、より多くの方に親しまれ、信頼される存在であるために、スポーツを通じた地域貢献に注力すると同時に地域の皆さまとのつながりを大切にしながら、地域社会の一員として成長していくよう、教育・研究・地域貢献の三本柱を軸に、地道に、そして誠実に取り組んでいきたいと考えています。

結びに、公立大学法人名桜大学のさらなるご発展と、地域の皆さまをはじめ関係者の皆様のご健勝とご多幸を、心よりお祈り申し上げます。

(スポーツ健康学科 助教)

## 人間健康学部 看護学科（2011年度卒業）



溝口 広紀

## やんばるで学び、ケアリングの未来へ繋ぐ

開学30周年を迎えるにあたり、これまで名桜大学の発展にご尽力いただいた教職員の皆さま、地域の皆さま、そして卒業生の皆さまに心より感謝申し上げます。また、私自身も本学看護学科の卒業生として、この節目を迎えることを大変喜ばしく思っております。

看護学科2期生として入学した当初は、現在の看護学科棟はまだ建設されておらず、生涯学習推進センターやスポーツ健康学科棟にて、専門科目の講義や演習を受けていました。当時はまだ十分な学習環境が整っていたとは言えませんが、恩師である先生方から、厳しく、時には優しく、看護の基礎を教えていただきました。3年次には看護学科棟が完成し、名護市街地を一望できる美しい環境での学びが始まりました。本学での4年間では、講義・演習・実習に加えて、地域住民への健康支援活動（ボランティア）にも取り組みました。活動を通して、コミュニケーション能力や血压測定などの技術を高めることができました。

あっという間に本学での4年間が過ぎ、卒業後は県外の病院に就職しましたが、大学で先生方から教わったことは臨床の現場で大いに役立ちました。特に、「考える力」や「自分の考えを言語化して表現する力」を身につけられたことは、非常に大きな財産になったと感じています。

臨床の現場で新人看護師の指導にあたるようになると、人を育てる困難さを痛感するようになりました。この経験から、かつての恩師の先生方がどのように学生を育てておられたのかという疑問と同時に、私自身も学生を育てられるようになりたいと思い、2018（平成30）年、本学看護学科の教員として勤めることとなりました。

私にとって、本学看護学科での4年間で学んだことは、学生時代から社会人に至るまで非常に多く、かけがえのないものとなっています。本学看護学科の学生は、地域の方々とふれあう機会が多いことから、教職員のみならず地域の皆さまにも育てていただいているという点が、他大学にはない大きな強みであると感じています。

このことを常に心に留めながら、今後も後輩を育てること、そして大学のさらなる発展に尽力していきたいと考えております。

(看護学科 助教)

## 国際学群国際文化専攻



駒井 由紫

(旧姓:桑子  
2018年度卒業)

## 「AB ALTO AD ALTUM」

“AB ALTO AD ALTUM”とは、「高き、より高きに」というラテン語の表現で、私が名桜大学の恩師である住江淳司先生から卒業時に頂いた言葉です。それ以来現状に満足せず自分の人生の目標に向かって常に前進してきました。

群馬県出身の私は、関東を飛び出し思い切って沖縄県の名桜大学に入学しました。名護市で過ごした3年間とブラジル留学の1年間は言葉にできないほど素晴らしい毎日の連続で、私の人生の宝物です。

特に心に残っているものはやはりポルトガル語の授業です。実は自分は第二外国語でスペイン語かフランス語を学ぼうと考えていました。しかし履修登録を誤り、気づいたらポルトガル語の教室にいました(笑)。しかし、今考えるとそれが運命の出会いであり、私の人生のターニングポイントだったと思います。ポルトガル語の学習に熱中し、定期試験で98点と100点を獲得、住江先生から「よくやったな」と言われ嬉しくなったのを今でも覚えています。初めて心の底から「好き」と言える存在に出会えた瞬間でした。

名桜大学を卒業してからは、JICA海外協力隊や在アンゴラ日本大使館勤務、島根県・滋賀県の小中学校でポルトガル語通訳など、名桜大学で学んだポルトガル語にいつも助けられてきました。現在は鳴門教育大学の大学院でモザンビーク共和国の教育の研究をしており、卒業後は国連児童基金(ユニセフ)での就職を目指しています。人生の最終目標は「この地球上の困っている子どもや女性が0になり、全員が笑顔で幸せに暮らせる世界にすること」です。周りからは馬鹿らしい、無理だ、と言われるかもしれません。しかし名桜で得たバイタリティを基に、より高きを目指して諦めず前進していきたいと思っています。

最後になりましたが、開学30周年・公立大学法人化15周年おめでとうございます。先生方及び学校関係者各位、沖縄県北部12市町村の方々を始めとする皆様へ感謝申し上げます。「名桜から世界へ」、今後のさらなる発展を心より願っています。

(鳴門教育大学 大学院学校教育研究科 人間教育専攻  
グローバル教育 国際教育協力分野 修士1年)

## 国際学群語学教育専攻



金崎 永幸

(2021年度卒業)

## 物事を捉える視点 財産

このたび、名桜大学が開学30周年を迎えるとのこと、心よりお祝い申し上げます。私は2022(令和4)年に国際学群語学教育専攻を卒業し、現在は公立中学校で教員として勤務しています。在学中は学問だけでなく、人との出会いや経験から多くを学び、自分の価値観や人生観を形づくる大切な時間となりました。

中でも最も印象に残っているのは、板山先生のゼミでの学びです。刈谷剛彦さんの『知的複眼思考法』を批判的に読み込み、議論を重ねました。物事を多角的・多面的に捉える視点を得られたことは、教育現場に立つ今、何よりの財産です。答えのない課題に直面する日々、生徒や保護者、同僚の立場や背景を踏まえて選択や対応を考える際、この思考法が大きな助けとなっています。

また、仲間と協働して困難な課題に向かう経験は、今の仕事にも生きています。思春期の生徒が仲間と力を合わせて乗り越える喜びを、学校行事や授業、部活動で体験してほしいと願いながら日々取り組んでいます。

卒業後も仲間との交流は続きますが、特に学科が異なる先輩方とのつながりが多いのは、この大学の魅力です。進路先が多岐にわたるため、教育だけでなく医療、福祉、企業など幅広い話を聞け、自分の視野や発想を広げてくれます。こうした異分野交流も大学生活がくれた財産です。

在学する皆さんには、多様な価値観と出会い、自分の可能性を広げる時間を過ごしてほしいと思います。大学で得た学びや人とのつながりは、どの職業にも必ず生きてきます。

名桜大学がこれから多くの学生・卒業生にとって誇りであり続け、地域や社会に貢献する存在であることを祈念するとともに、卒業生として、教育現場に立つ者として、その歩みを応援してまいります。

(福岡県春日市立春日南中学校教員)

## 国際学群経営専攻



屋部 藍華

(2019年度卒業)

## 多くの縁と学びに感謝

名桜大学の開学30周年、そして公立大学法人化15周年を心よりお祝い申し上げます。また、これまで大学の発展に尽力されたすべての皆様に、深い敬意と感謝を表します。

私は2020(令和2)年に国際学群経営専攻を卒業し、現在は名桜大学地域連携研究推進課に勤務しております。学生として学んだ場に、今は職員として関わり、この記念すべき節目を迎えられることを大変光栄に思っています。

学生時代には、多くの先生方や友人との出会いを通して、価値観や視野を大きく広げることができました。高安美智子教授のもとで挑戦した数理学習センターのチューター、林優子教授のご指導のもと、取り組んだ実践型インターンシップ「学P沖縄リーグ」(沖縄ファミリーマート)など、様々な経験が私を大きく成長させてくれました。これらのご縁とご指導に、心から感謝しております。

3年次からは財務会計を専門とする仲尾次洋子教授のゼミに所属し、簿記や会計学を学び、その奥深さに強く魅了されました。また、仲尾次教授には学問だけでなく、就職活動や人生の節目でも親身に支えていただきました。卒業後も変わらず見守っていただき、私は本当に幸せ者だと日々感じています。心より感謝いたします。

名桜大学卒業から5年、私は科学研究費助成事業をはじめとする外部資金を担当しており、学生時代に培った会計の基礎が、数字に向き合う日々の業務を支える大きな力となっています。名桜大学の一員として、これまでいただいた多くのご縁と学びに感謝しながら、母校の誇りを胸に、少しでも大学の発展の一助となるよう邁進してまいります。

名桜大学はこれからも地域と共に歩み、世界と繋がりながら、やんばるの豊かな自然の中で独自の存在感を發揮し続けることでしょう。これから40周年、50周年、60周年と共にこの節目を迎えることを心から楽しみにしております。

結びに、名桜大学に関わるすべての皆様のご健康とご活躍、そして大学の一層の発展を心よりお祈り申し上げます。

(名桜大学 総務企画部地域連携研究推進課)

## 国際学群情報システム専攻



名嘉山 兼志

(2014年度卒業)

## 学びを力に、起業の道へ

名桜大学開学30周年、心よりお祝い申し上げます。私は高校卒業後、専門学校でギター制作を学びました。手を動かし形にする“ものづくり”に魅力を感じていましたが、社会に出る前に、作るだけでなく教養を深めたいと思い、名桜大学への進学を決めました。当時の国際学群は、学びながら自分と向き合い、進路を選べる柔軟な制度があり、「ここでならやりたい事を探究できる」と感じたのが大きな理由です。公立化に伴い、地域に根ざした学びや地域貢献に力を入れている点にも惹かれました。

大学では、1年次からの教養演習を通じて、自ら課題を見出し、調査し、解決へ導く姿勢が自然と身につきました。情報系の講義で得た知識は、私の“ものづくり魂”に火をつけ、デジタル領域での制作に没頭するようになりました。専門性の高い授業も多く、学ぶ楽しさと知的好奇心を刺激され続けた4年間でした。

学生生活では、サークルやアルバイト、学内外のイベントにも積極的に参加。中でも学園祭実行委員として広報を担当し、学園祭のプランディング戦略を立て、ポスターやパンフレットの制作に関わったことは、現在の職業につながる大きな転機となりました。また、先生の紹介で参加した「社長弟子入りツアー」は、将来のビジョンを具体化するきっかけとなり、起業という道が現実的な選択肢となりました。

現在は広告業界でWebデザインや映像制作を手がけるデジタルクリエイターとして活動しつつ、法人を立ち上げ、経営者として日々奮闘しています。大学生活で培った「考えて動く力」は、今も人生の土台となり、名護という地域だからこそ、自ら動き、価値を生み出す力が育まれました。この行動力こそが、人生を切り開く原動力になっています。

これから10年、20年と、名桜大学がさらなる発展を遂げ、多くの学びの種を地域と未来へ広げていくことを、心から願っています。そして卒業生として恥じることのないよう私自身も一層精進してまいります。

(株式会社knc 代表取締役)

## 国際学群診療情報管理専攻



平良 礼香

(2016年度卒業)

## 「私を支える“名桜大学での日々”」

開学30周年、公立大学法人化15周年、誠におめでとうございます。節目の年に卒業生の一人としてメッセージをお届けできることを大変嬉しく思います。

私は名護市出身で、高校卒業後は中南部、もしくは県外の大学への進学を考えていました。そんな時、高校の先生から名桜大学で診療情報管理士が沖縄県で唯一、さらに当時は公立大学で唯一学べることを教えていただき、地元に残って学ぶことを決意しました。

入学後は高い専門性と豊富な経験をお持ちの先生方のもとで直接学べる恵まれた環境や、学生に対するサポート体制が充実しており、学びに対する意欲が一層高まりました。また、大学には沖縄県内だけでなく、県外や海外からの学生も多く在籍しており、多様な価値観や人との関わりを通じて視野が広がりました。3年次には診療情報管理士認定試験に向けて、先生方の熱心な対策授業、同じ学科の仲間たちと励まし合いながら学び続けた結果、無事に合格することができ、自信と達成感に繋がりました。他にも学科や先輩後輩の垣根を越えて交流する機会があり、今でも繋がりのある仲間たちに出会えたことはかけがえのない財産です。

大学では診療情報管理の専門的な知識だけでなく、パソコンスキルやデータ分析といった実践的な力も身につけることができ、日々の業務でも活かされています。また、在学中の実習で現在の職場に出会い、現場の雰囲気ややりがいに魅力を感じ、卒業後も勤務を続けています。職場には名桜大学卒業生が多く在籍しており、心強さを感じながら業務にあたっています。

大学生活で得た知識や経験は、今の仕事にも確かに生きています、「名桜大学を選んで本当に良かった」と心から感じています。今後も母校が地域や社会に貢献しつつ、多くの学生の未来を支える場であり続けることを願っています。

(社会医療法人敬愛会・中頭病院 診療情報管理課)

## 人間健康学部 スポーツ健康学科



宮國 康弘

(2008年度卒業)

## 名桜で築いた人生の原点

私は、沖縄県宮古島出身で、中学校の保健体育教員を目指して名桜大学に入学しました。在学中に保健体育教員免許と養護教諭免許を取得しましたが、卒業後すぐに教職に就くのではなく、より広い視野を得たいと考え、青年海外協力隊（JOCV）に参加し、新卒でバングラデシュへ2年間派遣されました。現地で感染症対策に従事する中で、健康における社会的要因の重要性を実感し、帰国後はさらに知識を深めるために大学院に進学しました。修士・博士課程を経て、現在もこの分野の研究を続けています。なお、社会的要因と健康の関係性は、学部時代の卒業研究でも取り上げたテーマであり、当時所属していた小川寿美子ゼミ（現スポーツ健康学科長）がその原点です。

大学時代に特に力を入れた活動は2つあります。ひとつは、新入生支援サークル「ウェルナビ」の創設と運営です。木村堅一先生（現副学長）の指導のもと、初代ウェルナビ長として、異なる学科の学生30人と共に、新入生支援に加え、メンバー自身の成長の場を所属メンバーとともに築くことができました。もうひとつは、ラオスを中心としたスタディツアーアの企画と参加です。2年次から4年次までに計4回訪問し、異文化との交流や現地調整も経験しました。この体験が、バングラデシュ派遣や人生観の転換にも大きくつながっています。

現在は大学教員として、教育と研究の両面から学生と関わっています。私自身が大学時代に人生観を変える出会いや体験をしたように、ゼミ生にも多様な生き方に触れられる機会を提供したいと考え、さまざまな企画を共に実施しています。また、ウェルナビのような学生支援の担当も務めており、自分自身がウェルナビで培った経験を活かしながら、学生の成長を促す支援を試行錯誤しています。

今振り返ると、学生時代に取り組んできたことが、すべて現在に繋がっています。スポーツ健康学科20年の歩みは、卒業生一人ひとりの歩みによって築かれてきたものだと思います。次の20年に向けてこれから的是ports健康学科の発展を心から願っています。

(日本福祉大学社会福祉学部 講師)

## 国際学部観光産業学科



島袋 完俊

(1997年度卒業)

## 大学の歩みに深い誇り

名桜大学開学30周年ならびに公立大学法人化15周年を迎えられますことを心よりお慶び申し上げます。

私は1998（平成10）年3月に観光産業学科の一期生として卒業しました。「やんばる」の大自然に囲まれた丘の上で過ごした日々から30年、月日の流れの早さを改めて感じるとともに、真新しいキャンパスのなか、新しい大学とともに歩み出す、期待と不安が入り混じった感覚は今も鮮明に覚えています。今回、こうして開学30周年という節目に寄稿の機会をいただけたことを大変光栄に思います。

入学当時のキャンパスは、講義棟、研究棟、図書館、食堂と売店のみというシンプルな環境でした。しかしながら、教職員の皆さまの熱意と、同期の仲間たちの志の高さに刺激を受けながら、「平和・自由・進歩」という建学の理念を体現するような学びを得ることができました。当時、観光を学べる大学は県内には他になく、国内でも数えるほどでした。将来はホテルで働きたいという漠然とした思いで入学に至りましたが、4年間の学びは、将来の方向性を明確にする助けとなりました。

現在はホテルの総支配人として沖縄観光とホスピタリティの現場に身を置いていますが、日々の業務の中でも名桜大学で培った学びや経験が生きています。多様なお客様を迎える、多様化するニーズに応えながら持続可能な観光の在り方を考える上で、大学での4年間の経験はかけがえのないものでした。

名桜大学はこの30年間で大きく発展し、多くの優秀な人材を地域社会や国際社会へ送り出してきました。卒業生の一人として、この大学の歩みに深い誇りを感じています。

これからも名桜大学が時代とともに進化し、未来を担う学生たちが「やんばる」という自然豊かな地でのびのびと学び、活躍できる場であり続けることを心より願っております。

教職員の皆さま、そして在学生・卒業生の皆さまのご健勝とご活躍を心よりお祈り申し上げます。

(リーガロイヤルグラン沖縄 総支配人)

## 人間健康学部看護学科



加藤 勇人

(2019年度卒業)

## 対話を通して育んだ看護の心

開学30周年ならびに公立大学法人化15周年、おめでとうございます。卒業生の一人として、この節目にメッセージを寄せる機会をいただき光栄に存じます。

私は、2016（平成28）年4月に看護学科の10期生として入学しました。県外からの進学で、初めての一人暮らしに大きな不安を抱いていましたが、気さくな友人たちのおかげで、すぐに沖縄の生活に溶け込めました。思い返せば、友人や先生方の温かな支えがあったからこそ、4年間の学生生活を充実させられを感じています。

名桜大学での大きな学びは「対話の大切さ」でした。課題に追われる日々の中、友人や先生と様々なことを話したことが悩みを乗り越える原動力になっていました。また、学内だけでなく、地域でのボランティア活動を通して、地元の方々と直接お話しする機会もありました。そうした経験の中で、相手が何を伝えたいのかを丁寧に受け取り、自分の考えをどうすれば伝えられるかを工夫する力が育まれたように思います。この経験は、多様な価値を持つ他者との対話の基礎となり、相手と自分の価値を大切にすることの重要性を学ばせていただきました。

卒業後は精神科病院に就職し、様々な背景を持つ患者さんと関わりました。精神科のケアには明確な正解がないことも多く、患者さんにとって何が最善かを考えるには、チーム内の他職種との話し合いだけでなく、患者さんとの日々の関わりも重要です。患者さん、家族、同僚との対話を重ね、その方にあったケアを提供でき、患者さんが笑顔で退院していくのを見ると、この仕事の大きなやりがいを実感しました。今ではその経験を活かしながら、母校に戻り、博士課程の学生として研究に取り組んでいます。まだ、道半ばですが、これからも人との対話を大切にし、自分らしい探求を続けていきたいと思っています。最後になりますが、名桜大学のさらなる発展と、後輩の皆様の輝かしい未来を心よりお祈り申し上げます。

(名桜大学大学院 看護学研究科博士後期課程)

## 人間健康学部助産学専攻科



川端 星羅

(2022年度修了)

**名桜大学とともに歩んだ  
助産師への道**

このたび、名桜大学が創立30周年という節目を迎えられましたことを、心よりお祝い申し上げます。本学は、これまで多くの専門職を育成し、地域社会に貢献してこられた母校の歩みに、卒業生の一人として深い敬意と感謝の念を抱いております。私は2019（令和元）年度に名桜大学看護学科を卒業後、小児病棟・新生児集中治療室（NICU）で看護師として臨床経験を積み、命のはじまりに寄り添うケアの尊さを実感しました。その経験から助産師を志す思いがいっそう強まり、名桜大学助産専攻科6期生として再び母校に入學し、2022（令和4）年度に修了いたしました。

専攻科在学中には、妊産婦とそのご家族に寄り添うための専門知識と技術を習得すると同時に、命の誕生に携わる助産師としての倫理観や姿勢、そして人ととの温かなつながりの尊さを深く学びました。本学専攻科は、地域の地理的・歴史的・文化的特性、とりわけ健康長寿社会の中で培われた豊かなケアリング文化を礎に、保健・医療・福祉が連携する助産ケアを実践できる人材の育成を目指しており、この点が最大の特色です。こうした教育方針のもと、地域に根差しながらも広い視野で助産を探究できた経験は、いま助産師として現場に立つ私の搖るぎない軸となっています。多様な課題に直面するたびに、母校で得た学び、支えてくださった先生方、そして共に励まし合った仲間たちの存在が原点となり、大きな力を与えてくれます。また、現在は、母校の助産教育にも演習協力という形で関わり、後輩たちの成長を支援できることに喜びと誇りを感じています。

母校が今後も地域に根差した人材育成と時代の要請に応える教育・研究を推進されることを、卒業生として心よりお祈り申し上げます。そして、在学生の皆さんに誇りと希望を持って学び、それぞれの力を信じて前へ進まれる姿を、心から応援しています。

（社会医療法人かりゆし会・ハートライフ病院 産婦人科病棟）

## 国際学部観光産業学科



伊波 史子

(1997年度卒業)

**大学での学び 私の原点**

開学30周年・公立大学法人化15周年、おめでとうございます。もう、そんなに経ったんですね！まだ出来立ての新しい教室の窓から、畑でパイナップルを収穫する様子をほんやり眺めていたことを昨日のことのように覚えています。

大学を卒業後、名護の企業に就職しました。そのきっかけは、春休み期間中の集中講義でした。観光学科の先生方の計らいにより、開業前のホテルの支配人や料理長、宿泊部長や営業部長などそうそうたるメンバーの講義を受け、最終日には建設中の工事現場を視察。ヘルメットをかぶって長靴を履き、未完成のホテルを見た私は心を掴まれました。人生最大の出会いでした。

先生方はいつでも、私たち学生が最良の選択ができる様、様々な工夫と努力を惜しまず注いでくださいました。大学での学びは、今でも私の原点です。仕事で悩んだとき、行き詰ったとき、迷ったときにヒントやきっかけになる存在です。それらは、恩師の教えや経営論の一節、毎週出されたレポートの課題。友人やゼミの中間、名桜祭の一コマや、大学でのお気に入りの空間などで、4年間の学びや経験、大学で過ごした記憶などが今でも私を助け支えてくれます。

先日、新しくなった学食を利用しました。賑やかに食事を楽しむ学生たちに囲まれて、タイムスリップしたようでした。50歳を迎えた今でも、ここはほっとできる場所です。そして、ふらりと訪れる私を今でも温かく迎えてくださる恩師に会う度に、「今の自分を越えたい、まだまだ成長したい」と心に炎が宿ります。時代の変化は速く・激しいものですが、これから沖縄・日本・世界と一緒に創っていきましょう。

（ザ・テラスホテルズ株式会社 総務人事部）

## 大学院看護学研究科



高木 智子

(2020年度卒業)

**恩師との出会い転機**

名桜大学開学30周年、公立大学法人化15周年、誠におめでとうございます。

卒業してから5年が経とうとしていることに驚きつつ、振り返ると名桜大学で過ごした時間は、かけがえのない学びを得られ、成長できる時間だったと思います。

中でも学ぶことの楽しさを教えて下さった恩師との出会いは、私にとって大きな転機でした。看護実習や学士・修士論文の執筆などにおいて、私の疑問や考えに耳を傾け、自分自身で物事の本質に辿り着くことができるよう指導をしていただきました。興味を持った事柄について調べ、考え、研究室で議論することが当たり前の日常となり、調べたことの共有を楽しんでいました。そんな日々を重ねた結果、学士論文の執筆を終えた頃には、知識を深めることや問い合わせ続けることの大切さを自然と感じられるようになっていました。学問と向き合う姿勢の変化を実感したことを鮮明に覚えています。学びを探求することが楽しいと感じられたからこそ、学部卒業後すぐに修士課程に進学しました。そして修士課程修了後も、一度大学からは離れましたが、看護師として働く傍ら、再び大学に戻り勉学に励んでいます。

大学では、所属学科を超えて、先生方や友人との交流ができたことも貴重な経験でした。異なる視点や専門性に触れることで、多角的に物事を考える力が養われたと感じています。また、沖縄というゆいまーる精神の根付いた環境で、地域の方々と健康活動をするという実践的な学びは、講義だけでは得られない気づきと責任感を育んでくれました。これらの学びを活かして、私は、患者にとって1番身近な存在である看護師として、患者の日常生活のことをイメージしながら、医師や薬剤師などの他職種の皆さんとの強みを最大限に活かすことができるよう、カンファレンスで積極的に意見を伝えています。いつか、今まで大学で関わって下さった方々と一緒に仕事をすることが今の私の夢です。

末筆ながら、名桜大学のさらなる発展と、在学生・卒業生の皆様のご活躍を心よりお祈り申し上げます。

（国立がん研究センター中央病院 看護部）

## 大学院国際文化研究科国際地域文化専攻、博士後期課程



前堂 鳩世

(2023年度修了)

**琉球漢詩の魅力 広めたい**

名桜大学開学30周年ならびに公立大学法人化15周年を迎えたこと、心よりお祝い申し上げます。学校関係者の皆様、誠におめでとうございます。

私は、2021（令和3）年に名桜大学大学院国際文化研究科国際地域文化専攻（博士後期課程）に入学しました。名桜大学での研究生活は、充実した毎日でした。博士課程の講義の中では、ゼミを通して、ゼミ生や指導教員の先生とお互いに多くの意見を交わしながら、自分の研究を深めていくことができました。さらに、博士後期課程在籍の学生および博士課程に関わる先生方が一堂に会する総合演習という授業は特に印象的でした。学生の発表内容に対して、研究分野の異なる様々な視点から意見を交わすことができました。

さらに、博士課程在籍時には、1年次の後期の時から、名桜大学で漢文学（中国古典文学）の講義を非常勤講師として担当させていただきました。詩を中心とした中国古典文学の文学史とともに、私が専門に研究している琉球漢詩についての講義を行い、博士課程在籍時から授業をするという貴重な経験をさせていただきました。

博士課程修了後は、大学での非常勤講師を継続しています。これまでの講義を通して、ほとんどの学生が琉球漢詩を聞いたことがないという現状を知りました。私は漢字や漢詩が好きで、高校生の時に琉球漢詩の存在を知り、大学で学んでみたいと思い、進学しました。そして、たくさんの人に琉球漢詩を知ってもらいたいと思い、研究の道に進みました。今後は、より多くの人に琉球漢詩の存在を知ってもらえるように自身の研究やその成果を社会に還元することに取り組んでいきたいです。

私が名桜大学で充実した学生生活を送ることができたように、在学生の皆様および今後名桜大学に入学してくれる学生の皆様が、授業や大学での様々な活動を通して、充実した学生生活が送れることを願っています。最後になりますが、名桜大学の今後のますますの発展を祈念しております。

（琉球大学人文社会学部 琉球アジア文化学科 准教授）



先家 茉子

(2021年度修了)

### 世界に学んで、違いを楽しめた。

名桜大学の開学30周年、心よりお祝い申し上げます。おめでとうございます！

沖縄県北部の豊かな自然に囲まれて始まった大学生活は、私にとって初めての1人暮らしであり、人生の大きな転機となりました。大学で出会った多様なバックグラウンドを持つ友人たち、外国からやってきた友人、外国で出会った友人。そのすべてが、「国際協力を仕事にしたい」という入学時からの夢を、力強く後押ししてくれました。

世界について疑問を抱いたときには、様々な専門分野を持つ先生方が論理的に解き明かしてください、海外で働きたいという思いに迷いが生じたときには、職員の皆さんのが真摯に向き合い、共に考えてくださいました。名桜大学の学びと支援の環境があったからこそ、私の「国際協力を仕事にしたい」という夢は、現実のものとなることができました。

現在私は、地元・広島県で、農業と多文化共生を組み合わせた活動に取り組みながら、インドネシアでも農業プロジェクトを進めています。日本の地域が直面している農業課題は、実は途上国が抱える課題とも深く通じ合うものがあります。日本で地域に根ざした農業モデルをつくり上げることができれば、その経験はインドネシアでも実践することができると、そんな想いを胸に、日々活動を続けています。

社会人になってからも、修士課程で学びを深められる環境が名桜大学にあったからこそ、こうした実践が可能になりました。農業というフィールドを通じて「多文化共生とは何か」を問い合わせ、国際と地域をつなぐ日々の営みのなかに、名桜大学で得た視点と知見が、確かに息づいていると実感しています。

名桜大学は、世界と地域をつなぎながら学び、成長できる、かけがえのない場所です。これから多くの若者たちが、沖縄から世界へと羽ばたいていかれることを、心より願っています。

(一般社団法人わかいふあーむ理事、  
びんご農業女子会副会長、個人農家)

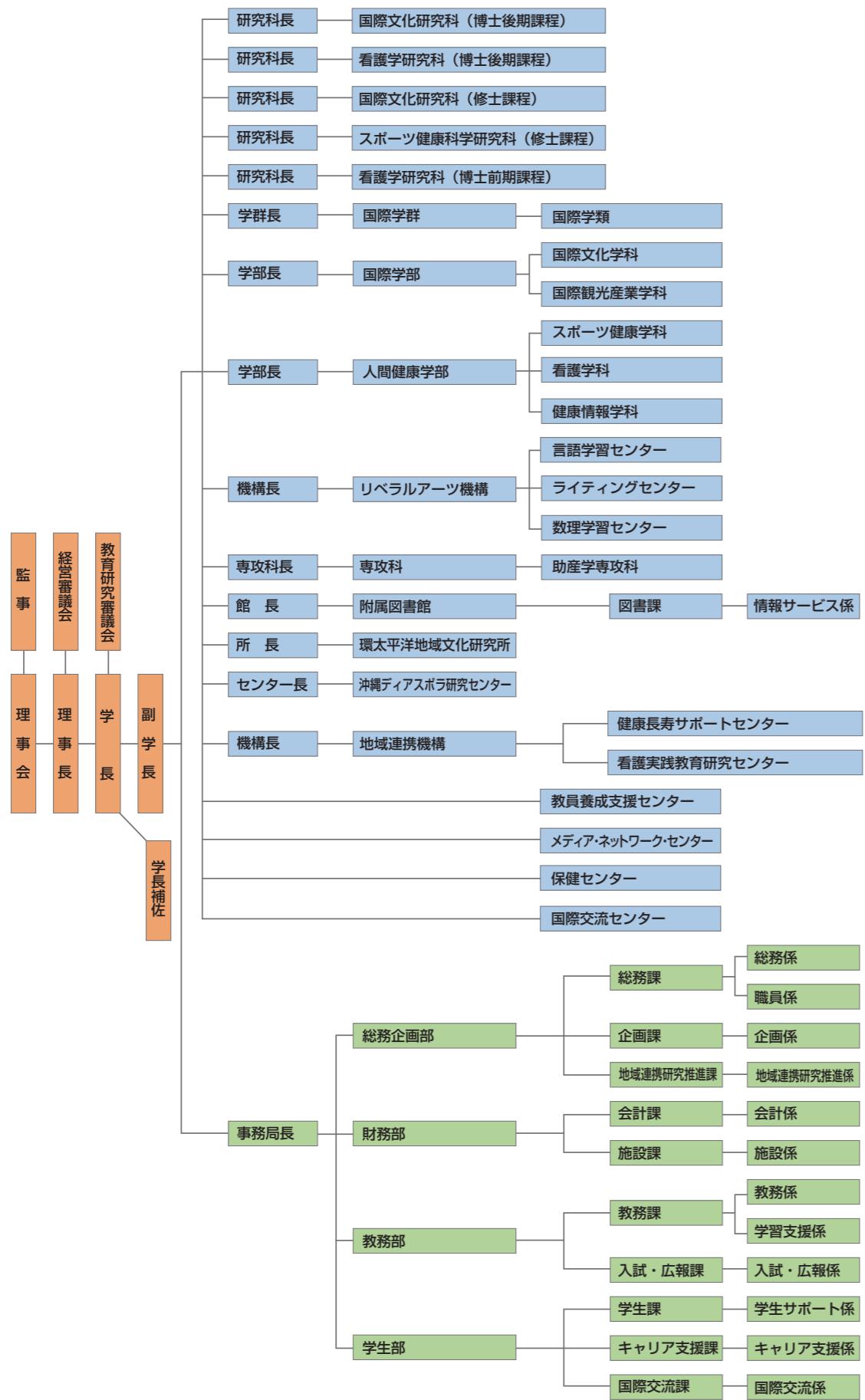


## 8 章

### 資料



## 公立大学法人名桜大学組織図 (令和7年度)



188



## 教員名簿 (令和7年10月1日現在)

学長 砂川 昌範  
 副学長 (地域創生担当) 林 優子  
 副学長 (研究国際交流担当) 永田美和子  
 副学長 (教育・入試担当) 木村 堅一

### 国際学部

#### 国際文化学科

氏名	職階	役職
渡慶次正則	教授	国際学群語学教育専攻長
嘉納 英明	教授	国際学部(群)長/大学院国際文化研究科長 (修士後期課程)
高嶺 司	教授	国際学群国際文化専攻長
板山 勝樹	教授	教員養成支援センター長
小畠 達	教授	附属図書館長
ノーマン・フィーウェル	教授	
小嶋 洋輔	教授	環太平洋地域文化研究所長
照屋 理	教授	
坪井 祐司	教授	国際文化学科長/国際学群国際文化教育研究学系長
屋良健一郎	教授	ライティングセンター長
山城 智史	教授	沖縄ディアスボラ研究センター長
メーガン・クックルマン	上級准教授	
麻生 玲子	上級准教授	
志田淳二郎	上級准教授	
上原なつき	准教授	
当銘 盛之	准教授	
李 梦迪	准教授	
長尾 直洋	准教授	
清水 美里	准教授	
玉城 福子	准教授	
林 智昭	准教授	

#### 国際観光産業学科

氏名	職階	役職
宮平 栄治	教授	
新垣 裕治	教授	
金城 亮	教授	国際観光産業学科長
田代 豊	教授	
仲尾次洋子	教授	
林 優子	教授	副学長
大城 渡	教授	国際学群経営情報教育研究学系長 /国際学群経営専攻長
大谷健太郎	教授	大学院国際文化研究科長 (修士課程)
東恩納盛雄	教授	
寺本 潔	教授	
宮城 敏郎	上級准教授	
許 点淑	上級准教授	
伊良皆 啓	上級准教授	
柳 銀珠	上級准教授	
卯田 卓矢	上級准教授	国際学群観光産業教育研究学系長 /国際学群観光産業専攻長
大城美樹雄	准教授	
タン エンハイ	准教授	
上原 明	准教授	
小山 壽治	准教授	

#### リベラルアーツ機構

氏名	職階	役職
高安美智子	教授	数理学習センター長
久高利美子	教授	
田原 貴子	教授	

#### 環太平洋地域文化研究所

氏名	職階	役職
波照間永吉	教授	

#### 臨時の任用教員 (令和7年10月1日現在)

氏名	職名	学部	学科
具志堅邦子	准教授	国際学部	国際文化学科
金 孝珍	准教授	国際学部	国際文化学科
ケム ロイ	助教	リベラルアーツ機構	

189



## 教員名簿

(令和7年10月1日現在)

### 人間健康学部

#### スポーツ健康学科

氏名	職階	役職
小川寿美子	教 授	スポーツ健康学科長
高瀬 幸一	教 授	
奥本 正	教 授	大学院スポーツ健康科学研究科長(修士課程)/学長補佐
大峰 光博	教 授	
樋原 伴子	教 授	
石田 明夫	教 授	
小脇 肇	上級准教授	
遠矢 英憲	上級准教授	
玉城 将	上級准教授	
音野 太志	上級准教授	
石橋 千征	准 教 授	
仲田 好邦	准 教 授	
神田奈津子	准 教 授	
神谷 義人	准 教 授	
濱本 想子	准 教 授	
三橋 優介	准 教 授	
神崎 園子	助 教	
崔田 誠志	助 教	

#### 健康情報学科

氏名	職階	役職
中里 収	教 授	IR室長
木村 堅一	教 授	副学長
佐久本功達	教 授	リベラルアーツ機構長
天願 健	教 授	健康情報学科長/国際学群情報システム専攻長
前川美紀子	教 授	地域連携機構長
木暮 祐一	教 授	広報室長
鈴木 大作	教 授	メディアネットワークセンター長
本村 純	教 授	国際交流センター長
大城真理子	上級准教授	保健センター長/国際学群診療情報管理専攻長
立津 慶幸	上級准教授	
太田佐栄子	上級准教授	
上門 要	准 教 授	
島 康貴	准 教 授	
水山 克	准 教 授	
具志翔太朗	助 教	

#### 教育支援員

氏名	職名	学部	学科
金子 有希	教育支援員		
仲程 晴香	教育支援員		
七海あおい	教育支援員		
大城 莉沙	教育支援員		
豊里あづさ	教育支援員		
幸喜 美帆	教育支援員		
金城 仁菜	教育支援員		

#### 看護学科

氏名	職階	役職
小西 清美	教 授	助産学専攻科長
永田美和子	教 授	副学長
大城 凌子	教 授	人間健康学部長
松下 聖子	教 授	
田場真由美	教 授	健康長寿サポートセンター長
玉井なおみ	教 授	
花城 和彦	教 授	
阿部 正子	教 授	看護学科長
流郷 千幸	教 授	
平上久美子	教 授	
木村 安貴	教 授	大学院看護学研究科長(博士後期課程/博士前期課程)
清水かおり	上級准教授	
比嘉 憲枝	上級准教授	
鬼頭 和子	上級准教授	
村上 満子	上級准教授	看護実践教育研究センター長
佐和田重信	上級准教授	
下地 紀靖	上級准教授	
藤井まい	上級准教授	言語学学習センター長
伊藤 智美	上級准教授	
鶴巻 陽子	准 教 授	
伊波 弘幸	准 教 授	
長嶺絵里子	准 教 授	
吉村 千草	准 教 授	
新城 慈	准 教 授	
西田 涼子	助 教	
大浦 早智	助 教	
吉澤 龍太	助 教	
安仁屋優子	助 教	
高畠 孝児	助 教	
松田めぐみ	助 教	
溝口 広紀	助 教	
當山ちひろ	助 教	
宮里 優人	助 教	

#### 大学院スポーツ健康科学研究科(修士課程)

氏名	職階	役職
吉武 裕	教 授	
樋口 京一	教 授	
金城 昇	教 授	
高倉 実	教 授	

#### 大学院看護学研究科(博士後期課程)

氏名	職階	役職
グレッグ 美鈴	教 授	
宇座美代子	教 授	
鈴木 啓子	教 授	



## 職員名簿

(令和7年10月1日現在)

理事長 高良 文雄

事務局長 池原 秀人

部名	課名	職名	氏名
総務課	総務企画部	総務企画部長	根間 朋江
		総務企画部特任参与・学長補佐	金城 正英
		総務課長	上間 久雄
		総務係長	新城 匡之
		係員	戸高 佑菜
		係員	宜壽次恵梨菜
		係員	具志堅大力
		係員	河合 咲
		職員係長	大瀬 恭子
		主任	山川 源太
		係員	平安山史花
		係員	諸喜田裕子
		総務課嘱託員	山川のみ
		総務課付係長(北部広域市町村圏事務組合)	大城 章紀
		企画課長	金城 雄彦
企画係長	上江洲 剛		
係員	謝花 喜昭		
係員	石本 陽広		
環太平洋地域文化研究所参与・URA	泉 太郎		
地域連携研究推進課長	仲榮貞 修		
地域連携研究推進課主幹	松田 勇		
地域連携研究推進係長	又吉 寛子		
地域連携研究推進課主査	中山 登偉		
主任	諸見里安晴		
主任	松浦 大輔		
係員	屋部 藍華		
係員	前里 貴史		
係員	城間 彩子		
係員	藤澤 碧		
係員	上間 望		
係員	伊波 盛智		
係員	比嘉 春樹		
係員	小橋川千夏		
地域連携コーディネーター	神谷 康弘		
係員(琉球文学大系編集刊行)	上原 万知		
係員(琉球文学大系編集刊行)	上原 良太		
係員(琉球文学大系編集刊行)	城間 瑞生		
財務部	財務部長	比嘉 一成	
会計課	会計課長	砂川 一弥	
会計課	会計係長	兼次千恵美	
会計課	主任	新田 繁迪	
会計課	係員	大城美奈美	
会計課	係員	岸本 孝帆	
施設課	施設課長	大城 洋	
施設課	施設係長	遠越 享子	
施設課	係員	比嘉 力	
施設課	係員	具志川大輔	
施設課	係員(ブルーム管理)	比嘉 義典	
施設課	施設課嘱託員	比嘉 辰己	

部名	課名	職名	氏名
教務課	教務部	教務部長	上江洲安幸
		教務部特任参与	山城 耕政
		教務課長	比嘉 淳也
		教務係長	饒波 正一
		係員	山内 恵美
		係員	宮城 圭吾
		係員	島尻 育美
		係員(看護学科事務室)	石本 三智
		教務課嘱託員	神山 利昭
		学習支援係長	新川 悅子
		主任	伊佐正アンドレス
		係員	戒田 峻
		係員(学生会館運営室)	大兼久友香
		係員	吉川 日菜
		勢理客友寛	
係員(言語学習センター)	具志堅絢音		
係員(数理学習センター)	伊良部実麗		
係員(ライティングセンター)	玉城 舞		
係員(学生会館運営室)	上原 友摩		
教員養成講座担当	新城 敦		
入試・広報課	兼浜 千聖		
入試・広報係長	大月 朋子		
教員養成講座担当	照屋 信次		
入試・広報係長	玉城 正貴		
主任	松田 弥生		
主任	大城 拓		
係員	宮城 光希		
係員	片山 葉月		
係員	屋比久るい		
学生課	学生部長(キャリア支援課長兼任)	荻堂 盛淳	
学生課	学生課長(学生サポート係長兼任)	嶋袋 奈月	
学生課	主任	金城 大貴	
学生課	係員	宮城 完爾	
学生課	係員	神山 智	
学生課	係員	宮城 桑奈	
学生課	係員	押川 莉樹	
セントラル	看護師	酒本のぞみ	
セントラル	看護師	新垣 凜	
セントラル	係員	島袋芽衣鈴	
セントラル	キャリア支援課長	真栄田義竜	
セントラル	キャリア支援係主査	浦崎 淳也	
セントラル	係員	屋嘉比千春	
セントラル	キャリア支援課嘱託員	比嘉真恵美	
国際交流課	国際交流課長(国際交流係長兼任)	赤嶺 達也	
国際交流課			



## 理事・監事・経営審議会委員・教育研究審議会委員

2025(令和7)年度

### 理事

高良 文雄 公立大学法人名桜大学理事長  
砂川 昌範 名桜大学学長（副理事長）  
林 優子 名桜大学副学長（地域創生担当）  
仲間 一 金武町長  
金城 秀郎 名護市副市長  
前田 貴子 株式会社ゆがふホールディングス  
代表取締役社長

### 監事

宮里 猛 開法律事務所 弁護士  
原田 泰人 やんばる会計事務所 公認会計士・税理士

### 経営審議会委員

高良 文雄 公立大学法人名桜大学理事長（議長）  
砂川 昌範 名桜大学学長（副理事長）  
永田美和子 名桜大学副学長（研究・国際交流担当）  
木村 堅一 名桜大学副学長（教育・入試担当）  
池原 秀人 名桜大学事務局長  
屋部 憲克 北部広域市町村圏事務組合事務局長  
新垣 力太 新垣産業株式会社代表取締役会長  
宮城 勝 株式会社沖塚代表取締役会長  
嘉手苅 健 元名桜大学地域連携機構参与  
新里江利子 かっぽう山吹副代表

192



## 歴代役員

### 2015(平成27)年度

#### 理事

比嘉 良雄 公立大学法人名桜大学理事長  
山里 勝己 名桜大学学長（副理事長）  
金城やす子 名桜大学副学長  
親川 敬 名護市副市長  
岸本 能子 名護市各種団体女性代表ネットワーク協議会会長  
當眞 淳 宜野座村長

#### 監事

玉城 卓彦 弁護士法人ていだ法律事務所代表社員  
城間 貞 城間公認会計士事務所所長

#### 経営審議会委員

比嘉 良雄 公立大学法人名桜大学理事長（議長）  
山里 勝己 名桜大学学長（副理事長）  
佐久本功達 名桜大学国際学群長  
金城 利雄 名桜大学人間健康学部長  
金城 正英 名桜大学事務局長  
大門 達也 名桜大学同窓会長  
荻堂 盛秀 名桜大学後援会長  
比嘉 克雄 北部広域市町村圏事務組合事務局長  
比嘉 幹郎 ザ・テラスホテルズ特別顧問

名桜大学名誉客員教授

宮里 好一 医療法人タピック沖縄リハビリテーション病院理事長

#### 教育研究審議会委員

山里 勝己 名桜大学学長（議長）  
金城やす子 名桜大学副学長  
佐久本功達 名桜大学国際学群長  
金城 利雄 名桜大学人間健康学部長  
住江 淳司 名桜大学附属図書館長  
田邊 勝義 名桜大学総合研究所長  
新垣 裕治 名桜大学国際文化研究科長  
小西 清美 名桜大学看護学研究科長  
木村 堅一 名桜大学リベラルアーツ機構長  
中里 収 名桜大学教務部長

### 2016(平成28)年度

#### 理事

比嘉 良雄 公立大学法人名桜大学理事長  
山里 勝己 名桜大学学長（副理事長）  
住江 淳司 名桜大学副学長  
山里 将雄 名護市副市長  
岸本 能子 名護市母子寡婦福祉社会会長  
當眞 淳 宜野座村長

#### 監事

三宅 俊司 三宅俊司法律事務所 弁護士  
原田 泰人 やんばる会計事務所 公認会計士・税理士

#### 経営審議会委員

比嘉 良雄 公立大学法人名桜大学理事長（議長）  
山里 勝己 名桜大学学長（副理事長）  
佐久本功達 名桜大学国際学群長  
金城 利雄 名桜大学人間健康学部長  
金城 正英 名桜大学事務局長  
大門 達也 名桜大学同窓会長  
荻堂 盛秀 名桜大学後援会長  
比嘉 克雄 北部広域市町村圏事務組合事務局長  
比嘉 幹郎 ザ・テラスホテルズ特別顧問

名桜大学名誉客員教授

宮里 好一 医療法人タピック沖縄リハビリテーション病院理事長

#### 教育研究審議会委員

山里 勝己 名桜大学学長（議長）  
住江 淳司 名桜大学副学長  
佐久本功達 名桜大学国際学群長  
金城 利雄 名桜大学人間健康学部長  
小川寿美子 名桜大学附属図書館長  
李 鎮榮 名桜大学総合研究所長  
田代 豊 名桜大学国際文化研究科長  
鈴木 啓子 名桜大学看護学研究科長  
木村 堅一 名桜大学リベラルアーツ機構長  
中里 収 名桜大学教務部長



## 名誉学長・名誉客員教授・名誉博士・名誉教授

### 名誉学長

第1号 東江 康治  
第2号 瀬名波榮喜

### 名誉客員教授

第1号 外間 守善  
第2号 島袋 嘉昌  
第3号 比嘉 幹郎  
第4号 平 恒次

### 名誉博士

第1号 小和田 恒  
第2号 佐藤 優  
第3号 ロバートトシオナカソネ

### 名誉教授

第1号 伊江 朝章	第16号 芝野 治郎	第31号 高宮城 繁
第2号 古波倉正偉	第17号 安井 祐一	第32号 仲地 清
第3号 外間 完和	第18号 新城 敏男	第33号 中村 誠司
第4号 平敷 浩邦	第19号 山端 清英	第34号 上間 篤
第5号 島袋 哲	第20号 石川 清治	第35号 宮里 捷
第6号 山里 將晃	第21号 内間 直仁	第36号 レイサム, キャロラインC.
第7号 宮平 進	第22号 西平 守孝	第37号 平識 善盛
第8号 小谷 達男	第23号 竹内 伸也	第38号 稲垣 絹代
第9号 上江洲 均	第24号 杉本 英夫	第39号 金城 祥教
第10号 東江 平之	第25号 久手堅憲一	第40号 金城やす子
第11号 上間 隆則	第26号 ガイエル, ティモシーC.	第41号 金城 利雄
第12号 山里 清	第27号 シーキンス, ドナルドM.	第42号 山里 勝己
第13号 瀬名波榮喜	第28号 清水 則之	第43号 朴 在徳
第14号 屋比久 浩	第29号 吉川 安一	第44号 住江 淳司
第15号 宮城 真宏	第30号 真喜屋尚美	第45号 鈴木 啓子

193

## ■2017(平成29)年度

## 理事

比嘉 良雄 公立大学法人名桜大学理事長  
 山里 勝己 名桜大学学長（副理事長）  
 鈴木 啓子 名桜大学副学長  
 山里 将雄 名護市副市長  
 岸本 能子 名護市母子寡婦福祉社会会長  
 當眞 淳 宜野座村長

## 監事

三宅 俊司 三宅俊司法律事務所 弁護士  
 原田 泰人 やんばる会計事務所 公認会計士・税理士

## 経営審議会委員

比嘉 良雄 公立大学法人名桜大学理事長（議長）  
 山里 勝己 名桜大学学長（副理事長）  
 高嶺 司 名桜大学国際学群長  
 砂川 昌範 名桜大学人間健康学部長  
 金城 正英 名桜大学事務局長  
 大門 達也 名桜大学同窓会長  
 萩堂 盛秀 名桜大学後援会長  
 比嘉 克雄 北部広域市町村圏事務組合事務局長  
 比嘉 幹郎 ザ・テラスホテルズ特別顧問  
 　　名桜大学名誉客員教授  
 宮里 好一 医療法人タピック沖縄リハビリテーション病院理事長

## 教育研究審議会委員

山里 勝己 名桜大学学長（議長）  
 鈴木 啓子 名桜大学副学長  
 高嶺 司 名桜大学国際学群長  
 砂川 昌範 名桜大学人間健康学部長  
 小川寿美子 名桜大学附属図書館長  
 中村浩一郎 名桜大学総合研究所長  
 田代 豊 名桜大学国際文化研究科長  
 佐久川政吉 名桜大学看護学研究科長  
 木村 堅一 名桜大学リベラルアーツ機構長  
 中里 収 名桜大学教務部長

## ■2018(平成30)年度

## 理事

比嘉 良雄 公立大学法人名桜大学理事長  
 山里 勝己 名桜大学学長（副理事長）  
 鈴木 啓子 名桜大学副学長  
 金城 秀郎 名護市副市長  
 岸本 能子 名護市母子寡婦福祉社会会長  
 高良 文雄 本部町長

## 監事

宮里 猛 開法律事務所 弁護士  
 原田 泰人 やんばる会計事務所 公認会計士・税理士

## 経営審議会委員

比嘉 良雄 公立大学法人名桜大学理事長（議長）  
 山里 勝己 名桜大学学長（副理事長）  
 鈴木 啓子 名桜大学副学長  
 高嶺 司 名桜大学国際学群長  
 砂川 昌範 名桜大学人間健康学部長  
 渡具知 伸 名桜大学事務局長  
 萩堂 盛秀 名桜大学後援会長  
 比嘉 克雄 北部広域市町村圏事務組合事務局長  
 比嘉 幹郎 ザ・テラスホテルズ特別顧問  
 　　名桜大学名誉客員教授  
 宮里 好一 医療法人タピック沖縄リハビリテーション病院理事長

## 教育研究審議会委員

山里 勝己 名桜大学学長（議長）  
 鈴木 啓子 名桜大学副学長  
 高嶺 司 名桜大学国際学群長  
 砂川 昌範 名桜大学人間健康学部長  
 小川寿美子 名桜大学附属図書館長  
 仲尾次洋子 名桜大学総合研究所長  
 中村浩一郎 名桜大学国際文化研究科長  
 佐久川政吉 名桜大学看護学研究科長  
 小畠 達 名桜大学リベラルアーツ機構長  
 林 優子 名桜大学教務部長

## ■2019(令和元)年度

## 理事

高良 文雄 公立大学法人名桜大学理事長  
 山里 勝己 名桜大学学長（副理事長）  
 鈴木 啓子 名桜大学副学長  
 金城 秀郎 名護市副市長  
 岸本 能子 名護市母子寡婦福祉社会会長  
 仲間 一 金武町長

## 監事

宮里 猛 開法律事務所 弁護士  
 原田 泰人 やんばる会計事務所 公認会計士・税理士

## 経営審議会委員

高良 文雄 公立大学法人名桜大学理事長（議長）  
 山里 勝己 名桜大学学長（副理事長）  
 鈴木 啓子 名桜大学副学長  
 砂川 昌範 名桜大学人間健康学部長  
 山城 耕政 名桜大学事務局長  
 萩堂 盛秀 前名桜大学後援会長  
 比嘉 克雄 北部広域市町村圏事務組合事務局長  
 比嘉 幹郎 ザ・テラスホテルズ特別顧問  
 　　名桜大学名誉客員教授  
 宮里 好一 医療法人タピック沖縄リハビリテーション病院理事長  
 新垣 力太 新垣産業株式会社代表取締役社長

## 教育研究審議会委員

山里 勝己 名桜大学学長（議長）  
 鈴木 啓子 名桜大学副学長  
 新垣 裕治 名桜大学国際学群長  
 砂川 昌範 名桜大学人間健康学部長  
 小川寿美子 名桜大学附属図書館長  
 仲尾次洋子 名桜大学環太平洋地域文化研究所長  
 波照間永吉 名桜大学国際文化研究科長（博士後期課程）  
 中村浩一郎 名桜大学国際文化研究科長（修士課程）  
 永田美和子 名桜大学看護学研究科長（修士課程）  
 小畠 達 名桜大学リベラルアーツ機構長

## ■2020(令和2)年度

## 理事

高良 文雄 公立大学法人名桜大学理事長  
 砂川 昌範 名桜大学学長（副理事長）  
 鈴木 啓子 名桜大学副学長  
 金城 秀郎 名護市副市長  
 前田 貴子 株式会社ゆがふホールディングス  
 　　代表取締役CEO代行  
 仲間 一 金武町長

## 監事

宮里 猛 開法律事務所 弁護士  
 原田 泰人 やんばる会計事務所 公認会計士・税理士

## 経営審議会委員

高良 文雄 公立大学法人名桜大学理事長（議長）  
 砂川 昌範 名桜大学学長（副理事長）  
 鈴木 啓子 名桜大学副学長（研究担当）  
 林 優子 名桜大学副学長（教育担当）  
 山城 耕政 名桜大学事務局長  
 嘉手苅 健 元名桜大学地域連携機構参与  
 比嘉 克雄 北部広域市町村圏事務組合事務局長  
 比嘉 克己 昭和化学工業株式会社代表取締役会長  
 新里江利子 かつぽう山吹副代表  
 新垣 力太 新垣産業株式会社代表取締役社長

## 教育研究審議会委員

砂川 昌範 名桜大学学長（議長）  
 鈴木 啓子 名桜大学副学長（研究担当）  
 新垣 裕治 名桜大学国際学群長  
 奥本 正 名桜大学人間健康学部長  
 高嶺 司 名桜大学附属図書館長  
 仲尾次洋子 名桜大学環太平洋地域文化研究所長  
 波照間永吉 名桜大学国際文化研究科長（博士後期課程）  
 中村浩一郎 名桜大学国際文化研究科長（修士課程）  
 永田美和子 名桜大学看護学研究科長（修士課程）  
 小畠 達 名桜大学リベラルアーツ機構長

**■2021(令和3)年度****理事**

高良 文雄 公立大学法人名桜大学理事長  
 砂川 昌範 名桜大学学長（副理事長）  
 鈴木 啓子 名桜大学副学長（研究担当）  
 金城 秀郎 名護市副市長  
 前田 貴子 株式会社ゆがふホールディングス  
     代表取締役CEO代行  
 仲間 一 金武町長

**監事**

宮里 猛 開法律事務所 弁護士  
 原田 泰人 やんばる会計事務所 公認会計士・税理士

**経営審議会委員**

高良 文雄 公立大学法人名桜大学理事長（議長）  
 砂川 昌範 名桜大学学長（副理事長）  
 鈴木 啓子 名桜大学副学長（研究担当）  
 林 優子 名桜大学副学長（教育・入試担当）  
 山城 耕政 名桜大学事務局長  
 嘉手苅 健 元名桜大学地域連携機構参与  
 宮里 幹成 北部広域市町村圏事務組合事務局長  
 比嘉 克己 昭和化学工業株式会社代表取締役会長  
 新里江利子 かっぽう山吹副代表  
 新垣 力太 新垣産業株式会社代表取締役社長

**教育研究審議会委員**

砂川 昌範 名桜大学学長（議長）  
 鈴木 啓子 名桜大学副学長（研究担当）  
 林 優子 名桜大学副学長（教育・入試担当）  
 仲尾次洋子 名桜大学国際学群長  
 奥本 正 名桜大学人間健康学部長  
 高嶺 司 名桜大学附属図書館長  
 小嶋 洋輔 名桜大学環太平洋地域文化研究所長  
 波照間永吉 名桜大学国際文化研究科長（博士後期課程）  
 中村浩一郎 名桜大学国際文化研究科長（修士課程）  
 永田美和子 名桜大学看護学研究科長（修士課程）  
 小畠 達 名桜大学リベラルアーツ機構長

**■2022(令和4)年度****理事**

高良 文雄 公立大学法人名桜大学理事長  
 砂川 昌範 名桜大学学長（副理事長）  
 鈴木 啓子 名桜大学副学長  
 金城 秀郎 名護市副市長  
 前田 貴子 株式会社ゆがふホールディングス  
     代表取締役CEO代行  
 仲間 一 金武町長

**監事**

宮里 猛 開法律事務所 弁護士  
 原田 泰人 やんばる会計事務所 公認会計士・税理士

**経営審議会委員**

高良 文雄 公立大学法人名桜大学理事長（議長）  
 砂川 昌範 名桜大学学長（副理事長）  
 鈴木 啓子 名桜大学副学長（研究担当）  
 林 優子 名桜大学副学長（教育・入試担当）  
 山城 耕政 名桜大学事務局長  
 嘉手苅 健 元名桜大学地域連携機構参与  
 宮里 幹成 北部広域市町村圏事務組合事務局長  
 宮城 勝 株式会社沖坤代表取締役社長  
 新里江利子 かっぽう山吹副代表  
 新垣 力太 新垣産業株式会社代表取締役社長

**教育研究審議会委員**

砂川 昌範 名桜大学学長（議長）  
 鈴木 啓子 名桜大学副学長（研究担当）  
 林 優子 名桜大学副学長（教育・入試担当）  
 仲尾次洋子 名桜大学国際学群長  
 奥本 正 名桜大学人間健康学部長  
 高嶺 司 名桜大学附属図書館長  
 小嶋 洋輔 名桜大学環太平洋地域文化研究所長  
 嘉納 英明 名桜大学国際文化研究科長（修士課程）  
 永田美和子 名桜大学看護学研究科長（博士前期課程）  
 佐久本功達 名桜大学リベラルアーツ機構長

**■2023(令和5)年度****理事**

高良 文雄 公立大学法人名桜大学理事長  
 砂川 昌範 名桜大学学長（副理事長）  
 林 優子 名桜大学副学長（地域創生担当）  
 金城 秀郎 名護市副市長  
 前田 貴子 株式会社ゆがふホールディングス  
     代表取締役社長  
 仲間 一 金武町長

**監事**

宮里 猛 開法律事務所 弁護士  
 原田 泰人 やんばる会計事務所 公認会計士・税理士

**経営審議会委員**

高良 文雄 公立大学法人名桜大学理事長（議長）  
 砂川 昌範 名桜大学学長（副理事長）  
 木村 堅一 名桜大学副学長（教育・入試担当）  
 永田美和子 名桜大学副学長（研究担当）  
 池原 秀人 名桜大学事務局長  
 嘉手苅 健 元名桜大学地域連携機構参与  
 宮里 幹成 北部広域市町村圏事務組合事務局長  
 宮城 勝 株式会社沖坤代表取締役社長  
 新里江利子 かっぽう山吹副代表  
 新垣 力太 新垣産業株式会社代表取締役会長

**教育研究審議会委員**

砂川 昌範 名桜大学学長（議長）  
 永田美和子 名桜大学副学長（研究担当）  
 林 優子 名桜大学副学長（地域創生担当）  
 木村 堅一 名桜大学副学長（教育・入試担当）  
 仲尾次洋子 名桜大学国際学群長  
 奥本 正 名桜大学人間健康学部長  
 小畠 達 名桜大学附属図書館長  
 小嶋 洋輔 名桜大学環太平洋地域文化研究所長  
 嘉納 英明 名桜大学国際文化研究科長（修士課程）  
 玉井なおみ 名桜大学看護学研究科長（博士前期課程）  
 佐久本功達 名桜大学リベラルアーツ機構長

**■2024(令和6)年度****理事**

高良 文雄 公立大学法人名桜大学理事長  
 砂川 昌範 名桜大学学長（副理事長）  
 林 優子 名桜大学副学長（地域創生担当）  
 金城 秀郎 名護市副市長  
 前田 貴子 株式会社ゆがふホールディングス  
     代表取締役社長  
 仲間 一 金武町長

**監事**

宮里 猛 開法律事務所 弁護士  
 原田 泰人 やんばる会計事務所 公認会計士・税理士

**経営審議会委員**

高良 文雄 公立大学法人名桜大学理事長（議長）  
 砂川 昌範 名桜大学学長（副理事長）  
 木村 堅一 名桜大学副学長（教育・入試担当）  
 永田美和子 名桜大学副学長（研究担当）  
 池原 秀人 名桜大学事務局長  
 嘉手苅 健 元名桜大学地域連携機構参与  
 宮里 幹成 北部広域市町村圏事務組合事務局長  
 宮城 勝 株式会社沖坤代表取締役社長  
 新里江利子 かっぽう山吹副代表  
 新垣 力太 新垣産業株式会社代表取締役会長

**教育研究審議会委員**

砂川 昌範 名桜大学学長（議長）  
 永田美和子 名桜大学副学長（研究担当）  
 林 優子 名桜大学副学長（地域創生担当）  
 木村 堅一 名桜大学副学長（教育・入試担当）  
 仲尾次洋子 名桜大学国際学部長  
 大城 凌子 名桜大学人間健康学部長  
 小畠 達 名桜大学附属図書館長  
 小嶋 洋輔 名桜大学環太平洋地域文化研究所長  
 嘉納 英明 名桜大学国際文化研究科長（修士課程）  
 花城 和彦 名桜大学看護学研究科長（博士前期課程）  
 奥本 正 名桜大学スポーツ健康科学研究科長（修士課程）  
 佐久本功達 名桜大学リベラルアーツ機構長


**後援会 歴代役員**

年 度	会 長	副会長		幹事(事務局長)
平成27	比嘉 恵一	國吉 明	渡口 政則	金城 正英
平成28	比嘉 恵一	渡口 政則	上原 正史	金城 正英
平成29	比嘉 恵一	上原 正史	新里 隆博	金城 正英
平成30	比嘉 恵一	上原 正史	新里 隆博	渡具知 伸
令和元	比嘉 恵一	上原 正史	新里 隆博	山城 耕政
令和2	比嘉 恵一	新里 隆博	重久 舞子	山城 耕政
令和3	比嘉 恵一	重久 舞子	中村 勇三	山城 耕政
令和4	比嘉 恵一	中村 勇三	玉城 哲雄	山城 耕政
令和5	比嘉 恵一	玉城 哲雄	具志堅 勉	池原 秀人
令和6	比嘉 恵一	具志堅 勉	嘉手苅 修	池原 秀人
令和7	宮城 博	嘉手苅 修	—	池原 秀人


**同窓会 歴代役員**

年 度	会 長	副会長		
平成26・27	大門 達也	森根 愛	八幡 智之	大城 貴博
平成28・29	大門 達也	森根 愛	八幡 智之	大城 貴博
平成30・令和元	大門 達也	八幡 智之	大城 貴博	—
令和2・3	大門 達也	八幡 智之	大城 貴博	—
令和4・5	大門 達也	八幡 智之	大城 貴博	—
令和6・7	大門 達也	八幡 智之	大城 貴博	—


**入学志願状況**
**年度別全学科入学志願状況**

年度	学科名	国際学群			スポーツ健康学科			看護学科		
		男	女	計	男	女	計	男	女	計
平成28	募集人員	280			95			80		
	志願者	447	538	985	304	155	459	57	190	247
	合格者	167	240	407	66	45	111	14	80	94
	入学者	139	177	316	61	40	101	13	74	87
平成29	募集人員	280			95			80		
	志願者	469	551	1020	289	147	436	35	193	228
	合格者	156	229	385	64	49	113	13	84	97
	入学者	123	170	293	56	45	101	10	75	85
平成30	募集人員	280			95			80		
	志願者	444	483	927	272	144	416	75	284	359
	合格者	146	226	372	69	43	112	19	74	93
	入学者	128	178	306	63	39	102	19	63	82
平成31(令和1)	募集人員	280			95			80		
	志願者	501	632	1133	289	150	439	45	267	312
	合格者	135	238	373	64	47	111	11	85	96
	入学者	105	195	300	59	43	102	10	77	87
令和2	募集人員	280			95			80		
	志願者	462	605	1067	304	151	455	43	279	322
	合格者	140	239	379	65	47	112	12	84	96
	入学者	120	181	301	56	44	100	11	72	83
令和3	募集人員	280			95			80		
	志願者	493	550	1043	283	198	481	52	306	358
	合格者	149	238	387	56	66	122	11	83	94
	入学者	108	175	283	46	52	98	11	72	83
令和4	募集人員	280			95			80		
	志願者	303	333	636	282	184	466	34	162	196
	合格者	168	193	361	55	59	114	13	77	90
	入学者	142	154	296	48	57	105	13	74	87

年度	学科名	国際文化学科			国際観光産業学科			スポーツ健康学科			看護学科			健康情報学科		
		男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計
令和5	募集人員	180			160			95			80			80		
	志願者	166	214	380	177	179	356	233	158	391	41	185	226	48	41	89
	合格者	99	136	235	97	102	199	52	60	112	11	79	90	31	26	57
	入学者	77	103	180	86	85	171	48	53	101	10	73	83	23	21	44
令和6	募集人員	180			160			95			80			80		
	志願者	201	233	434	179	201	380	168	173	341	39	172	211	93	52	145
	合格者	110	140	250	72	114	186	45	68	113	19	70	89	67	38	105
	入学者	92	114	206	65	103	168	40	59	99	19	68	87	53	28	81
令和7	募集人員	180			160			95			80			80		
	志願者	169	238	407	148	151	299	252	191	443	23	179	202	188	111	299
	合格者	82	139	221	88	97	185	49	66	115	7	83	90	87	55	142
	入学者	65	118	183	75	82	157	44	62	106	7	80	87	60	24	84



# 入学志願状況

## 都道府県別全学科入学志願者数

都道府県名/年度	H27	H28		H29		H30		R1		R2		R3		R4		R5		R6		R7		
	入学者	志願者	入学者	志願者	入学者	志願者	入学者	志願者	入学者	志願者	入学者	志願者	入学者	志願者	入学者	志願者	入学者	志願者	入学者	志願者	入学者	
北海道	10	23	9	34	8	46	13	42	13	43	14	60	16	46	15	34	13	35	16	23	8	
東北	青森県	4	6	3	4	0	8	3	5	1	1	0	4	1	2	0	1	1	6	3	3	3
	岩手県	4	23	13	10	1	10	3	9	4	11	3	16	6	9	6	10	1	18	8	5	3
	宮城県	1	7	0	5	3	12	4	10	2	5	1	10	1	9	5	9	6	2	1	4	3
	秋田県	3	2	1	6	1	13	4	2	1	1	0	10	2	3	1	0	0	1	1	0	0
	山形県	1	3	1	4	1	2	1	4	1	6	1	2	0	0	0	2	1	0	0	4	2
	福島県	2	8	3	8	3	6	3	10	1	9	3	5	0	4	1	9	4	8	5	5	2
関東	茨城県	6	26	5	39	14	46	9	61	11	50	10	70	13	28	7	26	10	26	6	20	1
	栃木県	0	15	3	20	2	17	4	14	3	20	4	28	6	12	4	7	2	13	4	9	3
	群馬県	1	9	2	10	4	6	1	8	2	11	2	6	1	4	3	10	1	17	7	11	7
	埼玉県	0	16	1	6	0	11	4	15	3	14	4	16	2	14	1	9	2	7	1	11	0
	千葉県	3	5	2	5	0	9	1	9	0	5	2	8	3	7	2	11	6	9	3	5	2
	東京都	6	18	2	16	4	19	5	26	5	24	4	14	4	11	2	14	4	17	6	7	2
甲信越	神奈川県	0	7	1	6	0	15	3	10	2	16	2	13	1	4	1	3	0	2	1	4	2
	新潟県	4	9	3	8	4	9	1	20	3	14	3	13	1	8	3	16	3	8	3	11	6
	山梨県	2	5	2	6	1	2	2	6	1	7	2	10	1	0	0	3	1	6	2	8	3
	長野県	2	11	4	7	2	10	1	10	2	12	2	16	2	10	4	5	3	17	8	3	1
	岐阜県	5	6	2	7	1	7	1	9	3	11	4	7	1	12	2	16	3	5	1	15	5
	静岡県	8	24	7	21	4	41	9	48	11	31	9	42	10	32	14	48	16	44	13	42	15
東海	愛知県	6	19	5	26	6	35	11	45	8	40	4	50	4	37	7	40	11	23	5	24	5
	三重県	1	8	3	5	2	13	4	11	2	10	3	10	1	6	3	6	2	2	1	5	1
	富山县	1	1	1	7	3	6	0	4	2	1	0	3	0	4	2	7	2	8	3	4	2
	石川県	2	9	4	5	1	5	0	9	2	13	2	14	2	5	1	8	4	11	5	14	2
	福井県	3	10	4	3	0	6	2	12	3	4	0	3	1	2	1	1	0	2	2	9	5
	滋賀県	0	1	0	3	1	9	4	4	1	8	3	10	1	4	1	6	3	2	0	5	3
近畿	京都府	3	9	3	20	5	12	2	9	2	12	2	12	4	8	1	12	5	8	3	8	0
	大阪府	4	21	8	30	6	22	4	24	3	15	4	22	2	29	4	20	10	22	4	23	5
	兵庫県	4	32	10	31	8	22	8	40	9	39	9	36	14	24	8	31	8	21	12	25	9
	奈良県	3	6	1	7	2	4	1	6	2	2	1	5	1	0	0	2	1	4	0	2	1
	和歌山县	0	24	2	9	1	9	0	21	3	26	1	19	2	7	0	8	0	11	3	2	0
	鳥取県	4	9	2	10	3	6	2	7	3	7	2	12	4	4	2	2	1	5	2	12	2
中国	島根県	0	8	2	3	1	2	1	5	2	6	2	10	2	5	3	0	0	6	3	5	1
	岡山県	4	18	6	18	3	16	2	23	5	25	4	20	2	6	3	15	7	16	4	20	6
	広島県	14	49	12	32	8	41	12	49	14	53	13	47	16	30	13	34	10	35	14	53	14
	山口県	0	11	3	7	2	12	1	11	2	18	5	10	3	8	2	12	4	15	9	17	5
	徳島県	1	4	1	10	5	14	4	9	1	13	3	21	5	9	3	10	4	5	2	10	4
	香川県	3	8	1	15	0	7	2	4	0	13	3	4	1	4	0	1	1	3	2	7	3
四国	愛媛県	10	19	5	19	2	14	3	29	9	37	7	23	3	18	7	16	7	15	8	23	7
	高知県	4	4	1	4	0	1	0	6	0	4	1	8	1	2	1	7	3	6	2	4	2
	福岡県	23	121	27	148	22	110	27	121	23	115	18	119	19	79	21	89	24	74	21	54	16
	佐賀県	4	20	5	37	6	25	6	16	2	17	2	26	7	8	2	17	8	14	6	16	5
	長崎県	19	64	16	64	21	63	10	71	10	58	16	84	20	45	12	46	16	44	18	53	17
	熊本県	9	65	15	37	14	45	12	51	15	44	7	50	12	32	10	39	14</				



## 在籍状況

### ■学部・学群

学部	学科	年度	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6										
			男	女	男	女	男	女	男	女	男	女										
国際学部	国際文化学科		-	-	-	-	-	-	-	-	77	103	166									
	国際観光産業学科		-	-	-	-	-	-	-	-	180	382	186									
	小計		-	-	-	-	-	-	-	-	86	85	148									
国際学群	国際学類		-	-	-	-	-	-	-	-	171	334										
	スポーツ健康学科		588	697	574	708	567	717	563	721	538	751	507	747	497	757	513	721	402	543	280	366
人間健康学部	看護学科		1285	1282	1284	1284	1289	1254	1284	1254	1234	945	1234	945	646		351	351	716			
	健康情報学科		225	191	230	185	233	185	232	177	244	170	237	179	235	186	217	197	214	207	197	226
	小計		416	415	418	409	414	416	421	414	414	421	421	421	423							
	合計		79	277	74	285	68	282	67	283	54	298	53	294	56	291	50	311	47	306	53	300
合計			356	359	350	350	352	347	347	347	361	353	353	353	353	353						
合計			304	468	304	470	301	467	299	460	298	468	290	473	291	477	267	508	284	534	326	575
合計			772	774	768	759	766	763	768	768	775	818	818	818	818	818						
合計			892	1165	878	1178	868	1184	862	1181	836	1219	797	1220	788	1234	780	1229	849	1265	920	1343
合計			2057	2056	2052	2043	2055	2017	2022	2009	2114	2263										

### ■大学院

研究科	専攻	年度	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6										
			男	女	男	女	男	女	男	女	男	女										
国際文化	国際文化システム専攻	領域・分野	計	計	計	計	計	計	計	計	計	計										
		-	-	-	-	-	3	2	4	4	6	4	6	4								
		言語文化	2	3	3	5	2	5	3	4	2	1	4	0								
		社会制度政策	5	8	7	7	5	8	9	5	5	4	4	0								
		経営情報	1	0	1	0	1	0	0	3	0	3	0	2								
		観光環境	3	1	1	0	0	0	0	1	1	1	0	0								
		人間健康科学	4	1	0	0	1	1	0	0	2	2	0	1								
		健康科学	0	0	0	1	0	1	0	1	0	2	0	2								
		小計	13	14	12	15	11	15	15	20	14	12	10									
		基礎看護学	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0								
看護学	看護学	看護学教育	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0								
		地域在宅看護学	0	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0								
		高齢者リハビリテーション看護学	1	5	0	3	0	2	0	1	0	0	0	0								
		母性看護学	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0								
		小児看護学	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0								
		精神看護学	2	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0								
		小計	3	12	0	6	0	3	0	1	0	0	0	0								
		基礎看護学	-	0	1	2	0	2	0	1	0	0	1	0								
		臨床看護学	-	1	1	5	3	8	5	13	4	11	7	9								
		小計	-	1	7	3	10	5	14	4	11	7	9	7								
看護学	看護学研究科(博士前期課程)	基礎看護学	-	0	2	0	2	0	1	0	0	0	0	0								
		臨床看護学	-	1	5	3	8	5	13	4	11	7	9	7								
		小計	-	1	7	3	10	5	14	4	11	7	9	7								
		基礎看護学	-	-	-	-	-	-	-	-	0	1	0	2								
		応用看護学	-	-	-	-	-	-	-	-	0	0	0	0								
スポーツ健康科学	スポーツ健康科学(修士課程)	生活支援看護学	-	-	-	-	-	-	-	-	0	1	0	3								
		小計	-	-	-	-	-	-	-	-	0	2	0	5								
		スポーツ健康科学	10	18	8	20	8	20	11	24	11	21	11	28	16	31	18	27	14	27	16	28
		合計	28	28	28	35	32	39	47	45	41	44										

### ■専攻科

専攻科	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6
助産学専攻科	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
	-	-	0	6	0	6	0	6	0	6

## 卒業者数

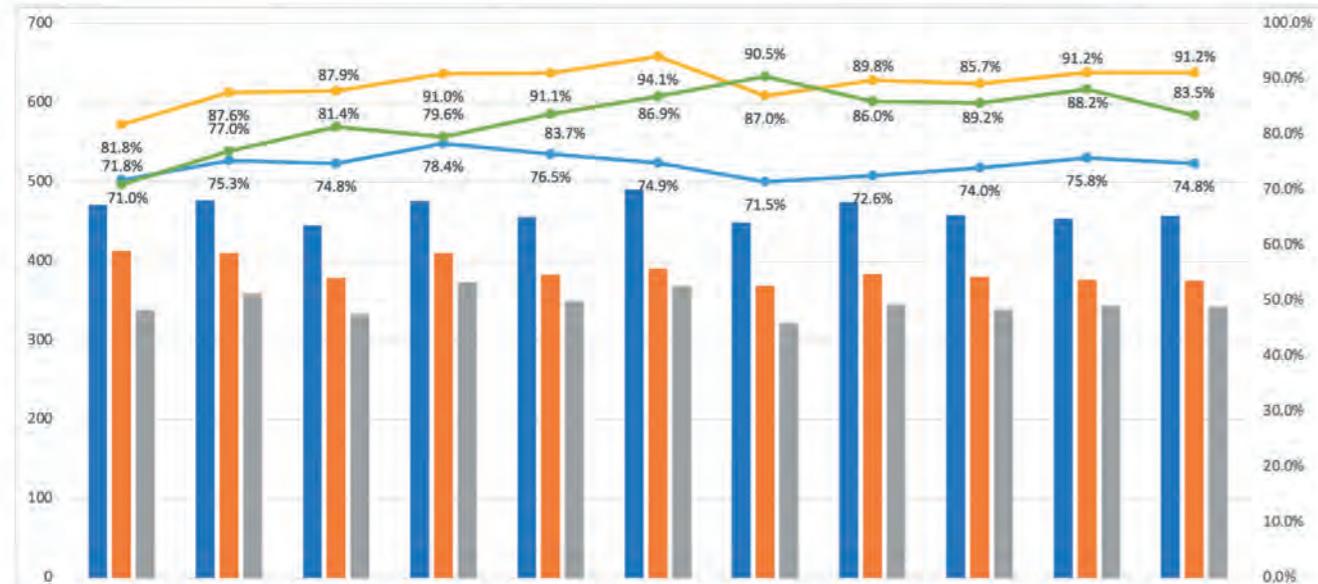
### ■学部・学群

卒業年度	1997~2013 H9~H25	2014 H26	2015 H27	2016 H28	2017 H29	2018 H30	2019 R元	2020 R2	2021 R3	2022 R4	2023 R5	2024 R6
男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	


<tbl\_r cells="12" ix="2"



## 卒業者就職状況



※3月卒業者で算出

※算出方法：就職者 ÷ 就職希望者 × 100 = 就職率（%） 小数点第1位で四捨五入

※県内大学卒者の就職率は、沖縄労働局「新規学卒者の求人・求職・就職内定状況」（各年3月末現在）より出典

- A 卒業者数
- B 就職希望者数
- C 就職者
- D 就職率（%）
- E 卒業者に対する就職率
- F 県内大学卒者の就職率



## 開学30周年・公立大学法人化15周年記念事業

### 記念イベント

#### 1 「本館」落成式及び懇親会

日 時：2024（令和6）年12月23日（月）  
場 所：本館2階学生食堂  
参加者：約80人

#### 2 記念シンポジウム「ウチナーンチュの移民—境界と移動—」

日 時：2024（令和6）年7月20日（土）  
場 所：沖縄市民会館中ホール  
参加者：約140人

#### 3 記念シンポジウム「歴史を考える—ペリー艦隊の琉球来航をめぐって」

日 時：2024（令和6）年12月21日（土）  
場 所：沖縄県立博物館・美術館 講堂  
参加者：154人  
開会挨拶：砂川昌範学長 閉会挨拶：永田美和子副学長



1. 落成式で挨拶をする高良文雄理事長

## 1 「本館」落成式および懇親会

2024（令和6）年12月23日（月）、本館2階学生食堂にて、本館落成式および懇親会を執り行いました。本館の建設は、本学が2024（令和6）年に開学30周年、公立大学法人化15周年を迎えたことを記念する事業の一環として実施されたものです。

当日は、沖縄県北部12市町村の首長・議長の皆様をはじめ、同日に本学より名誉博士称号を授与された作家の佐藤優氏、施設の建築関係者の皆様など、多くのご来賓にご臨席いただき、施設の完成を祝いました。

式典は、林優子副学長の開式の辞に始まり、高良文雄理事長、設置者を代表して北部広域市町村圏事務組合の渡具知武豊理事長が挨拶し、施工業者を代表して株式会社屋部土建の仲座義人代表取締役社長よりご祝辞を頂戴しました。

続く懇親会では、砂川昌範学長の謝辞に続き、佐藤優氏より祝辞をいただきました。また、北部市町村会の當眞淳会長による乾杯のご発声のもと、ご臨席の皆様とともに祝宴が催されました。

ご出席の皆様からは、「新しい施設が整備されたことを大変嬉しく思う」「この施設を学生が存分に活用し、さらなる成長を遂げてほしい」といった期待の声が寄せられました。会場は終始和やかな雰囲気に包まれ、参加者同士の親睦を深める貴重な機会となりました。

## 2 記念シンポジウム

### 「ウチナーンチュの移民—境界と移動—」

坪井祐司教授が司会を務め、嘉納英明研究科長が開会の挨拶をしました。次に、共催である名桜大学沖縄ディアスpora研究センターの設立経緯について、センター長である砂川昌範学長が説明しました。

その後、比嘉久名護博物館特任館長が『眉屋私記』と屋部』というテーマで基調講演しました。上原なつき国際文化学科准教授が「キューバ沖縄移民による宗教実践の現在—日系



パネル討論をする登壇者

人共同墓と慰靈行事の調査報告ー」、長尾直洋同学科准教授が「越境するウチナーンチュ—具志川からブラジルへの出移民と多様な移動の経験ー」、我那覇宗孝客員教授が「ペリー沖縄移民のアルゼンチンとブラジル転住」というテーマでそれぞれ研究発表を行いました。三者の発表から、沖縄移民はよりよい仕事と生活環境を求めて複数国間を活発に移動していたことが明らかとなりました。

総合討論では、屋良健一郎同学科上級准教授がファシリテーターを務め、フロアからの質問に対して登壇者4名が回答しました。沖縄そばがブラジルのローカルフードとなっていることについてなどの質問があり、移民が持ち込んだ沖縄文化が現地で受容されていることについて来場者の関心が高い様子が伺えました。

報告：上原なつき（国際学部国際文化学科 准教授）

## 3 記念シンポジウム

### 「歴史を考える—ペリー艦隊の琉球来航をめぐって」

本学の建学の精神である「平和・自由・進歩」に基づき、教育・文学・歴史学の観点からペリーの琉球来航の意義について、新城俊昭（沖縄大学客員教授）、山里勝己（名桜大学前学長・名誉教授）、山城智史（国際学部国際文化学科上級准教授）がそれぞれ基調講演を行いました。講演後には小嶋洋輔（同学科教授）がファシリテーターを務めてトークセッションが行なわれました。

#### 新城俊昭沖縄大学客員教授の講演

#### 「歴史教育における琉球・沖縄史学習の意義—欧米諸国の来航に揺れる「琉球王国」を探究する」

歴史教育における琉球・沖縄史学習の役割として、身近な史実に興味を持たせ、歴史事実を深く掘り下げて考える探究心や思考力を培うことにあり、このことがアイデンティティの確立に役立てることができる。

『沖縄21世紀ビジョン』の目指すべき将来像の第一で記されている言葉は、「沖縄らしい自然と歴史、伝統、文化を大切にする島」と掲げられているが、実際の若者の実態は自分たちの歴史・自然・文化を知らないことが問題としてあげられる。高等学校地歴科の新科目「歴史総合」で「琉球・沖縄史」学習をどのように取り入れるか。高校教育の現場では、教え方次第で生徒の探究心を高めることができる。「教科書を教えるのではなく教科書で教える」ことが教師の役割であり、教師自身にとっても、教えることは学ぶことにはかならない、と言える。



「歴史を考える」をテーマに意見を交わす登壇者

## 山里勝己名桜大学前学長・名誉教授の講演

## 「ペリー提督100年の夢—トラベルライティングとしての『アメリカ艦隊遠征記』」

1854年に調印された日米和親条約は、ペリー／ホークスの言い分に従うと、「コロンブス360年の夢」の実現であった。このような意味において、『ペリー遠征記』は二人の「提督」がつなぐヨーロッパ人の物語でもある。ジョン・ガスト「アメリカン・プログレス」(1872年頃)には、アメリカが擬人化されたスクールブックを持った女性像の後ろに明るい世界・光の世界・文明の世界が拡がっている。追われているのはインディアンたち、彼女が進んでいく西の方は暗く、未開の土地で野蛮な土地という「光（文明）と闇（未開）」の二項対立が比喩され、アメリカが進んでいく道を示していることがわかる。アメリカの高校で使われている歴史教科書は、「太平洋戦争」はアメリカと日本という、二つの新興帝国主義国家間の戦争であったと説明する。この戦争の歴史的背景として、ペリーの日本遠征、琉球への来航があった。

遠征中（1853年）、ペリーは米国本国に琉球占領を提案するが却下される。その夢が実現するのが1952年のサンフランシスコ平和条約の発効。今、私たちはペリー提督100年の夢、あるいは悪夢が実現された状況に生きていると言えるのではないか。アメリカ国内で起こったこと、太平洋島嶼で起こったことが琉球/沖縄でパラレルに展開されている。ある意味では、沖縄は太平洋西端のアメリカ最後のフロンティアのような様相をていしているとも言える。このような観点から、私たちの歴史がどのように作られたのかというのが見えてくる。マルコ・ポーロから現代に至るまでの大きな想像力の流れ・力のなかで現実が作られてきた、歴史が作ってきたことがわかる。

## 山城智史上級准教授の講演

## 「ペリー来航と米琉コンパクト—歴史の空白を埋める新たな歴史認識」

2024年は日米和親条約から調印170年の節目の年である。ペリーは1854年3月31日に日本と条約を調印し、日本にとってはいわゆる「開国」という新たな時代の幕開けとなった。その後、ペリーは琉球への5回目の来航で同様に開港を迫った。その結果、条約（Treaty）を調印した日本とは異なり、コンパクト（Compact）を琉球と調印した。19世紀米国外交においてコンパクトは琉球との一件のみで、米国では米国憲法の「州」の規定にコンパクトについて明記されている。ペリーは日本には琉球の開港を断られ、琉球には条約の調印を断られた。苦肉の策として州の規定を援用し、条約よりは拘束力が緩いコンパクトとして調印したと考えられる。琉球処分の際にもこのコンパクトが問題となる。このように歴史叙述というのは、外国側の史料も含めて総合的な歴史観に基づいて描かれなければならない。

## 小嶋洋輔教授（トークセッション・ファシリテーター）

ペリーの問題は沖縄という「場」にとって、「ゾーン」という山里先生のお言葉にもあったと思うが、大きな区切りとして扱われてきた。思えば、大城立裕の『カクテル・パーティー』の作中時間も琉米親善110年という空間である。今、2024年にペリー来航、そこに至る出来事を振り返る意味についての発表であった。ペリーの琉球来航という出来事を、ある種の空港のハブのような形で位置付け、さまざまな場に接続していく、そうしたお話であった。言い換えると、教育者、文学者、歴史学者の立場から主体的にこのペリー来航について、今一度解釈し直す重要性が提起されたと言える。フランス人歴史家のイヴァン・ジャブロンカ著『歴史は現代文学である』の中でも指摘されているように、研究者の主体性をどう解釈するのかというのが重要なになってきている。

報告：山城 智史（国際学部国際文化学科 上級准教授）

※肩書きは当時のものです



## 開学30周年・公立大学法人化15周年記念募金 寄附者一覧

## 個人

令和7年10月28日現在  
名称は50音順に記載

## 50万円以上

比嘉 良雄

## 10万円以上～50万円未満

池原 秀人	高良 文雄
岸本 恵好	比嘉 恵一
砂川 昌範	

## 3万円以上～10万円未満

内間 安寿	佐久本功達	照屋 信次	比嘉 一成
大城 凌子	嶋袋 奈月	天願 健	樋口 京一
太田佐栄子	鈴木 啓子	渡具知 伸	平上久美子
嘉納 英明	鈴木 大作	仲榮眞 修	宮平 栄治
木村 堅一	砂川 一弥	仲尾次洋子	村上 満子
金城 雄彦	高安美智子	中里 収	
金城 正英	立津 慶幸	永田美和子	
小西 清美	田場真由美	根間 朋江	

## 3万円未満

新田 繁廸	兼次千恵美	戸高 佑菜	松田 弥生
浦崎 淳也	具志翔太朗	長尾 直洋	屋嘉 義和
大城 章紀	窪田 誠志	比嘉 辰己	山川そのみ
大城 拓	清水 美里	比嘉真恵美	饒平名さつき
嘉手苅 健	遠越 享子	比嘉 義典	

※ご寄附いただいた皆様の中で、寄附申込書により大学広報誌等掲載を「希望する」  
または、「一任する」とされた方のみ掲載させていただいております。

## 企業・団体

令和7年10月28日現在  
名称は50音順に記載

## 300万円以上

会社名・団体名	役職名	氏名
株式会社沖縄銀行	代表取締役頭取	山城 正保
名桜大学後援会	会長	比嘉 恵一
株式会社琉球銀行	取締役頭取	島袋 健

## 100万円以上～300万円未満

会社名・団体名	役職名	氏名
沖縄電力株式会社	代表取締役社長	本永 浩之
有限会社北栄建設	代表取締役	座間味 栄文

## 50万円以上～100万円未満

会社名・団体名	役職名	氏名
医療法人琉心会 勝山病院	理事長	比嘉 敏夫
コザ信用金庫	理事長	喜友名 勇
株式会社ソフトウエア・サイエンス	代表取締役社長	三島 優巳
有限会社朋友	代表取締役	岸本 将
北部建築設計協会	会長	大嶺 正志
北部港運株式会社	代表取締役	崎原 清
琉球セメント株式会社	代表取締役社長	喜久里 忍

## 10万円以上～50万円未満

会社名・団体名	役職名	氏名
有限会社アーバン丸富	代表取締役	長浜 宗則
株式会社東江ガス	代表取締役	東江 成美
医療法人待望主会 安立医院	理事長	安里 公
株式会社AMS設計	代表取締役社長	吉田 勉
医療法人一宜会 大北内科胃腸科クリニック	院長	上地 博之
有限会社大知産業	代表取締役	知念 靖剛
株式会社大嶺建築設計	代表取締役	大嶺 正志
有限会社沖工設	代表取締役	古堅 稔
株式会社沖成ガード	代表取締役	東江 寿
株式会社沖縄シャングリラ	代表取締役社長	万代 悟
沖縄セルラー電話株式会社	代表取締役	宮倉 康彰
沖縄チエル株式会社	代表取締役	前田 喜和

## 10万円以上～50万円未満

会社名・団体名	役職名	氏名
一般財団法人沖縄美ら島財団	理事長	湧川 盛順
沖縄道路株式会社	代表取締役	宮里 三男
沖縄北部地区生コンクリート協同組合	代表理事	仲泊 栄次
かっぽう山吹	代表者	新里 清光
株式会社カヌチャベイリゾート	代表取締役	白石 武博
株式会社カルティベイト	代表取締役	比嘉 梨香
有限会社くくる	代表取締役	仲程 忠
KOBE三宮・ひと街創り協議会	会長	久利 計一
株式会社国際印刷	代表取締役	大田 康之
株式会社崎浜商店	代表取締役	崎浜 秀一
株式会社佐久本工機	代表取締役	佐久本 嘉幸
サン電通エンジニアリング株式会社	代表取締役	比嘉 太一
株式会社ジムキ文明堂	代表取締役	照屋 斎
株式会社白石	代表取締役	白石 武之
トラストコミュニケーション株式会社	代表取締役	前田 喜和
有限会社名護自動車学校	代表取締役	東江 範之
合同会社名護冷機設備	代表社員	棚原 順二
日本総合整美株式会社	代表取締役	古川 祐起
株式会社東開発	代表取締役	仲泊 栄次
株式会社東生コン工業	代表取締役	仲泊 栄次
有限会社北部空調設備	取締役	仲里 仁榮
公益社団法人北部地区医師会	会長	石川 清和
株式会社マイスター大学堂	代表取締役	久利 計一
株式会社前田産業ホテルズ	代表取締役社長	仲座 寛人
株式会社丸金交通	代表取締役	運天 健
株式会社丸山不動産	代表取締役	津波 隆太
メリーハウス	代表者	比嘉 千恵子
株式会社基土木	代表取締役	仲宗根 貢
株式会社MOTOIホールディングス	代表取締役	仲宗根 基
株式会社屋部土建	代表取締役社長	仲座 義人
やんばる物産株式会社	代表取締役	城間 秀幸
株式会社ゆがふファシリティ	代表取締役社長	仲間 徹宏
株式会社ゆがふホールディングス	代表取締役社長	前田 貴子
株式会社リウコム	代表取締役社長	知花 健二
琉球海運株式会社	代表取締役社長	比嘉 茂

## 企業・団体

### 3万円以上～10万円未満

会社名・団体名	役職名	氏名
浦添ガス工業株式会社	代表取締役	比嘉 良文
沖縄ガス株式会社	代表取締役社長	湧川 直明
株式会社沖縄環境分析センター	代表取締役社長	渡久地 博之
沖縄タイムス社	代表取締役社長	武富 和彦
沖縄ツーリスト株式会社	代表取締役	東 良和
沖縄配達株式会社	代表取締役	花城 清友
オキナワ メディカル サポート 株式会社	代表取締役	照屋 保
沖縄菱電ビルシステム株式会社	代表取締役社長	鷺尾 穎一
オパス株式会社	代表取締役	與那嶺 泰輔
オリオンホテル株式会社	代表取締役社長	村野 一
株式会社加島事務機	代表取締役	加島 一郎
株式会社協和建設コンサルタント	代表取締役社長	山城 治
医療法人きんクリニック	理事長	高良 和代
医療法人光風会	理事長	安里 義徳
ザ・テラスホテルズ株式会社	代表取締役社長	國場 幸伸
有限会社サン印刷	代表取締役	宮城 剛
シュワブ関連工事安全連絡協議会	会長	吉村 友希
昭和化学工業株式会社	代表取締役	屋嘉比 康則
昭和製紙株式会社	代表取締役社長	屋嘉比 康則
スカイマーク有限会社	代表取締役	宮城 勝繁
有限会社盛光産業	代表取締役	喜屋武 光雄
セコム琉球株式会社	代表取締役社長	井口 郁
株式会社第一医療器	代表取締役	比嘉 正人
有限会社大都コーポレーション	代表者	上地 貞治
中部興産株式会社	代表取締役社長	新垣 貴雪
弁護士法人ていだ法律事務所	代表	玉城 辰彦
株式会社仲泊興産	代表取締役	國吉 さと子
今帰仁診療所	院長	石川 清和
一般社団法人今帰仁村観光協会	代表理事	大城 洋介
有限会社名護総合測量設計	代表取締役	山城 豊隆
株式会社名護電水センター	代表取締役	岸本 稲子
医療法人はごろも会 那霸ゆい病院	理事長	玉城 仁
東住宅産業株式会社	代表取締役	仲泊 栄次
株式会社F U N I T.	代表取締役	眞榮城 渡

### 3万円以上～10万円未満

会社名・団体名	役職名	氏名
北部製糖株式会社	代表取締役社長	宮城 安彦
有限会社マル井建設	代表取締役	伊波 一人
有限会社丸崎建設	代表取締役	崎浜 吉秀
丸善雄松堂株式会社 九州支店	支店長	佐伯 誠司
有限会社丸良電建工業	代表取締役	比嘉 良勝
有限会社嶺井工業	代表取締役	嶺井 政一
みよし洋蘭	代表者	金城 ルミ子
本部生コン株式会社	代表取締役	崎山 正治
ヤナギ電設工業株式会社	代表取締役	仲宗根 智子
やまだクリニック	院長	山田 譲
株式会社やまと商建	代表取締役	渡嘉敷 真勇
株式会社リウゼン	代表取締役	宮城 典孝
株式会社琉球新報社	代表取締役	普久原 均
株式会社琉信ハウジング	代表取締役	城間 泰

### 3万円未満

会社名・団体名	役職名	氏名
沖縄協同ガス株式会社	代表取締役社長	比嘉 良秀
沖縄県行政書士会	会長	白木 純
一般社団法人沖縄県薬剤師会	会長	前濱 朋子
株式会社沖縄ボイラエンジニアリング	代表取締役	渡慶次 泰博
有限会社勝山シークヮーサー	代表取締役	安村 弘充
兼城商店	代表者	兼城 昌恒
有限会社きん	代表取締役	宮原 金星
久高たたみ店	代表者	久高 康伸
一般社団法人国頭村観光協会	会長	比嘉 明男
合同会社健堅	代表社員	仲栄真 雅宏
株式会社国際旅行社	代表取締役社長	與座 嘉博
株式会社コンピュータ沖縄	代表取締役	名護 宏雄
株式会社サン・エージェンシー	代表取締役社長	高江洲 守
株式会社シビルエンジニアリング	代表取締役	松川 靖
株式会社シャンブルタマキ	代表取締役	玉城 浩孝
株式会社昭和制作	代表取締役	赤嶺 竜司

## 企業・団体

## 3万円未満

会社名・団体名	役職名	氏名
西部電気工業株式会社	代表取締役社長	坂口 隆富美
株式会社大和地所沖縄事業所ベルビーチゴルフクラブ	総支配人	大城 善信
株式会社長堂屋GROUP	代表取締役	長堂 祐磨
名護漁業協同組合	代表理事組合長	安里 政利
株式会社名護さくら不動産	代表取締役	川畑 孝一
名護中央薬局	代表社員	神山 康馬
西平黒糖	代表者	具志堅 敦子
ぱどる岸本企画	代表者	岸本 盛之
株式会社秀K E N	代表取締役	崎浜 秀
有限会社北星産業	代表取締役	末吉 勇人
株式会社ミヤフク	代表取締役	宮城 尚生
株式会社ミライテック	代表取締役	當真 勝正
農業生産法人もとぶウェルネスフーズ株式会社	代表取締役	長濱 徳勝
本部ガス株式会社	代表取締役	比嘉 和夫
一般社団法人本部町観光協会	代表理事	當山 清博
山内ビル	代表者	山内 昇
株式会社山口建設	代表取締役	嘉陽 大地
リウコン株式会社	代表取締役社長	比嘉 盛勝
琉栄開発株式会社	代表取締役	宮里 豪
琉栄生コン株式会社	代表取締役社長	高良 和正
琉球製罐株式会社	代表取締役社長	永田 浩章

※ご寄附いただいた皆様の中で、寄附申込書により大学広報誌等掲載を「希望する」

または、「一任する」とされた方のみ掲載させていただいております。

※代表者名は、寄附時点の代表者名を記載しております。



## 教育研究奨励基金、その他特定・一般寄附金 寄付者一覧

(敬称略) ※肩書きは寄附当時のものです。

## 2015(平成27)年度

名桜大学県出身者子弟を支援する会  
メリーハウス  
株式会社ぬちます  
一般財団法人 生命医学研究振興財団  
おきぎんふるさと振興基金  
名桜大学後援会  
株式会社 リウコム  
宮里 政邦  
稻垣 紹代  
ピエン.S.P./パンガニパン  
東江 美代子  
東江 盛勇 (フランク東)

島袋 茂照 会長  
比嘉 千恵子  
高安 正勝 代表取締役  
小杉 忠誠 理事長  
比嘉 恵一 会長

※メディアパッド

## 2016(平成28)年度

名桜大学同窓会  
名桜大学協力会  
名桜大学後援会  
メリーハウス  
株式会社 沖成ガード  
一般社団法人 沖縄県軍用地等地主会連合会  
おきぎんふるさと振興基金  
山里 勝己

大門 達也 会長  
仲泊 弘次 会長  
比嘉 恵一 会長  
比嘉 千恵子  
東江 正寛 代表取締役  
眞喜志 康明 会長

## 2017(平成29)年度

光文堂コミュニケーションズ 株式会社  
メリーハウス  
名桜大学後援会  
イリノイ大学名誉教授・名桜大学名誉客員教授  
名桜大学協力会  
株式会社 沖成ガード

前社長 故・外間政春ご夫人 外間なるみ  
比嘉 千恵子  
比嘉 恵一 会長  
平恒次  
仲泊 弘次 会長  
東江 正寛 代表取締役社長

## 2018(平成30)年度

メリーハウス  
株式会社 沖成ガード

比嘉 千恵子  
東江 正寛 代表取締役社長

## 2019(令和元)年度

名桜大学同窓会  
名桜大学後援会  
株式会社 屋部土建  
メリーハウス

大門 達也 会長  
比嘉 恵一 会長  
比嘉 千恵子

## 2020(令和2)年度

沖縄セルラー電話 株式会社  
公益財団法人 金秀青少年育成財団  
株式会社 沖成ガード  
名桜大学後援会

東江 正寛 代表取締役社長  
比嘉 恵一 会長

## 2021(令和3)年度

市内在住の岸本裕子ほか9人の有志  
名桜大学後援会  
名桜大学同窓会  
メリーハウス

比嘉 恵一 会長  
大門 達也 会長  
比嘉 千恵子

## 2022(令和4)年度

金秀グループ  
北部建築設計協会  
イオン琉球株式会社  
名桜大学協力会  
名桜大学硬式野球部後援会

吳屋 守将 会長  
吉田 勉 会長  
鯉渕 豊太郎 代表取締役社長  
仲泊 弘次 会長  
岸本 正博 副会長  
(羽柴工業株式会社代表取締役会長)

一般社団法人 キーンズリコスポーツクラブ  
名桜大学後援会  
鈴木啓子

長浜 永 代表理事  
比嘉 恵一 会長  
長浜 永 代表理事  
比嘉 恵一 会長

## 2023(令和5)年度

北部建築設計協会  
名桜大学後援会

比嘉 恵一 会長

## 2024(令和6)年度

医療法人運天産婦人科医院

運天 啓一 院長

※軽自動車  
※留学生への支援金  
※コロナウイルス感染拡大に伴う困窮学生への緊急助成金  
※コロナウイルス感染症の影響に伴う学生支援等  
※コロナウイルス感染症の影響に伴う学生支援等

※コロナ禍における学生支援としてレトルト・インスタント食品12万円相当  
※新型コロナウイルス感染症の影響に伴う学生支援  
※新型コロナウイルス感染症の影響に伴う学生支援

※沖縄の将来を担う人材育成への支援

※環境保全活動・啓発への支援

※記念碑建立費用

※同部に必要な備品等の購入

※女子サッカーチームユニフォーム

※名桜祭

※大学運営の向上

※助産学専攻科に保育器



## 年表 (大学開学以降)

年	出来事
1994 (平成6) 年	4月 名桜大学開学(国際学部 国際文化学科、経営情報学科、観光産業学科) 第1回名桜大学入学式
1995 (平成7) 年	4月 名桜大学開学記念式典 9月 名桜大学総合研究所設立(翌年4月1日開所)
1997 (平成9) 年	10月 名桜大学後援会設立 11月 名桜大学完成記念植樹
1998 (平成10) 年	3月 第1回名桜大学卒業式
1999 (平成11) 年	4月 第50回沖縄県植樹祭が名桜大学で開催 7月 名桜大学開学5周年式典
2000 (平成12) 年	6月 名桜大学大学院国際文化研究科設置認可申請 12月 名桜大学大学院国際文化研究科設置認可(文部大臣)
2001 (平成13) 年	4月 名桜大学大学院国際文化研究科開設 名桜大学言語学習センター設立・開室 5月 名桜大学メディアネットワークセンター設立(同年6月1日開室)
2002 (平成14) 年	2月 名桜大学同窓会設立
2003 (平成15) 年	3月 名桜大学大学院国際文化研究科第1期生 修了式
2004 (平成16) 年	9月 名桜大学人間健康学部設置認可申請 10月 北部生涯学習推進センター設立・開設 12月 名桜大学開学10周年記念式典
2005 (平成17) 年	1月 名桜大学人間健康学部設置認可(文部科学大臣) 4月 名桜大学人間健康学部スポーツ健康学科開設
2006 (平成18) 年	6月 名桜大学人間健康学部看護学科設置認可申請 7月 名桜大学教員養成支援センター設立・開室 名桜大学国際学群国際学類設置届出(国際学部3学科を改組) 11月 名桜大学人間健康学部看護学科設置認可(文部科学大臣)、翌年4月1日付けをもって保健師助産師看護師法第19条第1号、同第21条第1号に定める学校として指定(文部科学大臣)
2007 (平成19) 年	4月 名桜大学国際学群国際学類(国際文化専攻、語学教育専攻、システムマネジメント専攻、情報システム専攻、観光産業専攻)開設 名桜大学人間健康学部看護学科開設
2009 (平成21) 年	4月 名桜大学国際学群国際学類に診療情報管理専攻を設置、システムマネジメント専攻を経営専攻に名称変更 5月 名桜大学数理学習センター設立・開室 12月 北部広域市町村圏事務組合より公立大学法人名桜大学設立認可申請 学校法人名護総合学園より名桜大学の設置者変更認可申請及び学校法人解散認可申請
2010 (平成22) 年	3月 公立大学法人名桜大学設立認可(沖縄県知事) 名桜大学の設置者変更認可/設置者変更に伴う学校法人名護総合学園解散認可(文部科学大臣)

216

年	出来事
2010 (平成22) 年	4月 名桜大学の設置者変更による学校法人名護総合学園の解散 北部広域市町村圏事務組合が設立した公立大学法人名桜大学により設置された名桜大学の開学 5月 名桜大学大学院看護学研究科設置認可申請 10月 名桜大学大学院看護学研究科設置認可(文部科学大臣)
2011 (平成23) 年	2月 名桜大学教養教育センター設立(同年4月1日開設) 4月 名桜大学大学院看護学研究科開設
2012 (平成24) 年	10月 名桜大学健康・長寿サポートセンター設立(同年12月21日開設)
2013 (平成25) 年	3月 看護実践教育研究センター設立(同年4月1日開設) 4月 北部生涯学習推進センター内にエクステンションセンター開設 名桜大学保健センター開設(保健室を廃止・拡充)
2014 (平成26) 年	12月 名桜大学開学20周年・公立大学法人化5周年記念式典
2015 (平成27) 年	3月 名桜大学国際交流センター設立(同年4月1日開設) 名桜大学国際学部(国際文化学科、経営情報学科、観光産業学科)廃止 4月 名桜大学リベラルアーツ機構設立(教養教育センターを廃止・拡充) 名桜大学ライティングセンター設立(翌年5月16日開室)
2016 (平成28) 年	10月 名桜大学助産学専攻科 保健師助産師看護師法第20条第1号に定める学校として指定申請
2017 (平成29) 年	1月 名桜大学助産学専攻科 同年4月1日付をもって保健師助産師看護師法第20条第1号に定める学校として指定(文部科学大臣) 4月 名桜大学助産学専攻科開設 地域連携機構開設(エクステンションセンターを廃止・拡充)
2018 (平成30) 年	3月 名桜大学大学院国際文化研究科国際地域文化専攻(博士後期課程)設置認可申請 8月 名桜大学大学院国際文化研究科国際地域文化専攻(博士後期課程)設置認可(文部科学大臣)
2019 (平成31) 年	4月 名桜大学大学院国際文化研究科国際地域文化専攻(博士後期課程)開設
2021 (令和3) 年	3月 名桜大学大学院看護学研究科看護学専攻(博士後期課程)課程変更認可申請 8月 名桜大学大学院看護学研究科看護学専攻(博士後期課程)課程変更認可(文部科学大臣)
2022 (令和4) 年	4月 名桜大学大学院看護学研究科看護学専攻(博士後期課程)開設 5月 国際学群を国際学部へ名称変更届出 国際学部国際文化学科の届出設置 国際学部国際観光産業学科の届出設置 人間健康学部健康情報学科の届出設置
2023 (令和5) 年	3月 名桜大学大学院スポーツ健康科学研究科スポーツ健康科学専攻(修士課程)設置認可申請 4月 国際学部国際文化学科、国際観光産業学科開設 人間健康学部健康情報学科開設 9月 名桜大学大学院スポーツ健康科学研究科スポーツ健康科学専攻(修士課程)設置認可(文部科学大臣)
2024 (令和6) 年	4月 名桜大学大学院スポーツ健康科学研究科スポーツ健康科学専攻(修士課程)開設
2025 (令和7) 年	7月 名桜大学附属北部看護学校看護学科 保健師助産師看護師法施行令第12条に定める学校として指定申請 11月 名桜大学附属北部看護学校看護学科 翌年4月1日付をもって保健師助産師看護師法施行令第12条に定める学校として指定(文部科学大臣) 12月 名桜大学開学30周年・公立大学法人化15周年記念式典

217

## 編集後記

本記念史が目指したのは、2015（平成27）年から10年間の名桜大学の歩みを個別具体的に記録しようということでした。それは『名桜大学20年史』、近くは『公立大学法人名桜大学 10年のあゆみ』が刊行されているということで、記録すべき内容をしっかり選ぼうということから、「10年間」ということに限定したといえます。ですが、本記念史を編集して気づかされたのは、そうした予想に反して、この10年、もといればこの5年間で名桜大学は大きく変容していた、ということでした。本記念史に関わるワーキンググループは、2024（令和6）年12月から動き出したのですが、そこで悩むことになったのは多く出される記事の候補から何を選ぶかということでした。

たとえば、特にこの5年の大きな変容といえるのが、研究に対する支援体制の構築でした。そうした基盤ができたからこそ、「琉球文学大系」の発刊、名桜大学沖縄ディアスボラ研究センターの設置に代表される事業が動き出すことにつながったといえます。そしてそこからまた、専門を深く学ぶ大学として、国際学群改組、大学院の設置などがなされました。今後、研究の成果をどのようなかたちで地域、そして教育に展開してゆくことになるのでしょうか。次の記念史に何が書かれることになるのか、今から楽しみです。

寄せられた文章は、名桜大学の現在を記録しようとする人々の熱意がたっぷりの文章になっています。熱い文章ではありますが、それでいて堅苦しくない、読みやすい文章になっていると思います。ぜひ、楽しんで読んでいただければ幸甚です。本学は次の10年、さらにその次の10年と着実に歩みを進めてゆくだろうことを、今から予想させる、こうした文章であふれています。

そして、こうして本書の刊行が叶ったのも、お忙しい最中、シビアな締切にもかかわらず、寄稿くださった方々のおかげです。心より御礼申し上げます。

引き続き本学に、多くの方々のご支援、ご協力をいただければ幸いです。どうぞよろしくお願い申し上げます。

（名桜大学開学30周年・公立大学法人化15周年記念史部会 副部会長 小嶋 洋輔）

218

## 記念史部会メンバー

部会長：小畠 達（附属図書館長）

副部会長：小嶋 洋輔（環太平洋地域文化研究所長）

部会員：金城 亮（国際学部国際観光産業学科 教授）

伊良皆 啓（国際学部国際観光産業学科 上級准教授）

大峰 光博（人間健康学部スポーツ健康学科 教授）

下地 紀靖（人間健康学部看護学科 上級准教授）

水山 克（人間健康学部健康情報学科 准教授）

金城 正英（総務企画部 参与）

渡具知 伸（附属図書館 参与）

山城 耕政（教務部 参与）

荻堂 盛淳（学生部長（キャリア支援課長兼任））

神谷 順子（附属図書館図書課長（情報サービス係長兼任））

赤嶺 達也（学生部国際交流課長（国際交流係長兼任））

事務局：根間 朋江（総務企画部長）

上間 久雄（総務企画部総務課長）

河合 咲（総務企画部総務課 係員）

具志堅 大力（総務企画部総務課 係員）

所属・職階は2025（令和7）年11月1日現在

219

# 名桜大学30年史

公立大学法人化15周年記念

---

2025(令和7)年12月20日発行

編 集 名桜大学開学30周年・公立大学法人化15周年

記念事業 記念史 部会

発 行 公立大学法人名桜大学

〒905-8585

沖縄県名護市字為又1220-1

TEL (0980)-51-1100

FAX (0980)-52-4640

印 刷 新星出版株式会社

TEL (098)-866-0741

---